

真顔のシングル厨がアローラ入りするお話

Ameli

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ポケ廃大学生がアローラを真顔で生き抜くお話。

目次

見知らぬ砂浜。	1
寝起きモクロー。	8
こんにちはアローラ。	15
そっとしておいて。	22
独白。	30
田舎の洗礼。	38
ヒミツの共有。	46
邪神様、降臨。	54
イカれたパーティを紹介するぜ。	63
邪神様 v s 巨神兵。	73
でーと、おあ、でっど。	83
島クイーンさんおっすおっす。	92
オレ達のフロンティア。	101
ポケモンと人と。	111
聖地巡礼その二。	121
勝手に葉漬け一歩手前にされている件について。	130
嘘つき少女に本物を見せてみた。	140
主人公補正。	151
ブランクタイム。	162
ロケットスタート（物理）。	174
みんな知ってるあの人。	184
思わぬ遭遇。	194
積もる話。	205
食事のレポート。	216

太陽。	227
地獄のポケリフレ三本勝負。	237
動き出した。	246
馬鹿は二度騙される。	257
思惑と陰謀渦巻く。	267
タワータイクーン。	277
デートorデッド	287
埋まりつつある外堀。	295
雑談日和。	306
色んな意味で大試練。	315
奪われやすい唇。	325
真の分岐点。	336
答え合わせ。	347
ウラウラ島へ上陸しただけ。	358
古代のプリンセス。	367
庭園の思い出。	376
苦悩と葛藤。	387
がんばりーリエのすがた。	397
カプ・ブルルとの約束。	409
ジェットコースター記念日。	419

見知らぬ砂浜。

この世界は、元より電子で出来ていた。

モノクロームの、単純で、狭いこの世界は『世界中』で、今もなお愛され続けている。

0と1以外に存在する数多の要素……例えばキャラクター、ストーリー、世界観。それらが上手く噛み合つて、この世界は人々の心を掴んだのだ。この世界の育成、対戦を模倣し踏襲している作品は決して少なくない。

キャラクター1つ1つに、それぞれ個性的な設定があり、能力が決められている。最初の作品が出て20年……シリーズが増えるごとに、キャラクターの数はどんどん増えてゆき、総数はもうすぐ四桁に迫ろうとしている。この世界が魅力的である理由を人々が挙げるとするなら、真っ先にこれを掲げるだろう。

誰もが、自分の好きなキャラクターで勝ちたい。そう思うのは当然だろうが、

現実是非情だ。

『個性的』である都合上、各キャラ毎に、絶対に勝てない壁がある。

種族、才能、努力、運。それらを全て兼ね備えたキャラクターには、どうしても届かない時がある。

それを分かっているとしても、好きなキャラクターを使い続ける人間は少なくないが、

そんな『プレイヤー』は、自身の個性を理由に勝率を落としていく。^{レベル}好きなポケモンで勝てるのは、一握りの選ばれた人間のみ。

この物語の主人公である俺は、選ばれなかった方の人間だ。

……ほんと、どうしてこの世界に来てしまったのだろうか。

「やっと、めざ地デンジユモクの厳選終わったぞ……」

お目当の個体が出る確率は、性格一致を含めておよそ1%ちよい上程度。意識する相手は亜ガラとジバコくらいか。めざ地はまだ確率は高めな方で、めざ炎になると確率は半分以下になる。

まあ、めざ炎テテフ持つてるんですけどね。あれは熟練の修行僧がやる所業だった。

今現在、大学の講義中であり、いつも付き合いのあるグループの連中はスマートフォンを弄りながら器用にノートを写している。教授

の声は子守唄と同等の力を持ち、一番後ろから見物してるが命中60くらいか。

リアルでも催眠は命中低そうだな。

「ケン、お前またポケモンかよ」

後ろに座ってる友人に独り言を聞かれたらしく、手元をチラチラと見てくる。彼は大学に入ってすぐに出来た友人だ。グループの中では一番長く遊んでいて、住んでるアパートも近いのでよく遊びに行くようになった。

「おう、勝手に見んなや」

「まあいいじゃん。てか最近のポケモンってこんな感じなのか、随分変わったよな」

そんなこと、ずっと近くで見えてきた自分が一番知っている。だが新作が出る度に、デザイン変わったな、なんて言う連中が出てくるのは、15年前から変わらない。

「まあな。ポケモンも日々進化してるってわけよ」

「ふーん。でも俺、あんまりそのポケモン好きじゃないわ」

彼が言っているのは、おそらく画面に映っているデンジユモクの事だろう。正直、ウルトラビーストは俺も好きになれない。

「でも強いんだよ。だからこうして、ずっとゲームいじってんのさ」

「相変わらず暇だなあ、単位大丈夫なの？」

「……いつも通り、ノートおなしやす」

「はいはい。後で飯奢れよ?」

不真面目な俺は、真面目な彼にいつも頭が上がらない。

「のんきテツカグヤは案外早めにツモれたな」

ポケモンの輪は、今や世界にまで広がっている。インターネットさえあれば、どこの誰とでも、自由自在に通信交換可能だ。

それを利用して、家に帰ってすぐテツカグヤ集めに奮闘していた。

こちらが差し出す餌は、伝説のポケモン。ソルガレオ、ルナアーラ、ネクロズマ。これらを元手に、適当に繋がった小学生みたいなトレーナーや外国人からテツカグヤを巻き上げる。

GTSはポケモンの質が悪い。交換の手間がかからないのは魅力的ではあるが、あそこは廃人どもの廃棄でいっぱい、図鑑を完成させた今、伝説のポケモン集めと、おしゃボ孵化余りを漁るくらいしか利用していない。

元手を5体消費したくらいで、外国人と交換して、性格がのんきのテツカグヤが手に入った。80程度までレベル上げされており、愛用していたのが分かる。まあ、100レベルの伝説のポケモンには勝てなかつたんだろうけど。

そうやって手に入れたテツカグヤに、きのみを与えて努力値をまっさらに戻す。そしてポケリゾートへ行き、他の厳選済みポケモンと一緒にアスレチックへ放り込んだ。これだけで、時間が経てば努力値を得られるのだから、昔に比べると育成も楽になった。他のことに時間を使いたい人にとって、このポケリゾートは最高のツールだ。

一通りの作業を終えて、スマートフォンを見る。いつも連んでる連中からの飲み会のお誘いと、彼女からの一日終わりの労いの言葉が浮かんでいた。飲み会には参加を表明し、彼女には適当な返事を送った。

さて、他のポケモンでも厳選するか。

あたまがいたい。すこしのみすぎたか？

なんだろう、すこしさむい。まあ、ふゆだしあたりまえか。

そんなことより、ここは、どこだ？

どこだ、ここは。

揺蕩う意識の中で、気付けば、纏まりのないことを考えながら全身水浸しになって倒れていた。肌に触れる風は、冬の木枯らしとは程遠い暖かさを帯びており、風邪を引く心配はなさそうだ。

ここは砂浜だろうか。波の寄せては帰る音が周期的に聞こえる。磯の香りと、靴に入った水と砂が気持ち悪い。

「きみ、大丈夫かい？」

不意にかけられた男の声。辛うじて振り向くと、安心感と同時にデジャブ。場所は知らないが、この人とどこかで会ったことがある気がする。というより、シルエットがそっくりなのだが、ありえない。

「この砂浜で人を拾うのは『二度目』だな。ぼくにはナマコブシ拾いよ、むしろこっちの才能があるのかもしれないね」

確信が心の中で芽生えた。確かに知らない声だ。だけど、俺は、彼を知っている。

ククイ博士。

アローラ地方の博士で主人公にアローラ図鑑を渡し、旅をサポートし続け……ポケモンリーグ最後の壁として立ちはだかる異色のトレーナー。

頭が混乱してきた。俺はどうしてここにいる？ いや違う、どうし

て彼が存在する？

「……大丈夫、じゃなきそうだね。ルガルガン、運ぶのを手伝ってくれ」

「がう」

自力で立ち上がろうとするが、動けない。まるで糸のない傀儡のよう
うに、身体はいうことをきかなかつた。

ルガルガンは、服の裾を咥えると器用に背中に乗せ、ククイの後を
ついていく。岩タイプのくせに、身体はモフモフだった。

初めて出会ったポケモンは、ルガルガンかあ。明日締切のレポート
あるんだけど、どうしようか。なんて、取り留めのない下らないこと
を考えながら、静かに目を閉じた。

寝起きモクロー。

バサバサと、羽ばたく音が鼓膜を揺らす。顔に当たる風の感触が、否応なしに意識を覚醒させようとしていた。

二番目に出会ったポケモンは、視界いっぱい広がるモクローであった。鳥ポケモンらしくインコに似たようなそうでないような、そんな動物らしい匂いが嗅覚を刺激する。

そんなことに思考を奪われて数秒経った後、実は襲われているかもしれないという考えに至り、勢い良く身体を起こした。緑のモフモフは甲高い鳴き声とともに、勢い良く射出され、床を転がった。

「ごめんなさい!!」

モクローの持ち主の声だろうか、ドタドタと忙しない足音に自然と顔を向ける。赤いニット帽の似合う、可愛い女の子だ。そして、おそらくサンムーンの主人公でもある……いや、全く違う可能性も否定はできないが。

向こうの世界で追っかけてたのは男の尻だったせいでもあるが……こんな感じだったよな？

見慣れた対戦相手レート界限の連中は、原型留めてないくらいオシャレガン盛りか、デフォルト男主人公の戦闘狂スタイルのどちらかだったため、デフォルト女主人公の原型は遠い過去に消えていた。

「すごく元気がいいな。このポケモン、なんていうの?」

さらりと嘘が出る辺り、自分のクズ加減に嫌気がさす。何が、なんというの、だ。この少女より遥かにポケモンを知っているというの

に。

「この子、モクローっていうの。ポケモンなのにモンスターボールに入りがらなくなかって、ほんとに困ってるわ。大人しくしてると思ったらすぐイタズラして……」

なるほど、ついさつきまでイタズラされてたのね。そう思ったら眉毛啄まれたり、額をツンツンされたりしてた気が……心なしか、眉毛が減った気もする。

「クロー」

モクローは手馴れた様子で、彼女の頭上に乗った。そこが positioning なのだろう、機嫌よくクチバシで器用に毛繕いを始める。サトシのピカチュウみたいだな。

「なるほど、でもよく懐いてるみたいだけどね。モンスターボールに入らないのも、キミと一緒に居たいからじゃないか？」

「そうだといいんだけど……この子ね、あたしの初めてのポケモンなの。だからすごく心配で……」

「いやいや、心配いらないさ」

あたしの初めて、という部分もう一回言わないかなあなんて考えてたら、違う話し声が女の子の後ろからやってきた。おそらくククイ博士だろう。

「初めてのポケモンは誰だってキンチョーするし、ドギマギしちゃうもんだよ。それを乗り越えてようやく一人前のトレーナーってわけ。だから焦る必要は無いさー！」

相変わらずの爽やかお兄さんっぷりである。原作通りだとすると、やっぱりポケモン仮面？だったか、それともマスクだったかロイヤルだったか。ポケモンたちと共に鍛えられた肉体が、白衣の中から覗いている。どうやら忠実に『再現』しているみたいだ。

「それより、アローラ！ よく眠れたかな？」

「あ、アローラ。しっかりと休ませてもらいました」

由来はハワイ島のアロハなんだろうが、やはりどこか可笑しい。挨拶の全てがこの一言に集約される辺り、便利であるとは思うのだけど。

「はいこれ、きみのリュックだよ。一応中身は見えてないから安心してね」

そういつて手渡されたのは、見覚えのない青系のリュック。だが、それを気取られないように受け取った。中身の確認は後回しだ。

「ありがとうございます、助けていただいたみたいですが……すみません、実は記憶が曖昧で、何処から、どうしてここに来たのかさえ分からないんです」

「そうか……やはり。自分の出身地や、名前は？」

やはり？

「私の名前はケン。一応ホウエンに住んでいたはずなんですが……」

もちろん、全て嘘だ。俺の名前はケンではない。ケンという名前は

渾名でもあり、インターネットやゲームでよく使う名前……いわゆるプレイヤーネームだ。

ハウエン地方というのも、大学が九州なだけで出身地はむしろカントーである。

出身をハウエンにした理由としては、リメイクを含めて一番よく遊んでいたのと、主人公との会話でボロが出ないようにするためである。主人公は記憶が正しければカントー出身だったため、詳しく問い詰められると綻びが出るだろう。記憶喪失を理由に誤魔化せるだろうが、念には念を。

どうしてここまで作戦が練られているのかというと、実はだいぶ前から起きて、事情を再確認していたのだ。流石に、モクローにイタズラされてからは狸寝入りするのは無理があったが。

その少しの間で自分の置かれている状況から、ある程度のことは推測できたが……未だに信じられない。

会話も少し盗み聞きした。おそらく今は、リーリエたちとアーカラ島に行く前だろう。

「ハウエンから!? よく無事だったね!!」

ククイも驚いているものの、何かパズルのピースが嵌った、合点がいったかのような表情をしている。やはり、何か勘づいてるな。

「自分でもそう思いますよ……そういえば、ククイ博士はともかくキミはどうしてここにいるの?」

話を逸らすために、モクローを頭に載せてる少女、ミツキに声をか

けた。

「今から、島巡りのためにアーカラ島つてところに行くんだけど……」

「君も一緒に来てくれないか？」

突然のククイである。また会話のフォーカスがこちらに向いてしまった。

「えーと、何故、でしょうか？」

「ごめんね、少し調べさせて貰ったんだ」

手に持っていたファイルから、一枚のグラフのかかれた紙を取り出した。

「これが普通の人。んでこれが、主^{ヌン}ポケモンの。最後にこれが、君のグラフ……何と説明すればいいか分からないんだけど、それでも明らかなのが一つある。君は今、なにか特別な事情を抱えている筈だ」

科学者らしく早口に紡がれた言葉、だがそれは的確に的を得ていた。

グラフはおそらく、ウルトラホールから放出されるエネルギー関連のものだろう。ストーリーでも、主ポケモンとウルトラビーストは同じオーラを纏っているという設定だったはず。おそらく、簡易的な測定器を使って測定したと思われる。最後のグラフだけが、主ポケモンを大幅に上回っていた。

「……仮にそうだとしたら、私をどうするつもりですか？」

「いやいや、そんなに警戒しないでくれ。アーカラ島にはそういった事象を研究する場所があるから、一緒に来て欲しいんだ。ぼくも、君みたいな子は初めてなんだよね」

なるほど、つまりは。

「……俺はモルモットになるのか」

「えーっと、何？ モルモット？」

早速ボロが出る。こういう詰めの甘い所はバトル以外でも変わらないようだ。

「分かりました、私も同行しましょう。なにか手掛かりが掴めるやもしれません」

というより、付いていくしか現状無理そうだ。ミヅキちゃんならともかく、ククイ博士を振り切って逃げられる自信が無い。

「よしわかった、ケン。短い間だがよろしくな。ミヅキちゃんとも仲良くしてくれよ」

「わたしはミヅキ。よろしくね」

「よろしく。ところで……変な話ですが、私は何歳に見えますか？」

唐突な質問に、皆が一瞬固まった。少し眉間に皺を寄せて考える素振りを見せた数秒後、ククイ博士が口を開いた。

「……14歳？」

向こうの世界では老け顔が特徴的であり、よく友人からは「ねえ、何年浪人したの??笑」と煽られたものだ。

つまり、今の自分の身体は、実年齢よりもかなり下回っている。記憶は大丈夫な分、巻き戻されている訳では無さそうだが……着てる服のサイズが明らかに小さいし、ミツキちゃんタメ語だし、心なしか声も高くなってるし……

「勘弁してくれ……」

どうやら、ウルトラホールの移動によってかは知らないが、記憶ではなく身体年齢を奪われたみたいだ。

こんにちはアローラ。

不本意ながら若返ってしまった21歳は、軽く現実逃避をしつつもアローラの大地を踏みしめていた……といっても、道の殆どはコンクリートだった。

これから、アーカラ島の空間研究所にでも連れていかれるのだろうか。解剖とかされるのやだなあ。なんて有りもしなさそうな事を考えるのは、南国特有のこの暑さのせいだろう。日差しが強いなんてレベルじゃねえぞこれ、反射熱と合わさって最強に見える。

カントー出身のミツキちゃんなら、この気持ち分かってくれるだろうか、なんて思ってたけど……島を一周して適応してるみたいです。ピンピンしてます。モクローとじやれている姿が微笑ましい。子供って元気だよなあと、心は若返っていないことを再認識した。

そろそろ休憩したほうがいいのではと、脳と膝が悲鳴をあげはじめた頃。ようやく辿り着いた。

波止場では、シナリオで飽きるほど見た顔の男女がこちらを伺っているのが見える。

男のほうはハウ。ほんわか愛されキャラで、島キングの孫だったはず。ただ、主人公と同じくシリアスな場面でもニコニコとした表情を崩すことは殆ど無いため、一部の人々から主人公共々サイコパス扱いされている不憫な子だ。

女のほうはリーリエ。かわいい。天使。

リーリエについて多くを語るのは、野暮というものである。

「その人、誰ですか？」

天使にその人呼ばわりされた事に若干傷つきつつも、いい笑顔を意識して返事を返す。

「俺はケン。訳あってククイ博士と一緒に、アーカラ島の研究施設に行くことになってる。短い間だけどよろしくね」

「よろしくー」

リーリエの天使っぷりと同様に、ハウの間延びした声も健在であった。おそらく最後までこの調子なのだろうか、島キングの孫というプレッシャーなど何も感じないといった風だ。

「それじゃあ、このクルージングに乗ってくれ」

案内されたのは、原作でも見たとおりである数人用サイズの古びた一槽の船であった。帆には何回も補強された後があり、船体も少しばかり時の流れを感じるような汚れ方をしていた。

「あの……博士、これは流石に……」

「ちよつと……」

「ボロいよねー」

やめてさしあげろ。ククイ博士だって研究費を削減しないとやってけないのだろう、察せよキッズ。

「これはビンテージ風ってわけで、決してボロくはないんだぞ！」

はいはい、そーいうのいいから。といった感じで、皆は船に乗り込んでいく。この子達無駄に大人びてる感じするし、ククイ博士もそこそこ大変そうだ。

船室は何人も入るスペースがないため、操縦者のククイ博士以外は外に出ることになった。今思えばククイ博士、船の操縦も出来るのかハイスペックすぎ。

と考えたが、とあるスーパーニビ人は陸空海なんでもござれの運転テクニックを持ってたしなあ。それにアローラみたいな離島地域だと、船の免許は車の免許くらい重要そうだし当たり前かと、独りでに納得した。

乗り込む配置としては、俺とハウの男二人と、天使とその従者で左右に分かれることにした。ミヅキちゃんがこれから、天使様をお守りする立派な戦闘代理人に育っていきそう。こうやって分かれる辺り、才能の片鱗が見え隠れしている。

「ねえ、ケンってポケモン持ってないの？」

エンジンのけたたましい音で掻き消されそうなギリギリの音量で、向こう側に座っているミヅキが声をかけてきた。ギリギリ聞こえないふりが出来そうだったので、首を動かさず水平線を見続けるフリをした。

「あー、それおれも気になるー」

ちっ、ハウも聞こえていたか。

何のポケモンを持っているのかなんて、俺が一番知りたい。ハウエンから来たっていう説明をした手前、ハウエン地方のポケモンが出せ

ないとアウト。アローラのポケモンでもアウト。

どうしようかと考えた結果、一つの妙案を思いついた。

「俺のポケモン、大きすぎて船から落っこちてしまうかもしれないぞ？」

ハウとミツキの目が輝き、リーリエは少しばかり顔を強ばらせた。

「えー！ そんなに強いポケモン持ってるの！」

「いいなー、あたしなんてモクローとゴンベだけ……」

「すごく、気になります……でも、今ポケモンを出されたら、わたしたちはダダリンのように、海の藻屑と化してしまいますよね……」

よし、時間は稼げた。アーカラ島に着いたら真っ先にポケセン行こう。おそらく、どんなポケモンがいても預かってくれるはずだ。たとえば、伝説のポケモンでも幻のポケモンでもマスボ入りのポケモンでも、ジョーイさんはいつも通りの対応をしてくれるのだから。

そもそも、船に乗る前に思いつけばよかったものを……いや、追いつめられたから思考が早めに回転しただけか。

「どんなポケモンか教えてよー」

「アーカラ島に着いたらのお楽しみだ。おそらくポケモンも疲れてると思うし、ポケモンセンターに行つてからな」

くどいハウに必ず見せると念を押したが、預けられる所を見られても大丈夫なのだろうか。スクリーンにがつつりポケモン写つちやつ

てた気がするが……まあいいか。

あれから、そんなに時間も掛からずに無事アーカラ島に辿り着いた。

これから少しの間自由行動をとることにしたらしく、集合場所を一時間後の空間研究所前に定めた。ククイ博士は事前の打ち合わせもあるのかもしれない。

解散して、真っ先にポケモンセンターへと向かう。場所はストリーククリアして間もないためか覚えており、割とスムーズに行けた。道は変わっていないが、ゲームにはなかった住宅地やちよつとした店、建物が並んでいて、道では様々な人種の人々、様々な種族のポケモンが思い思いに動いている。

ここは、この世界は『ゲーム』とは違って、生命がある。これは忘れてはならないようだ。特に、俺のような廃人一歩手前だった人間は。

赤い屋根がトレードマークというのは、この世界でも随分と目立つわけで、目的地はすぐに見つかった。ポケモンセンターは地域にひとつずつあり、人々とポケモン達のコミュニティとなっているという話を聞いたことがあった。もちろん、ゲームかアニメの設定でだが。

ここも例に漏れず、色々なポケモンたちがいて、カフェやバトルで

息抜きをしていた。その光景に、幼い頃少しだけ描いた情景が重なる。

純粋な気持ちでポケモンを見ていたのは、どれほど昔だっただろうか。初恋の子と、毎日ポケモンをやっていた頃が懐かしい。

自動ドアの向こう側には、見慣れたような、初めて見るような光景が広がっていた。中央にジョーイさん、右側にフレンドリーショップ、左側にカフェ。頭で分かっているけど、何度画面の向こう側から覗いてみても、デジャヴなどない。新鮮な気持ちでここに立っていた。

迷わず、まっすぐに歩く。以前から決められていたかのように道筋は自然と出来上がっていた。

「なにかご用でしょうか？」

ジョーイさんが、営業スマイルで話しかけてきた。こうしてカウンターに近付くだけで話しかけてくれるのは、初めて利用する人だったり人見知りの子供だったりに対して好印象だ。ゲームの世界だとAを押さなければ自動ドアすら入れない。

ほんと、なんでそんな仕様にしたかなあ。

「すみません、ポケモン達を休ませて欲しいんですが……」

「ポケモンの回復ですね、おまかせください。それでは、モンスターボールをお借りしてもよろしいですか？」

後ろに背負ったりリュックから、ボールを六つ取り出した。バッグの中身をあらかじめ少しは確認してみたが、確実にウルトラボールだと

分かるのが三つほどあった。だが、天下のポケモンセンターである。きちんと対処してくれる筈だ……例えそれが世界に存在しないボールでも、その中身が幻はおろか未発見のポケモンでも。

「……あの、これはモンスターボールですか？」

嫌な予感は一ビンビンしている。

「一応モンスターボールです。もしかして、預かれませんか？」

「いえ、仕組みはモンスターボールと変わらないみたいですから大丈夫ですよ。お預かりしますね」

そして、ジョーイさんは奥の機械にボールを並べた。上の大きなディスプレイに表示され、次々に明らかになる俺のポケモン達、ガブ、ジュモク、カグヤ、ギャラ、ミミツキュ、そしてテテフ。

あー、これ最初に組んだバトルチームじゃん。懐かしい。

なんて、思い出に浸っている暇はなさそうだ。ジョーイさんが、まるで親の敵でも見るかのようにこちらを見ている。気がつけば、周囲はざわめき、囲うようにしてこちらを見ている。

「どうして、島の守り神のカプ・テテフを持ってるんですか？」

そんなの、誰よりも俺が知りたい。

そっとしておいて。

この場において釈明するには、大きな問題があった。

カプと名のつく各ポケモンは、おそらくこの世界でただ一匹であるという点。これがどうしようもなく大きい。

カプと名のつくポケモン達は、遠い昔に伝説のポケモンから特別な力を授かって、殻を持つ今の形状になったとされる……はずだ。

ゲームの世界では、セーブデータの数だけアローラ地方があり、カプ・テテフもそれと同じくらいには存在した。対戦環境ではミラーマッチが日常茶飯事に行われていたし、GTSには二度と交換されないような条件を付けられて眠っているカプ・テテフは五万といるだろう。

だが、こちらの世界ではどうしてもカプ・テテフに限らず、カプと名のつくポケモン達は、各種一匹ずつであると考えられる。これはどうしても覆すことは難しく、言い訳するにはこの世界のどこかにいるもう一匹のカプ・テテフをこの場に召喚するしかない。気紛れという設定の奴ら呼び出すのは、今の状況では不可能だ。

さらに問題なのは、それを実現させたとして島の人間を納得させることができるのだろうか、という点である。

カプと呼ばれるポケモンはどれも守り神と比喻される程、とても強力で比類なき力を持つとされる。実際バトルでも強い。

コケコは種族値と技が噛み合っておらず悲惨だが使い勝手の良いポケモンだし、テテフとブルルは火力が頭おかしい。レヒレだけ微妙みたいな風潮があるが、そんなことはない。いつの間にか、レヒレで

詰んでるような状況は誰しもが経験したことがあるはず。めがねこわい。

そんなポケモンを、しかも一匹しか存在しないというプレミア付きで持っているとなれば理屈では納得しないゴミクスが出るのは当然の摂理だろう。

昔、加速バシャーモという最強のポケモンがいた。ポケモン全国図鑑（1000円）を買えば、軽業キモリ、加速アチャモ、湿り気ミズゴロウのうち、いずれかが”ランダム”で入手できるのだが……いわゆる夢特性であり、配布は雄のみ。当時は、雄からの夢特性遺伝が不可能であったため、入手方法がそれだけしかなかった。

当時高校生だったため、お小遣いはある程度潤沢ではあった……しかし中身は完全なランダムであったのだ。不幸にも一万円と引き換えたのは、外れポケモンとゴミの山であったのだった。

なお友人は一発で引き当てた模様。その友人に対して、一週間口をきかなかったような記憶がある。後に謝罪こそしたものの、人生の汚点であり、今でも恥ずかしい思い出の一つとして胸の奥につつかえていた。

金を出して買えるものでさえ、この有様だ。カプと名のつくポケモン達はその比ではない。今の状況は、言わば宝石を持った子供そのものである。

目の前でテテフを解放しろ！ ならばまだ良い。元から無かったものだ、未練など無い。しかし、どこの誰かが、力尽くで奪おうとする可能性は大いにある。

身体は子供だ。中学生くらいとはいえ、目の前にいる黒人のガチムチや長身白人に蹂躪されたらひとたまりもない。怪我で済めばいい

が、最悪の場合死ぬ。

そうになると、突破口はただ一つ。

「俺は、カップ・テテフに選ばれたんだ。文句があれば言ってみろよ」

そう、開き直りだ。ここまでくると、もはや清々しい気分ですらなれる。実際は、カップ・テテフと打ち合わせはおろか顔合わせすらしていないというのに、とんだ大見得を切ったものだと思っ
ていた。

ただ、全くもって無謀というわけでもなく、勝算は十分以上にあつた。

カップ系のポケモンは前述の通り気紛れで、気に食わない人間に罰を与えるらしい。つまり、カップ・テテフの機嫌を損ねれば身の危険があるため、カップ・テテフの気に入った人間には迂闊に手を出せないようになるという考えだ。

思った通り、そう宣言してから周囲に動揺が走った。狙い通りである。これから更にゴリ押しするかと次の言葉を考えていたが……

周囲の様子がおかしい。畏れというよりこれは、どちらかという……哀れみ？

「わ、わかりました。くれぐれもお気を付けて」

予想に反し、すんなりとボールをくれるジョーイさん。振り返れば、あれだけいた人ばかりが波のように引いていった。

おかしい。何か、根本的に間違っているんじゃないだろうか？ レ

アポケだぞ？ 普通寄って集って取りに来るだろ？ スカル団とか普通に奪い取りに来そうなもんだけど？

少し考えて、ある一つの答えに辿り着いた。

カプ・テテフって、もしかして……

「あの、ジョーイさん。カプ・テテフって、そんなに印象悪いんですかね？」

「あなた、もしかして知らないの?! カプ・テテフは気紛れで人を狂わせて楽しむ邪神よ！ 何度かトレーナーと一緒にいる所を目撃されてたけど、彼らの殆どが不審な死を迎えてるわ……あなたも気を付けることね」

邪神に取り憑かれていたと気付いて数分後、カフェで荷物点検を始めた。この行為は最早現実逃避といっても過言ではない。周りからは一定の距離を保たれ、マスターのおじいさんからは苦笑いされる状況なんて目を逸らしたくなくても何らおかしくないだろう。

リュックの中には、四次元ポケットよろしく沢山の荷物が入っている……訳ではなく、見た目の容量に見合った、数種類の未使用ボールと、Zリング、キーストーン、回復薬数個が入っていた。

まず島巡りしてないのにZリング持っていたり、カロスの二人組に出

会ってないのにキーストーン持ってたりなど、突っ込みどころが多すぎるが、ギャラドスは問題なくメガシンカ出来るし、ガブリアスは問題なくZ技が撃てるわけだ。

口にエネココアを入れ、少し落ち着いた。なるほど、不良少年のグズマでも好きになるわけだ。チョコレート風味の中に、少しだけ花のような甘い香りが鼻腔をくすぐる感覚は、他のココアでは味わえない。

少し状況を整理してみよう。今現在所持しているポケモンはUB二匹カプ一匹普通ポケ三匹だ。外を出歩いた時にどれだけ目立つかを考えてみて、UBとテテフは論外、ミミッキュはミツキ達に不審がられる。消去法でガブリアスとギャラドスの二匹で冒険すべきだと結論付いた。

ただ、ガブリアスのドラゴンZは使わない方針で行かなければ。そもそもZリング持ってもいいのか？ 島巡りしてないぞ。これから島巡りするという選択肢もあるけど、リーリエとその一味の邪魔はしたくない。

リーリエの旅を終えて成長する様を見届けなければ……あれ、そしてたらカントーに行っちゃうよな？ そしたら二度と会えなくてしょんぼりリーリエしちゃうよな？

……リーリエの成長を見届ければ会えなくなる。だが邪魔をせずとも、リーリエが成長しなければカントー行きもなくなる。

いきなり究極の二択が迫ってきた。リーリエを取るか、島の平和を取るか……エネココアをしたり顔で飲みながら、なんて罰当たりなことを考えているのだろうか俺は。

色々考えた末に辿り着いた答えは、保留だ。冷静に考えれば原作通り行かないと、最悪アローラが滅ぶ。困りはしないだろうが、良い気はしない。リーリエが避難してしまい会えなくなる可能性だってある。ここは流れに身を任せよう。

思考を巡らせているうちに、エネココアが空になってしまった。マグカップを下げてもらえるよう、手前に押し出す。

「ごちそうさま、エネココア美味しかったです」

「また来るといいよ。これは、カップ・テテフへのお供え物だ、しっかり受け取ってね」

そうして渡されたのは邪神への供物……もとい虹マメを数十個、それもケースごと押し付けられた。騒ぎを起こすなどということだろうか？ と考えたが、虹マメは仲良し度がたくさん上がるのを思い出した。やだおじさまいけめん。

そろそろ約束の時間だろうと思い、席を立った。いつになっても、皆から注目されるのは慣れないものだ。

空間研究所は、ポケモンセンターの目と鼻の先にあった。三階建てのバーネットビルという場所に間借りしているようで、近くには不自

然なほど大きなパラボラアンテナのようなものが立っており、ランドマークにもなっているようだ。

中に入ると、リーリエとミヅキ、ハウが既に到着していた。予想よりだいぶ早めである。

「お前ら、どこか観光しに行ったりしなかったのか？」

「あたしとリーリエは服を見に行ったよ」

「おれはマラサダ食べたー」

あれ、もしかしてカロスの二人組とはまだ遭遇してない感じか？

このまますれ違ったままでも問題はなさそうだが……まあ、一応フロアは入れといてやるか。

「観光なら、この町にあるホテルしおさいって場所がおすすめだぞ。噴水とか造詣が良いみたいだし、一回くらい行ってみるといいってカフェのおじさんが言ってた」

あの二人組に会わないからといって、これといって弊害はないが……できるだけゆっくり旅をしてほしい。こういうのは大人になってからだと体験出来ないだろうし、こんな機会があるなら色んな事を見て、聞いて、触っていくべきだ。なにより……そうすることで、ドラダラと旅をする百合百合しい彼女等をいつまでも見続けることができるのだ。眼福である。

え、リーリエと結ばれなくてもいいのかって？ ばっかお前、烏澁がましいにも程があるだろいい加減にしろ。

「たぶんククイ博士は上で待ってるだろうし、さっさと行くか」

エレベーターのボタンを押し、目的地を三階に定める。二階に何かあるかすぐく気になったが、今回は見送りである。

エレベーターが開くと、そこは最先端の技術が詰まっていた。研究者が数人コンピュータに向かい合っており、その中にククイ博士もいる。完全に場違いな気がしてならないのは気のせいではないだろう、せめてシャツを着なさい。

「あら、よく来たわね」

声のする方に目を向ければ、褐色の美女がいた。そういえば、名前出てこないけどククイ博士の嫁さんだったな。リア充爆発しろ。

「はじめまして、ククイ博士に呼ばれてここまで来ました。私はケン、そしてこの子がリーリエ、隣がミツキとハウです」

「あら、あなたがフォールの……」

「いったい、ククイ博士はどんな説明をしたのだろうか……ここまで可哀想な目で見られるの産まれて初めてなんだけど。」

独白。

空間研究所での扱いは、リーリエ以上に可哀想な子として、まるで腫れ物を触るかのようなものだった。

向こうとしては若干の記憶喪失になり、元の世界に帰ることができない可哀想な子供に映っているのだろう。実際はレポート期限と就活が消えて、割とこれから何するか楽しみな成人男性なので申し訳なさでいっぱいである。

バーネット博士……ククイ博士の嫁さんの話は、コスモッグ、フォールと呼ばれる人間の二つについてであつた。コスモッグについては、繁殖方法や進化先さえも丸わかりなので、どれも既知の事実として一応の確認くらいである。

個人的に気になるのは、どちらに進化するかであるが……祭壇の名前で明らかになるだろう。時間の問題だ。フォールについては、まだウルトラホールが研究足らずというのもあり当たり障りのない部分だけ、つまり原作で分かった内容以下のことしか情報は得られなかった。

だが、フォールについての話をした後の周りの反応には少し驚かさされた。ミヅキ&ハウの真顔サイコパスコンビも感情の起伏が見え隠れしていて、原作が表情を作れないくらいスペック不足だったんだろうなあなんて思ったりしていたが……予想外にリーリエの反応が大きかった。

コスモッグについては言わずもがなではあるが、親元に帰れないリーリエ自身の境遇を重ねたのだろうか、突然ポロポロと泣き出してしまったのだ。

リーリエには申し訳ないが、親元というか実家から勘当されているため元の世界にも帰る場所はないので心配いらない。確かに、人間関係や漫画やゲームの結末など未練は少しくらいあるのだが、今は将来への不安や人間関係その他様々なプレッシャーから解放されたことの方が大きい。

本気で帰ろうと思うのならば、パルキア辺りを捕獲すれば元の世界へ帰ることが出来そうな気もするのだ。悲観的になって塞ぎ込むより、楽観的に見て活動した方が精神的にも楽で身体に良いだろう。

こちらからは特に情報提供をすることはなく、身体年齢が下がったのは伏せ、少し記憶が抜け落ちてのことだけを伝えた。ボロが出る可能性は大きいが出たところで問題は無いだろう。「信用出来なかった」でゴリ押し出来そうなくらい周りから腫れ物扱いを受けた身としては、罪悪感が少しばかりはあるが、どこでどんなリークがあるのか分からないため、迂闊に所持しているポケモンについても話せない。

UBについてポケモンセンターでは突っ込まれなかったのは、ジョーイさんがおそらく知らない別地方のポケモンであると勘違いしたのだろうと考えている。カプ・テテフを把握出来たのであれば、カグヤとジュモクも把握しているはずだ。

もし『本当』にポケモンについて熟知しているのであれば、生態系のタガの外れたUBの存在が異常であるのは理解できるはず。特にククイ博士や、その奥さん……バーネット博士にバレたら面倒なことになる。俺もUBも、ウルトラホールから出てきたという推測で間違いないのだから。

空間研究所での話はこれだけ。特に驚きもほとんど無く、天使の新たな一面を垣間見たというくらいしか収穫はない。それでも十分こ

こへ来た意味はあったのだろう。向こうのみんな、なんかごめんな。

ついでに言えば、島巡りはしないことになった。ポジションとしてはリーリエと同じく、ククイ博士の助手二号というわけで、リーリエの旅をサポートする役割になったのである。バンザイ、生きてよかった。みんな、ほんとすまん。

「んで、何でこんな状況になってんですかねえ」

「君が敬語を崩したの初めてだね」

目の前にはイワンコと、どうでもいい事を言うククイ博士。空間研究所を出て直ぐの事であった。丁度いい広場になっているとは思っていたが、ここはバトルに使う訳では無いだろう。近くに研究に使う機材らしきものがあちらこちらに散らばっているのを、ククイ博士は見えないのだろうか、それとも見て見ぬ振りをしているのか。

「いやいや、ここでポケモンバトルでもするつもりなんですか?」

「その通り! 君の今の実力を把握しておかないと、リーリエがもし

もの時に危ないからね」

場所が不適當だが、至極真つ当な意見である。確かに、ククイ博士はどんなポケモンを使うかだとか、バトルでの癖とかで性格まで分かりそうではあるし、何事においてもまず拳で語り合うタイプのように感じる。

とどのつまり、ここで負ければリーリエとは離れ離れ……絶対に勝たねば。決意を胸に腰のボールホルダーから、ルアーボールを手に取った。

「ギャラドス、出番だ。徹底的にやるぞ」

顔合わせはしていないし、鳴き声すらも聞いたことはないが……こいつは、誰よりも俺が一番よく知っている。

「えっ、赤いギャラドス!？」

「すごい、初めて見ました!」

「これが……ケンのポケモン」

水棲のポケモンながら地面の上でさえ威圧感を放ちつつイワンコと向かい合い、とぐろを巻き咆哮する赤いギャラドス。その姿にククイ博士、リーリエ、ミヅキは驚きの声をあげる。ハウは驚いて言葉も出ないようであった。

偶然産まれた、C抜き5V色ギャラドス。性別は雄、性格は陽気、努力値はASぶっぱ余りH、技は竜舞、滝登り、地震、氷の牙、Lv5¹。

「ギャラドス……いや、ニシキ。俺のために戦ってくれるか？」

ニツクネーム
NNは、ニシキ。メガストーンを持たせている竜舞型のメガギャラドスとして育成した、使い勝手の良いポケモン上位に入るポケモンだ。

声に反応して、強面の顔がこちらを向き大きく頷いた。その目は、任せると言わんばかりでヤル気に満ち満ちている。

「イワンコ！ 体当たりだ！」

先手必勝とばかりに、ククイ博士はイワンコに指示を出した。博士のことだ、勝てない戦いだと分かっているのだろうけど、それでも出来ることを全て出し切るつもりなのだろう。

ならば、こちらも本気でいくまで。

「ニシキ、滝登りで迎え撃つぞー！」

「ガァウ!!」

よく訓練されているのか、それとも呼吸が合っているのか、ギャラドスに指示を出した後のタイムラグは殆ど感じられないほどスムーズで、陸上だろうがお構い無しに加速する。

身体の小さいイワンコに、巨大なギャラドスが水流を纏い突き上げた。

イワンコはたまらず吹き飛ばされ、宙を舞う。それを見事、ククイ博士がキャッチした。

……いつも思っていたが、この人身体能力高すぎでしょ。イワンコも中型犬くらいの大きさあったはずだが、受け止めてもピンピンしている。

当然ながら、ククイ博士の腕の中にいるイワンコは気絶しており、どうみても戦闘不能となっていた。おそらくイワンコは、この地域のレベル帯に調整されているのだろう。ガチで来るならルガルガンを使ってくるだろうし、イワンコ相手に勝てるのは当然の理であった。

「いやー、Z技を使う暇も与えないとは流石だね」

「自慢のポケモンですから」

自慢のポケモン、という発言を聞き得意気な顔をしたニシキ。どうやら、この世界のポケモンは人間の言葉がある程度理解できるようなある。アニメの中でもそのような描写であったし、やはりポケモンは不思議な存在だ。

「ニシキ、バトルしてくれてありがとう。もしかして俺が誰か分かるのか?」

「ガウウ」

当然だ、といった感じでニシキは頷いた。しかしこうも表情豊かに動いてくれると、めっちゃくちや感動する。やはりポケモンも生き物だと、今更ながら実感した。一度、手持ちのポケモンと対面する機会を作らなければいけないだろう……少しだけ不安な連中もいるが。

「……ケンさん、なんだか嬉しそう」

「トレーナーとポケモンは、家族と同じようなものだからね」

「家族……」

リーリエの呟きにククイ博士が反応し、それにポツリと、ミヅキが言葉を零した。

残念ながら、そんな綺麗なものではない。

確かに、手塩にかけて育てたポケモンが親近感を持つて接してくれるのは嬉しいし、感動する。しかし本当に嬉しいのは、自分のよく知っている『仮想』のポケモンが、世界が、限りなく『現実』に近づいていく感覚だ。

ニシキに限らず育てた全てのポケモンは、悪く言えばあくまでコレクションの一つと言っても過言ではない。苦勞して入手し手間をかけた数々のポケモンを、身近で眺めることができる事実。それを皆に認められる感覚。リアルの世界では得ることの出来ないそれが、何よりもたまらない、甘美なものであった。

はつきり言つて非道德的だ。生き物に向ける感情ではない。

だが、誰がそれを責める？ 異世界から来た人間の胸の内など、この世界の誰にも理解されない。こうして、笑いながらニシキをハグしている姿を家族のようだと解釈するくらいには、皆同じくらい鈍い。心にあるのは独占欲だというのに。

好き嫌いは別として、ポケモンへの認識は相も変わらず、あくまで勝利するための駒でしかない。ポケモンの世界に来たことなど、言つてみればゲームのリアリティが増しただけのようなものである。我ながら順応が早いのも納得だ、この世界の誰よりも、この世界のシステムを理解しているのだから。

目の前のニシキを見た。グルルと、喉をさすられると目を細めて鳴く姿はまるで猫のようだ。十分な信頼を得ているのは明らかだった。

ゲームとは何か違う感覚。この感覚に慣れるべきかどうか、まだ判断がついていなかった。

田舎の洗礼。

バトル後、リーリエとの同伴をきっちりかつちり(誓約書付きで)認めてくれたククイ博士とは、ここで暫しの別れとなった。

おそらくバーネット博士とイチャコラするつもりなのだろうが、一丁前に研究があるだの調査があるだの言っている。本音と建前がこんなにも分かりやすい例はない。たとえ相手が子どもだろうと、もう少しマシな嘘をつくものだが。

「では、どうしてバーネット博士がククイ博士の腕に絡んでいるのですか？」

研究の邪魔ではありませんか、とリーリエの容赦ない質問が飛んだ。たった今、どうでもいいし放っておいてあげようと思った矢先であつたのだが……案外、子どもの眼は不正に敏感なのだろう。

リーリエの眼差しは、お年玉を貯金すると言って取り上げる親を、疑いの目で見える子供のそれであつた。

「あら、夫婦が一緒にいるのは当たり前だと思っけど？ 違うの？」

より一層くっついて、大人の余裕を見せつけてくるバーネット博士。ぎゅむつという効果音が入りそうない形の胸部がさらに崩れ……おいこれ以上はやめろ不健全だ。子どもたちの目の前で何をするのだこの夫婦は、リーリエの目に毒ではないか。

「そう、仕方の無いことなんだ！ それじゃあ僕はフィールドワークに行ってくるね！」

「ま、待ってよあなたー！」

隙ができたのをいい事に強引に話を纏めたククイ博士は、どこかへと走り去っていった。それをバーネット博士が秒で追いつく。二人とも博士のくせに身体能力高すぎだろスーパーアローラ人かよ。

結局どこでナニについて調べるのか、質問に答えることなく反論される前にトンズラした二人を追いかけようとするのは、リーリエ含め誰もいなかった。リーリエの表情としては、もう好きにやってくれという諦めだけ。ククイ博士が保護の役目を全て放り投げたのだから、この結末は仕方ないといえば仕方ない。リア充め末永く爆発しろ。

「ククイ博士はいなくなっちゃったし、どうしたもんか……お前らこれからどうする？ リーリエも行きたいところとか無いのか？」

これからの方針を定めるために、三人に意見を聞いておく。おそろく別行動になるのだから、動向だけでも把握しておいて損は無い。

「あたしとハウは島巡りの続きよね。せせらぎの丘に行くために、とりあえずオハナタウンを目指そうかな」

「いいねー。俺も牧場行きたいー」

こいつらはオハナタウンへと向かうみたいだ。大味筋書き通りという、一番安心するルートである。

逆に、一番安心出来ないのはメレメレ島に逆走パターン。誰も彼等を止めることは出来ない。

「わ、わたしは……もう少し、この町を見てまわりたいです」

たった今、天使からの特命を受けた。どこが天使ってこんな普通の事を控えめにアピールするところが天使。熾天使リーリエルからの

神託を受け、観光プランを早急に仕上げることを決意したのだった。

「オツケー、そしたらミツキとハウはここで一旦お別れだな。お互い切磋琢磨して頑張るんだぞ?」

「うん、ありがと……でもなんでそんな上から目線なのよ」

それは年齢もポケモンのレベルも上だからだ。無意識的に上から目線となってしまったのも無理はない。だからそんな嫌そうな顔をしてしないで。

「そんなことは、俺のギャラドスに勝てるようになってから言ってくれ……あれ、もしかしてハウと一緒に行くのか?」

「えっ、一人だと危なくない?」

確かに子ども一人旅は危ないのだが、年頃の男女二人旅は別の意味で危ないのでは……とも考えたが、やむなしか。この世界がリアルに近付きすぎて、島巡り上の安全管理の問題も浮上してきたようだ。確かに子ども一人に島巡りさせるのはどう考えても危険だろうし、歳の寄った子どもでグループを組ませるのは得策ではある。

「確かに一理あるな。まあ無駄話はこれくらいにして、早く次の目的地に行くといい」

「だからなんで上から……わかったわよ。ハウ、はやく行きましょ!

リーリエもまたねー!」

「わかったー。リーリエもケンも、また会おうねー」

サイコパスコンビは手を振りながら、早足で去っていった……もし

かしてあいつら、できてる？ 退場の仕方がクワイ博士とバーネット博士のそれと大差ないんだけど。

「よし、まずは観光地を探るための情報収集しよう。とりあえずアローラ観光案内所に行くか」

「そうですね、行ってみましょう」

きつちり三步後ろを付いて来るリーリエ。冷静に考えてみると、リーリエと二人きりである。リーリエと二人きりだ。リーリエと、二人きりになった！

大事な事なので三回言いました。しかも、観光するなんてデートみたいなシチュエーションだ。これは神が与えた、異世界に飛ばされた俺に対する特典だと言っても過言ではない。ポケモンなどはゲットしてしまえばどうともなるが、天使はただ一人の天使なのだ。ありがとう神様、俺、頑張って生きるよ。

浮かれすぎて数時間前の事など忘れ去っていた結果、街行く人々から変な目で見られることになってしまった。

その影響は、まず観光案内所に向かう前からすでに出始めていた。道ですれ違う人々からヒソヒソと噂話をされるのだ。どれだけヒソ

ヒソしてても、カプ・テテフにストーカーされてるだの、呪われた子だの普通に聞こえてくるので少しくらい静かにしてほしい。

「どうやらこの町に、カプ・テテフを捕まえた方がいるみたいですね」
「……………だ、誰のことについて話してるんだろうな」

流石に嫌でも耳に入るようで、リーリエが雑談をふってくる。嫌な流れだ。

「さあ…………でも、カプ・テテフはカプ神の中でも凶悪で、無邪気さ故に人々とポケモンを呪い殺して遊ぶそうですよ…………その結果、幾つもの集落が減んだとも歴史に記されています」

「は、ははははは…………リーリエは物知りだなあ」

「えへへ、ありがとうございます」

笑えない。表情筋を無理矢理酷使して筋肉痛になる一歩手前である。テテフってこんな設定があつたの初めて聞いたのだが、どうしてそんな重要なことをストーリーで言わないのだろうか。ゲーフリリの悪意を感じる。

だが、一回は顔を合わせなければならぬだろう。衛生管理はともかく、食事の問題は避けられない…………ジユモクやカグヤなど、食事もするかどうか分からない面々もいるのだが、とりあえずポケマメあげとけばいいか…………本当にそれで大丈夫なのだろうか？

この先にある新たな不安を抱えながら、ようやく観光案内所へとたどり着いた。ここまでの道のりを鑑みてみるに、噂話はカンタイシテイ全体に広がっているのだろう。ぶっちゃけ嫌な予感しかしない

が、かといってここで逃げるわけにもいかず、ドアを開いた。

「すみません、ここら辺の観光スポットでオススメの場所を知りたいのですが……」

「あ、あの子よ！ カプ・テテフに見初められた子！」

開幕これかよいい加減にしてくれ。おかげでざわざわとした喧騒が、観光案内所の中で感染していく。思った通りではあるのが、思った以上に不味いことになった。

まず、隣にホウエン出身だと信じているリーリエがいる点だ。手持ちにテテフなんて連れていけば、疑われるのも当たり前のこと。どう言い逃れしても穏便に済ませることはできないだろう。

次に、これは予想していたのだが、観光案内所の職員が怖がってまともに話を聞いてくれなさそうな点だ。邪神の気紛れが飛び火したらたまったものではないだろうし、関わりあいになりたくもないだろう。しかしこれでは観光プランが組めない。

そういうの一切存じ上げておりませんのスタイルで行くべきかとも考えたが、カンタイシティも観光案内所も狭い。既に全員に話が行き渡っていると考えれば、下手に嘘をつくよりも流れに身を任せるべきか。

「あの、どうぞおかけになってください」

「……ありがとうございます」

カウンターの向こうでは慌ただしい声が聞こえる。座らされた席は豪華で、おそらく来賓用の調度品なのだろう。座り心地も最高であ

る……機嫌を良くさせて帰らせるつもりなのだろうか？

「……ケンさん、少し聞きたいことが」

「悪いリーリエ、それは後で話す」

すかさず、出てくるであろう言葉を牽制した。おそらく良いようには思っていないのだろう、ジト目でこちらを見ている。かわいい。やはり天使は何をしても天使なのだろうか。などと思いを馳せていると、職員がこちらに向かってきた。

観光案内をしてくれるのは二人だ。しかも物腰の低すぎる接客態度に、周りの客が訝しげにこちらを見てくる。仕方ない、完全にVIPの対応だもの。ここまで大物になった記憶などないのだが。

リーリエはその対応に不慣れな様子ではなく、やはり令嬢なのだろうか変な気遣いをさせないようにしている辺り流石である。天使だ。もうこれ以上褒めさせるのを止めてくれ、ボキャブラリーが足りない。

観光案内所の二人は、まず周辺を散策した後、ホテルしおさいに行つて噴水を見たりホテル内を見学して、ホテルにあるレストランで食事というプランを提示してきた。

「あれ？ ホテルしおさいのレストランといえば、十年先まで予約が取れないと聞いたことがありますよ？」

流石リーリエ、博識である。お嬢様とはいえ、きちんと勉強しているのは感心せざるを得ない。

「はい、その通りです。ですが、ホテルのオーナー様が特別席を設けて

下さるそうですのでご安心ください」

全く安心など出来ない。というか、いつの間にそんな約束を取り付けたのだろうか。すごく気になる。

「お忙しいでしょうに、予約はどのようにして取ったんですか？」

「ホテルしおさいのオーナー様が是非とも招待したいとのことでした……このバッジを見せるだけで部屋に通してくれるよう話を通してあります。料金に関しましても、すべて無料でさせていただくのとです」

どうしてそうなったと問い詰めたいが、押し付けられるようにバッジを受け渡された。色々と扱いが神すぎるのだが、これを本当に受け取ってもいいのだろうか。罨ではなくとも、何かの意図があるに違いないと腹を探っても仕方が無いだろう。

「色々とお手数をおかけしていただき、ありがとうございます。それでは、私たちはこれで」

いくら考えても無駄だと思考を打ち切った。それに、ここには他の客へのプレッシャーになるだろうと、リーリエを連れそくさと案内所を出ることにした。

ちらとリーリエを見る、明らかに不機嫌だ。ここからが正念場である。

さて、どうやってリーリエに言い訳しようか。

ヒミツの共有。

ホテル周囲の散策自体はすぐに終わった、というより周りの視線が痛いので早々に切り上げた、というのが適切かもしれない。

マジで何なの？ 俺ら是指名手配犯か何かなのか？ 人相広まるの早すぎでしょ？ 田舎の限界集落かな？ そんなにお前ら暇なの？ 他にもつとやることあるでしょ？ 等、言いたいことに限りがない。

「……ごめんな、俺のせいでゆっくり見れなくてさ」

「いいんです。この辺はミツキさんと一緒に、大体は見終わってますから」

リーリエの気遣いが心にくる。結果論だが、やはり多少のリスクはあっても、ポケモンは直に確認しておくべきだった。心のどこかには、他人に見せたいと思っていたのかもしれない。我ながら愚かなことをした。

逃げるようにホテルしおさいの中へと入っていくと、思ったより空いているロビーが目の前に広がっていた。もう少し客がいるかと思っただが、繁盛期ではないようだ。どおりで特別席が作れるわけである。

「すみません、これを見せれば良いと言われて来ました」

早速ポケットに隠していたバッジを、受付の人に見せた。一瞬考える素振りを見せたが、表情はすぐに驚愕に変わり、内線だと思われる電話をかけた。

「すみません、例の……ええ、カプ・テテフを所持しているトレーナーです」

すみません、がつつり聞こえちゃってるんですけど。あなた達カプ・テテフのこと警戒しすぎではないですか？

「宿泊ですよね？ お部屋にご案内しますので、付いてきてください」

宿泊なんて聞いていないが、ちょうどいい。こちらもこの街のポケモンセンターで夜を明かす気は毛頭なかったので、最悪野宿かなんて思っていた矢先の出来事である。

「彼女も宿泊できますか？ ただ、一緒の部屋だと色々問題があるというか……」

「お部屋はこちらの都合上、一部屋のみとなっておりますが……一応、ダブルベッドで防音処置が施されておりますので問題ありません」

むしろ問題しかない。何故だろうか、こちらを観光客カップル扱いしている気がしてならないのだが……リーリエが顔を真っ赤にしている可愛い。

「わ、わたし、ポケモンセンターに泊まりますから！」

残念だが、仕方ないだろう。リーリエは何者であろうと穢してはならない清く尊い存在なのだ。

「だそうです。彼女は食事だけということをお願いします」

「わかりました。食事の準備が出来次第お持ち致しますので、お部屋で待機なさってください」

歩いているうちに、一通りの説明が終わった。どうやら部屋内で食事ができるようだ。エレベーターは丁度よく一階で止まっており、スイッチを押すとすぐにドアが開き出す。中はポケモンや荷物を運べるように作られているのだろう、業務用エレベーター並に広かった。

エレベーターはどんどん上がってゆき、最上階にたどり着いた。そのままホテルマンに付いていくと、最奥の部屋の前で止まった。

「こちらになります。どうぞごゆっくり、お寛ぎくださいませ」

ドアキーを手渡すと、ホテルマンは戻っていった。先程渡された鍵で扉を開くと、そこはビジネスホテルなんかとは比べ物にならないほど、気品の溢れる部屋であった。

部屋はベッドとシャワールームを加味しても広く、二人で食事ができるくらいの机と椅子が置かれていた。デスク、ベッド、タオル、果てはアロマポットなど、備え付けの品々全てが一級品であることは素人目でも一目瞭然だ。さらには、最上階ということもあってか海が一望でき、水平線に隠れようとする夕日まで見ることが出来た。

「すごいな……いや、ほんとすごい。感動した」

「そこまで感動するものでしょうか、普通に凄いとは思いますが……」

「……あんまりミツキたちの前では、そういう事言わないほうがいいぞ」

リーリエが天然つぷりを発動させる。可愛らしく首を傾げてるが、そっぴいの子、財団の令嬢だった。おそらくだが、こういうのが当

たり前の世界で生きてきたのだろう。

「そういえば、ケンさんってカプ・テテフをゲットしていたんですね」

こういう、空気の読めなさとかで分かる。今そんな話の流れじゃなかったでしょう……どれほど気になっていたのだろうか。食事中に、さり気なく言ってみようかなんて考えてたのが全部水の泡だ。

「その秘密を教える前に、一つ約束事がある。これはリーリエと俺だけの秘密にすること、たったこれだけでいい」

「……それはククイ博士にも、ミツキさんにもですか？」

「そうだ。それが守れなければ、今日のことは忘れてくれ。ただし、もし約束を守れるのなら……リーリエの今一番知りたい事を教えてやる」

リーリエが眉を顰める。まあ無理もないか、ぱっと出の人間が何を知ってるなんて思いつかないだろう。反応としては正しい。

リーリエは少し目を伏せ、決意したかのように見開き直した。

「わかりました。ケンさんについて、色々教えてください！」

「お、おう……そんなにやる気になってもらっても困る」

どうしようと、リーリエを落ち着かせると椅子に座るよう促した。給水器から水を注ぐと、リーリエの前に置き、自分の分を一口飲んだ。美味しい、どうやら水も一級品のようだ。冷たすぎず、丁度良い温度まで冷されている。少しレモングラスのようなハーブ成分が含まれているのか、清涼感が増したように感じた。

一呼吸、間を置いた。

「深く考えずに聞いてくれ……俺は、別の世界のアローラからやって来た。カプ・テテフは向こうの世界の個体で、こちらの世界では別の個体が存在しているはずだ」

「そんなことって……ありえるのでしょうか」

半信半疑、といった感じか。流石に今ので信じてくれるとは思っていないが、この主張はあながち間違いではないのも事実だ。すぐに押し切れる。というより考えられる間を与えずにゴリ押した方が早い。

「空間研究所で、ウルトラホールについて聞いただろ？ 他の世界と繋がる事が出来るんだが、それは平行世界とも繋がる事が出来るみたいでな、おそらく、俺はそこからやってきたみたいだ。ただ、平行世界といっても若干の時差があったみたいで、俺らの世界だとアローラにはポケモンリーグがあっただが、こっちにはなさそうだな」

「そ、そんなにいっぺんに話されても困ります」

失敬、焦りすぎているみたいだ。少し話のペースを落としつつ、リーリエの反応を見ながら進めるか。

「つまりだ。言い換えれば、俺は別の未来から来たってことになる。ただそれを皆に言えば、どこで話が漏れるかも分からないし、いつ未来が変わるか分かったもんじゃない。だから少し嘘をついたんだ」

「わたしに話そうと思ったのは、どうしてですか？」

「……向こうの世界でも、リーリエのことは一番信用していたし、今日のやりとりで、ある程度リーリエが信用出来るに値すると思ったんだ。だから話した」

あ、また顔が真っ赤になつてる。やはり本物の天使はどの表情でも天使だ。愛くるしいことこの上ない。リーリエは自分で顔を二回ほど叩くと、勢いよく立ち上がった。

「分かりました！ ケンさんを信じます。あんなにお強いギャラドスと信頼し合っているんです、嘘をつくような悪い人のはずがありません！」

絶賛嘔吐き中なんだけどなあ。まあアローラの未来をロールプレイングしたのは事実だし、ポケモンの親もおそらくケンなので事実だ。なんの問題もない。あるとすれば、その『ケン』は、『俺』じゃない。

「信じてくれてありがと。お礼のついでに、未来から来た俺が何か一つ教えてやるよ。コスモッグについてか、それとも……未来のルザミーネさんについて、とか」

「……やっぱり、かあさまを知ってるんですね」

「どうする？ 何かを一気に教えるのは、未来を変えてしまうかもしれないから避けたいんだが……」

「かあさまについて教えてください」

ほぼ即答か、当然といえば当然だ。リーリエの旅の目的はコスモッグをエーテル財団から守ること、それが達成されたエンディング後は昔のような母親を取り戻すこととなった。

おそらく、リーリエにとってはコスモッグが何であれ無事ならば問題ないのだろう。ただ、ルザミーネがどのような原因で変わってしまったのかは知りたいはずだ。

「ルザミーネさんとはある出来事の後、心身ともに衰弱し、目を覚まさなくなった。原因はウルトラホールの中に棲むポケモン、ウルトラビーストだ」

「……それを倒せば、かあさまは元に戻るのでしょうか？」

「そんな簡単な話じゃないだろうな。ルザミーネさんは今現在、精神をウルトラビーストの毒に侵されている状態だ。ただ倒せば済む問題じゃない……だがな、俺の知ってる限り、チャンスは一度だけ来る」

そう、ルザミーネがウルトラホールの向こう側に行く前に、一度だけウツロイドが姿を表す瞬間がある。エーテルパラダイスでの不祥事で、初めてUBを目撃するシーンがあったはず。

「ルザミーネさんに取り憑いているウルトラビーストを手に入れてしまえば、まいさえすれば、解毒剤の研究も進むだろう。幸い協力してくれそうな人物もいるしな。そうすれば、ルザミーネさんが消耗する前に治せる可能性がある」

「そんなこと、出来るんですか？」

余裕である。ウツロイドはLv28なので、おそらくウルトラボールで一発ゲットだろう。念のため、カグヤとジユモクでウルトラホール周りを塞いで貰えば逃げられない。

「ただ、それだと未来を変えてしまうんだが……」

「いいんです！ そんな未来なんて、お断りです！」

いつになくリーリエが激しい。がんばりリーリエじゃないのに、こんなに感情的になるのか……激情に駆られるリーリエもかわいいな。

「よし分かった……ただ、達成するにはミツキの行動をチェックする必要がある。前いた世界の人間関係的に、ミツキはこの世界の俺みたいなものだからな。ウルトラビーストと出会うのも、おそらくミツキだろう」

「ミツキさんが？」

少し怪訝そうな目で見るのはやめていただきたい。こちらもある程度は傷つく……あれ、これももしかしてご褒美なのでは？

「だから、行動チェックのためにも一緒に行動した方が……誰か来たな」

足音が止まって数秒後、ノックがかかる。おそらく食事の準備が整ったのだろう。一時会話を中断して、ロックを解除し、扉を開ける。すると料理がたくさん運び込まれようとしていた……ただ、扉を開けたのは見覚えの無い、恰幅の良い壮年だった。

「失礼、私はこのホテルしおさいのオーナーをさせてもらっています、ラクと申す者でございます。どうしても貴方と食事がしたく、こちらに参りました」

おいおいおい、オーナー直々に来るのかよ。

邪神様、降臨。

ついに、ゲームで出番の無かったキャラクターがやってきてしまった。ホテルしおさいのオーナーなんて名前もビジュアルも記憶のない……もしかすると忘れているだけなのかもしれないが。

「これはこれは……今日はお招きしていただき、本当にありがとうございます。遠慮なくどうぞ、私も一度、挨拶に出向きたいと思っております」

どう考えてもオーナーが何か企んでいるというのは薄々理解していたが、出会ってみても何もわからない。詳しい話は食事中に、という事なのだろう。

「あの……わたしは同席してもいいんですか？」

「構いませんよ、お嬢さん。可憐な華はそこにあるだけで、会話を弾ませるものです」

ニコニコとリーリエと話す姿は、孫を想って話すジジイそのものなのだが……腹の中で何を考えているのか分かったものではない。この好待遇といい、対応の早さといい……まるで、何かに備えていたかのようなものを感じる。

「それではご着席して、しばしお待ちを……はやく料理を運んでくれ、ついでに椅子もな」

「はい、ただいま」

オーナーが指示を出すと、軍隊のようにキビキビとホテルマンたちが準備していく。少しの間に、広いテーブルの上が料理でいっぱいになる。

なった。

料理の内容的にはアローラらしく、極彩色があちらこちらに散らばる南国風のトロピカルな味付けが多そうである。生魚を食べる習慣があるのだろうか、見慣れた刺身も出てきた……かかっているのは醤油ではなく、ほんのり赤いよくわからないタレであったが。

「では、冷めないうちにいただきますしょう」

「ありがとうございます、それではいただきます」

冷戦のような食事時間が始まった。この部屋の誰もが口を開かないうえ、マナー違反を恐れて極力音をたてないように食べているせいか、部屋全体に嫌な静寂が漂っている。食事はどれも一級品なのだが、食べづらいつたらありやしない。空腹は最高のスパイスだとも言うが、これはまさしく最低のスパイスだった。

少し甘めのソースを付けた何かのステーキを頬張っていると、この空気に屈したのかやっとオーナーが口を開いた。

「私には、息子がおりました。もう数十年も昔のことです」

導入から入るのだろうか。昔話のように進めて、それから本題に入るのだろうか。濃厚な肉汁のステーキを無理矢理ゴクリと飲み込んだ。

「……続けてください」

「息子はポケモントレーナーをしておりますですね、アーカラ島でも名のあるトレーナーへと成長していったのです。ところがある日、息子から連絡が来ましてな……カプ・テテフを手に入れた、とね」

嫌な予感がしてきた。あれだ、お前がカプ・テテフを持っているはずがない！ みたいな言いがかりをつけてくる展開だ。こういつた展開はよく小説や漫画で見えるものだ。イメージだが、中世の貴族が同じようなことやっているような気がする。

「なるほど、つまり私のカプ・テテフは偽物であると仰られているというのですね？」

「いえいえ滅相もない！ そういう意味ではございません！ 問題はここからで……カプ・テテフを手に入れたと吉報を入れて数週間後、息子は消息を絶ったのです」

……まさか、巷で噂のテテフに取り憑かれて死んだのって、よりによってお前の息子かよ。嫌でも有名にもなるなるはずだ、おかげで大迷惑である。

「それから息子は姿を表すことはありませんでした……そこでお願いがあるのです、どうか一度だけでもカプ・テテフにお尋ねしたいのです。息子が生きているか、ただそれだけでも、どうかお願いします！」

気軽に聞いてみると予想以上に重たい話であった。こんな話を食事中にするなんて、料理に対する冒瀆もいいところである。せっかくの食材と手間隙が、このオッサンのおかげで全て台無しだ。隣で話を聞いていたリーリエも口と手が止まっている。

更に文句を言うならば、食事中にも一切の談笑も無かった点だ。なにが話が弾むだ。こうなることならば、リーリエと一緒に二人だけのロマンチックな食事がしたかった。食事中、リーリエがモグモグ食べる様をずっと見る事が出来る……最高だ。

だからこそ、そのチャンスを台無しにしたこのおっさんには、テテフに「誰それ知らない」と言わせて絶望させてやろう。それがいいそれがいい……ただ、邪神とのご対面か。無駄に緊張して、手汗と貧乏揺すりが尋常じゃない……決して武者震いの類ではないのは確かだ。

よし、覚悟を決めよう。

「分かりました、そこまで仰るのであれば……出てきて、カプ・テテフ」

おそらく今日一番のイベント、カプ^邪・テテフ^神とのご対面である。

マスターボールから飛び出したカプ・テテフは、何故か殻に閉じこもってしまった。カプZを使った時のように、蝶のような触覚も出ている。何かの意思表示なのだろうか。しばらく見つめても何の反応も起こさない。

「あの……どうかしましたか？」

オーナーが、心配そうにこちらを見てくる。そんなに急かすんじゃない。こちらは一個一個の挙動が命取りなのだ、殺されてたまるものか。

ただ、これでは埒が明かないので一先ず声をかけることにしよう。

「……………カプ・テテフさん？ これはいったいどういふつもりです

か？」

「……名前で呼んでくれなきゃ嫌」

なんだ今の声。もしかして、テテフか？ ちらとリーリエをしたら、驚きでドレッシングを口に付けたまま惚けていた。どうやらリーリエにも聞こえているようだ。かわいい。

脳味噌をフル回転させて考える。名前……：カップ・テテフではないものとするれば、やはりニックネームを指しているのだろう。今のパーティをレート初期に組んだと仮定するならば、最初に厳選した個体で間違いないはず。ボールもマスターボールだ。

「はいはい……：ハルジオン。顔を見せてくれ」

ハルジオン、と呼ばれた瞬間、ピョコつと殻から顔を出した。椅子に座っている状態で視線が同じなので、おそらく身長はそんなに高くない。殻の上からはみ出す上半身は、幼い黒人の女の子のように感じる。

まじまじと観察している内に、いきなり抱き着かれた。開始五秒でブースト全開である。幸いにも、ある程度友好的なようだ。

「えへへー、ちよつと怪しかったからカマかけたけど……：やつぱりケンだった！」

当たり前のように頬ずりしてくるが、ゲームの世界でそんなことした記憶が一切ない。リフレなんて面倒なこととはしていないし、育成だってレベリングのみ、あとは凄いい特訓で6Vにしたくらいだろうか。

しかも何気に怖いことを言ってくる。もしも名前を呼び間違えたら、一体どうなっていたのだろうか……考えないようにしよう。とにかく、このままでは埒が明かないので一旦テテフを引き剥がした。

「早速で悪いけど、ちよつとだけこの人の質問に答えてくれないか？」

「いいけど……じゃあ、ケンも何かアタシの言う事聞いてよ？」

悪戯っぽい目で見てくるカプ・テテフ。邪神、邪神、と崇められている神様からのお願いなど、正直嫌な予感しかしないが料理代と思つて我慢して領いた。

「やったー！ それじゃあ明日はデートね！ 楽しみだなあ」

この瞬間、島の住民が持つカプ・テテフへのイメージは、オーナーの息子から余所者のトレーナーへと記憶を塗り替えることになった。ここまで騒がせるトレーナーも結構稀なうえ、目立ちすぎであるので残当だ。

またデートプラン考えないとなあ、なんて考えてると、おずおずとしたオーナーが目に入った……そういえば放置してたの忘れてた。

「それでは、なにか写真などを拝見させていただきたいのですが……準備のほうは出来てますか？」

「これを見せてやってください。消息を絶つ数ヶ月ほど前の写真です」

渡されたのは、色褪せた一枚の写真。二十代前半のような見た目をしている好青年だ。完全にイメージだが、オーナーの若かりし頃のような顔をしており、まさしく倅といった感じだ。

「これ、誰か分かるか？」

「え、知らなーい。それよりさー、どこいこつか？ 近くならせせらぎの丘も良いところだよ？ それともハノハノビーチと一緒に泳いじやう？それともそれとも……」

少しくらはいは写真をまじまじと見てほしいのだが。ハルジオンは横目でチラと見ただけで、後は自身の欲望溢れるデートプランをあれこれ言っているだけだ。これではオーナーも浮かばれない……かと思えば、何か清々しいような顔をしていた。

「今のカップ・テテフには、君しか見えないようですね。おそらく、息子はもうこの世にはいないのでしょうか……本当にありがとう。カップ・テテフと会えただけで、私の心は満たされた」

内心、もう息子は死んでいると分かっていたのだろう。どちらかといえば、テテフと会うことで踏ん切りをつけたのかもしれない。ただ、リーリエが納得いかないような顔をしている。

「リーリエ、一応言っておくけど内緒だからな？」

どのような意味に取られても大丈夫なように、少し言葉を濁しておいた。リーリエにはテテフが別個体であるということ、オーナーには先程の会話を内密にしておくということに聞こえるはずだ。

「いやはや、今日はありがとうございました。最後まで当ホテルをこゆっくりお使いください」

「ありがとうございます。それではまた、会う機会があれば」

オーナーは満足そうに帰っていった。ただ対照的に、リーリエはまだ不満そうである。

「どうして、本当のことを言ってあげなかったんですか？」

「本当のことを言ったところでオーナーさんは救われないからかな。オーナーさんは救いを求めていたんじゃないかと考えたんだ。おそらくだが、物事を解決するために来たわけじゃなかったと思う。仮にここで終わらせてあげなければ、あと何年待っていたと思う？ もう数十年か？」

「そ、それは……」

「それに、本当のことを話したとしても信じてくれないだろうな。信じてくれたとしても、俺の情報が漏れて一気に危ない立場になる」

リーリエを説得していると、膝上に乗ったハルジオンが不意に両頬を引っ張った。地味に痛い。

「……はひひへふんは（なにしてるんだ）」

「ここにいてもつまんなーい。いいから早くデートしようよー」

デートなどといっても、もう空は夕闇から既に抜け出して夜へと変わっている。流石に今からでは、どの店もほとんど閉まっているだろう。

「なんで人間の街でデートしなきゃいけないわけ？ この島の良いところいっぱい知ってるのに、わざわざ人間の街に行くのもねー」

そうだったこの子ポケモンだった。なら、デートプランは考えず

に、ハルジオンの行きたいところに連れていくべきか……あれ？ 今ナチュラルに思考読まれてなかったか？

「でも少し待ってくれ、もう少しだけ飯を食いたい。リーリエもまだ食べ足りないだろ？」

「そうですね、こんなに色々料理を食べる機会はありませんからね」

テテフのほうを見ると、さっきまでニコニコとしていたのに、いきなり真顔になっている。睨みつけるような半目は、若干の威圧感もあって少し怖い。

「ねえ、この子……ケンの番つがい？」

リーリエがスープをぶちまけた。

「いや、（まだ）違うぞ。それがどうしたんだ？」

「そうなの？ よかった……」

殺しちやうところだった」

どうやらこのテテフ、噂以上に邪神だった。

イカれたパーティーを紹介するぜ。

リーリエは怖がってご飯食べなくなっちゃった……神様に殺す発言されたら、嫌でもそうなってしまうだろう。むしろ、普通の反応である。

寧ろ、気絶しなかったリーリエを褒めたい。結構ガチなオーラを出していた気もするので、ハルジオンには後でそういうのはやめるように言っておくべきだろう。最悪、本当に死人が出る。

「リーリエ、今日は遅いし帰ったほうがいいんじゃない……あれ、そういうコスモッグはどうしたんだ？」

「コスモッグ……？ ああ、ほしぐもちゃんですか？ えーっと、さっきまでお食事中でした」

そういつて、リーリエが椅子の下に置いてあったバッグの中にステーキを一切れ放り込めば、コスモッグがびゅいとひと鳴きして元気に食らいついた。ポケモンフーズじゃなくても問題なさげではあるし、基本的に雑食なのだろう。

それにしても、シオルダーバッグに入れっぱなしだと進化したときに大変ではないだろうか。コスモッグの進化系であるコスモウムは、ポケモンの中で一番重い。

ゲームならストーリー上、ルザミーネさんが驚掴みしたりリーリエがキヤリーしたりするのも仕方ないものがあつたが、今はリアル基準で重力が働いているのだと考えてもいいだろうし、リーリエが持ち運ぶのは不可能だと考えられる。

「リーリエ、悪いことは言わないからコスモッグをモンスターボール

に入れたらどうだ？ いざとなれば逃がすこともできるし、何よりコスモツグも安全だぞ」

「……確かにそうですね、確かにそちらのほうが合理的かもしれません」

リーリエが能動的にモンスターボールを使わないのは、ストーリーにて進化したコスモツグが主人公にゲットされるからだろう。だが、時が来れば逃がすか、いつそモンスターボールごと譲渡すればいいだけのことだ。この世界なら、モンスターボールに入れない理由はない。シヨルダーバッグを一生懸命運ぶリーリエも可愛いが、些か大変だろう。むしろバッグが限界を迎えそうな気もする。

リーリエに、全面コバルトブルーに光るモンスターボールを手渡した。それを見たリーリエは少し不審そうな顔をするが、無理もない。自分で言うのもなんだが、モンスターボールと呼ぶにはあまりにデザインが掛け離れている。

「このボールを使え……ウルトラボールといってな、コスモツグも居心地がいいはずだ」

「え、もらってもいいんですか？ それでは早速……おいで、ほしぐもちゃん！」

「びゅん」

バッグから勢いよく飛び出たコスモツグが、リーリエの前にあらわれた。ハルジオンも先程まで興味無さげにしていたが、コスモツグを見て驚く。

「あつ、星の子だ。どーしてこんなところに……まあ、ケンの周りは常識

外れなの多いからねー」

変な言いばかりではあるが、当たらずも遠からずというような感じではあるので何も言えない。そういえば、カプ系はUBであるコスモッグを見逃すという取り決めをしているという設定があつた気がする。

「ほしくもちゃん、よろしくお願いしますー！」

言葉の勢いとは裏腹に非常にゆっくりとした軌道で投げられたボールは、ポンと甲高い音を上げて開くとコスモッグを飲み込んだ。そのまま、ゲームでは見たことのないような速度で揺れ、やがて動かなくなった。

「やった、やりましたよー！」

今にも飛び跳ねそうな勢いで喜びリーリエを見ると、こちらも心が温まる。やはり天使はここにおられたのか。なんて考えていると、膝上に居座っているハルジオンが強めに手を握りだした。小さく柔らかかな掌に包まれているはずの親指が、洒落にならないレベルで痛い。

「……そんなにあの子がいいわけ？」

「表情筋全く動かしてない自信あつただけだなあ!!」

というより、こちらの顔も見えていないはずだ。それはともかくとして、親指の付け根の部分が、鶏肉の手羽元のように剥離しようとしているのをうっすら感じる。激痛により、もはや触覚など全く働いていないが。

そういえばこの邪神、Lv100である。すごいとつくんの仕様上Lv100にしなければならぬのだが、まさかこんなところで悪影響が出てくるとは育成中には思いもしなかっただろう。たとえば種族的に攻撃が控えめだろうが、Lv100は伊達じゃない。おそらくレートにいるガブやカイリニューより火力が出る。

「わかった！ わかったから離せ！」

「ふんだ。アタシの力、思い知った？」

言われなくとも、育てたのは自分自身であるため嫌ほど理解している。むしろ臆病なのに何故こんなに強気なのだろうか。控えめと臆病で迷った結果、どうやらハズレの方をひいてしまったらしい。

ただ、ツーンとそっぽを向いている姿はまんま無邪気な子どもものようだ。強がっている様子が逆に嗜虐心を煽り、おもわず撫でてしまった。

「そ、そんなんじゃ許してあげないもんね！」

そんな捨て台詞を吐いて、ハルジオンは殻に引きこもってしまった。あれ、もしかしてテテフも天使可愛い？

「カプ・テテフの相手も大変そうですね……」

「まあ、いつものことだ」

まるで長い付き合いであるかのような口ぶりだが、出会って一時間も経っていない。リーリエに全てを打ち明けるには、とりあえずこの世界の把握と、生活基盤の安定化をさせてからでなければ危ういだろう。どこで国際警察に捕まるのか、分かったものではないのだから。

「俺はハルジオンの相手をしてるから、リーリエは帰ってもいいぞ。この後じゃ流石に飯は食えないだろ」

「そうですね、それではまた明日……どこで待ち合わせますか?」

リーリエとの待ち合わせ、この文面だけで心が踊る。

「ポケモンセンターで待ち合わせるか……住民が騒ぎそうだが、グダグダ言っても仕方ないだろう」

「では、カフェでゆっくりしてますね」

あー、リーリエとゆっくりりえしたい。一緒にスイーツを食べたいっことして、ほんわかな時間を過ごしたい。これだけハイペースでイベントを消化してきたのだし、少くらは休息も必要ではないのか等と下らない事を考えたが、出来ることは早めに消化しておいた方がいいと結論付いた。ゆっくりりえはその後だ。

「よし、後で迎えにいくわ。俺はハルジオンの相手しないといけなから見送れないが、気を付けて帰るんだぞ」

「はい! 今日ありがとうございます!」

そういつて、天使は去ってしまった。残されたのは邪神のみ。

「なんか失礼なこと考えなかった?」

「気のせいだ。それで、デートの件なんだが……人気のない、かつスペースのあるところってない?」

「この近くだと……北のほうの崖下にちょうどいい砂浜があって、ゆつくりできる場所があるよー」

「んじゃそこに行くか。案内してくれ」

それを聞いたハルジオンが、何やらウキウキと張り切っている……一体今から何をするつもりなのだろうか。ホテルの外に出ようと一旦、ハルジオンをボールに戻そうとした……のだが身体がピクリとも動かない。

「それじゃあ一名さま、ごあんなーいー!」

勢いよくバルコニーの入り口が開いたかと思ったら、ハルジオンと一緒に飛び出していた。何を言っているのか自分自身よく分かっていない。分かっているのはただ一つ。

「どうして飛び降りたんだよおおおおおおおおああああああああああああああああああ!!!」

「ごっちのほうがいからねー」

次の朝、「絶叫しながらカプ・テテフと共に空をとんでいた」と噂が追加された。実際には落下しているのだが、それは本人にしか分からないことだった。

方法はどうかあれ、肉体は無事に辿り着いた。精神は無事かどうか、定かではない。思考できるだけまだマシといったところか。

ハルジオンの選んだ場所は、崖のすぐ側にあるかなり広い砂浜だ。確かにここなら、ゆつくり星と海を満喫でき、ロマンチックな一夜を過ごせるだろう。崖が高すぎて、遭難者以外は来る事が無さそうであるのがネックか。

何故、人気のない場所を選んだのか。それは……ポケモンたちとの初顔合わせのためである。

「とりあえず、みんな出てこい」

ホルダーについてのボールを全て放り投げた。一度顔を合わせたギャラドスのニシキは勿論、デンジュモク、テツカグヤ、ミミッキュ、ガブリアスが姿を現す。どれも、ゲームの液晶から見る姿とは全く違い、猛者特有の威圧感やおどろおどろしい雰囲気を持っているのを感じる。

「ちよ、ちよつと！ そんなの聞いてないよー！」

ハルジオンが抗議の声をあげる。大方、二人きりでデートが出来るなど考えていたのだろう。現実はそう甘くはないのは、先程貴様が教えてくれたはずだろうに。

「デートは必ずするから、今日は俺のワガママに付き合ってくれ」

「それなら、別にいいけど……」

お墨付きをもらったので、順番にチェックしていくことにする。まずは、最初に組んだバトルボックスという予想を前提に、ポケモンたちの個体を当てていかなければならない。

「まずは、ガブリアス……お前、シーザーだよな？」

「ガアブ！」

その通りだというように遠吠えをあげるガブリアスのシーザー。レートの様だしこれでいいかと、暴君ジュリアス・シーザーから名前を取った。余談だが、前作でジュリアスの名前のガブを育成している。

性別は雄で性格は陽気のASぶっぱ。技は地震、岩石封じ、逆鱗、アイアンヘッド。ウルトラボールに入れているため、判別はやりやすかった。

「それとミミッキュ、お前は……シルキーだな」

「キュキュ！」

ぴょーんと、一跳びで胸に飛び込んできて、甘えるように頬擦りされるが……ハルジオンから若干の殺気を感じたため、少し撫でてから地面に下ろした。シルキーの名前の由来はそのまま、幽霊から来ている。

雌で意地っ張りのASぶっぱ。技は剣舞、じゃれつく、シャドークロー、影打ち。持ち物は襷で運用していたが、今は所持していない様

子だ。ミミツキユは二種類作っていたが、ゴジャボに入れてる方はおそらくアタツカーだったと記憶しておいて幸いであった。

「デンジユモク……セントエルモか」

「モク」

反応が淡白すぎて何を考えているのか分からないが、おそらく返事を返しただけなのだろう。ニツクネームはセントエルモ、悪天候時に起こる不吉な発火現象から名前を頂戴した。長いしエルモって呼ぼう。

臆病CSぶっぱ。技は10万V、マジカルシャイン、エナジーボール、めざパ地面。スカーフ持ちで、よく一舞ギャラを後出しで狩っていた。めざ地は撃つ機会が少ないので、氷の方が良かったと後悔している。

「んで、お前さんは……セレスティーラ、でいいのかな？」

「フウン」

Celesteilaだ、日本語でテツカグヤである。次からは面倒臭いのでセレスって呼ぶことにしよう。先程の鳴き声的に、おそらく自分だけニツクネームじゃないのが不満なのだろうが、他人産なので仕方ない。ただ、そんな縛りなどないこつちの世界なら何と呼んでも構わないだろう。本人も喜ぶだろうし、やはりセレスでいいか。

性格は呑気、HBぶっぱで、技はヘビーボンバー、火炎放射、宿り木の種、守るのやどまも型だ。このパーティにはアタツカーが多いので、受けることができる型じゃないと厳しいと予想し見事的中出来たようだ。

本題の本題はここからである。

「なあセレス、俺を乗せて空飛べる？」

「クウ？」

は？ 今飛んできただろって？ 滑空だろあんなのシーザーでもできるわ。

邪神様 V S 巨神兵。

この広大な世界で好き勝手するのであれば、徒歩より速い移動手段が必須だろう。だが、島巡りには一切参加していない(という建前の)ため、リザードンはおろかケンタロスにも乗れない状態だ。はつきり言って非常に不便である。

なので、アローラ式ではなくオーソドックスな移動手段、つまり手持ちのポケモンに乗るといふものを試してみるべきだと考えた。ただ、走れるポケモンはともかく飛べるポケモンはテツカグヤのセレスだけなので不安ではある。第一、どのようなにして掴まるのだろうか……と考えたところで、ポツポで空を飛ぶよりはマシだと自分に言い聞かせた。

「ふうん」

可能だ。とでも言わんばかりの胸の張りっぷりだが、これを信用してもいいのだろうかと若干の疑問が残る。ここでつべこべ言っても仕方がないので、とりあえずトライアンドエラーの精神で頑張るべきなのだろう。

「んじや、ここらへんを飛んでみるか。ハルジオンは俺が落ちた場合の落下速度の軽減、ニシキは海に落ちた場合の救助を頼む」

「がう」

「えー、つまんなーい」

そう言いながらも渋々と付き合ってくれるあたり、あの邪神もしかしたらツンデレの気質があるのかもしれない。

「……また一つ、ケンにお願いできるからいつか」

ふふふふふ……と楽しそうに嗤う姿は、紛うことなき邪神様であった。こわい、終わったたら何されるんだろ。

「フウ」

暗黒神ハルジオンに怯えていると、いきなりセレスから捕獲された。器用に両サイドの巨大なジェット部分を使い、すくい上げるように十二単じゅうにひとえの上にあるくびれまで運ばれる。まるで自分専用のコックピット気分だ。

ただいま、地上5 m付近。人間風情には十分高い。

「フーフーン」

鳴き声と同時に、何か地面を揺るがすような音が聞こえてきたので咄嗟にセレスにしがみついた。感触は鋼タイプらしく硬くひんやりとしていて、常夏のアローラでは重宝するかもしれない。絶対外には出せないし、添い寝なんて以ての外ではあるのだが。

いってらっしゃい、とでも言っているのだろうか、下ではシーザーとエルモが暢気に手を振っている。と言ってもシーザーはヒレで、エルモはコードだが。

数秒後、彼らのサイズが米粒になった。

「あああああああはいはいはいはいはいはい!! テ
ストなのに本気を出すなああああああああああああああ
あああああああ!!」

「クーウン」

セレスは心做しか嬉しそうであるが、こっちは重力と必死の攻防を
繰り返していた。セレスが加速すればするほど、慣性の法則により下
に引っ張られていく。まだ腰をかける部分があっただけマシだが、無
ければ発射のGでやられていた。一番懸念していた空気抵抗は、十二
単の中におおかげで殆ど感じない。

そして、だんだんとGの抵抗がなくなっていく。減速しはじめたみ
たいだ。先程までに空を切る音しか聞こえなかったが、セレスがホバ
リングする音も聞こえだした。そろそろ外を見るかと十二単の間隙間
から覗きみると、その光景に目を奪われる。

「夜景が綺麗だな」

「ふうん」

多少高高度に慣れて、少し外を詳しく見る余裕が出てくる。夜景のメインである人が密集している部分は勿論の事ながら、少し離れた赤く燃える火山も闇夜と対照的に艶やかに映って見える。自然と文明が共存している、一枚の絵を見ている気分だ。

絶景を楽しみつつも、目的の一つであるアーカラ島の近くにある孤島を見つけた。発売前から噂されていたが、廃人の樂園は思っていた以上に近場に存在したようだ。

「そろそろ帰るぞ、一応お目当てのものは確認できたしな」

「ウウン」

名残惜しそうにセレスが一言告げると、どんどん高度が下がってくる。これから更に下降するのだろうか、この速度でどのようにして着地をするのか。あまり下を意識しなくても大丈夫な分、上昇より下降の方が恐怖心は少なく、巨大なセレスの着地方法が気になるくらいの心の余裕があった。

数分後、ようやく地上にいるポケモンたちが見え始めた。若干ホバリングしながら降りているのだろう、思ったほど勢いよく降りては行かない。肉眼でポケモンの判別がつきそうになった頃、突然セレスは叫んだ。

「ふうーん!! (みんなーっ逃げてーっ!!)」

蜘蛛の子を散らすかのように、一目散に皆が逃げた。素早さに定評のあるシーザーとシルキーはひと息で崖を登り、比較的動きの遅いエルモと逃げ遅れたハルジオンは海へ飛び込んだ。

いきなり重力が重くなったかのように、セレスが加速しだす。途中、一番乗りしたシーザーに音速ですれ違った。陸ザメのくせにロツククライミング速すぎるだろ、とツツコミをする前に通り過ぎてしまふ。

あわや不時着というタイミングで、セレスがブラスターで一気に速度をゼロに戻した。なるほど、鳥が着地する間際に大きく数回羽ばたくようなもんか、と単純に考えていたがセレスのブラスターだと規模が違う。

あれだけ綺麗だった砂浜は焼け焦げ、高熱により黒く融解している箇所もあり、若干生えていた草は熱風で全滅。崖も若干焦げており威力の高さをまじまじと見せつけられた。

「セレス……もうお前で飛ぶの止めるわ」

「くーん」

そんなに悲しそうに鳴いても、無理なものは無理である。飛んだ数だけ自然が破壊されることも然ることながら、バレないよう、ひっそりと飛ぶという目標が達成出来ない。砂浜ならともかく、ほかの場所で着地しようものなら、大火事の危険さえも出てくる始末。

それに、着地の度に自然破壊していたら間違はなくカプ神に目をつけられる。今もこちらを見ているカプ神が一匹いるが、今にも射殺さんといったように鋭い眼光で見ている……可愛さが売りのカプ・テテフの顔でそんな顔すんなよ。

「……いつまでイチャイチャしてるの？」

違った。全く自然破壊関係なかった。

「……お前、アーカラ島の守り神だろ？ 自然より俺を優先していいのか？」

「ケンかアーカラ島かって言われたら、迷いなくケンをとるよ！」

褒めて褒めて、みたいなテンションで返事をしているのだが、これは果たして褒めてもいいのだろうか……何か大切なものを失いそうな気がする。例えば、アローラの自然とか。

「はいはい……とところでハルジオン、地面の温度は大丈夫なのか？」

地面に降りようにも、未だにプスプスと音を立てている融解した砂を見せられるとどうしても躊躇してしまう。ここが砂浜で本当に良かった。

「んー、裸足だと辛いんじゃないかな」

「なるほど、靴が焦げても嫌だしもう少しここにいるか」

「おりても、だいじょーぶだよ？」

こわいこわい、眼がマジである。本気と書いてマジだ。ただ、本意ながら降りようにも自力で降りるのは不可能である。不本意ながら。

ここが5m地点だと仮定するなら、だいたい二階建ての窓から飛び降りるくらいの高さだと想定される……十二分に危険である。そういったリスクや不便性も含めて、今後セレスで移動するのは諦めるとするか。

「ハルジオン、下ろしてくれないか？」

「えー、しよーがないなー」

めちやくちや嬉しそうである。先程までの睨みつけるでポツポツが殺せそうな顔から一変、聖母マリアのような自愛溢れるご尊顔へと姿を変えた。

ハルジオンはフワフワとこちらに向かってきた……かと思ったのも束の間、セレスに叩き落とされた。ブラスター部分で一刀両断、これは死ねる。

「ふうん」

ははは、スキンシップも大切だよね……吹き飛ばされて地面に埋まるレベルだったけど。これは果たしてスキンシップなのか。どうみても仲間割れだが、どういふことかサツパリ分らない。

「ぶふー!?!(まさかケンカうつてんの?!?)」

「ふうふうふう!!(貴女だけズルい!もう少しだけでいいから、このままでいいでしょー!)」

ハルジオンは怒りの余り、テレパシーで話すことを忘れるくらい余裕を無くしているようだ。一体何を話しているのだろうか……と観察していると、ハルジオンがサイコフィールドを貼った。

特性サイコメイカーはカプ・テテフのみが持つ特性で、カイオーガが雨を降らすように、バトル開始時にサイコフィールドを貼るというものだ。

ハルジオンがサイコフィールドを貼ったということは、考えられるのはただ一つ。バトルの始まりだ。

「おい待て待て！ 俺がいるんだけど！」

こういう喧嘩は、巻き込まれると禄なことは無い。生身の一般ピーポーはとつとと退散すべきなのだろうが、生憎ここは地上5m。不幸にも固くなっている地面に落ちれば、少なくとも骨の一本二本は覚悟しなければならぬだろう。大人しくしがみついているべきか。

だが叫び声も虚しく、無常にもバトルは始まるのだった。

素早い動作で放ったハルジオンのムーンフォースがセレスを襲うが、ブラスターで振り払うと砂煙と共に霧散する。セレスのタイプ相性と耐久性能が優秀なため、タイプ一致のメインウェポンでも大したダメージを与えられない。だが、ハルジオンの目的は違ったようだ。

「フウン！」

煙に紛れてハルジオンが後ろに回り込んでいることを勘づいたセレスが、振り向きざまにブラスターを叩きつける。それを紙一重で回避したハルジオンは、サイコキネシスで……俺を引きずり下ろした。そして、吸い寄せられるようにハルジオンの胸に落ち着く。頬の感触から察するに、やはりペったんこだ。

「ふふつ、形勢逆転って感じかなー！ ねーどんな気持ち？ ねえねえどんな気持ちー？」

「ふーフウン……（やっと一緒になれたのに……）」

先程まで切羽詰まっていたくせに、よくもまあいけしやあしやあと。ただ、煽り方が尋常じゃないため挑発を覚えさせてるかどうか不安になった。技スペを遊ばせておく程、ハルジオンに余裕はない。

ちなみに、ハルジオンの性格は臆病でCSぶっぱ、技はサイコキネシス、ムーンフォース、めざパ炎、10万V。王冠を使っているため6Vである。

ちなみに、一番打点が入る10万Vを撃たれていたら、スーパーマサラ人ではない人間は即死なので危ないところだった。

「フウン（仕方ない、見逃す）」

「ふふん、分かればいいの。同期のよしみで、たまには貸してあげるから我慢してよね？」

「クウン（約束だよ?）」

何か、知りえないところで色々と話が纏まってきているみたいである。不安だ、すごく不安だ。何故あんなにも殺気立っていた筈なのに和解しているのか。何か言い表せないような恐怖が、心の中で蠢いている。

「キュキューー！」

言いようのない不安感に怯えていると、崖の上から帰ってきたシルキーが胸に飛び跳ねてきた。ふんわり柔らかくキャッチして撫でてあげると、キューと気持ちよさそうに鳴く。かわいい。ただ、こんなことをするとハルジオンが黙っていないだろう、とチラ見すると既に鬼の形相だ。ついでにセレスからもジト目で見られている気がする。何故だ。

「おいおい、俺はただ手持ちのポケモンと戯れてるだけで何の問題もないだろ？」

「あ、じゃあアタシとも戯れようよ！」

何を今更言っているのだろう、先程まで十分戯れてただろうが。おかげで死ぬ思いをした。

どれだけシルキーとハルジオンが小さく軽かろうが、流石に二匹同時には持てない。いつまでも空くことのない両腕にやきもきしたのか、ハルジオンが後ろに回り込んだ。猛者に無防備な背中を見せるという行為に、身体が本能的恐怖を感じる。

「ぎゅー！今のうちに、いっぱいじゃれついちゃおっと！」

いきなり抱き着かれた。少しキュンと来てしまったが、相手は邪神だ。おそらく一時の気の迷いである。抱き着かれるだけならば無問題なのだが、抱きついていいる部分は首なので下手したらノックアウトの心配がある、油断禁物だ。Lv100なので無駄に力もあるし、加減されなくなった場合キテルグマよろしくこの世とおさらばする可能性も……正直、全く安心できない。

他のポケモンはというと、シーザーとエルモとニシキは、我関せずとか、ご愁傷さまとかでも言っているかのように一歩引いており、セレスはこちらを羨ましそうに見ていた。

でーと、おあ、でっど。

昨日はあれから、全員に虹マメを食わせた後ハルジオンにホテルまで運んでもらった。カフェのおじさんから貰った有り金ならぬ有り豆全部売り取られたが、大丈夫だろう。

この際ハルジオンに運んでもらえばいいかなんて考えていたが、ハルジオン自身の力が強すぎるせいかな調整が難しく、さらに言えばスタミナがないため長時間の運用には向いていないようである。その証拠に、あれだけ騒いでいたせいでもあるのだが、ハルジオンは帰るとすぐに疲れて眠ってしまった……ベッドで。よく見ると薄目を開けていたので即モンスターボールに戻した。

翌日。予定より早起きだったのだが、疲れはほとんどない。むしろ昨日より調子がいいというか、身体全体がエネルギーシユというか、全能感バリバリであった。

「どお、気持ちよく眠れたでしょ？」

おまえはなぜ、そとにでてきているんだ？

お前の入ってるボールは曲がりなりにもマスターボールなのだ、いくらカプ神だからといってやっていい事と悪いことがある。

とは流石に言わず、そうだなと短く返事をして身支度を始めた。構ってほしいオーラを出してるハルジオンを放ってシャワーを浴び、身だしなみをキツチリ整えてポケモンセンターへと向かう。朝食付だと言われたが断り、チェックアウトした。

リーリエと、二人旅。

これだけでご飯三杯は余裕である。朝食抜きでもフルパワーだ。逸る気持ちを抑えつつも、足は自然と早足になり、思考はどこで何をしようかと頭いっぱいになる。思春期の恋愛気分がそのまま具現化したような頭の中身だったが、問題があると思えるほど身体と脳は正常に作動していなかった。

「あ、ケンさん」

リーリエはいつも通りの姿で、ポケモンセンター内のカフェに座っていた。どうやら朝食を食べていた様子。うん、今日もかわいい。

「あと、カップ・テテフもおはようございます」

はて？ と振り返ったら、不機嫌そうなハルジオンがいた。ボールに戻し忘れた結果、ここまで普通に付いてきたのだろう、なるほど通りで無駄に周囲からの注目度が高いわけだ。お陰様でポケモンセンター内の空気が尋常じゃないほどざわめいている。これは自業自得とも言えるが。

「アタシには、ハルジオンっていう命より大切な名前があるの。それ以外で呼ばないで」

ハルジオンの口調からはいつもの様な子供っぽさはなく、絶対零度のような言葉でリーリエの顔が凍りついている。確かに朝は忙しくて構ってられなかったが、リーリエに八つ当たりするほど怒っているなんて思いもしなかった。

「ご、ごめんなさいハルジオン……さん」

「リーリエが謝ることじゃない。忙しくて構ってられなかった俺が悪い……ハルジオン、ごめん」

謝罪をした途端、表情は一変してハルジオンは満足そうに笑った。

「いいよー、許してあげる……でも……ちゃーんと約束は守ってよね？」

ハルジオンは許してくれている筈なのだが、背筋がゾクリとするよ
うな、冷ややかなオーラを放っていた。顔は笑顔なのだが、心做しか
眼からはハイライトが消え、深淵を覗き込んでいるような気持ちにさ
せる。下手なホラーよりホラーであった。

そこまで言うくらいの約束とは何のことだろうか……デートに行
く程度としか印象に残っておらず、他については記憶が全くない。消
去法でデートだろう。

「分かってるよ、デートだろ？ リーリエと旅に出る予定だったんだ
けど……今日じゃなきゃダメか？」

「あー絶対に今日じゃなきゃダメー」

棒読みすぎて隠す努力が見えない……余計な事を言わなければよ
かった。となると、リーリエとの二人旅は延期になる。ポジティブに
考えれば、今日で旅の支度をする事ができるようになるし、リーリ
エも昨日見れなかったところを見ることができると考えれば幾らか
マシだろう。

「そういうわけでリーリエ、俺は女神様のご機嫌でも取ってくる。出
発は明日でも大丈夫か？」

「わたしは構いませんよ。少し、空間研究所で調べたいことがあった
ので」

ニコニコと気を遣わせないようにするリーリエたんマジ天使。だが、空間研究所で何を調べるのだろうか。一度聞いてみて、知ってることであれば教えてあげるのもいいかもしれない……勉強は嫌いだったが、リーリエと勉強会とか御褒美だろ。

「ありがと。それじゃあ、また明日同じ時間にポケモンセンターでな」

ここに長居しても得るものなど何も無いので、そそくさとポケモンセンターを出た。リーリエは勿論の事ながら、周囲の人間も可哀想だ。

こちらを見る目が、まるで中世の平民が貴族を見るかのような脅威を見るものになってしまっているのだ。ハルジオンを表に出していなかった昨日までは物珍しさが出ていた筈のだが、やはり邪神を侍らせているところも違うものか。

当の本人はというと、移動するエネルギーを消費したくないのか、それとも甘えたいだけなのかは分からないが首根っこに捕まっていた。時折、風に煽られるピンクの髪がくすぐったい。

「とりあえず、飯食ってないしマラサダ食べに行くか」

「さんせー！」

大人しくしていれば可愛いものである。なので、耳元で叫ぶのはやめていただきたい。ついでに匂いを嗅ぐのも首筋を噛むのも。

ゲーム内ではこの街にマラサダシヨップは無かったが、この世界にはどの街にもあるようなのでそこに出向いた。相も変わらず、周りからの視線が突き刺さっているのを感じるが気にしないことにしている。

今朝不機嫌だったせいかは知らないが首筋を舐めたり齧ったりしてくるのも一切止める気はなさそうなので、下手に機嫌を損ねる行為は控える方針へシフトした。

「い、いらっしやいませ……お二人様でよろしいですか？」

「……どうみても一人でしょう？」

アツハイと返事をする良く訓練された店員は、カウンター席へと誘導した。ここで邪神様のご指導が入る。

「……アタシ、広い席じゃないと落ち着かないなー」

「ひいい、そ、それではこちらのテーブル席へどうぞ！」

終始怯えっぱなしである。無理もないが、流石に失礼に値するのはなからうか……と考えたが、ハルジオンは機嫌が悪くなさそうにしているので、大丈夫ということだけは間違いなかった。

どうみても四人席のテーブルに案内されると、ハルジオンからよう

やく解放された。今朝の様子と比べると、機嫌は逆方向に振り切れているようで一安心だ。店員はこちらに付きつきりな様子なので、あまり待たせることのない様に即座に注文した。

「マラサダセットを二つ、味は……どうしようか」

「甘いのがいいなー」

「はい、かしこまりました！」

とても良い返事で対応する店員を見てると、すぐくいたたまれない気持ちになった。可哀想ではあるが、少々度が過ぎるのではないだろうか。

この世界のカプ・テテフがこれまで何をしてきたのか、リーリエの話を含めて気になってくる。一度か二度か、島を滅ぼしているような気さえするが……ハルジオンを見ているとやりかねないとさえ思えてしまうのが一番怖いところである。

「飲み物はロズレイティーとエネココアで」

「わかりました！ しよ、少々お待ちを！」

逃げるように去っていった店員が、てんちよーカプ・テテフが来ます！ と言った途端に厨房から絶叫が聞こえた。この目の前でキョロキョロしている可愛らしい生物が、一体全体何を仕出かしたのか……気になる。ウラウラ島には図書館があつたはずだ、一回行ってみるべきだろう。

「えへへ。ケンとマラサダ食べに来たの初めてだよね」

「そうだったな」

ゲーム時代は、わざわざマラサダショップに出向くことも一切なかったため実際これが初めてなのだろう。だがハルジオンの嬉しそうな姿を見ると、何度も訪れるハウのようなりピーターが続出するのも分かる気がした……あいつは完全にマラサダが好きただけなのだろうけど。

メニュー表を見たところ、渋いマラサダや苦いマラサダもあるようだが……マラサダマスターのハウでも、そういうゲテモノ紛いのマラサダを食べるのだろうか。

「ねー、これからどうする?」

「うーん……ハノハノビーチにでも行ってみるか?」

日帰りで行ける場所は限られている。ハノハノビーチだったら歩いて一時間もせずに行くことができるため、シールドジャングルやせせらぎの丘など他の知っている場所よりは無難であろう。

「いいよー、でもアタシ泳げないよ?」

「俺も水着持ってないし、砂浜を散歩するだけでも十分だろ……つと、ドリンクが来たな」

先程とは違い、店長らしき壮年の男がドリンクを運んできた。にしても、気を遣いすぎではなからうか。

「ハルジオン、どっちが良い? オススメはエネココアだな、一回飲んだけど美味しかったぞ」

「じゃあそつちでー！」

カップを手に取り熱を冷ますようフーフーと息を吹きかける姿は、本当に子供のようで可愛い。ようやくエネココアに口をつける
と、一気に顔をほころばせた。

「あまーい！ これすつごく美味しいよー！」

「よかったな、お代わりはいくらでもいいぞ」

「やったー！」

かわいい。リーリエも天使であるが、ハルジオンもまた違った天使
なのかもしれない。

ちなみに、お金は腐るほどあった。昨日、荷造りをしていっていると開け
てない裏ポケットに気付いたのだ。財布の中からはお金と、髪の毛の長さ
が違うのでいつ撮ったのかは判別出来ない顔写真付きのトレーナー
パスが出てきた。

ちなみに、残金は15000000円^{ひゃくごじゅうまんえん}。長財布の中にギツシリと札束
が詰まっている様は圧巻だった。子供の持つ金の量じゃない……と
いうか、何故今まで存在に気づかなかったのだろうか。しかし、これ
で金策の件は不要になった。

エネココアをちびちびと飲んでる姿を眺めていると、マラサダが
やってきた。ファストフードも顔負けの速度で運ばれてきたのだが、
他のお客さんへの対応は大丈夫なのだろうか……と周りを見渡して、
誰一人不満そうな人間はいなかった。なるほど、みんな心は一つだっ
たのだ。

「こちら、アブリーの蜜を使用した特製マラサダです」

そうして出されたのは、こんがりと揚げられたパンのようなものだった。試しに一口食べてみると、中からキラキラと輝く黄金の蜂蜜が染み出してくる。パンにまぶしてある白い砂糖のようなものも、蜜の邪魔をしない程度の甘さに抑えられていた。美味すぎる。

「これいいねー！　また食べにきたくなっちゃった！」

モグモグ食べながらどうやって喋ってるんだと疑問に思ったが、そういうテレパシーだった。店長らしき人物は、満足げに頷いた。

「よかった。島の守り神からも評判の良いマラサダとして、これから売り出していくことにしましょう」

なんとボロい商売であろうか。実際、ネームバリューが凄いので観光客に売れそうな気もする。実際多くの人に入っていく所も見られているので、すぐに広まりそうではある。

「ですので、お代は結構です。心ゆくまでごゆつくりとお寛ぎください」

そう言って、エネココアのお代わりを注ぎに厨房へと戻っていった……あれ、もしかしてお金も要らない？

島クイーンさんおっすおっす。

今、非常に面倒なことになっている。

「シーザー、逆鱗」

命令を聞き届けた直後、シーザーが一気にルガルガンとの間合いを詰めた。竜の本能に身を任せ、大きく振るわれた剛腕を、ルガルガンは両腕でしっかりとガードする。

「カウンター！」

攻撃をギリギリで耐えたルガルガン、返して繰り出した起死回生の右ストレートが、二倍以上の体格差のあるシーザーを弾き飛ばした。

カウンター……受けた物理技の二倍のダメージを相手にぶつける技だ。ジャンケンのように同時に技を繰り出す性質上、読み合いの発生するゲームの世界では使い勝手の悪い技だった。しかし一度相手の技を見てから繰り出せるこの世界では、話は180度変わってくる。向こう有利の後出しジャンケンのようで悪質極まりない。

やはり、フィールドが砂浜だったことを加味しても、カウンターを発動させ辛い地震を撃たせておくべきだったか。

そんな後悔は先に立たず、シーザーはそのまま戦闘不能。だが相手のルガルガンもシーザーの特性、鮫肌によって傷付き倒れる。

「あら、珍しい。あんたのガブリアス鮫肌なのね」

「そこまで珍しいんですか？」

ふと出た言葉だったが、思い返すと答えは一択、珍しいに決まっている。この地方で夢特性を持つポケモンは、仲間を呼ぶことで出てくるポケモンのみだ。

ちなみに夢特性とは、最初はポケモンドリームワールドが主な入手方法であったため、ドリームと掛けているのか「夢特性」と呼ばれる特性のことで、昨今のポケモンに元々与えられた特性とは別の特性のことだ。

確率としては、全体で見ると10%にも満たない割合で存在する珍しいポケモンなのだろう……レート界限では、ガブリアスは普通の特性のほうも10%にも満たないのだが。

対戦相手……島クイーンのライチさんは、ダイノーズを繰り出した。いつ見ても、ライチさんのポケモンに可愛さが見いだせない。女子力アピールのためにも、せめてサニードゴを持つてくるべきだろう。

「さあ、次のポケモンを出しな！」

確実に怪しまれるLv100のポケモンは出せないの、カグヤとエルモは論外、ハルジオンは自分が決めた島クイーンに興味があるのか傍観中だ。ダイノーズは防御面が硬く、攻撃が中堅止まりのシルキーでは相性が悪い。となると、ニシキにメガシンカしてもらおうべきか。

こうなったのは数分前、ハノハノビーチに到着してからのことだ。ハルジオンと散歩しようかとビーチに足を踏み入れたタイミングで声をかけられ、そのまま人気のない場所まで連れてこられた。シチュエーション的にはナンパそのものだったため、少し期待したのも着いて行った要因の一つだ。

そして、突然のバトルである。脳筋かよ。

「ニシキ、メガシンカだ」

ボールから出すと即座にメガリングに手を添える。ニシキのエラ部分にイヤリングのようについているメガストーンが反応し、身体が光輝く、ゲームでは見慣れた紅のメガギャラドスが現れた。

「竜の舞」

「10万ボルトで邪魔するのよー！」

力強くグルグルと旋回し舞うニシキに、10万ボルトがヒットする。水タイプと悪タイプのニシキに電気技の10万ボルトは効果抜群だ。しかし、ダイノーズの火力程度ではニシキにダメージを蓄積出来ないのは明白だった。

「滝登り」

「電磁浮遊でかわしてー！」

文字通り自らを鼓舞したニシキが、水流を纏いダイノーズへと突き進む。ダイノーズは避けようと動いたが、ダイノーズの素早さは低くニシキの素早さは高い上、竜舞の効果で1.5倍の速度となつている。回避出来るはずもなく、ダイノーズは直撃し大ダメージを負った。

どうやらこの世界だと素早さは、回避率にも直結する重要なファクターのようだ。また一つ勉強になった。ゲームの素早さは先行を決めるだけである……その先行を取ることが重要であるが。

「追撃しろー!」

例えHPが残りわずかでも、攻撃しなければ倒れることはない。フラフラで攻撃を避ける素振りさえしないダイノーズに対する罪悪感を、正論と声量で振じ伏せた。勿論、ダイノーズは倒れる。

「もう一度、竜の舞」

とつさの思い付きが功を奏したのか、ビーストブーストよろしく、ポケモンの交代間際に能力値を上げておく。ライチさんの驚いた顔が見えた。

昔、ずっと考えていたことがあった。相手が悩んでいる時間でどれだけ積めるのか……そんな事を考えるのは、いつも負け試合の時ばかりであるが。

ポケモンを戻し、次は何のポケモンを出すのか悩む時間でさえ、公式のルールに縛られないこの世界だと積みの起点になるのではないかと思っただが、大当たりだ。

補足しておく。「積む」とは、補助技のうちステータスを向上させる技を撃つことを指しており、ニシキの竜舞やシーザー、シルキーの剣舞等が該当する。「起点」とは、安全に積むことの出来る環境を指す。

ニシキの竜舞を見て焦ったのだろう、ライチは素早く次のポケモンを繰り出した。

「ゴローニャ、雷パンチー!」

ボールから飛び出て間もないというのに、既にゴローニャは攻撃の

体勢を整えていた。流石は島クイーンのポケモン。だが、二舞したメガギャラを止められるポケモンなど、岩タイプが主流なライチさんの手持ちには存在しない。ポリ2でも持つてくるんだな。

「滝登り」

ゴローニヤが拳を突き出すより速く、ニシキはゴローニヤを吹き飛ばした。特性の型破りにより、ゴローニヤの特性である頑丈は無効化される。つまり、もう起き上がることはない。

「ニシキ、もう一回竜の舞……もう貴女に勝ち目はないですよ、それでも続けますか？」

場に残っているのは、三積みされたほぼ無傷のメガギャラドス。対するライチさんの手持ちポケモンは、ゲーム内でのパーティを鑑みて対抗できるポケモンはもういない。

「……そうだね。この勝負、潔く負けを認めるよ」

初めてのバトルは、ライチさんの降伏で幕を下ろした。ルガルガンのカウンターに出鼻をくじかれたものの、こちらに有利な戦いを進められた試合であった。いずれはライチさんとバトルすることになるとは思っていたのだが、こんなに早いのは予想外である。

「しかし、メガシンカ……それも色違いのギャラドス。カプ・テテフに見初められるだけのことはあるね」

「ははは、お世辞がお上手ですね。そんな話をするために会いに来たわけじゃないんでしょう？」

決して見初められた訳ではない、決してだ。

別の街に住んでいる島クイーンがここまで早く接触を試みた所を見るに、何かしらの情報源があるはず。可能性が一番高いのはライチさんの知り合いであるククイ博士か……この世界にいるカプ・テテフからだろう。ハルジオンとの噂が広まってから予想はしていたが、こんなに早くライチさんが訪れるとは。

「察しが良くて助かるよ……そのカプ・テテフは一体どうしたんだい？」

その言葉はおそらく、勝利を褒め称えているかは知らないが頬擦りと撫で撫でを繰り返している邪神に向けられているようだ。勝った本人より喜んでいる始末。

「もどれ、ハルジオン、ニシキ」

嘘を吐けば、必ずどこかで矛盾が出る。その出処を予め封じた。それに、ポケモンたちに真実を話すのはタイミング的に不味いのだ。主人ではないと知って、謀反でも起こされたらたまったものではない。

「そうですね、話す前に、まずは秘密を守る約束をして欲しいのですが……私が約束を破ったと判断した場合、アーカラ島に武力による制裁を加えます。判断基準も制裁の内容も私が決めます」

「ほう、随分とバトルに自信があるみたいだね……ポケモンのスペックに頼りすぎで、バトルはそこまで上手じゃないみたいだけど？」

全くもってその通りだ。色々シミュレーションしたところで、具体的な指示を出せなかったり、攻撃を回避する指示も出せなかったり等、当たり前であるがまだまだ未熟な面もある。だが、そのスペックこそが最強なのだ。

「おいで、セレス」

ウルトラボールが開くと、その巨体が姿を現した。砂浜でさえも着地の衝撃を抑えられず、少し地面を揺らし、砂埃がたつ。

「な、なんだいこのポケモンは……」

「貴方なら理解できるでしょうが、このポケモンは街一つなら焼き尽くす程のスペックを持っています。私たちは、別の世界にあるアローラから来ました。私の所持しているカプ・テテフは、本来向こうの世界にいた個体です……自分で言うのも何ですが、こう考えれば、カプ・テテフが二匹存在するのも辻褄が合いませんか？」

説得力を与えるには、実物を見せてやればいい。インパクトのある見た目をしているセレスは、この役目を担うのに最適だった。別の世界というのも、ウルトラスペース出身のセレスだと辻褄が合う。勿論ボロが出る前にすぐに引っ込めた。

「別に信じてもらえなくても良いのですが……実際、カプ・テテフと交流がある島クイーンの貴女なら分かりますよね。カプ・テテフの違いなんて一目瞭然なはずだ」

「……………わかった、あんたの話信じるよ。そーいや名前を聞いてなかったね、なんていうんだい？」

「ケンです……色々と事情がありまして、記憶を少々失っているのですが、その辺の事情はククイ博士に話を伺ったほうがいいのかもありませんね。彼はおそらく、私が別の世界から来たことに勘づいてます」

勘づいているものにも、空間研究所でフォールについて説明を受けたのだから気付いているのは当然だろう。

今のところククイ博士にはフォールであること、ハウエン地方にいたこと、記憶が曖昧であること、この三つを伝えている。

ライチさんにはフォール……別世界の人間であること、記憶が曖昧であることを伝えた。だがハルジオンを所持しているため、アローラ地方に関わりがあるとは少なからず思われているだろう。

そもそも、ハルジオンの騒動があつたためククイ博士にバレるのも時間の問題だ。記憶が曖昧な部分として覚えていないことにするか、あるいは……嘘を吐いているのをバラすか。

今は記憶が曖昧という理由でも通じそうではあるし、問題ないように思える。リーリエには話してしまったが、後々、必ずバレるだろう。別にバレてもいいのだが、今度は国際警察や研究団体がフォールとウルトラビーストをセットで捕獲しようと面倒なことになりそうだ。

となると、嘘を吐いたと告白するのは心象が悪くなりそうではあるし、やはり記憶が曖昧でゴリ押すか。

「ふーん、ククイがね……わかった。今度ククイのところに顔を見せに行くことにするよ。ただ、あんたのカプ・テテフのことなんだけど、あんまり外に出して欲しくないんだ。カプ・テテフの評判はカプ神の中でも最悪でね……もう昔の話なのに、みんな怖がってる。それにこの世界のカプ・テテフも、あんたのカプ・テテフにはあんまり良い気はしてないみたい」

それもそうだ、自分と瓜二つの存在がいるなんて気分が悪いだろう。島の連中は、もう嫌というほど反応を見たので大丈夫だ。

「分かりました。ただ、説得を試みるだけです。効果は期待しないで下さいね」

「分かってるよ。カプ・テテフは無邪気で我儘だからね」

ライチさんが理解のある人で助かった。正直、ハルジオンを抑え込める気がしない。

「はー、久しぶりに本気でバトルしたよ。どう？ なにか食べに行かないかい？」

「そうですね、カントイシティで何かオススメのお店があれば、是非一緒にさせていただきますが」

「よし、決まりだね。それじゃあ一緒に行こうか」

そうして、ポケモンセンターに傷付いたポケモンを預けた後、定食屋でご飯を奢ってもらった。

ただ、その代償に独り身がつかいだの、島クイーンという称号が結婚の邪魔をしているのだと愚痴を聞かされた……これから、更に四天王という称号が付くので男が寄り付かなくなるというのは、まだ内緒の話だ。

オレ達のフロンティア。

ライチさんに愚痴を聞かされる時間は、ハルジオンの「時間よ」という冷淡な一声で幕を下ろした。その時、猛禽類のように鋭い目でライチさんを牽制している様は、力関係を如実に表していたといっても差し支えないだろう。なお、睨まれた本人はハルジオンから滲み出る怒気と威圧感で涙目になっていた。

こちらとしても、これ以上はハルジオンの地雷を踏みたくはないので、連絡先の交換もククイ博士を通してくれと適当にはぐらかし、断っておく。個人的にも、また同じような愚痴を聞きたくはないので至って当然の処置であった。婿探しは他を当たってくれ。

名残惜しそうなライチさんと別れた後は、気持ちを切り替えて、ハノノビーチにてハルジオンとのデート後半戦に挑む。

煌めく水平線を眺めながら砂浜を歩き、ヒウンアイスを食べる。デートの内容は散歩といっても間違いないようなものだが、ハルジオンからすれば満足のいくものであったみたいで、ライチさんといった時の不機嫌さはすっかり失せていた。

「ケンのくせに、中々やるじゃない」

このこのー、とじやれついてくる邪神は、上機嫌なのを隠そうともしないのであった。ハルジオンのくせに、中々可愛いところもあるじゃないか。

言わずもがな、ハルジオンに抱く第一印象はというと、手持ちの中で最悪だった。

子供のように気紛れで残忍な性格、この世界でのエスパークタイプが

持つ理不尽当たり判定、それでいて範囲が広く強力無比な技……どれを取っても厄介極まりなく、さらに生命力を自在に増やすことのできるというフレーザーバーテキストまでもが生きてきている。

正直な話、外来種のUBより質が悪い。以上の理由から、一番手なずけておくべきポケモンがハルジオンだった。

それを、こうもアツサリとやってのけてしまっただけで少し拍子抜けしてしまっただけだが、幸運だったと思っておこう。

そんなこんなで、他愛もない話をしながら海岸の最果てに着く頃には、ヒウンアイスも食べきり、夕日は既に水平線へ沈もうとしていた。

「暗くなる前に、一度行っておきたい場所があるんだけど……いいか？」

「えー、もうちよつと一緒に遊ぼうよー」

「駄々をこねるんじゃないよー」

これは、ポケモンたちの餌に関わるところなのだ。フレンドリイショップにはポケモンフーズというものがあつたが、それは一般的なポケモン向けであり、電気コードや黄金の鉄の塊なんかは何を食べるか分かったものではないため、現状ではポケマメでしかエネルギーを賄えない。

丁度いいので、ポケマメを取りに行くのも兼ねて聖地巡礼しようと思っていたのだ。

「ポケ豆を取りに行きたいんだが……目的地が、少し離れた孤島にあるんだよ」

「……虹マメもある？」

「それはお前の頑張り次第だ」

「よーし、頑張るよー！」

邪神様からのお許しも出たので、とりあえずはボールに戻し、少し奥にあるライチさんとバトルした人気の無い砂浜に移動する。

「セレス、 出番だ」

「フーウ??」

バトルじゃないの？ と言いたげな声と共に、セレスがボールから出てきた。

「昨日と同じように、俺を乗せて飛んでくれ……って気が早いなあ」

「フフーン」

返事をもらう前に、十二単に押し込められてしまった。張り切りすぎは逆に不安を覚えるのだが、大丈夫だろうか。主に自分の身が危ない。

「まずは上昇してくれ。目的地は……方角言っても分かんないだろうし、見た目を教えるから」

「ふうん」

本当に分かっているかは定かではないが、信じる他はない。この世

界に来て通算二回目である地獄のフライトが始まった……かのよう
に思えた。

結論から言うと、空の旅は快適だった。

上昇する時も加速が控えめになっており、比較的ゆっくりとした移動を心掛けているようで、気分としては快速列車に乗っているような感じだった。もしかして、前回行った飛行実験のことを気にしていたのだろうか。

昨日の時点で場所を把握していたのと、目印が分かりやすいのもあり、目的の無人島は直ぐに見つかった。着地を命じると、これもまたゆっくりと行われる。前のような派手さはなく、スリルもない。安全装置のないジェットコースターに乗っている身としては、何ともありがたいことだった。

着地したのは、大きな豆の木が生えている島だ。辺りにはポケマメがたくさん散らばっており、それを目当てに近場の野生ポケモンも集まっている。人の姿はどこにもなく、少し安心した。

ここは、ポケリゾートと呼ばれる群島の内の一つである。

目的はただ一つ、ポケマメの在庫を増やすこと。ライチさんに話を聞いたところ、アーカラ島で一番栄えてそうなカンタイシティにも売っている店はなく、その話から、おそらくカフェでのみ手に入れられるものだと推測したのだが、流石に何回もおじさんからカツアゲするのは忍びない。

そこで、余った時間を使い現地調達をしようと思い付いたのだ。幸いにもポケマメケースはあり、労働力も申し分ない。

「というわけだ。たくさんポケマメを拾ってきてくれ」

小さいものを拾うような、細かい作業が苦手なニシキとセレスは留守だが、ほか四匹……シーザーは爪で拾えるかどうか怪しいが、シルキーとエルモ、ハルジオンに頑張ってもらおう。

「……ケンと一緒に拾わないの?」

「ポケマメを集計する役目があるからな。セレスを目印にして集まってきてくれ」

こういう時に、10mもあるセレスの巨体は重宝する。例え何も無いただっ広い島でも、その巨体は目印になる……上から視線を感じるが無視して、ポケモン達に散策するよう指示を出す。

この島、田舎にあるようなショッピングモールの敷地ほどはあり、下画面でしか見ていなかったのもあって存外に広く感じる。ポケモン達は散り散りに動いているようで、シルキーが一番小さいのもあつてか、もう見失ってしまった。

「ニシキには、豆の木を揺らしてもらいたいんだけど、いけるか？」

「ガオウ！」

楽勝だ、と言わんばかりの遠吠えに頼もしさを感じる。ニシキは返事をするとうすぐに行ってしまった……上からの視線を感じる。

「セレス……お前には、俺を野生のポケモンから守る、つまりボデイガードという重要な役目があるってことを忘れるなよ？」

「クウウン！」

ちよろい。

十メートル級巨人の威圧感が凄すぎて、野生のポケモンなど百メートル周辺には一匹も見当たらないのをセレスは見えていないようだ。木を揺らす役目を与えるにも、そのままへし折りそうで怖い。案山子が一番の適役である。

だが、セレスは真面目にボデイガードをやるつもりなのか、先程よりも距離を詰めている。というより触れるくらいまで接近してて潰されないか不安だ。もしかして、野生のポケモンよりコイツの方が危ないのかもしれない。

改めて、ポケモンたちの作業の進行度合いを見てみる。シーザーは苦戦しているようだが、着実にポケマメを集めつつあるみたいだ。キープできる量が限られてくるだろうし、一番早く帰ってくるのはシーザーになるだろう。シルキーは視界から消えたつきりであり、ハルジオンもいつの間にかどこにもいない。大きさでも一番目立つエルモは、自慢の腕？で地面に落ちているポケマメを根こそぎ取り尽くしていた。

これはエルモが優勝だな……と思っていた時期が、私にもありました。

数十分後、シーザーが帰ってくるのと同じくらい早くハルジオンが帰ってきた……色とりどりの、大量のポケマメと共に。

「えへへー、取りすぎちゃったかな？」

取りすぎなんてレベルじゃない。シーザーの100倍くらいは持ってきてるんじゃないかってくらい大量だ……これ、ケースに入るのか？

「いったい、どんな裏技を使ったんだ？」

「えつとー、まずは木を元気にして、いっぱいポケ豆を作らせてね……」

「その手があったか」

生命力を爆上げる魔法の粉を使って、生産量をガンガン上げたよ。うだ。邪神のくせにやってる事が豊穰神で草も生えない。ふと、同じような方法で木の実を量産できる……とも考えたが、カップ・ブルルにブチ切れられそうな気がしたのでそつと頭の片隅に閉じ込めた。

次に帰ってきたのはシルキー。いきなり目の前に現れたかと思ったら、ぴよんぴよんと飛び跳ねはじめ……布の中から完全にキャパオーバーと言いきれるくらいのポケマメが出てきた。四次元ポケツトかな？

最後にエルモが元気よく発光しながら、その大腕に収まりきれない

くらいの量を抱えて帰ってきたが、ハルジオンとシルキーの集めたポケ豆を見ると途端に萎びてしまった。分かりやすい。

「みんな、よく頑張ってくれたな……少し、いやかなり頑張りすぎだ、これどうやって持ち帰ればいいんだ……」

「ここで食べていけばいいんじゃない？」

「二人あたりのノルマが300個くらいになるけどいいのか？」

ちなみに、普通のポケモンなら五個でお腹いっぱいになるみたいだ。とどのつまり、不可能である。

「仕方ない……オッサンに押し付けるか」

ポケリゾートには管理人がいる。名前は「モーン」といって、記憶喪失だったり、同じ名前のウルトラホールを発見した人物がいたり、リーリエと同じ金髪翠眼だったりする、非常に謎に包まれた人物だ。ゲームではポケリゾートの真ん中にあるイカダに住んでおり、ポケマメと引換に、無人島の各地にある施設のグレードアップをしてくれる。

「君は……それに、こ、このポケマメはいつたい……」

色違いのギャラドスに乗った人間が突然家に押しかけてポケマメを千個くらい持ってきた、といったような反応をするモーンさん。

「お近づきのしるしです。どうぞお納めください」

遠回しに孵化施設と努力値施設カンストさせろと圧をかけ、ポケマメを押し付けた。向こうは全く気付いていないようだが仕方ない。

「とても助かるけど……もしかして、一緒にポケリゾートを盛り上げてくれるのかい!?!」

「え、いいんですか?」

正直な話、ここにはまた来たい。食糧事情が乏しいのもあるが……ここは、天然のポケモンボックスといっても過言ではない。何かの理由でパーティを変更せざるを得ない場面になった時、ここを利用できると非常に便利だ。ポケモンセンターのパソコンは、身分が定かでない今の段階ではあまり使わない方がいいだろう。

UBと邪神は、置いておくと環境破壊に繋がるのでNG。

「もちろんさー! 二人で最高の楽園を作り上げよう!」

二人は、熱い抱擁を交わした!

それを見たハルジオンは、イライラしている!

「……早く帰りましょ。誰がここにポケマメ運んだか分かってるんで

しようね！」

ハルジオンのサイコキネシス！

「なんでそんなに怒ってるの……ってサイキネは止めてえええええ
!!」

「ははは、キミも大変そうだね」

何が大変そうだねだテメエぶちのめすぞ。完全に他人事のような
モーンさんに若干の苛立ちを覚えたが、全身を握り潰されるような感
覚が神経を襲い、そんな感情も消えてなくなつた。家から強制的に
フェードアウトされ、海に叩き落とされる。

おれがなにをしたっていうんだ。

帰りは怪しまれるので、そのままニシキに乗って帰った……が、途
中で暗礁にぶつかり、結局セレスに乗って帰つたのだった。心なしか
嬉しそうにしているのを見ると不安しかない。

ポケモンと人と。

暗闇でのフライトを見事成し遂げ、ポケモンセンターで無事に一泊することが出来た。空を飛んだことで若干乾いていたが、海水まみれで帰ってきたため磯臭く、ジョーイさんからは氷のように冷たい目で見られることとなった。

背中に走る悪寒はそのせいかな……と思っていたが、濡れた身体で空を飛んだことで、めでたく風邪をひいてしまったみたいだ。結局、一晩で治ったので大したことはなかったみたいだが。

次の日、ポケモンセンターに内装されているフレンドリイショップでかいふくのくすりを爆買いしていると、リーリエが宿泊所から出てくるのが見えた。人混みからリーリエを見つけ出すことは、紅白縞々のタイムトラベラーを探すより簡単である。一般人とは放つオーラが違うのだ。

「アローラ。リーリエ、よく眠れたか？」

「あろ……おはようございます」

少しずつ島の文化に蝕まれている墮天使リーリエ。かわいい。

「昨日は悪かったな。今日こそは大丈夫だから安心してくれ」

「気にしてませんから大丈夫ですよ。自分のポケモンを大事にするのは、トレーナーとして当然ですから」

リーリエの慈愛溢れる微笑みは、天使を通り越してもはや聖母マリアのようだ。いつそリーリエ教でも作ってしまうかと考えてしまう……少なくともカプ神よりは栄えそうだ。

リーリエに風当たりの強いお邪魔虫ハルジオンはというと、今のところボール内で大人しくしているが、いつ目覚めるかは誰にも分からない。気が変わる前にさっさと出発してしまおう。

「リーリエはどこに行ってみたいんだ？」

「えっと、ほしぐもちゃんの事を調べるために命の遺跡に向かう予定だったんですが……ケンさん、ほしぐもちゃんについて全部知ってますよね？」

リーリエの言うとおりほとんど全て把握している。UBなもの、3V固定なもの、覚える技が跳ねるとテレポートだけなもの、Lv43で進化するのも、それから伝説のポケモンになるのも、身長体重共にアローラの中で一番少ないということも。

「まあな。だけど別に行ってもいいぞ？」

リーリエと行くだけで、その場所は思い出の場所となるのだ。

「いいんです。それに、ケンさんのカップ・テテフ……ハルジオンさんと、この世界のカップ・テテフが出会ってしまうと考えると、少し申し訳ない気持ちになります」

リーリエの優しさが痛い。善意が、これほどまでに人を傷つけるなどなんて世界は残酷なのだろうか。幸薄そうに笑うリーリエの顔を直視できない。

「気を遣わせて悪いな。他に行きたい所とか無いか？」

「わたし、一度せせらぎの丘に行ってみたかったです！ ……ダメ

「……ですか？」

「全然いいぞ、むしろ得意分野で安心した」

「よかった……一度、そういったところに行ってみたかったです」

即答だが当然の結果だろう。上目遣いでこんな事言われたら即落ちニコマ漫画のようになるのは自明の理なのだ。というより、最初から断るつもりなど微塵もなかったのだが。

それにしても、せせらぎの丘か……ミツキたちの後追いになるが、完全に追いつくと痛々しいお兄さんに出会いかねない。バトルドームにも出没している筈なので、少しペースを落とすか、駆け抜けるべきか。今鉢合わせてしまうとストーリーが歪んでしまいかねない。

「途中、ミツキやハウに出会うかもな」

「そうですね、皆さんが旅している途中を見るのは少ないので、すごく楽しみです！」

太陽のように眩しい笑顔を浮かべるリーリエ。やはり天使だったかと再認識して、ポケモンセンターを後にしたのだった。

「シーザー、逆鱗」

無慈悲な猛撃が、小柄なヤングースに襲いかかる。勿論、即ダウンだ。

「ああっ、ヤングース!!」

「次はお前だっ、ベトベター!」

街を出て早々、スカル団の二人組に絡まれた。おかしい……ここらでスカル団に遭遇するイベントなど無かったはずなのだが……記憶が薄れているわけではないし、発生するのはカロス二人組のイベントだけで間違いないだろう。無いとは考えたいが、既にストーリーが捻じ曲がりつつあると見た方がいいかもしれない。

「シーザー、げき……ああ、もう止まんないか」

意識を、目の前で繰り広げられている惨劇に向ける。主役のシーザーはというと、敵をちぎっては投げ、ちぎっては投げを繰り返す殺戮マシーンと化していた。ドラゴンタイプの攻撃技である「逆鱗」の効果は、数ターンに及ぶ強攻撃の連打と、その後の混乱。混乱はデメリットだが、手持ちへ戻せば元に戻る類の状態異常だ。

ゲームの世界では、手持ちへ戻すのに一ターン必要だったせいでデンプロスとなってしまうていた。だが、『ここ』では違う。最悪、ゲーム中に出来なかった「逆鱗中に戻す」ことだって可能だろう。トレーナーの腕次第では、一切のデメリットを省いた最強のドラゴン技と化する。

手持ちを全て失ったか、あるいはシーザーに恐れをなしたのかは分からないが、ポケモンを出してこないスカル団に、これ以上戦う意志は見えない。まだ半分くらい逆鱗中のシーザーに、ボールに戻す動作を行うと正常にモンスターボール内へと戻っていった。技の発動途中でも、どうやら問題は無いみたいだ。

「お前らスカル団だな、目的は？」

「そつ、それは……やめるっす！ その口を大きく開いたギャラドスで何するつもりっすか!？」

「お前の協力次第だ」

繰り返し開閉をする口と完全に開いた瞳孔を見るに、ニシキはおそらく誰から見てもガチだった。

「すごい、きみはえんぎがとくいなふれんずなんだねー。」

この荒々しいフレンズに数秒睨まれたスカル団のしたっぱは、全てを洗いざらい吐いた。狙いはリーリエだけのようで、カンタイシティに一日長居した結果見つかってしまったようである。完全にこちらのミスだ。

それにしても、スカル団側でリーリエの人相書きが回っているのは驚かされた……といっても、バックにエーテル財団があるのだから当たり前か。ただ人相書きといっても、写真なのだが良く撮れている。根刮ぎ奪い取った。額縁に入れて飾るか、財布に入れて御守りにしよう。

「んで、リーリエがどういう子なのか知らされてないわけ？」

「知らないっす！ ただグズマさんに捕まえろと言われただけっす！」

「ていうかなんすかアンタ！ こんなに強いトレーナーがいるなんて聞いてないっす！」

数日前には存在すらしていなかったのだから、皮肉にも的を得ているといえるだろう。ただ、こちらの存在が知られてしまったのは大きなデイスアドバンテージだ。既にそうなっているが、更に原作通りに事が進まなくなる可能性が出てきた。

これからは、シナリオに沿って進めていくというより、今起きてしまった事から逆算してイベントをこなしていくべきだろう。最優先事項はウツロイドの捕獲だ。プランBは失敗してから考える。

「今回は見逃してやるよ、次は無いから気をつけてくれよな……なあニシキ」

「ガウ！」

「こ、こいつはヤバいっす。目がガチっす。一回帰ってボスと相談するっす！」

「もう二度と会わないよう気をつけるっす！」

すたこらさつさと、スカル団二人組は逃げ出した。賞金貰ってないし追い剥ぎするかも考えたが、特にお金に困ってるわけでもないし、天使の前で悪事を働けば天国へ行けなくなりそうなのでやめた。具体的には、リーリエの好感度下がりそう。

「やっぱり、バトルお強いんですね」

役目を果たしたニシキをボールに戻し、リーリエに向き合う。どうやら、さっきの脅迫はなかったことにするみたいだ。

「そういや、リーリエはポケモンバトルが苦手だったな」

「そうなんです……やっぱり、ケンさんはわたしの色々知ってるんですね」

一般的なアローラサシオン&ムーラをブレイク済みの人間のポケモントレーナーとしては、リーリエがポケモンバトルを苦手としており、全て主人公が代行しているというのは常識の範疇である。ただ、こんな疑問を抱いたことは無いだろうか。

リーリエの近くでポケモンバトルをして、果たして主人公はリーリエに嫌われなかったのか？

主人公は結局チャンピオンになるのだが、リーリエはそれについてどう思っていたのか。リーリエがいなくなったアローラで、タマゴを抱いて踊るケンタロスとロデオしながらずっと考えていたことだ。

「リーリエは、誰かが……例えば俺やミヅキ、ハウがバトルするのって嫌？」

「いえ……違うんです。ただ、ポケモンが傷つくのが嫌いというか……」

「だけど、それがポケモンバトルだ」

そう、突き詰めれば敵を倒す事こそがポケモンバトルだ。敵を倒すためであれば、どんな手段も問わない……準伝、厨ポケ、搦手、強ア

アイテム……非情だが、使えるものはいくらでも使うべきであり、使わない、使えない人間は勝負に勝てない三下だ。

だが……この世界では、理想のポケモンバトルの在り方というものもある。

「けど、これだけは忘れないで欲しい。ポケモンバトルは決してポケモンを傷付けるためだけに行っているものではないということを」

これは理想だ。実際には、相手を痛めつけることを目的としているトレーナーも一定数存在するだろうし、ブリーダーという選択肢を取る人間もいることから、バトルに対する忌避感が強い人間もいるだろう。

だが、昔のアニメで見たサトシとピカチュウのように、バトルを通じて友情を深め合うような……そんな関係に憧れたことなどないと言える、嘘になる。ミツキとモクローがじゃれあう姿を見て、羨ましい、と感じたのも事実だ。

ただもう、そんなものは望めないほど沼に嵌ってしまった自分がいるのもまた事実だ。今更、そんな生易しい感情を持ってポケモンとバトルすることはできない。ポケモンがバトルに勝つためのツールであり、データだと達観してしまっている。

しかし、この世界にいる人間は違う。ポケモンを生物として見ているからだ。だからこそ、せめてリーリエだけでもポケモンバトルのジレンマから解放してあげるべきだ。たとえば、心にもない言葉を吐いたとしても。

「それに、今日みたいにリーリエが襲われるか分からないしな。自衛するためにも、ポケモンを捕まえて鍛えてた方がいい」

「……ケンさんが守ってくれるから大丈夫です」

「長期的な話をしているんだ。いつまでも傍にいられるとは限らないし、目を離れた際に……なんてこともある。まあ、今は頭の片隅に置いていればそれでいいけどな」

この世界はゲームとは違う。シナリオ通りに物事が進められるわけではないし、CERO―Aなんてものも存在しない。現実の事象に合わせてみれば、反社会的組織のスカル団がただ悪戯するだけの連中だとは思わない方がいいだろう。

ナイフを振るうよりも、銃の引き金を引くよりも、ポケモンに指示を出すことのほうが簡単に人を傷つけることができる。直接傷つけるより、間接的に傷つけるほうが罪の意識は圧倒的に軽くなるからだ。

例えば、見ず知らずの人に劇物をぶちまけるような、向こうの世界でおいそれと出来ないことも平然とやってのけるだろう。携帯の容量さもポケモンならはだ。

そんな連中に、自衛手段を持たないのは自殺行為だ。現状の戦力でも、相手の物量差に押されたら勝てるかどうかも分からない。

「今は心配しなくてもいい。俺は必ず、リーリエを守りきってみせる……喋りすぎて喉が乾いたな。もうすぐ牧場だし、休憩がてら少し寄ってもいいか?」

「は、はい。いいですけど……」

反応を見るにどれだけ言っても埒が明かないので、話を一区切りし

てまた歩き始めた。こういった点で融通が効かないのも、リーリエがゲーム内での特性を引きずっているせいなのかもしれない。どう考えても、ポケモンに護衛させないのは非効率すぎる。島巡りという慣習も、ポケモンという自衛力があるからこそそのものだ。

ゲームの世界とリアルの世界。互いに影響を与えているのは明白だが、いったい何がどこまで干渉しあっているのか分からない……が、今から考えても、どこがどのように変化しているのか知らなければ意味がない。

深く考えるだけ無駄だろうと、思考を止めた。

聖地巡礼その二。

牧場で小休憩を挟んだ後、一時間足らずでオハナタウンへ辿り着いた。街中を一周してみたところミツキたちの姿は確認できなかった。既にせせらぎの丘へと向かっているのだろう。

この町自体は突出して何かあるわけでもないが……近くには我ら^{レイト}の聖地がある。時空を超えて何度も何度も世話になった身としては、並々ならぬ感慨深さを感じていた。

「え、預かり屋……ですか？」

博識のリーリエ曰く、ポケモンを繁殖させることが目的の施設で、学者などもよく利用しているのだとか。ポケモンは不思議な生き物で、性行為、出産を行わずにタマゴを得ることが可能なのだそう。何を言っているのか分からないだろうが、俺にもリーリエにも分からない。

水素が燃えると水になる事が科学的に証明されているが、どう頑張っても水素分子が酸素分子と結合する瞬間は見えない。それと同じように、ポケモンが子供を作る瞬間が物理的にブラックボックスと化しているため、子孫を残す原理が分かっても性行為を行っていると切り切るのは不可能、つまり限りなく黒のグレーなので科学的にはそうなっている……となっているようだ。ちなみに、見張り続けるとタマゴを産まないと実験で結果が出ているそう。

まあどうせ、十中八九やることやってるんだろな。

「ただ預かり屋さんにポケモンを預けるだけじゃダメみたいですよ。同じタイプのポケモンを預けてもタマゴが出来なかったり、違うタイプのポケモンを預けてタマゴが出来た例も報告されているそうです」

「俺が知ってるのは、炎タイプと草タイプを預けて成功した例だな。一応、生息地が異なるポケモンでもタマゴは作れるぞ」

だいぶ昔の話だが、ユレイドルに自己再生とミラーコートを遺伝させるため、サニーゴとユレイドルでタマゴを作ったことがあった。サニーゴ自体は弱いのだが、諸刃の頭突きミラーコート自己再生etc……覚える技が軒並み強力である。今は遺伝が簡単になったため忘れられているようなのだが、サニーゴは色々なポケモンに有能な技を遺伝させるため重宝されていた……その件は後にして、まずはポケモンのタマゴが出来る仕組みとは何かという点を知っていなければならぬ。

ポケモンにはタイプとは別に、タマゴグループという隠しステータスが存在する。例えば、同じ怪獣グループのリザードンとフシギバナを預ければ……実用性は別としてだが……雌の方のタマゴが出来る。そこにタイプは関係ない。

ちなみにサニーゴのタマゴグループは水中1と水中3。これに該当するポケモンはだいたい100を超えるか超えないか程度存在している。つまり、それだけ多くのポケモンとタマゴを作れるということに他ならない。応用としてサニーゴ、水中1と怪獣、怪獣の順にタマゴを作ることと技を受け渡すことも可能であり、有用性はポケモンの種類が増えるだけ上がっていくのがサニーゴであった。

今はそんな面倒なことをせずとも、両親の技を受け継いだりすることで同時遺伝が可能だが、昔は雄からの遺伝限定だったため、サニーゴがいなければ不可能な遺伝経路はざらであつたりする。いい時代になったものだ。

何が言いたいのかという点、タイプ違いで交配出来るなど、そんな

ことは一般はいじんトレーナーとしては常識である。

こちらでは、生態系が異なるポケモン同士の交配は積極的に進められていないみたいだが、ゲームではデータ解析によって発売前から完全網羅されていたりもする。トレーナーにとつて遺伝技は重要な戦略の一つであり、場合によっては盤面をひっくり返してしまう可能性もあるため侮れない。

「そうなんですか！……やっぱり、ケンさんはポケモンに詳しいですね」

「二応、アローラ最強だったからな」

これは過信や傲慢ではなく、客観的に見て事実だ。アローラ地方で登場するポケモンの中に、100レベルのポケモンは存在しない……つまりはそういうことだ。シーザーやニシキならばともかく、ハルジオンやセレス、エルモに勝てるポケモン、トレーナーはアローラに存在しない。

更に言えば、エルモは5V、セレスとハルジオンは実質6V……つまり、同族の中でも最高の才能があり、努力値も戦闘に特化するように振られている。並のポケモンはおろか、少しでも育て方が違えば、同じ個体でさえも勝つのは難しいだろう。紛うことなき最強のポケモンなのだ……データ通りであれば、の話だが。

「わたしと同一年のポケモントレーナーが、ポケモンブリーダーの知識を持っているのは本当に凄いことです。わたしも沢山勉強したんですから」

「へえ、リーリエは将来ブリーダーに……いや、ルザミーネさんの後を継ぎたいのか」

「……やっぱりケンさんには全部お見通しなんですね」

全然お見通しではない。ブリーダーと口に出して違和感があったので、その可能性に至っただけだ。しかもラッキーパンチでクリーンヒットしただけなので、軽くこちらも動揺している。

「かあさまが引退した後、にいさまが財団を継ぐと思うんです。ですから、わたしはそのサポートをしたいのです……そのために、ポケモンの生態もきちんと勉強しなきゃって考えてます」

「その歳で、そこまで将来について考えているのか……リーリエは凄
いよ」

「えへへ……でも、わたしたちは成人しています。ケンさんは心配な
いと思いますが……やっぱり、自分自身の未来は、ちゃんと見定めて
おいたほうがいいと思うんです」

遊びまくっている大学生に酷な事を言うな……少し意地悪しよう。

「でも、リーリエは長らく家出しているみたいだけど？　それは大人
としてどうなんだ？」

「うっ……」

「まあ、リーリエは大人だからこそ、コスモッグのために自分の意思で
ルザミーネさんから離れたんだよな。やっぱり偉いよ」

こちららも、すかさずカウンターを繰り出す。ただ、だいぶ凹んでい
るようなので、きちんとフォローもしておいた。

「そ、そんなに面と向かって言われるのは、少し恥ずかしいです」

頬を赤く染めてはにかむリーリエは、やはり天使だった。心臓射止められて死にそう。

「思った以上に広いな！」

「……どうしてそんなに嬉しそうなんですか？」

今、道の途中にある『預かり屋』に来ている。ゲームと同じように、外にカウガールが立っているのは軽くデジャヴを感じた。

預かり屋とは、第六世代以前にあった従来の『育て屋』と違い、ポケモンに経験値が入ることの無い、純粹にポケモンのタマゴを作る施設となっている。人間とポケモンは仲良くやっている筈だが、こんなポケモン版ラブホテルみたいな施設が大手を振って営業中なのはいいのだろうか……その仕様変更はとて有難かったが。

まず、経験値が入らないことによりレベルが上がらず、要求される金額が高額にならない。前作から連れてくることの出来た乱数産6Vメタモンを使用すれば必要ないが、基本的に預けるポケモンは使い

回していく。Vがない箇所を4Vメタモンで補い、生まれたポケモンと別の4Vメタモンで穴を埋め……と繰り返していくのだ。

当然、ポケモンの入れ替えは頻繁に起こるわけで、少ないにせよ一回1000円取られるのは当たり前で、金策が見つかるまでは正直厳しい。自己最高記録は、国際孵化中に育て屋内で100レベルになったゴースを引き取った時の10000円……あれ、思った以上に安い？

資金繰りが安定してくると、今度は遺伝技を勝手に忘れてたりするのが煩わしくなってくるので、レベルの上がない預かり屋は嬉しいものだった……どうせ王冠のせいで経験値ボーナスがなくなつたんだろうけど。そんな心配も、プレイヤーに全自動育成マシーンポケマシーンを使わせた時点で既に手遅れのような気がしなくもないが。

「さあ、満足したし行くか」

「えらく切り替えが早いですね……あんなに楽しみにしていたのに、もう行っちゃうんですか？」

「預かり屋と蜜月の関係にあったのは“向こう”の世界の話だからな、ここに来たところで何をするという訳でもない」

預かり屋にはすごくお世話になった。めざパ、ボックス拡張、ジャッジ、そして厳選……どのサービスを受けるにも、預かり屋がなければ困難を極めただろう。

だが、「今は」必要ない。

「み、蜜月……」

「おつと勘違いしないでくれよそれは言葉の綾だ断じて不純な関係ではなくもつとビジネスライクな関係そう俺が500円で預けて向こうがタマゴを渡すだけのプラトニツクな「ケンさん、ああいうタイプの子が趣味なんですね……これはハルジオンさんに相談しないと……」

それだけはやめてください何でもしますから」

末恐ろしい女である。クスクスと天使の笑を浮かべながらも、たった一つの失言をこうやって揚げ足取り追い詰めてくるのだ。

「じゃあ、また一緒にアイスクリームが食べたいです」

「はいはい」

休憩の時に食べたアイスクリームのことを指しているのだろう。モーモーミルクで済ませた身としては、少し気になっていたので丁度いい。一回牧場に戻らなければならぬが、帰り道にあると思うのであまり気にならないだろう。

「はいはいって、ちゃんと覚えててくださいよ?」

「その点は問題ない。記憶力は良い方だからな」

リーリエの発言を忘れるはずがないだろう。一字一句取りこぼさずに聞き取っているつもりだ。ちなみに、先程の頬を膨らませておこリーリエしている顔も永久保存した。

「まったくもう。こんなに急いで行く必要は……もしかして、今からせせらぎの丘に行くつもりなんですか? 着く頃には夜になってしまいますよ」

「あ、近くにポケセンあるから問題ない」

「……………野宿とかハプニングとか、そういう冒険チックなのを期待していたのに……………」

「……………そんなこといわれても困る」

なるほど、リーリエは冒険してみたかったのか。確かに、近くでミヅキやハウが気ままに冒険しているのを見れば、自分もいつかやってみたいと思うだろう。

ちなみに、今回は最初から最後までエスコートしていたので冒険なんて泥臭いことは一切やっていない。野生のポケモンやモブトレーナーは、シーザーの圧力で出現すらしなかった。NPCに一定の判断力があるのもゲームとの変更点なのだろう、もしかすればスカル団もある程度変化しているのかもしれない。

「せせらぎの丘までは俺が連れてってやるから、帰りはリーリエに任せる。それでいいか？」

「…………それは冒険ではなく復習ではないですか？」

「…………勘のいいガキは嫌いだよ」

しまった。リーリエは普通に優等生だった。

「わかったわかった。次は冒険とやらに付き合っってやるよ……………そもそも、『せせらぎの丘に行きたい』としか言わなかったリーリエが悪い」

「それでは、後日改めてお願いしますね」

「あっはい」

有無を言わさず流されてしまった。まあ、あんな笑顔でお願いしま
すね、なんて言われたら何も言えなくなるわ。

勝手に薬漬け一歩手前にされている件について。

宣言通り、半日もせずにトレーナーの群生地を抜け、せせらぎの丘手前のポケモンセンターに辿り着いた。辺りは既に薄暗く、太陽はもう沈みかけている。しかし、これでも想定よりだいぶ早い。

ちなみに、毎度のことながらポケモンバトルは一戦もしていない……シーザーさん威圧感強すぎい。いてつくはどうでも放つてるのだろうか？

今回は強行軍が目的なので、狙い通り上手くいったのだが……これをやり続けるのは不味い。低レベルのポケモンから手に入る経験値は微々たるものだが、”経験”は喉から手が出るほど欲しい。ライチさんの言っていた通り、未だリアルでのバトル自体に不慣れなためか自分のプレイングが下手であるとひしひしと感じるのだ。

今の状態はというと、サトシ達……いわゆるアニメキャラをベースにして適当に振舞っているだけだ。形だけならあまり問題ないだろうが、中身が伴っていないのはポケモンたちに非常に申し訳ない。

ポケモンたちの実力は、はつきり言って想像以上だ。50レベルのシーザーでさえ、周りに擬似プレッシャーのような圧力を与えている。セレスやエルモ……ハルジオンは言わずもがなではあるが、レベル100のポケモンたちは存在だけで大きな威圧感を出すだろう。親しくしてくれている姿だけを知っているためか、あまり感じていなかったせいでもあるのだろう。今回で痛いほど理解できた。

人混みの中でハルジオン^{Lv100}の与えた影響は馬鹿にならなかつたのだ。周囲の人間は、ただハルジオンが邪神というだけで注目していたわけではなかつただろうし、ライチさんも、ただ巨大というだけでセレスに驚いているわけでもなかつたのだ。

ポケモンたちが強すぎるせいで、バトルできないのも考えものかもしれない。今度はシルキーでも餌にして雑魚を釣るか。

悩み事といえ、もう一つ。

「えー！ もうここに着いたの!？」

「はやりすぎだよー」

うっかりミツキとハウに追いついてしまった。

二人はポケモンセンター前で待ち構えていた……というより、偶然鉢合わせた。聞いてみると、せせらぎの丘の入口一歩手前で引き返したとのこと。確かに暗闇での活動は危険だ。

「ここに来るまで丸二日くらいか。普通なら上々じゃない？」

二人で旅をしているとはいえ、飛び出してくる野生のポケモンとトレーナーに構っていれば、嫌でも時間を割くことになるだろう。そうすれば自然とポケモンは疲れ、傷を負う。ポケモンが傷つけばポケモンに行くなり、傷薬で回復を図るのが普通だ。

強力な薬を使おうが、傷の治りは一定時間を要する。この前シザーで試したので間違いないだろう。冷静に考えてみれば当然である。

ポケモンセンターで回復するにしても、同じように時間がかかるだろう。ついでに言えば、ミツキたちのポケモンはこの辺のレベルに圧勝することは出来ない。その条件下でさえ、二日目でここに居るということはつまりそういうことなのだ。

確実に、チャンピオンとして頭角を現してきている。

「でも、ケンたちは一日でここまで辿り着いたんでしょ？」

「ポケモンのおかげだな、無駄な戦闘をせずに済んだ」

「うわー、ずるいー」

「うるせえこれも実力だろうが」

現段階での実力はともかくとして、才能で言えば俺よりミツキたちの方が遥かに上だ。彼等は主人公であり、物語の終盤にはどちらが勝っても可笑しくないような素晴らしいバトルを繰り広げる……はず。

実際、ハウにはストーリーでもネッコアラとアシレーヌに苦戦した。ついでに言えば、ミツキが選んだポケモンがモクローというのを鑑みれば、俺と同じような壁にぶち当たるだろう。

モクローの最終進化系はジュナイパー。見た目こそぐわなない鈍足っぷりとアローラ中殆どのポケモンが弱点を付ける技を自力で習得出来ることが相合わさって、人気とは真反対にストーリーでは不遇であった。レート環境でも、同期で同タイプのダダリンの存在も不遇に拍車を掛けている。

しかし、アタッカー適正の強いダダリンと違って型が読めないという明確な差別化があり、汎用性がないだけで他のマイナーなゴーストタイプと同じようにピーキーなだけだ。ジュナイパー入りパーティでレート2000を踏み抜いた猛者もいる。

もし、ミツキが今のままモクローと共に冒険を続けたのなら……相棒の弱点の多さというウィークポイントを抱えて尚、頂点へ手を掛けるトレーナーになったとしたら。

「今のうちしか経験出来ない事だつてあるんだからな」

「もしかして嫌味？」

嫌味になるのかもしれない。自分には無い才能を持ちながら、自分には決して経験出来ない事を体験している者への羨望。全てを投げ出せば、流砂の中のダイヤモンドを見つけるくらいの確率で叶えられるだろう。しかしそれは、今の俺にとって相棒たちを天秤にかける行為だ。勿論無理である。

「人生の先輩からの激励の言葉さ。大事に受け取ってくれ」

「えー、別にいらないよー」

「そういうの傷つくからな、な？」

ハウはいつでも正直にもものを言うように見えるため、たとえ冗談でもかなり傷つく……冗談だよな？

「ていうかさ、ケンって人生の先輩でもないよね？」

「その点には、私も激しく同意します」

「ほんのちよつと先輩だから！」

誰も真面目に聞いてくれないまま、流れるように宿泊施設へと向かった。

既に夕食を終え、各々の部屋に入り就寝一歩手前というところで、ボールの開く音が聞こえた。

……いや、予想はしていた。だが、こちらは既にベッド・インしているため誤魔化しは容易。すぐさま仮初の寝息を立て始める。

「ねえ、ケン……………寝た振りしても無駄だよ？」

邪神、再臨。

仕方が無いので開き直すことにした。

「今日は歩きっぱなしで疲れたからな、もう動けない」

「そうなの？ それなら言ってくれたらよかったのに」

起き上がって早々、ハルジオンが胸に飛び込んだかと思ったたら、身

体が一気に軽くなった。関節の痛みは勿論のこと、疲労感や筋肉痛まで綺麗さっぱり無くなったのだ。

「ハルジオン、一体何をしたんだ？」

「え、今まで気付いてなかった？ 元気になる粉を使ったんだけど……」

「粉……？ 今まで……？」

「うん。これを生き物にふりかけるとね、すつごく元気になるの……時々、元気になりすぎて死んじゃうんだけど」

「物騒だなおい」

この前言った粉か。植物に振りかけるならまだしも、人間にかけるのは流石に不味くない？ と考えたところで、リーリエの言葉を思い出す。そういやコイツ前科あったわ。

「……村一つ潰せる能力を個人に使って大丈夫なのか？」

「(かなり中毒性あるけど) 調節すれば大丈夫だから任せて！」

「本当に？ おい本当に大丈夫か？ 目を見て言ってみろおい」

「うるさーい！ 元気になったならとつと外に出るの！」

体力を回復してしまい眠気が消えてしまったのは事実だったので、言われるがままに外に出た。日本の熱帯夜とは違いジメジメしてなくて涼しい。

「せせらぎの丘に行っちゃおう!」

「おう」

「……最初に言つとくけど、ボールからポケモン出すの禁止だからね」

「勝手に出てきた時は?」

「捻り潰す!!」

元気のよろしいことで。

「そんなに元気があるなら、どうして昼間に出てこなかったんだ?」

リーリエがいないこの機会に一番聞いておきたいことだった。ハルジオンの事だし、必ず何処かで邪魔してくると考えていたのだが、一向にボールから出てきやしない。おかげでリーリエと静かな二人旅が出来たとはいえ、どこか釈然としないところもあった。

「別に、ただ出るのが面倒だっただけ。このボールから出るのって結構体力使うんだよ? ポンポン出れるわけじゃないじゃない」

「あー、マスターボールだしなあ」

そこまで拘束力があるのは初めて知った。マスターボールとなれば、並大抵はおろか全てのポケモンを封じ込め、捕獲してしまう。その拘束力は群を抜いて強いのだろうと考えられるが、それと同時に、自由に抜け出すことのできるハルジオンに少し冷やりとさせられる。

「それに、有象無象に見られながらは趣味じゃないから」

「……相変わらず独占欲強いよな」

言葉の裏にあるドス黒い何かを嫌でも感じさせられた身としては、ニコニコしている邪神から半歩分ほど遠のいても仕方が無いと思っただ。だが無常にも察知され、タツクルを受ける。バイクに轢かれた昔を思い出すほどの衝撃だった。

「アタシを捕まえたのはアナタよ？　ちゃんど責任持って面倒見てもらうからね！」

アナタの示す意味が違う気がするのは気の所為ではないだろう。ウフフ、と笑う彼女はどうにも肉食獣のそれとしか思えない。エスパーとフェアリーはどこへ行ってしまったのだろうか。

そうこうしている内に、せせらぎの丘へと辿り着いた。野生のポケモンは相変わらず姿を表すことはなく、聞こえる音は、虫ポケモンのさざめきと川の流れる音のみ。

「人がいっぱいいるアーカラ島の中でも、殆ど昔から変わらない場所があつて、その中でも特に好きなのがせせらぎの丘だよ」

「お前でも、自然に気を遣うんだな」

「少しはね。だいたいケンの一割くらいかな」

「それは……流石に少なすぎるんじゃないか？」

「アーカラ島の自然は逞しいからね、人間と自然どっちも応援しちゃう」

島の守り神といっても、島の自然だけを見ている訳では無いのか。

考えてみれば当たり前のことだが感心した。

「だけど、島によって方針が違うんじゃないか？」

「……あんまり、他のカプに興味持って欲しくないんだけど」

「俺の一番は、いつだってハルジオンだから大丈夫」

甘い言葉に、ハルジオンはすぐに陥落した。ちよろい。にへらとした表情のまま、説明を続ける。

「カプ・コケコは人間を応援してて、アタシとカプ・ブルルは中立。カプ・レヒレは自然寄りかな」

「ブルルは中立なのか。てっきり自然寄りかと思ってた」

「中立っていうか、面倒くさがりかな。やり過ぎると怒っちゃうけどね。あいつ短気だし」

確かにウラウラ島は他と比べると開発が進んでいるようにも感じるな、人類はやり過ぎたのか。こうやってメガ安とポータウンは滅ぼされましたとさ。

雑談に花を咲かせながら少し進むと、広大な湖が広がっていた。硝子のように澄み切った水面には、大きな月が反射しているため他よりさらに明るく感じる。

「おや、もしかして試練に挑戦するつもりですか？」

背後から声がした。誰もいないと思っていたため、少し不自然に振り向いてしまうと苦笑いをされる。少し恥ずかしい。青髪の小柄な

少女は、壁に立て掛けている釣竿を手に取った。

「あはは、驚かせてすみません……こっちもびっくりしたのでお互い様です」

視線の先にはハルジオン。なるほど、確かに驚いただろう。彼女の顔が引きつっているのは七割くらいハルジオンが原因のようだ。

「スイレンだよな、最近どこか……そうだ、雑誌で見た気がする」

「も、もしかして、月刊釣りクラブを見てくださったのですか!？」

今度は自分の顔が引きつるのを感じた。どうやら、テキトーに変な嘘をついたせいで、スイレン……アーカラ島のキャプテンに何か盛大な勘違いをされたようだ。

嘘つき少女に本物を見せてみた。

どうしようか。勿論の事ながら雑誌は全く見てないし、釣りなんて友人の釣具を借りてダム湖で数回程度しかやったことないんだが……当たり前だが、ポケモンの釣りなんてものもやったことはない。

「釣り自体はやったことないんだが……以前から少し興味があつてな」

「そうだったんですか……でしたら、わたしが釣りの楽しさを教えてあげましょう！」

「え、いいのか？」

「良くない」

やはり邪神様のストップがかかったか。すごくテキトーなこと言ってしまったせいで内心困ってたし、今回はナイスアシストと言っておこう。いや思っておこう。

「いくらカプ・テテフでも、漁業という人の営みに口は出させませんよ？」

「そうじゃない！ アタシとケンの二人っきりの時間を奪うことに問題があるの！」

「あ、それなら問題ありません。もう寝る時間なので直ぐに帰ります。それに、ゆつたりとした空気で釣りデート……最高じゃないですか！」

スイレンもデートスポットとか考えるのか、あまりそういった事に

は疎いと思っていた。ただ釣りが好きなだけかもしれないが。

「うーん、釣りをしながらまつたりデート……いいかも」

いつも思うがこの邪神チヨロすぎないか。

「それじゃあ決まりですね、この釣竿をどうぞ！」

言われるがままに釣竿を持たされて、釣りスポットに移動させられる。そういえば、前作までは水辺があればどこでも釣りができたが、サンムーンになってからは釣りできる場所が限られているんだっとな。

「……………こなら良いでしょう。さあ、手順を説明しますよ！」

クイクイツ、だの、ぐぐーつ、だの、ギュイーン、だの擬音の多いスイレンの話を要約すれば、まず糸を垂らしてウキの反応を待ち、獲物が食らいついたと思った瞬間に一気に引き上げる。要は餌釣りと殆ど一緒だ。

「じゃあ、試しに釣ってみましょう！　ちゃんと一匹釣れるまで見守っておいてあげますから」

「スイレンが付いていれば心強いな……………ハルジオン、お前にも期待してるから落ち着けそして座れ」

この女、まだ帰りやがらないのか。といった目をしていたので、少しご機嫌をとる。満更でもないといった顔をしているので、効果は上々って感じた。ほんとちよろい。

試しに、早速糸を垂らしてみる。ウキが鏡のような水面に吸い込ま

れ、少しとたたず浮上した。

「ここから少し待ってみましょう」

「しかし……ルアーを引っさげてるだけで本当に釣れるのか？」

「大丈夫！　なんてったって、わたし自ら作った釣竿ですから！」

ルアーは生きてるように動かすからこそ、疑似餌としての効果が得られるのだ。それを動かしてもせずただ吊るすだけで釣れるわけが……えっ、

「ちよ、引いてる引いてる!!」

「おっ、思ったより早いですね。早速ぐーっといっちょやいましょう！」

言われるがまま、釣竿を勢いよく振り上げた。確かな感触が両手に伝わる。これは……デカイぞ。

「おらっ!!」

水面から現れたのは……ただのコイキングだった。ただのコイキング、といつても一メートル近く、重さも中々重たい。もしかしてかなりの大物を釣り上げたのではないだろうか。

「あー、残念。普通のコイキングだったね」

「ケン……あまり気にしないで」

……どうして励まされているのだろうか。もしかして……これが

普通のサイズ？ おかしい、このコイキングの大きさは今まで釣りをしてきた……いや、見てきた魚の中でもトップクラスにデカイ。そんなはずは……

そこまで思考したところで、考えるのをやめた。鯉の王様だからこそコイキングなのだ。ブラックバス風情に比較される器ではない。

そう、俺がおかしいんじゃない。世界がおかしくなってるのだ。

「よし、次こそはでっかいの釣り上げてやるぞ」

「おおー、夢はでっかく、ですね。わたし、実はここで赤いギヤラドスを釣ったことあるんですよ」

「へー、そう。よかったね。ケンも赤いギヤラドス持ってるよ」

おいばかやめろ、という前に全て終わってしまった。気付けば、スイレンがこちらを尊敬の眼差しで見つめてくる……気がする。どうやら、ハルジオンの負けず嫌いな性格が裏目になったようだ。

スイレンの、赤いギヤラドスを釣った、という発言は、からかい上手なスイレンの嘘である可能性が高い。他にもカイオーガを釣っただの海パン野郎を釣っただの言っているが、おそらく嘘だ。とんだ小悪魔系少女である。

色違いの赤いギヤラドスはゲーム中でも希少性が高く、それこそカイオーガにも匹敵する。どちらもシナリオを一周しなければならぬが、カイオーガは固定シンボルや配布など入手可能な方法が多く、対する赤いギヤラドスは現状HGSでしか固定シンボルで入手することはできない。

ゲームでもこれだ。この世界になると、どちらでも入手手段が無いと言っても過言ではないだろう。ものすごく……それも五千分の一を引くまで頑張れば、もしかすると赤いギャラドスを手に入れることは出来るかもしれないが。

水ポケモン大好きなスイレンが、もし俺が赤そんいなギャラポケドスモンを持っていると知ったら……

「す、すみません！ 一度だけでも見せてもらえないでしょうか？」

「まあ、こうなるよなあ」

三者話し面談合いの結果、お互い一匹のポケモンのみでバトルをする事となった。いわゆる1on1というやつだ。

「行きますよ！ いけっ、アシレーヌ！」

「クキューウン！」

出てきたのはアシレーヌ。ゲームでの切り札はオニシズクモだったはずだが……まあいいだろう。そもそも、本気のスイレンと戦ったことは無かったし、こっちの世界では違うというだけのことだ。

「バトルだ、ニシキ」

「ガオツ!!」

ニシキをボールから出すと、スイレンがすぐさま飛び付いた……ニシキ、威嚇してただけだ。だが、目をキラキラさせている彼女を止める気は起きなかった。パートナーのアシレーヌも呆れ顔である。

「触ってもいいですか?!」

「今更かよ……ちゃんとバトルの稽古をつけてくれるんだったらな」

スイレンには、バトルをする代わりにポケモンとのコンビネーションを教わるつもりだ。バトルの経験を積むならば、キャプテンのスイレンに教わるのが一番良い。

スイレンは、牙を剥き出しにして威嚇するニシキに構わず撫で回しながら、胸を張って任せてくださいと言う。確かに頼もしい。

「よし、ニシキ。胸を借りる気持ちでいくぞ」

「じゃあ、まずはわたしから……アシレーヌ、ムーンフォース!」

月の力を帯びた一条の光が迸る。

アシレーヌは、アローラ御三家のアシマリが進化した姿だ。タイプは水とフェアリーという珍しい複合タイプ。タイプ一致のムーンフォースがニシキに襲い掛かった。

「龍の舞で回避しろ」

力強い舞を踊りつつも、アシレーヌのムーンフォースを器用に避け続けている。まさか一発で成功するとは思ってもいなかったため拍子抜けしてしまった。

「す、すごい……」

「見とれてるところ悪いな。滝登りだ」

舞の勢いをそのまま滝登りに乗せ、攻撃が終わって隙のあるアシレーヌに突撃する。だが、それを許すキャプテンではない。

「泡沫のアリア！」

「構わず押し切れ！」

アシレーヌの鼻先に水が集まり、ニシキに飛ばす。着弾すると一気に爆裂し、ニシキにダメージが入る。

が、泡沫のアリアは滝登りを止めるほどではないという判断は正しかった。

鋭いニシキの一撃が、アシレーヌに突き刺さる。

「判断を見誤ったな、スイレン」

「うぐぐ、でも負けませんよ！」

言葉を交わす裏で、アシレーヌのレベル帯を分析する。一舞滝登りを、若干だが勢いを殺す程度の威力……イーブンかそれ以下か。それとも、ニシキがレベルアップしているのか。

「もう一度、滝登り」

「ムーンフォースで迎え撃って！」

「龍の舞で回避！」

スイレンが指示を飛ばした瞬間を見計らって、ニシキの技を変更する。こちらの無理矢理なオーダーにきちんと答えてくれるニシキは、ポケモンの中でも優秀なのだろう。先程と同じようにムーンフォースを完全に避けた。

「あ、ずるいですよ！」

「やれることは全部やるのさ。ニシキ、滝登り！」

「むー、泡沫のアリア！」

ここでムーンフォースを撃つてこないのは、予備動作か熟練度の違いで即撃ち出来ないのをスイレンが知っているからだろう。熟練度の概念はネットゲはおろか現実世界でもあるのだし、もしかすると色々と影響を及ぼしているのかもしれない。暇になったら検証してみるか。

アシレーヌの泡沫のアリアに、威力の増減は見られないようにみえる。つまり、特性の激流は発動していない。

「まだ押し切れる！」

「がんばって、アシレーヌ！」

「きゅーん！」

がんばって、という一言で集める水泡が目に見えて増大する。なんという出鱈目か。

「ニシキ、ぶっ飛ばしてやれ！」

「がう！」

気が付けば、声が出ていた。それに応えるかのように、ニシキは勢いを増し、なんと泡沫のエリアを弾き返すまでに。

「う、嘘でしょ……」

直撃した滝登りは、見事アシレーヌを戦闘不能に追い込んだ。一回舞った分が加算されていると考えても、泡沫のエリアを受けた状態で倒してしまうなど考えてもいなかった……こんなのが罷り通っているのだろうか。

「これだけのコンビネーションがあるなら、わたしの力は必要なさそうですね」

「……よく頑張ってくれたな」

でも、やりたい事をして勝ったし問題ないか。これからはポケリフレも頑張らなければならないらしい。というより、確率云々に賭けるよりも毎回最高乱数以上の火力を叩き出す方法があるなら、迷わずそちらを選ぶだけだ。

「ケンもそろそろ調子を取り戻してきたね」

「なんと、まだまだ実力を隠しているのですか！」

「そんなに持ち上げるのはやめろ」

そんな実力はないし、今回もたまたま上手くいったただけだ。この調子を保っていかねばならない。今回のバトルを見る限りだと、発想は悪くなかったはずだ。これから頑張ろう。

「赤いギャラドス……よろしければ、どのように出会ったのか教えてもらえないですか？」

「ああ、孵化させたら産まれた」

「えっ」

「すまん……ロマンチックでもなんでもなくて」

いいなーいいなー、とニシキを撫で回す速度が二倍になるスイレン。これから根掘り葉掘り聞こうとするつもりだったのだろうが、イライラが最高潮の邪神様と目が合ってしまったようだ。たまらず苦笑い。

バトルまでは大目に見てやると言われていたことを思い出したのか、スイレンは渋々引き下がった。ニシキがホッとした表情をする。

「……まあいいでしょう。また会える日を楽しみにしてますよ」

「おう、また明日な」

「えっ」

ミツキとハウが試練目的で来るだろうし、リーリエとそれを眺めながらピクニックする予定だからな。明日もよろしく、とスイレンに告

げるとハルジオンがより一層不機嫌になった気がした。

「十八匹目ふいいいいっしゅ!!」

「何匹コイキングを釣るつもりなの……まったりデートが……こんなはずじゃ……」

結局、頭に邪神様を乗せたまま二十一匹を釣り上げ帰路についた。デート？ 知らんな。とにかく、スイレンの釣竿は神だと言っておう。

主人公補正。

コイキングを全てキャッチアンドリリースした後、ポケモンたちにポケマメを与える。ポケモンたちは巨体の割に、一日虹マメ数個分で十分のようだ。中々エネルギー効率がいいのかもしれない。

離れない邪神を引き摺りながらポケモンセンターに戻る。そのおかげで、中に入れば早朝にも関わらず騒がしい事になってしまった……もういつそ、開き直ってしまうのも悪くないかもしれない。

何よりへそを曲げたハルジオンのご機嫌取りがめんどくさい。

気を取り直して、置いたままの荷物を回収するため一度部屋に戻ると、なんと

リーリエがベッドで眠っていた。

部屋間違えたか、と部屋番号を確認しても間違い無く自分の部屋だ。そもそも、リーリエの部屋は右隣のお向かいさんである。リーリエマスターを目指している俺に部屋をチェックし忘れるなんて隙は

無かった。

一瞬の内に、脳内会議でリーリエとぐっすりリーリエするのはどうかという提案がされ、満場一致するも、ハルジオンが察知してサイキネで絞め殺されかけるといふ事故といふか事件があつたがほぼ滞りなく私物を回収できた。

何故リーリエが寝ているかは気になるが、天使のやりたいうようにやらせる事こそがリーリエ教徒としての務めである。放つておこう……すぐく気になる。

気を取り直して、ポケセン内にあるカフェでおじさんとフアンドマメジネットの話をしながら、グランブルマウンテンを飲んで時間を潰す。主張の強い苦味と、芳ばしい香りが癖になりそうなコーヒード。塩気のあるポケマメがよくマッチする。

「あれ、もう起きてたんだ」

後ろからの声に振り向く。どうやら、一番最初に起きたのは今日の主演……といふかこの世界の主演であるミツキだったようだ。姿見は眠そうな表情とは対照的でキチンとしており、身支度が万全であることが伺える。

「緊張して眠れなかったのか？」

「そんな事ないよ………と言いたいところだけど、やっぱり試練前は少し特別よね。まだ慣れそうにないわ」

「そうだよなあ……よかつたら、バトルの練習でもする？」

「えー、無理無理！ ケンのギャラドスになんて勝てっこないもん！

ククイ博士のイワンコ、わたしたち結構苦戦したのよ?」

そういえば、島を渡る前にノーマルZを持ったイワンコとバトルする機会があつたな。モクローのおかげで苦戦した覚えはないが。

「それでも、ポケモンと技の確認くらいは出来るだろ。ちゃんと受け止めてやるさ」

「んー……それじゃあお願いしちやおうかな」

「決まりだな。早速外で始めよう」

コーヒー代の支払いを済ませ、ミツキを連れて外に出る。早朝から少し時間が経ったが、それでも人は少ない。こちらとしては好都合だ。

「ニシキ、出番だ」

「フクスロー、出てきて!」

モクローが進化したのだろう、出てきたのは一回りほど大きくなったフクスロー。相変わらずマイペースそうな雰囲気は消えない。

ストーリー的には進化するのは遅めだが、その分、他のポケモンが育っているという証拠だろう。学習装置の効率は前作と比べて下がっている筈だ……そもそも、学習装置なんてチートアイテムを持つてるのだろうか?

「ニシキ、今回は避けるだけだからな。相手の動きをしっかりと見るんだぞ」

「ガウ」

「それじゃあ始めるわよ……フクスロー、はっぱカッター！」

「クロッ!!」

いくつもの鋭い切れ味を持つ木の葉が、フクスローの羽根裏から手裏剣のように飛び出し、不規則に、だが狙いは確実にニシキの方へ向かっていく。

観察してみるに、この技はホーミングしない……が、動きが不規則なためか回避のタイミングも見た目以上に分かりづらい。

「あれは確実にお前を狙ってくる。引き付けて回避だ」

軌道はやがて、標的に収束する。身体に当たる数秒前、ニシキは天高く跳躍した。跳躍……というより、単にはねただけなのかもしれないが。

「あーもう！ もうちよつとだったのに！」

「クロー」

本気で悔しがるミツキとは違い、まあ当然だよなといった感じのフクスロー。案外、フクスローにこちらが試されているのかもしれない。

「もう一回やってみよう。もしかしたらマグレかもしれないな」

「ガウ」

次も必ず避けてみせると言わんばかりに、ニシキは遠吠えを上げる。もしかして、マグレ発言が癪に障ったのだろうか。

次に放たれたはっぱカッターは、先程の比ではなかった。数は前回の三倍くらいか。更に言えば一枚一枚の速度も微妙に違うため、回避のタイミングを掴み辛い。

「龍の舞で加速しろ！」

こういう時は、遅い攻撃を引き離すべきだろう。付いて来れる攻撃だけを回避すればいい……あれ、この練習はもしかして、こちらも中々勉強になるのでは？

結果として、はっぱカッターは一枚も当たることなく、フクスローのスタミナ切れにて練習は幕を閉じた。当てられないからといって、同じようなはっぱカッターを何回もぶっぱなすのが悪い。

「ちよつとは当たってくれてもいいじゃない！」

「すまん。俺も悪気があった訳じゃないんだ……それより、フクスローをジョーイさんに預けなくてもいいのか？」

「言われなくても行きますよーだ！」

ミヅキはこちらを向き、あつかんべーをした後、猛ダツシユでポケセンに直行した。

少し……いや、かなり怒らせてしまったようだ。確かに大事な試練前で、こんなに煽るようなことをしてしまえば怒るのも無理はないだろう。

だからといって試練前に邪魔してしまつたかというところでもなさそうで、ミヅキは怒りこそしたものの気が沈んでるようには見え、フクスローも最後まで闘志が見え隠れしていた。

おそらく、パートナー同士が互いに、試練が「終わった後」の事を考えているのだろう。なんとまあ前向きな。その前衛姿勢っぷりは、いずれ転ぶぞと忠告したい程だ。

「あれ、もう終わりですか？」

「……スイレン、もしかして見てたのか？」

どこから湧いて出たのか、背後からスイレンの声がした。相変わらず気配が薄いので内心とても驚いたが、それを誤魔化すようにスイレンの方を向かずにニシキをボールに戻す。そもそもどうしてここにスイレンがいるんだ。

「勿論！ 側でじーつと赤いギャラドスを目に焼き付けていました！ それにしても、あんなに軽やかに舞うギャラドスはなかなか見ませんよ！ ……赤いギャラドスはもつと見ないですけど」

朝なのにギャラリーいっぱいでしたもんねえ、とスイレンは周りを見渡す。言うほど人集りは出来ていないように感じたが、早朝である

ことと場所が場所であることを加味すればこれで十分多いのだろう。

「ギャラリーの皆さん、赤いギャラドスのパフォーマンスか何かだと思っ
てましたよ……それで、ホントのところは？」

「……フクスローの練習相手になつてた」

「やっぱり……あ、じゃああの子が試練を受けにくるトレーナーさん
なんですね。あの精度のはっぱカッターを撃てるんですしたら突破間
違いなしですよ……撃てたら、ですけどね」

意地の悪そうに言うスイレンを、鼻で笑った。

「俺が何かしたところで、アイツは止まらんよ」

なんといつても、未来のチャンピオンだからな。

「ふーん……どうして、そこまで肩入れするかは分かりませんが……
実力を見せるなら程々にしたほうが良いですよ？」

「……それは『いずれ俺という壁に当たって、挫折するから』か？」

「あなた……!!」

「まあ、俺にも多少なりとも経験はあるからな」

俺にとつての壁だったものはレート2000。猛者の指標。遙か
高み。1859という、そこまでの足掛かりは作れたが、第五世代、
第六世代、第七世代とプレイしてきて、2000に届くことは終ぞ無
かった。

パーティはテンプレを、選択肢は安牌を。途中で燃え尽きもしたが、それを馬鹿正直にダラダラと六年間続けて、結局、ここ一番で敗北を繰り返す。負け癖が骨の髄まで染み渡っているようだ。

このままこの世界で骨を埋めてしまうのならば、挑戦する機会は一生涯訪れることはないだろう。そう思えば感慨深い。

だけど、今の俺には。

「その時は俺が一番大きな壁になってやるさ。むしろ超えて見せろってな」

「……随分と、あの子を買っているみたいですね」

「お前さんも垣間見ることになるだろうよ、ミヅキの凄さってもんをな」

「ミヅキ……覚えました。今日の試練、楽しみに待っています」

そう言つてスイレンは人混みに紛れ、せせらぎの丘へ歩いていった。その後ろ姿は、心做しか少し楽しそうにも見える。

この世界の主人公だから、とはいえ何が起こるか分からないのもまた事実。一度や二度の敗北くらいは覚悟した方がいいかもしれない。

「わあ、やっぱりミツキさんたち強いですね！」

「ああ……………そうだな」

そう思っていた時期が、私にもありました。

「わたし、ヨワシの魚群の姿なんて初めて見ました！ 遠目で見てもすごく迫力ありますね……………」

リーリエは、サンドイッチを頬張りながら試練を観戦しており、時折黄色い声援を送りながらこのピクニックを楽しんでいるようだ。

ここは、湖を一望出来る高台……………いわゆる、穴場スポットである。場所は昨日のうちに予めハルジオンに聞いてはいたが、まさかここまですて綺麗に試練が見れるなんて思ってもみなかった。おそらくハルジオン自身も、ここでトレーナーの試練を盗み見たりしてたのだろう。

ビニールシートを敷いて、ポケセンで購入した軽食を食べつつ自然とポケモン、そして試練を楽しむ。これが今日の俺のデートプランだった。

リーリエの評価は上々だったが、スイレンからは「人の試練を覗くなんてちよつと……………」と苦言を呈され、以後は気を付けるように釘を刺された。

肝心の試練だったが……どうやら、心配なんてしなくてもよかったみたいだ。

なんせこの試練、二人がかりである。ずるい。そんなの誰だって勝てるに決まってる。

ミヅキが今使っているポケモンはバタフリー、この近くで捕獲した即戦力だろう。様々な状態異常を付与する技を使いこなしているのを見ると、やはり才能ありと思わざるを得ない。

ハウのポケモンは、原作通りピカチュウ。バタフリーの背に乗り、接近してからの電撃系統の攻撃は水タイプのヨワシにはかなり効果的だった。

どちらも、使用ポケモンは一匹目。ピカチュウの10万ボルトがヒットすると、ヨワシは魚群の姿から単独の姿へと変化した。HPを残り四分の一まで削るとヨワシは群れを解除してしまう。つまり、もうあと一歩のところまで追い込んでいる証拠だ。

結局、ミヅキとハウのコンビネーションは、お互いの切り札を見せることもなく試練を楽々と突破してしまった……あれ、フクスローの特訓の成果は？

「終わっちゃいましたね。流石はミヅキさんとハウさん、素晴らしいバトルでした！」

「……バトル苦手だったのに、あんまり気が回らなくてごめんな」

「えーと、昨日ケンさんに言われたことをずっと考えてたんです。ポケモンバトルは悪いものじゃない……だから、バトルを少し違う目線で見てみようかなって」

天使である。デートプランをこなしていく内に、リーリエがバトルを苦手にしていた事を思い出し、途中から懺悔室に半日程引きこもりたいくらいの気持ちでいっぱいだったのだ。

それを見てかは知らないが、リーリエはこうやって気遣ってくれている……様子を見るに、純粹に楽しんでいたのかもしれないが、それにしたってやっぱり天使だ。

試練の終わった二人が、スイレンからミズズを貰っているのが見えた。そろそろ帰る時間か……と言っても、まだ昼下がり。

「二人の試練突破を祝って、小さな祝賀会でも開くか」

「あつ、それいいですね！ わたしも準備お手伝いします」

リーリエがはにかみながら賛成してくれた。天使だ。ピクニックセットを秒速で片付けると、行きと同じようにシーザーを繰り出し、ポケモンセンターに直行した。

ブランクタイム。

ゆうべはおたのしみでしたね。

まあ、何を楽しんだかと言えば、宿屋のそれではなくただの食事会だ。結局スイレンも仲間に入れて、せせらぎの丘でバーベキューをする事になったのだった。

何の肉を焼いているのかは、もう考えないことにした。こちらに来てから何度も食してきた肉だ、美味しいことは認めてやろう。だが何が原材料なのかは聞きたくない。

焼いて食べれば美味しいタンパク質と脂質の塊なのだと自分に言い聞かせていると、気が付けば無心で肉を焼き、皿の上に乗せる行為を延々と繰り返していた。

あ、スイレンさん釣ったばかりの活きのいいヨワシを網の上に置かないでくださいメンタルがヘルスしましゅ。

そうやってただ肉を焼く機械になっていると、突然、リーリエが羞恥の表情を浮かべながら、あろうことか、アーンを……やばい刺激が強すぎて思い出しただけで死にそう。逆に表情筋が死んだ。

それはそうとバーベキューにビールは付き物だが、あいにく周りにはリアル基準で酒が飲めない未成年揃い。そもそもの話、ポケセンに酒なんて売ってなかった。トラブルの原因になるとのこと。仕方が無いので、サイコソーダで我慢する事にしたのだった。

三本目のサイコソーダをキメていると、不意にその時は訪れた。

一瞬にして視界がブラックアウトし、後頭部に衝撃が走る。平衡感

覚から自分が倒れたと知覚し、立ち上がろうとするも、腕と脚が思うように動かない。

野生のポケモンに攻撃されたのかと勘違いしてボールホルダーに触れ、ある事実を思い出した。

俺はインドア派であり、徹夜で動いていたのはドーピングのおかげだったと。

記憶にあるのは以上だ。

何故リーリエが右腕を抱き枕にして添い寝をしているのかも、ハルジオンがこちらを見つめながら左腕を圧死させようとしているのかも、二人と一匹をまとめてエルモが膝枕？しているのも到底理解できないが、これはもうハーレムの完成と言っても差し支えのないだろう。やったぜ。

ハルジオンとリーリエからの拘束を振りほどくと、上体を起こす。

まだ頭は鈍い痛みを発しており、左手は感覚がない。天使はともかくこの邪神、よりによって抱き枕代わりにしやがったな。

「いったーい！ どうしてそんなことするのー！」

「左腕をもぎ取ろうとした奴がよく言うわ」

血の通っていない両腕を何振りかすると、血流が巡り始めたのか痺れが段々と無くなってきた。ちらとリーリエを見るが、起きる気配は微塵もない。規則正しい寝息と共に肩が揺れ、精巧に作られた人形のように美しい寝顔が生命を宿している奇跡が、より一層酷く儂さを感じさせる。

ここまで、まじまじと近くでリーリエを見るのは初めてだろう。画面越しに眺めていた憧れが、今まさに目の前にある。その達成感は、

「ねえ、いつまでそうしてるつもり？」

脳内に直接刺さる背筋の凍えるような愛の囁き（冷笑）で霧散した。

「……少し黄昏てただけだ。今は何時くらいになる？」

「んーとね、もうちよつとで日の出かな」

となれば、今は六時前くらいになるのだろうか。辺りを見渡すと、既にバーベキューセットは片付けられており、自然らしい静寂を感じる。鳥ポケモンや虫ポケモンたちの鳴き声も、夜明け前で日が昇っていないせいかな、あまり聞こえない。

「そうか………それで、お前達は他に人間と会ったか？」

「ううん。ケンと一緒に居た子だけだよ」

それだけならば対処も簡単だろう。考えたくはないが、今回の事でポケモンだけでなく色々な事がバレた可能性もある。ハルジオンならまだ大丈夫だが、UBのエルモはダメだ。どうやっても誤魔化せない。

最悪の場合、ハンサムやリラ、クチナシといった強力なNPCである国際警察が動くだろう……口封じするなら、人数の少ない今しかない。なんなら遠方に逃げる手段もあるが、子供四人を消すことなど、強力な力を持つポケモンには造作もないことだ。

………そこまで考えて、思考をやめた。何を馬鹿なことを考えているのだ。この世界はゲームと違い、リセットじゃ戻らない。短絡的な行動は控えるべきであり、熟考とまでは到らずとも思慮深く行動するべきだ。この世界にどれだけ影響するか分からないのだから。

「ケン？　もしかして具合悪いの？」

ごめんね、もう無理させないから。と、いつになく優しいハルジオンがそこには居た。どうやら険しい雰囲気を出しているのを、体調不良が長引いているものと勘違いしたらしい。

いつもは邪神でも、根は優しい子なんだな……と思っただが、そもそも充電切れのように倒れ込んだのは過労が原因であり、元凶はハルジオンだ。崇目にマッチポンプされて好感度を上げてしまうところだった、危ない危ない。

「モクモク」

「セントエルモはね、ボディガード代として虹マメを要求するー！っ

て言ってるよー」

エルモはコードをしゅるりと伸ばし、こちらに掌を向けるかのよう
に広げた。膝枕、兼ボディガード代としてと言うよりは、活動中のエ
ネルギーの補填分を要求しているのだろう。もしかしくなくても、ハル
ジオンより断然いい子だ。

ケースから虹マメを二粒、エルモの掌？ に置くと、尻尾部分の
コードが横から伸びてきて一瞬のうちに平らげてしまった……一回
見てるとはいえ、この瞬間には慣れそうもない。

おそらく、尻尾から電気を吸収している要領で食事しているのだろ
う。そんなノリでポケマメをドレインするのは、精神衛生上良くない
のでやめて欲しい。自分が吸われるのを嫌でも想像してしまう。

「さてと、お前達について言い訳を考えなきゃいけないんだけど……
何か案はないか？」

「はいはい!! あたしたちの仲を一切包み隠さず話しちゃって、お
邪魔虫どもを駆除しちゃう!」

「却下」

「モク」

「お、エルモも何か思いついたか？」

「モクく、もくモク」

ダメだ、サツパリ分らない。

「やっぱりそう思うよね！ セントエルモもね、あたしたちのこと、そんなに隠さなくてもいいんじゃないかって言ってるよ！」

「本当かあ？」

訝しげな目でハルジオンを見たが、それを察したのかエルモが触手で肯定をアピールした。どうやら本当にそう言ったみたいだ。

「お前達の事がバレると、色んなところから国際警察が飛んできて大変なんだけど」

「だいじょーぶ!! ちゃんと妻のあたしが守ってあげる！ ほら、エルモだって百人は殺れるって！」

「モクク」

無言で肯定するエルモこわい。

物騒なことを言う二匹だが、存外に頼もしく見える。日本人の俺にとって、警察という国家権力は絶対の存在に思えてしまうが、超常の存在であるこの二匹にとっては羽虫も同然のようだ。頼もしいことこの上ない。

「流石に、あんまり物騒なことはやめてくれよ……？」

ふふふつと怖い笑みを浮かべるハルジオンと、高揚したのかバチバチと発光しているエルモを見て、半分くらい諦めの心が芽生えた。国際警察の皆様、御愁傷様です。

ケンさんが倒れた。

突然の出来事で、ミヅキさんも、ハウさんも、スイレンさんも固まってしまいました。

何かあったに違いないと駆け寄ろうとすると、これもまた突然に、ケンさんの持っていた既視感のあるモンスターボールから、コード束のような巨大なポケモンさんが現れました。

そのポケモンさんは、現状を即座に把握するとわたし達の前に立ちはだかり、わたしに威嚇しているのか、触手を放電させバチバチと火花を散らします。

「そこを退いてくれませんか？」

ケンさんの容態が分からない以上、ここで引いてはいけません。ずっと詰め寄り、謎のポケモンさんと暫し対峙する事数秒間。この短いようで長い数秒が経過すると、もう一匹のポケモンさんが現れました。

「セントエルモ、大丈夫。その女に敵意は無いよ」

アーカラ島の守り神、カプ・テテフ……ハルジオンさんです。ハルジオンさんの言葉を聞くと、セントエルモと呼ばれたポケモンさんは静かに触手を下げました。

「ありがとうございます、ハルジオンさん」

「チツ……別に事実を言ったまでだから。はやくケンを元気にしなさい」

元気にして、と言われても医者 of 真似事さえ出来ないのですが、それでも何か力になればとケンさんの容態を確かめるべく、体温を測ったり、脈拍を測ったりしました。

ケンさんは不思議な人です。わたしたちと同じ年なのに、振る舞いは大人びていて、ポケモンバトルは一流、島の守り神であるハルジオンさんにも好かれていて、教養と学問も申し分なく嗜んでいます。

そんな彼が、未来から、わたしのためにやってきた。

そんなことを考えるのは自惚れかとも思ったけれど、考えれば考えるほど、ケンさんはわたしのために尽くしてくれている事実には、考えるだけで、不謹慎ですが今までにないくらいドキドキしました。

……………ケンさんこそ、一番大変な目にあって苦勞している筈なの

に。

空間研究所で、ククイ博士とバーネット博士からF a i r e eについて話を聞いた時、胸が締め付けられるようでした。

『彼等F a i r e eは、ウルトラホールに吸い込まれる過程で何かを失ってやってくる。記録に残っている内で、一番可能性が高いのは記憶の喪失だ。彼も例に漏れずその可能性がある』

違う。ケンさんは嘘をついていた。記憶喪失も勿論嘘であり、寧ろ自身がF a i r e eであることを悟っていた節さえありました。

じゃあ、いったい何を失ったのか。それは、傍にいたわたしだからこそ分かります。

ケンさんは、喜怒哀楽を表現することができなくなっていました。

一緒に話している時も、ポケモンさんと話している時も、バトルをする時も、誰かに脅しをかける時でさえ、

彼は、悲しいほどに真顔だった。

でも、わたしには分かるんです。わたしだけは分かるんです。

なかったしいつもと違う若干の手の震えだつて見過ごしてなかったしバーベキューだつて彼にしては少し拙い動きを繰り返してたから栄養取らなきゃつてお肉を食べさせてあげたのにどうして。

ゆるせない。

「ハルジオンさん、ケンさんは過労で疲れて眠つてるみたいです………何か心当たり、ありますよね？」

「えつと、別になにも……」

「おかしいですよ、いつもはケンさんに触らせてもくれないのに、今回はこーんなに触つても心配そうに見てるだけ……カプ・テテフは生命力を増強させる鱗粉を使い、生物を活性化させると聞きました。昨日はケンさん寝てないみたいですが……」

ハルジオンさんの反応を見て確信しました。ケンさんをあんなに疲れさせたのは、他でもないハルジオンさんの仕業であると。ライチさんにカプ・テテフの生態を教えて貰つて助かりました。敵について調べるのは何事においても基本的なことでもんね。

「心当たりがないなら仕方無いですね。でも、ケンさんの身体が冷えると行けないので、ちよつと失礼させていただきます」

「ちよ、ちよっと！ あんたどういうつもり！」

そんなの決まっています。ケンさんを守る為には、もっともっともつともつとケンさんのことを知らなきやいけないんです。だからケンさんと一緒に横になって暖め合うついでに色々なことをしてもそれは仕方が無いんです。

ケンさんの隣に失礼させてもらい、一番近くで寝顔を拝見させてもらいます。普段はキリツとしてる分、寝顔は歳相応でかわいいです。また一つ知ることができました。

もう大丈夫ですよ。この調子で、ちやあんとケンさんのこと『保護』してあげますから。

ロケットスタート（物理）。

ハルジオンが言うには、ミヅキたちは普通にポケモンセンターに宿泊してようだ。UBのエルモやセレスについての説明は要らないかもしれないが、一応ハルジオンについて少しは釈明しなければならぬだろう。

……釈明といっても、どうすりやいいんですかね。カントー人のミヅキと現地人のハウ相手だと、多少の脚色さえ看破されそうで怖い。かといってリーリエと同じ事をいえば、リーリエからの信頼は地に落ちるだろう。それだけは絶対に避けねば。

ああでもないこうでもない、眠ったままのリーリエを背負いながらポケモンセンターを目指す。ハルジオンのおかげで、見知らぬ人からの怪訝な視線への耐性はバッチリだ。有難迷惑とも言う。

UBとカプは、ただ単純に目立つ。だが、それを理由に一切外に出さないのはエゴが過ぎるだろうというのが、今回ポケモンたちとの対話で得た俺の答えだった。

そもそも、目立つかどうかの話をするならシルキー以外の手持ちは外に出せない。シーザーとニシキは通常ポケモンだからといっても、普通に大人より大きいし、色違いだし、持つてる人少ないし、何より怖いし超強い目立つことこの上ない。

目立つと最悪の場合、ポケモンたちの強さを売りに、リラさんみたく国際警察になるルートを辿るしか無くなるが……普通の大学生風情が就ける職じゃないな、むしろ忙しさを考慮しなければ勝ち組なのではなからうか。

カプに縛られてると説明すれば、島キングとして縛られてるクチナ

シさんみたくアーカラ島に常駐出来るかもしれない。国際警察のみなさん、どうぞこの哀れなフオールを見つけてください。

将来への希望をまた一つ見出してしまっていると、いつの間にかポケセンの目の前へとたどり着いていた。

「ほら、リーリエ起きて」

背中にへばりついたリーリエをゆさゆさと揺らす。思えば、こうやって意識のある内にリーリエと密着するのは初めてでは無かろうか。快拳である。これは、人類の大きな第一歩を踏み抜いたと言っても過言ではないだろう。

「ん……あと、あと五分だけ……」

ダメ……ですか？

なんてそんなことを耳元でそんなことを言われると、どうにも抗えない。福音を受信した鼓膜が幸せで蕩けてしまいそうだ。というか蕩けた。

身体の限界が近いからなのかは知らないが、頭の回転が非常に早まっている気がする。そのせいか重くて腕がシンドいとか腰がイキそうとか、そういうった即効性のある非常に失礼なワードが浮かび上がったが、口に出してしまえば最後だ。リーリエとの関係はオワリーリエである。

とりあえず、馴染みのカフェにでも行くか。アローラという僻地に存在する、俺の唯一のオアシスだ。

ポケセンに入ると、まずはジョーイさんと目が合う。当然だ、真正

面だもの。朝帰りしてきた少年トレーナーが、いたいけな少女を背負って入ってくるのを、良い目で見えるはずがない。都市の路地裏でぶちまけられた吐瀉物を見るような目で見られた。なんか目覚めそう。

名残惜しいが、ジョーイさんからの視線を会釈で受け流し、カフェスペースへと移動する。回転率が早いのか、それともただ単純に朝が早いのかは分からないが、人は座っていないなかった。

リーリエを降ろそうと、膝を曲げ、ゆつくり自然に椅子に腰掛けるように促したが、どういうわけかしがみついて離れない。あの、だいぶ力籠ってるんですがその……

「かあ、さま……」

寢言のように呟いたその一言で、すべて理解した。

リーリエだって寂しいのだ。いくら大人びていようが、年頃の女の子が何ヶ月も親元から離れば、ホームシックにだってなるだろう。こういう時に力になってあげなくてどうするっていうのだ。

「すみません、エネココアを二つ」

「えっと、とりあえずその子を下ろしたら？」

「大丈夫です」

「えっと……結構、腕と膝が震えてるように見えるけど？」

「問題ありません」

結局、両腕が塞がっている状態でエネココアは飲めず、そのまま冷

めてしまい、ハウが起きてくるまでずっとこのままだった。

件の二人を前に、冷めたエネココアを一気飲みした。

最初、ミヅキたちの説得を試みようとしたら、苦笑いしながら「事情があるもんね」と気を遣われてしまった。リーリエも、UBであるエルモについて思うところはあれど、直接危害を加えたりしていないので、と過度な追及は受けなかった。

随分とスムーズに事が済んで拍子抜けしたが、「代わりに、新しい冒險がしたいのでシールドジャングルに連れて行ってください」とのこと。少し手間だが大丈夫だろうと二つ返事で了解した。

だが、ミヅキたちはシールドジャングルで待ち構えているキャプテンのマオと対面する前に、ヴェラ火山公園にいるキャプテン、カキの試練を突破しなければならない。

つまりは、また別行動をとるという事であり、こちらとしては、リーリエと二人きりでそれは幸せな時間を過ごせること間違いなしなので、全くの無問題である。

問題があるとすれば、ミヅキたちを見失うと合流が難しい点だろう。正直そんなに派手なイベントは、この先ウツロイドがウルトラホールから出てくるくらいなので、対応が受動的だとそのままイベントごと計画が流れてしまう可能性だってある。

「それはいいんだが、後々ミヅキたちと合流するのが大変じゃないか？」

「大丈夫です！ ミヅキさんのロトム図鑑とわたしのライブキャスターで、お互いの連絡先を交換しましたから」

「うらやまけしからん」（流石はリーリエ、準備が良いな）

「…………？」

ずるい。俺もリーリエの連絡先欲しい。と思ったが、図鑑はおろか連絡機器を持ってないことを思い出し、落胆。そして、リーリエのようにライブキャスター等の重要な道具を、ククイ博士から何一つ貰っていないことに気が付いた。後で色々貰おう。

「そういう事だったら安心だな……………どうしたリーリエ、そんなにじつと見られても困るぞ？」

「……………そうですね、ケンさんを困らせてはいけませんよね」

しょんぼりリーリエもまた天使。リーリエは日本の春夏秋冬のように、喜怒哀楽それぞれを楽しむことが出来るのかもしれない。

「いやいや、全然！ 全然困ってないよ！」

「ふふっ、ありがとうございます」

ありがとうございますとは一体何のことなんだろうか。フオローについてなのか、それともずっと俺の顔を見続ける権利を得られたと思っっているのか。

リーリエにジト目で見続けられるというご褒美を意識すれば、会話と脳味噌がフリーズしてしまうので無視して話を進める。

「俺たちはシェードジャングルに長居する事はないだろう。だから、合流出来るようニコシティに着いたら必ず連絡してくれ」

シナリオ的に、エーテルパラダイスに行く前は大試練のはず。余裕を持って、大試練の前には合流出来るようにすれば問題ないだろう。

「二応、合流する理由を聞いていい?」

「カプ・テテフがライチさんに用があるんだけど、どこにいるか分からないし連絡先も知らないからな。ミヅキたちが大試練を受けるついでに、こつちも要件を済ませようかと思ってる」

それっぽい言い訳をアドリブででっち上げる。向こうは、ハルジオンやUBに対して不干渉気味の対応を取ってきた。おそらく大丈夫だろう。

「なるほどー、カプ・テテフはアーカラ島の守り神だからねー」

島キングの孫であるハウも納得してくれているみたいだ。それを見て、ミヅキもそんなものかと了承してくれた。

「次会う時には、二人とも成長してる事を祈ってる」

「だからなんで上から目線なの……って、流石にトレーナーとしては上か。いつか必ず痛い目見せてあげるからね!」

「おれも絶対に追いついてみせるよー!」

そんな捨て台詞を残し、シエードジャングルまで回り道だからと風のように去っていった。息ピッタリすぎてヤバイ、もしかしてククイ博士とバーネット博士の仲に匹敵するかもしれない。

「リーリエ……はやく準備しないと置いてくぞ？」

「……………はっ」

本当に大丈夫だろうか。前途多難だ。

「……………それで、この崖をどうやって登るつもりですか？」

リーリエがジト目で睨みつけてくる。おこリーリエなのだろうかと思っただが、この状況を楽しんでいるみたいだし違うようだ。目から並々ならぬワクワク感を感じる。

現在地である五番道路は、預かり屋とその他オハナ牧場やせせらぎの丘、シエードジャングルに隣接した道路だ。オハナ牧場とせせらぎの丘の間に、障害物は一切ないのだが……せせらぎの丘側からシエードジャングルへ向かうには、大きな段差がある。

この前来た時には何も見えなかったもので、おそらく大丈夫だろうと思っていたが、この段差、目測5mから8mくらいはある……もう段差と呼ぶには大きすぎるんじゃないだろうか。流石に自力で登るのは無理そうだ。

「自力で登るのは無理だな……自力では」

当然だが、崖登りするような無謀な人間は周りにいないため、人気はない。

セレスは巨体のせいで一番目立つので、昼間は出すのを控えたかったんだが、致し方あるまい。ハルジオンでも何とかなりそうだが、後々の為にも顔合わせが済んでいないポケモンの方がいいだろう。

腰のボールホルダーから、セレスのボールを取り出し、ちよつと離れた距離に放る。圧縮された巨体が解放され、大きな振動と土煙が辺りに広がった。

「す、すごい、大きいです」

この瞬間、ボイスレコーダーを持っていない自分を恥じた。後でクイ博士から強奪しよう。

「ウルトラビーストに分類されてるポケモンの一種で、名前はCelesteela。セレスって呼んであげてくれ」

「せ、せれすていら？さん、よろしくお願いします。リーリエです」

「フウン」

ハルジオンほど敵意がある訳でもなく、エルモという前例を見ているからなのか、リーリエはすぐに笑顔で挨拶した。オーマイエンジェル。

「早速で悪いけど、その腕を使って持ち上げてくれないか？ 崖の上

に行きたいんだ」

「フウ」

なんだそんなことかと、ドヤ顔で無い胸をはるセレス。言ったら怒られそうなので口には出さない。

早速、巨大な腕のようなブースターに乗ると、あっという間に崖の上へ。崖に立ってもセレスの身長越えられない辺り流石だ。

「リーリエもよろしく頼む……お前これは振りじゃないからな？」

「フウン」

分かっているのだろうか。セレスは、突発的にハルジオンへ攻撃するくらいは好戦的である。それに、「イタズラがすぎ」だ。

「ここを掴めばいいんですね」

少しよろめきながらも、ブースターの上に乗るリーリエ。正直、嫌な予感しかしない。

「フウン」

「え、ちよつと何するんですか!」

あ、この光景どこかで見たことある。というより覚えがある。飛行実験をした時だ。

それに気が付いた時には、俺も捕まえられていた。無駄に力加減が絶妙で、潰れ死ぬのは避けられたが、危なすぎる。

「ケンさん、あの……」

「コイツ……飛ぶ気だ。絶対に手を離すなよ」

いったい、何が不満だったのだろうか。そんなワードが頭をよぎった次の瞬間、それを掻き消すような爆音と共に地面が遠ざかった。

みんな知ってるあの人。

トレーナーとしての格が違う。

彼女と、彼女の従えるポケモンを目の前にして、漠然とだが圧倒的な差をピリピリと肌で感じとってしまった。

凜とした、何があつても動じないであろう自信に満ち溢れる佇まいを目にするとトレーナーとして、人として何ランクも上の存在だということを思い知らされ少々鬱な気分になる。

「あら、もしかして私を知ってるの?」

いかにも意外そうな顔をする彼女に少しだけ毒気を抜かれてしまった。向こうの世界にいる大きなお友達なら、一目見るだけで誰なのか簡単に当てる事が出来るだろう。

特徴的な髪飾りに黒のコート、太陽の光で煌めく腰まで伸びた長いブロンドの髪に意志の強さを感じさせる灰の瞳、何より傍に控えさせているポケモン……ガブリアスが、彼女がいったい誰なのかを物語っていた。

「……シンオウチャンピオンのシロナさんが、こんなちっぽけな島に一体何の用ですか?」

正解よ、と、そんな様子で満足そうに不敵な笑みを浮かべる様は、世人全てが思い浮かべるクールビューティそのものであった。身体がガチガチに緊張していたとしても魅入ってしまう美しさがある。

シロナが何の用事でポケリゾートにいるのかなんて知ったことではないが、ライド登録されていないセレスで飛んできたところを見ら

れているのは間違いないだろう。運が悪いのか、それとも日頃の行いが悪いのか。自然と眉間に皺が寄る。

アローラでは、ライド登録していないポケモンで空を飛ぶことが禁止されている。そして、向こうもそれを知っているだろう。

誰が勝手に飛んで勝手に着地した先にチャンピオンが待ち構えているなんて思うか。どうしてこうなった、頭が頭痛で痛くなりそうだ。

「私ね、アローラにはバカンスで来てるの」

悩みの種を抱えているこちらを見かねてかは知らないが、シロナが語り始める。

「でね、手持ちのポケモンにいっぱいポケマメを食べさせようと思つて、カフェのおじさんに仕入先を聞いておいたの」

え、ポケマメの仕入先ここなの？

「そしたら、最近は豊作だし、自分で取りに行ったらどうかって言われちゃって……………場所聞いてガブリアスで来ちゃった」

「……………なるほど、貴女の言いたいことがなんとなく理解できました」

「つまり、貴方も私も共犯者よ!!」

敢えて自分からライドポケモンを使っていないとカミングアウトすることで、信用を少しでも得ようとしているのだろうか。とはいえ、そもそもこちらに擦り寄ってくる意味が全く見えないのだが。

しかし、社会的立場のある人間と島巡りする子供とは持たなければならぬ責任は比べ物にならないので、媚び売って見逃してもらおうとする考えは強ち間違っていないのかも知れない。

「共犯……ということは、シロナさんはポケマメを盗みに来たという事ですか？」

長らく背中に隠れていたリーリエから、一転攻勢の鋭いツツコミが入る。その発想はなかった。流石マイエンジェル、賢い。

「え!? えっと、そういう事じゃなくてライドポケモンの事!……:そもそも、この島は出入り自由でポケマメも自由に取っていいはずよ!」

「本当に? この島の管理人の方には話を通しているんですか? 仮にこの島が出入り自由なら、港や空港が何処にも見当たらないのはどうしてですか? ポケマメを自由に取っても構わないのに、こんなにも人間の痕跡が無いのはどうして?」

「え、えっと……:そういう所はあまり詳しく知らないわ。そういった手続きが必要そうな場所じゃなさそうだし、無人島だったら出入り自由で港がないのも理解できると思うんだけど」

「つまり、この島についてなんの前調べもせず違法ライドでここまで来たという事ですね。一地方のチャンピオンがこんなことをやってるなんて知られたら、大スクープになると思いませんか? 共犯だなんて軽々しく言いますが、罪の重さも責任の重さも全く違います。そういう点を理解した上で物申しているんですか?」

「そ、そんなこと言われても……」

リーリエさん、ちよつとやり過ぎじゃあないですかね……？

リーリエの苛烈な攻め（意味深）に屈したのかどうかは分からないが、あれだけクールなキメ顔をしていたシロナさんの顔がどんどん泣きそうに……

「それぐらいにした方がいいぞ。そもそも違法ライドしているのは……不本意ながら俺たちも変わらないんだからな」

「……………えへ、ちよつとムキになりすぎちゃいました。シロナさんごめんなさい」

「え、ええ。分かってくれたならいいのよ」

止めなければ何処までも行ってしまうそうだったので、ブレーキをかけておく。不本意そうな沈黙と棒読みの謝罪は、俺の心を震え上がらせるのに十分すぎた。理由が分からないから余計に怖い。何が彼女をこんなにも駆り立てるのだろうか。

「それで、シロナさんは目的を達成できたんですか？」

「ええつと、まだね……」

「丁度良かった。それじゃあシロナさんも手伝ってください、収穫」

「え？」

「えっ？」

虚を突かれた思いがした。

「いや、互いに協力し合った方が効率いいじゃないですか。私たちのポケモンもお腹が空いていると思うので」

「そうしてくれるなら助かるんだけど……あの子は不服そうよ?」

確かに背中から尋常ではない圧力を感じる。やめてリーリエ、ゴムみたいに服を引っ張ると傷んじゃうから。

「どうしたんだリーリエ、らしくないぞ?」

「……………嫌な予感がします。ケンさんが遠くに行ってしまうような、悪い予感です」

「何を言ってるんだか。俺をどうにか出来る人間なんてそれこそチャンピオン……………くらいでもどうにもならない筈だし大丈夫だって!」

「あら、それは聞き捨てならないわね」

隣のガブリアスも唸り声をあげる。やっべ、藪蛇だった。リーリエに調子のいいことを言って安心させようと焦った結果がこれだよ!

…………勝てないわけではない、原作通りならば。

「いやシロナさん落ち着いてくださいよ、子供の戯言ですよ?」

「貴方達はもう成人してるじゃない、自分の言葉には責任を持つべきよ? それに、貴方の持つポケモンに少し興味があったの」

シロナは、モンスターボールを一つ取り出した。やばい、この人マジでやる気だ。目が座ってやがる。

仕方がない、勝てるかどうか怪しいがやってみよう。

「……消耗は避けたいので、互いの切り札同士でやりましょう」

「ええ、構わないわ」

バトルスペースを作るべく互いに距離を取る。リーリエは相も変わらず後ろに引っ付いているが、これといった支障は出ないだろう。

さて、切り札同士といった手前、出てくるのはガブリアスのはず。タイプ一致技の地面とドラゴン両方を半減以下に抑えられるセレスが適任か。シルキーは火力不足が否めないし、何よりレベル差が大きすぎる。ニシキも威嚇持ちだが相手に押し切られそう。ハルジオンもいいが、存在を知られるわけにはいかない。

まあセレスで完封出来るだろうと、ボールを投げようとして

「これはあたしの出番ね！」

やっぱり、やめた。作戦の全てが台無しとなった今、臆することは何もない。全てハルジオンのせいにしてしまおう。

「えっと、この子が貴方の切り札？」

「違うようなそうでないような……」

「あたしが一番よね？ ……違うなんて言わせないから」

確かに口が動かない。あまりに動かなさすぎて鼻が詰まっていたら死んでいただろう。邪神つぷりを見せつけるのも良いのだが、もう少し

し好きな人くらいは思いやってくれても良いのではないかといつも思うのは間違いではないはずだ。

「ずいぶん気性の荒いポケモンね……トレーナーの指示を聞けないんだったら、確かに切り札なんて言えないわね」

「人間風情が身の程を弁えろ」

一瞬で雰囲気が変わる。こつわ。久々にガチギレしてるし、テレパシーから伝わる怒気が半端ではない。心なしか口の拘束が酷くなっているのもポイントだ。これもう顎くつつくんじゃないか？

「ハルジオンさん、ケンさんの伴侶を名乗るならお淑やかにしないと……嫌われますよ？」

ピクリと、ハルジオンがリーリエの言葉に反応した。かと思えば、あれだけキツく結ばれていた俺の口も解放され、ハルジオンから苛立ちの感情が消えた。もしかして、リーリエの声に耳を傾けているのだろうか。あれだけリーリエのことを毛嫌いしていた筈なのだが。

「……………さっさと始めるわよ。すぐに片付けてあげる」

「並々ならぬ自信ね、少し期待してるわ！ 行くのよ、ガブリアス！」

ガブリアス……シロナの切り札であり、イメーজポケモンと言っても相応しいポケモンだろう……他の人はミカルゲとか言いそうだけれども。

ガブリアスが前に出た瞬間、ハルジオンのサイコフィールドが発動。それを見たシロナさんは臨戦態勢に移った。

さてこの勝負、シロナがハルジオンのタイプを知っているかどうかで勝負が分かれてくる。

「ガブリアス、ドラゴンダイブよ！」

よし、知らないな！

「ハルジオン、引きつけてムーンフォース！」

「!?……ガブリアス、アイアンテールに切り替えて!!」

咄嗟のアイアンテールへの切り替え。なるほど、逆鱗ではなくドラゴンダイブを覚えさせているのは小回りの良さか。きちんとフェアリー対策もしているようだ。

ただ、残念ながら選択肢を見誤ってしまったようだ。ここは回避すべきだった。Lv100であるハルジオンの高い特攻から繰り出される、それも弱点のつけるタイプ一致技をガブリアスが耐えられる筈がない。

鋭い月の力を纏った光線は、近づいてくるガブリアスへと寸分の狂いもなく吸い込まれていった……あれ、おかしいな。光線が曲がったんだが。

しかし、現実を両目はきちんと捉えていた。あのガブリアス指示も無いのにアイアンテールで弾きやがった！

「二回下がってサイコキネシス！」

ハルジオンが今一番繰り出しやすい技は、先程しくじったムーンフォースではなく、サイコキネシスだろう。迫り来るガブリアスに意

識を素早く切り替えたハルジオンは、即座にサイコキネシスで対応、ガブリアスを吹き飛ばした。

「……流石はチャンピオン、ガブリアスもよくサイコキネシスを耐えたな」

「さっきのでやったと思ったんだけどねー」

「……私が褒められるなんて、なんだか新鮮な気持ちね」

ガブリアスが吠える。さっきはやってくれたなと言わんばかりである。

「もう一度ムーンフォース！」

ハルジオンに月の力が集う。それを見たガブリアスは一気に距離を詰めようと駆け出した。マツハポケモンなだけあってか、距離はグイグイと詰められる。

「アイアンテールよ！」

やはりか、先程も同じ戦法だっただけに予想は付いていたが、かといって何か策がある訳でもない。

「ハルジオン！限界まで引きつけるぞー！」

「任せてー！」

ハルジオンも俺を信じている。ならば、俺も信じるしかあるまい。

ハルジオンの目の前にガブリアスが来るのは、指示を出して3秒と

経たなかった。ムーンフォースを警戒してか横薙ぎではなく縦に振るわれた鋼の尻尾。だが、それは押し負ければ逃げようのない体勢になる。向こうも本気だ。

ハルジオンに当たる瞬間、溜め込まれた光が一気に解放され、一条の光となってガブリアスを包み込んだ。ガブリアスも負けじと尻尾を盾に前に出る。

「大丈夫！俺を信じろ！」

「ガブリアス！頑張って！」

その声援は、本人たちに届いたかどうか分からない。ただ、ハルジオンは俺に近く、ガブリアスはシロナさんと離れていた。勝負の分かれ目はそこだけだったのかもしれない。

思わぬ遭遇。

力負けしたガブリアスが吹き飛ばされ、眠るように動かなくなった時点で勝敗は決した。シロナがすぐさまガブリアスに駆け寄ると、ガブリアスは申し訳なさそうに一声鳴いた。

この勝負は、たとえ相手がチャンピオンであろうと元々こちらが勝って当然のものだった。シロナにこちらの情報など一切なく、チャンピオンであるからこそ逆にシロナさんの情報はほぼ筒抜けであったのだから。ポケモンの強さもこちらが上であることもレベル差を鑑みれば明白で、プレッシャーなく指揮する事が出来たのもそれが要因の一つだろう。そのレベル差も俺だけが把握している事だ。

もっと上手く戦えていた筈だ。安直にムーンフォースを出さず温存していれば、ガブリアスを寄せ付けぬよう立ち回っていれば楽に勝てた。結局のところ肉薄していたガブリアスに仕切り直しを強いることが出来たのは、ハルジオンのマンパワー故であり、トレーナーの手腕ではない。同格同士の戦い、例えればレート戦のような戦いであればあの瞬間で敗北を喫していただろう。

トレーナーとして、このポケモン達を率いるには実力が足りないのかもしれない。

それでも、

「やったよー！　褒めて褒めてー！」

この喜びを、一緒に共有してくれる。俺のことを信じてくれたハルジオンが耐えがたい劣等感を流してくれる。

「はいはい、これで満足か？」

顎下の部分を、こしよこしよとくすぐるように撫でる。えー、思ってたのと違う！ 等と言っているものの身体は正直なようで、ふにやりと表情を和らげている。チョロい。

ポケモン達を信じるのは当たり前だ。自ら厳選し、自ら育て、自らの考えうる限り最高のコンビネーションを生み出すパーティーを作ったのは、そう、紛れもなく自分自身なのだから。

だが、それは酷く一方通行で自分勝手なものだ。無論、データだったポケモンだからこそ行えた事であり、神に祈りこそしたが、当然ポケモンに自分の事を信じて欲しいなど思ったことは一度もなかった。

けれど、今は違う。互いに心を通わせなければバトルには勝てない。神頼みなど以ての外だ。もう一戦シロナと交えるならば、今のままであれば次は絶対に勝てないだろう。未知をアドバンテージにしていたのだ、同じ轍は二度踏まないだろうし、同じ手は二度と通じない。

「驚いたわ、想像以上よ」

「それはどうも」

チャンピオンに褒められる。それは特別な事で浮かれそうになるが、真意を履き違えてはならない。褒められているのはトレーナーの俺ではなく、ポケモンのハルジオンだ。

それが分かっているても、少し浮ついてしまうのは仕方がないだろう。才色兼備な美女に、こうも真っ直ぐ褒められる経験など短い人生の中であるかどうかさえ怪しいものだ。

「……………ケンさん、お疲れ様でした」

「お、おう。リーリエ……………ちよつと怒ってない？」

「まさか。おこつてなんかいませんよ？」

嘘だ、あからさまに不機嫌すぎる。棒読みで目を泳がせている辺り、隠す気など毛頭ないのだろう。

「……………デレデレしてる」

ボソリと呟かれた一言は、背筋を凍らすには十分な毒を含んでいた。ジト目でこちらを見つめる天使には一体何が見えているのか非常に気になるところではある。

「あ、確かにデレデレしてる」

「お前らしい加減にしろ」

されるがままになっていたハルジオンも、同じようにジト目でこちらを見つめ始めた。ただ、撫でられっぱなしのデレ顔なので威力半減である。

「貴女たち、その子のことよく見ているのね」

私には全然分らない、といった風にシロナさんが呆れ顔をする。本当に美しい顔というのは、どのような表情でも様になるのだと再認識した。

「そ、それほどでもありません！」

顔が真っ赤になるリーリエ、こちらも負けず劣らずかわいい。あとそれ褒められてないからね？

「ふふっ、お邪魔しちゃ悪いわね。それじゃあケンくん、また会いましょう」

そうやってシロナはガブリアスをボールに戻すと、代わりにトゲキッスを出し、流れるように空に消えた。

「……………え、シロナさん帰っちゃった？　ちよつと早すぎん？　バトルについて色々話を聞きたかったんだけど。」

リーリエが脅しなどするはずもないので論外として、もしかしてハルジオンの圧力に負けたのか、とも考えたが現在進行形で掌に弄ばれてる此奴がそんな事出来るはずもない。シロナの用事は未だ未達成の筈なのだが…………謎は深まるばかりだ。

「ケンさん、今日はここでゆっくりしませんか？　ほしぐもちゃんに色んなポケマメを食べさせたいです」

「よし、ハルジオン集めてこい」

「えー、なんでこの女のために…………」

天使から休養せよと指令が入ったので、そちらに脳味噌をシフトさせる。シロナさんとはどうせもう会わないだし深く考えなくていいや。それよりもリーリエの用事が最優先である。

「いやー残念だなー、これはハルジオンにしか頼めない大役なんだけどなー」

「三分間待つてなさい！」

チョロい。ホントチョロすぎるぞこの邪神。素晴らしい笑顔で飛び出して行ったぞ。

「わたしたちも、一緒にポケマメ拾いましょう……ハルジオンさんに悪いですし」

優しい、やっぱりリーリエは天使なんだなあと再確認した。罪悪感なんて感じなくてもいいのには思いながらも、勿論二つ返事で了承した。

危うく、考え無しにリーリエとモーン博士を会わせるところだった。作戦を変更し、途中まで本気で集めようとしていたハルジオンに待ったの声をかけて、そこそこの量を散歩がてら採取した後ポケモン達に食べさせた。拗ねているハルジオンもちよつと可愛い。ただその攻撃実数値185で首をホールドするのはやめろ、それは俺に効く。

結果としてリーリエに手持ちを全て晒した訳だが、意外にも、リーリエはウルトラビーストであるエルモヤセレスをそれほど嫌な目で見ることはなかった。まあ嫌な存在に膝枕してもらおう筈がないし、警戒しすぎたか。

今回リーリエと初顔合わせとなったのは、シルキーだ。キュキュつと可愛らしくぴよんぴよん跳ねながらリーリエにじゃれつく(技ではない)と、すぐに仲良くなった。天使と戯れる小動物を見て、こちらも癒されたのだった……その癒しも、じゃれつく(物理技)を敢行して来たハルジオンを抑えつけながらだったのでプラマイゼロだ。

日が暮れる前に何とかセレスに乗ってバレないように元の場所へ帰り着き、その時点で超えたかった段差を突破。今は最寄りの8番道路にあるポケモンセンターで一息ついている。とんだ遠回りだった、飛んだだけに。

だがまあ、目的は一応果たせた。ショートカットしなければミヅキ達と一緒に島を回らなきゃいけないし、グラなんとかお兄さんとロイヤルドームで鉢合わせする危険も決して低くはない。あのお兄さんめんどくさそう……特にリーリエ関連だったら。

手持ちを紹介できた点については、リーリエにこれ以上隠し事をしなくても良くなったと考えれば、今回の逃避行も悪くはなかったのかもしれない。

一番の収穫は、ポケモンセンターにチェックインするのが遅れたおかげで、リーリエと二人部屋になった点だ。最高だ。もうこれ以上ハッピーな事はない。リーリエにおやすみとおはようを誰よりも早く言えるなんて、これ以上の誉れはないだろう。勿論ベッドは別だが、二段ベッドなのでリーリエの寝息を聞きながら眠る事が出来る。幸せだ。

ちなみにジョーイさんからダブルベットを勧められたらリーリエが顔を真っ赤にさせて、ま……まだ早いです！ とか言ってて鼻血出そうになり、危うく天に召してしまうところだったが、デレデレしてんじやねえよとハルジオンの登場で全身が引き締められ、事無きを得た。おかげで一躍有名人になり、周囲5mに人はいなくなつたが。

与えられた個室に逃げ込むような形になったが、狭い部屋でリーリエと二人きりになれたのは島の住民グツジョブと言わざるを得ない。ハルジオンには絶対言わないけど。

明日はシェードジャングルで何をしようか、と話を進めっていると、きゆるるる、と可愛らしいお腹の音が聞こえた。またもやリーリエは顔を真っ赤にし、俯く姿に一つの様式美というものを感じ、堪能してご飯を一緒に買いに行った。

一緒にご飯を買いに行ったのが間違いだった。

「お前……リーリエと何してる？」

「お、お兄さま!?! どうしてここに!!」

どうしておにいさまがいるんですかねえ。あんた今頃ロイヤルドームにいる筈だろうが。どうしてフレンドリーショップで弁当選んでんだよ。

「そんなことはどうだっていい。それより、この男は誰なんだ？」

「初めまして！ リーリエからグラジオさんの数々の武勇伝を聞き及んでおります。私はケンです、ククイ博士からリーリエの護衛として雇われています。今後ともよろしく願います！」

リーリエに色々言われる前に、自分の立ち位置を明確にしておく。第一印象は大事だ、外堀を埋めるのはもっと大事だ。これで好感度爆上げであろう。

まあ、数々の武勇伝、と言っても俺が知っているのはヌル持って非行に走ったことと、スカル団の用心棒をしている事だけだ。本人はフツと行って満更でもなさそうである。もしかしておにいさまってチヨロい？

「……用心棒をしている、と言ったな。リーリエを護れるかどうか試させてもらう！」

残念、チヨロくなかった。しかも護衛と伝えたのにも関わらず用心棒に変換する辺り、厨二病の進行が思った以上に酷い。見た感じ16歳くらいだし、そろそろ高二病へ突入してもいいのでは無いだろうか。

ここまでポーズを決めて、腰のモンスターボールを取ろうとして……店員さんとリーリエにジト目で見られていることによく気がついたようだ。

何を隠そう、ここは店内である。決め台詞決めポーズを赤の他人にキメてこれは大ダメージだろう……と思ったが、フツ何やってやがる俺……等と言いながら俺の手を掴み外へ出た。誤魔化せてない誤魔化せてないから。

「……用心棒をしている、と言ったな。リーリエを護れるかどうか試させてもらう！」

本日二回目だが、まあ本人に至って悪気は無いのだから触れないでおこう……ちよつと夕焼けとか言い訳にならないくらい顔赤いけど。リーリエとそっくりでちよつと萌えた。

「まずは様子見だ、ズバット！」

「

ズバットは何か言っているみたいだが、周波数が高すぎて聞こえない。おそろく決まった……みたいな顔しているお兄さまも聞こえていないだろう。

「シルキー、おいで」

「きゅきゅー！」

俺にとって、シルキーとは初バトルになる。まあ前哨戦みたいなものだし今の戦術が通用するかどうか……まあ十中八九押し通せるだろうけど、確認作業はすべきだろう。

「剣の舞」

「噛み付く」

シルキーの方が断然速い。小さい身体が美しく舞う姿は、龍の舞と比べても遜色ないだろう。纏っている布がドレスのように目を惹きつける。

「シルキー、剣の舞で翻弄してやれ」

噛み付くために接近して来たズバットだが、シルキーの美しくも俊敏な踊りに付いて行けず、攻撃は外れる。

「くそ、もう一回だ！」

ズバットがもう一度襲い掛かるが、レベルが違いすぎた。ゲームなら化けの皮くらい剥がせるだろうが、この世界ではそれすらも叶わな

い。

「シャドークロー」

ようやくズバットが剣の舞に慣れ始め、正確に狙いを定めたとこ
ろで指示を出す。シルキーは待つてましたと言わんばかりに荒々しく
引っ掻いた。

二回ほど積んだシャドークローは、物理特化クレセリアを一撃で葬
り去れるポテンシャルを秘めている。ズバット如きが耐えられるは
ずもなく、ノックアウト。

「くっ、ヌル！」

「バルう！」

次は切り札のタイプ：ヌルか。まあ敵ではないな。

「じゃれつく」

「回避に専念しろ！」

無理だ。鈍足のタイプ：ヌルではシルキーに追いつけない。約2秒
の逃避行の末、シルキーのフェイントに引つかかったタイプ：ヌルは
ボコボコにされて宙に放り出された。流石に今ので戦闘不能だろう。
呆気なかったが、レベル差が開きすぎているし当たり前か。

「……驚いた。こんなにも強いトレーナーとポケモンがいるなんて」

「ありがとうございます」

安心して妹さんを俺に任せてください。

「俺の完敗だ。リーリエをよろしく頼む」

「お兄さま、どこに行くんですか？」

「……少し、頭を冷やしてくる」

そう言ってポケモンセンターに行く辺り優しい。流石はリーリエのお兄さまだ。

積もる話。

盲点だった。まさかグラジオの借りてるモーターがすぐ近くに
あったなんて。わざわざロイヤルドームからここまで戻ってくるな
んて無駄すぎる努力しやがって、おかげでリーリエと一緒に一夜を過
ごす計画が台無しだ。

その時は確かに、リーリエも積もる話があるだろうとかなんとか
言って快く送り出したが、冷静になってみれば酷く惜しいことをし
た。もしかすると、一夜限りのチャンスだったのではないかと絶賛後
ろ髪を引き千切られる思いで一杯である。

しかし、三カ月くらいはリーリエと離れ離れだったという境遇を考
えると少し同情した。もしもリーリエの兄になれたなら、四六時中一
緒に生活し、お邪魔虫を皆殺しにし、近親婚の許される国を探す或い
は樹立させるまでである。彼の身に起こった悲劇を思うと胸が張り裂
けんばかりだ。

……と、リーリエのために帝国を創り上げる妄想をしたところで、
マスターボールが開いた。まあいつもの邪神様だろう。今夜は徹夜
しないって伝えなきゃな……その前に寝たフリをダメ元で試してお
こう。

「……………起きてるの？」

「……………起きてるよね？」

「……………えーと、セレスティーラのボールはど「はいはいハ
ルジオンさん！ 今起きましたから！」

こんなところで10m級の鉄案山子を出してみろ、三回建てでも屋

根が吹っ飛ばぞ。

「ふふ、押してダメなら引いてみろってね！」

「ガンガンいこうぜの間違いじゃないのか……」

成功したのがよっぽど嬉しかったのか、目の前でクルクル小躍りする小さな邪神に溜め息が自然と出ていた。いちいち可愛いのもモヤモヤする要因の一つだろう。

「んで、今回は？ 言っておくけど夜通しは無しだぞ？」

「わかってるって！ ……昨日はほんとにごめんなさい」

……………ハルジオンが、謝った???

「明日の天気はリュウセイグンか……？」

「ちよっ！ そ、そこまで言わなくてもいいじゃない！ ……あたしだって、少しは責任を感じてるし」

この邪神に良心なんてあったのだろうか、と今までの行動を振り返るも特にそんなエピソードはない。どういった風の吹き回しだろうか。

だが、これはチャンスだ。何が原因かは知らないが、引け目に感じている事を利用してマウントを取れそうだ。

「そうだな、いきなり気絶するくらい酷使させられたんだからなあ」

「そう！ だから、疲れないうよう養ってあげるね！」

……………何を言っているんだこの邪神は。

「いや、いきなり言われても話が見えないんだけど」

「だから!! あたしが責任持って面倒みるから!!」

「俺はペットか何かかな？ とにかく、そういう話はノーセンキュー……………いやちよつと待て、話くらいは聞いてやろう」

あまりに激動の連続すぎて感覚が麻痺していたが、この世界では地に足のついていない立場だったな。戸籍もない、実績もない、職もない…………俺、リーリエの旅が終わったらどうなるんだろう…………

少しだけ、ポケモンバトルで食って行くかとも考えたが不安定すぎる。クワイ博士の研究を手伝うのもやぶさかではないが、原作から持ってきた知識はいずれ底をつくだろう。ついでに150万円も数年で底をつく。やばい、この世界の成人年齢低いだろうから補助金も宛てにならない。

そう、最悪の話だ。バトルで生計を立てられたり、正式な博士の助手になりさえすれば問題はないのだ。だから、ちよつとだけ話を聞いて楽そうだったらそちらの方にシフトするだけ。異世界で邪神相手にヒモ生活も悪くない。これでラノベ書けそうだな。

「えつとね、普段は貢ぎ物ときのみで生活して……」

「おい、その貢ぎ物ってどこの誰が……あつ」

「一日中、遺跡の中でゆったりのんびりと暮らすの！ 身の回りの世話はメイドがやってくれるから大丈夫！」

「おい、そのメイドってどこの誰……あつ」

あれ、これって実質ライチさんに養ってもらおうのでは……？

「いざとなったら遺跡を増築して、念願のマイホームも!!」

「ハルジオンさん、少しばかり俗に染まりすぎなんじゃ……」

「違うもん！ちゃんと勉強したんだもん！」

その手には最早飾りとも見て取れる膨大な量の付箋がついた、何度も読み返され擦り切れた結婚情報誌があった。色々メモしてある辺りどこの誰かのものだろう。ハルジオンがそもそも字を書けるかどうかなど知ったことではないが、十中八九どこの誰かのものだろう。いとあわれなり。

「でも、人間のオスってこういう頼れるメスが好きなんでしょ？」

「頼れるのは島クイーンなんだよなあ」

「もしかして、浮気？」

「……浮つくも何も俺たち恋人でもなんでもないからな？」

危ない危ない、一瞬凍える世界が発動した。あれおかしいな、目覚めるパワーは炎だったよな。どうして身体が震えてるんだろう。

「じゃあ、恋人を通り越して夫婦って事？」

「……………思ったけどさ、どうしてお前は俺に執着するんだ？」

「えっ？」

それを口に出して、瞬時に後悔した。冷や汗が目尻を辿り網膜を刺激する。蛇に睨まれた蛙のように、それを拭うことは出来なかった。

「……………本気で、言ってるの？」

「そっか。今まで聞いてこなかったから分かってるって思っちゃった」

「ケンがいなくなるなんてアローラが沈んだって考えられない。ケンがあたしの全てだから。」

「でも、不幸にもケンは人間という短寿の生き物……命を燃やして生きてるのもケンの魅力的なところだけど。それでね、みんなで考えたの。ケンがいなくならない方法を。限られた時間を最大限に使ってケンと一緒に世界を終える方法を」

「……人間って、社会を持っていてのに特定の相手だけで番を持つポケモンでもない変な生き物だって知ってた？ 愚かだよ、短命で脆弱、その上一匹しか孕めないのに独占欲だけは一丁前」

「そんな強欲で愚かな種族に、ケンは絶対に渡さない」

「……そんなに顔を痙攣らせちゃって可愛い。ケンだけは特別だから大丈夫。ケンは聡明で器も大きいし当たり前だよ」

「……もしかして、過激だと思った？ でも、こんな風に思ってるのはあたしだけじゃないよ。セレスティーラだってセントエルモだって思ってる。産まれた瞬間からケンの子供だった子たちはそんな風に思わないだろうけど……でも羨ましいな、ケンから全てを与えられて成長するなんて考えるだけで幸せだよ。でも幸せすぎて平和ボケしてるっていうか、ケンを盗られるっていう危機感がないみたい……話、逸れちゃったね」

「勿論、ボックスの中にいるアザレアもヒマワリもアジサイもジェリーもシルバレもプロテンもキリコもアバドンも、みーんな、ケンのこと大好きだから安心していいよ」

「でも、一番好きなのはやっぱりあたしかな。他のどのカプよりも早く捕まえられたし他の誰ともボールも違うし他の誰より一緒にバ

トルもしたし他の誰より愛情だつて感じられた。金の王冠を使ったのもあたし、一番敵を倒したのもあたし。誰にも負ける気がしないのもあたし」

「特に、ケンに関してはね、誰にも一番を譲りたくない。今までも、そしてこれからも、あたしはケンの一番の矛で、盾で、伴侶でありたいの」

「……そんなに強張らないで、ケンは自然にしてる方が素敵だよ？」

「何かの間違いでこの世界に来ちゃった時はどうしようかと思っただけど、帰りたくなったらこの世界のアルテミスを探せばいいよね。ケンも知ってるだろうけど、あの子、世界を渡る力があるから」

「あっちの世界だとケンはほとんど喋らなかつたよね。表情も無機質みたいだつた。でも、この世界に来てから、まるで命を吹き込まれたように言葉を話して、表情を変え、感情の起伏も見てとれるようになった。恥ずかしいけど、一瞬ニセモノかと思っちゃった……でも、ちゃんと、あたしの名前を呼んでくれた」

「すごく、嬉しかったな」

「だから、この世界ならケンと番になれるって思ったの。だからこうやっていっぱいアプローチして、馬鹿みたいに嫉妬して、そつと寝込みを襲ってるの」

「分かった？ あたしも責任を取るけど、ケンも責任を取らなきゃダメだからね？」

「だから、目を逸らさないで」「あたしたちを、あたしだけを見て」「もっと愛して」

「聞いたからには、絶対に逃がさないんだから」

「……逃すつもりもないんだけどね」

「それで、話って何？」

「詳しくは知らないんだけどさ、ポケマメが大発生してるみたいなんだよ」

「ポケマメって？」

「ポケモンと仲良くなるために、アローラでは古来からきのみのように使われて来た食べ物の事さ」

「そう……でも、貴女が深刻そうな顔をする理由が見当たらないわ」

「その大発生前に、ある予兆があつてね……この写真を見て」

「綺麗な空ね……これは、UFO？」

「そう。でも、あたしにはこのシルエットに心当たりがある」

「……それが本題？」

「バカンスに来てるところ悪いけど、頼めるかしら？」

「別にいいわよ、貴女には色々お世話になつてるし」

「ありがとう、助かるわ。それ実はポケモンなの」

「ええっ！ 本当に？ こんな形の空を飛ぶポケモン、古代の文献にも載ってないわ。飛行機の間違いじゃないの？」

「もし本当にポケモンだったら？ チャンピオンとしてバトルしてみたくない？」

「んー、でも相手してくれるかしら……」

「大丈夫、そのポケモン、多分トレーナーを乗せて飛んでるよ。トレーナー自身も聡い子だからね、その事について言及すればバトルしてくれるわ」

「そういえばアローラってそらをとぶを使うのは原則禁止だったものね……どうしてそこまで詳しいのに、貴女が調べないの？」

「……あたしじゃ、見極められなかった。でも、あんたはチャンピオン。他の誰でもないあんたじゃなきゃ、彼を、ケンを止める事が出来ないかもしれないの」

「ふーん。ケンくんね……彼にも、未知のポケモンにも少し興味が出て来たわ」

「島を管理しているモーンって人がいるから、そこで泊まって待ち伏せしてて。島にターゲットが向かったら連絡を入れるわ」

「了解、後で色々聞かせてもらおうよ?」

「あたしも聞かせてもらおうさ」

食事のレポート。

ハルジオンの独白きょうはくは、俺の心に深く刻まれた。これだけ熱烈に愛を語られたのもそうだが、一番衝撃だったのはLv100まで育てた準伝ポケ全てがハルジオンのような偏愛を持ち合わせている可能性があるという、その一点に限る。

いったい誰が予想しただろうか、効率良くテンプレ通りにポケモンを育てたらこんな邪神が産まれるなど。これは対策がどうか後悔するしないの問題ではなく、ある種仕方ないものだったのかもしれない。そもそもポケモンの世界に入り込んだ事自体がイレギュラーだ。潔く諦めよう。

しかし、実際問題これを拗らせた対応で済ませば世界を巻き込む大戦争が勃発してしまうだろう。アローラが海に沈む日もそう遠くないのかもしれない。

あれだけ思いの丈をぶちまけたハルジオンは、珍しく疲れて眠ってしまった。非常に慣れたように腕枕を強要するのを見るに、模範的な常習犯であることが窺える。

仕方がないので一緒に布団を被る。今のハルジオンに反抗しても、無事で済むヴィジョンも成功するヴィジョンも全く見えない。ここは時間をかけて解決策を模索するのが最適だ。幸い、ここまでのアクションを起こしているのはハルジオンのみ。他のポケモンからプレッシャーの類を感じないため、ゆつくりやっても問題ないだろう。

ハルジオンの暖かい寝息を肌を感じながら、意識を手放した。

「ケンサーン、起きてください!」

微睡みの中、福音が聞こえた。薄っすらと目を開けば、そこには可憐な天使が一人。ここは天国か……と真剣に自分の生死について問い詰めたところで、リーリエがジト目でこちらを見つめているのに気づいた。

「……………随分と、ぐっすり気持ち良さそうに寝てましたね。いつもと抱き枕が違うからでしょうか?」

ポケモンを懐に抱いて寝るのは、この世界ではマナー違反なのだろうか。自分が抱き枕にされてないため今回の寝心地は悪くなく、ハルジオンの体温が逆に安眠を促したと言ってもいいだろう。この抱き枕に高評価を付けていいかもしれない。

「夫婦だし当然よね! これからもいっぱい一緒に添い寝してあげるから!」

「ふふふ、この薄汚れた抱き枕さん……一回綺麗に洗濯してあげましょうか?」

「……………なに? やる気なの?」

なにやら、この狭い一室で天魔界戦が始まりそうな予感がする。

「それより! どうしてリーリエがここに? お兄さんはどうしたんだ?」

「あつ、そうでした。実はおにいさまのモーテルで朝ごはんを作ったんです。よければ、その……ケンさんに食べて欲しくって……ダメ、ですか？」

「ありがとう、喜んでいただくよ」

是非もない。寧ろ、どうして断るかと思ったのだろう。天と地がひっくり返つても有り得ないというのに。

「ふーん、姑息な点数稼ぎなんて無駄だもんね。こっちには優秀な召使いがいるんだから！」

「お前それポイント駄々下がりだからな……?」

逆にライチさんのポイントが急上昇だが、それを言えばコニコシテイごと地図から消えて無くなりそうなので心の中に仕舞い込んだ。

モーテルへの移動中、ボールに戻る気などさらさらないハルジオンがいつも通りに首根っこにしがみついていると、ある一人の勇敢な……無謀とも言うが……観光客がシャッターを切ったことで、黙っていて正解だったと思ひ知ったのだった。

「すっげー！ ホンモノのカプ・テテフだ！」

まあ撮られるよなあ、神様だから罰当たりだとか日本人以外の人間って考えないのかも、等と考えていたが、周りの反応を見る限りだとそうでもないように感じた。

ジョーイさんも、現地住民の皆さんも顔を真っ青にして慌てふためているように感じる。高々写真を撮られた程度でどうしたというのだろうか。

「無礼者め」

一瞬感じた殺意と共に、カメラが消えた。

正確には、カメラを持っていた両手ごと握り潰したかのように圧縮された。と表現した方がいいだろう。どういう原理があるかは知らないし知りたくもないが。

滴り落ちる血を見たのか、銘々に悲鳴があがった。周囲はさらに響めきを広げ、緊張が高まる。

ただ、一番叫びたいであろう渦中の彼は無音だった。よく見れば大粒の涙を流し怯えたようにこちらを見ている。口は縫い合わされたように閉ざされたままで、端からツウつと垂れる出血がみられた。

あ、これ全身サイコネシスの刑だな。とここでようやく勘付いた時には、彼の意識は既になかったようだ。糸を切られたマリオネットのように泡を吹いて倒れ込んだ彼を、ジョーイさんたち医療スタッフ

が担架を持ってきて奥へと担いで行ったのだった。

「……なんて言ったの？」

「次は命を奪うって」

どうせ指向性のテレパシーで罵詈雑言を捲し立ててるだろうなあとカマをかけたなら、シンプルにキツイこと言ってた。正直ちよつとちびりそう。

「……そこまで写真が嫌なのか？」

「写し身をいっぱい作られるなんて気持ち悪いから無理。あたしは、唯一無二のあたしよ」

邪神様のどうでも良さそうなプライドで両手を無くした彼に黙禱を捧げた。ハルジオンに治療を頼んだところで素直に聞いてもらえろとは思えない上、治したところでカメラ弁償しろなんてつけあがられても困る。

あれ、こんな事出来るんならシロナのガブリアスなんて余裕だったのでは？　とも考えたが、ただ単にバトルの真似事でもしたかったのだろう。あれだけ俺の事を狂愛してるのであればやりかねない。聞かない方が吉と見た。

「ケンさん、置いていきますよー？」

「……リーリエさんメンタル強すぎない？」

「ふふ、鍛えてますから」

あー、これも聞かない方がいいやつだー。

モーターでリーリエとグラジオが出してくれた食事は、どこの国かは知らないが洋食スタイルのもので日本人の俺には新鮮味があった。

モーターの扉を開けた隙間から吹き込んだパン屋のような芳醇な香りから既に期待以上だったが、テーブルには色とりどりのジャムと専用の陶器に入ったバター、チーズとサラミのようなものを散りばめられたシーザーサラダ、どこかの映画で貴族が食べているのを見たことがあるような半熟卵を専用のスタンドに乗せたもの、一際目立つ巨大な瓶には既視感のあるラベルが貼ってあるモーターミルク。グラジオが奥でぐったり横になっているのを見るに、リーリエの入れた意気込みがよくわかった。

「リーリエ……パンは、そのの、オープンに……入ってるから、後は頼んだ」

その言葉を最後に、グラジオは寝息をたてはじめた。ちよつと消耗し過ぎじゃないですかね？

というより、モーターにオープンなんて置いてあるのか。と思つたが、よく見れば電子レンジと兼用のようだ。電子レンジの隣には表面を焼かれるために待っているバゲットが山のように積んである。

「おにいさま、ありがとうございます。ここからは私に任せてゆつく

り休んでくださいね」

グラジオがサムズアップのハンドサイン。はよ寝ろ。

「それにしても凄く豪華だな、めちやくちや手が込んでるんじゃないか？」

「そうでもありません。私たちの故郷では、あまり火を使わないような手間のかからない朝食が基本ですから」

手間のかからない、という言葉に納得しかけたがグラジオが瀕死である事と整合性が取れない……あれ、このモーモーミルク、確か新鮮さを売りにしていてこの前買えなかったタイプの奴だ。

……この様々なパンの種類もフレンドリイショップでは買い揃えられないし、そもそもサラダに使われている新鮮な野菜やチーズなどを流浪人のグラジオが持っているとは考えづらい。

「おにいさまにも、ほしぐもちちゃんにも頑張って貰ったので大丈夫ですよ」

ボールからびゅいびゅいと声が聞こえた。どうやらコスモツグもお疲れの様子。ここまで気合い入れなくても、リーリエの焼いたトースト程度で十分以上の満足感を得られたのになあ。

と言うより、ここまでのものが出てくると逆に怖くなってくる。どんなものを対価に要求されるのだろうか？ 俺は果たして明日まで地に足がついているのだろうか？ 人生、山あり谷ありと言うが、今を絶頂と例えるならば下に待つのは奈落だろう。今から落ちるのが怖い。

「ふーん。人間のくせに中々頑張るわね。食べてあげてもいいけど？」

この後に及んでまだこんな事を言うのか。無言でマスターボールを取り出そうとしたが、それよりも早くリーリエが返事をした。

「是非食べて欲しいです」

条件反射レベルで早い返事だったが、ここまでハルジオンを好いていたか甚だ疑問である。もしかして裏でイチャコラやってるのではと、ハルジオンに対し疑いの目を向けてしまうがすぐに霧散した。コイツにそんなことする余裕はないのを、既に身を以て体感済みだ。

何より、リーリエの言葉に温かみが籠っていないのである。顔と声は笑っているが、四六時中リーリエを見続けていた俺には分かる。目だけが笑っていない。

「え、それじゃあ、食べよっかな……」

ハルジオンもタジタジである。少し見ないうちにリーリエに対して弱くなってないか？ それとも気のせいだろうか。

何はともあれ、せっかくリーリエが用意してくれた朝食だ。頂くことにしよう。

最高だった。その一言に尽きる。

シーザーサラダは冷たい水に浸されていたように程よい低温で、それが脂っこいはずのチーズや肉を絶妙に和らげ、旨味だけを際立たせている。色とりどりのジャムも、焼きたてのパンに合うようなものばかりで食事が終わる最後まで飽きることはなかった。ハルジオンはパンとモーモーミルクで満足してしまう程。スタンドに立ててあった茹で卵はこれまた絶妙な半熟加減であり、塩加減もリーリエの調理スキルの高さが伺えた。

「すごく美味しかった……さて俺は代償に何を失うんだ……？」

「何言ってるんですか……でも、ケンさんがここまで喜んでくれて嬉しいです！」

こんなおもてなしを用意してくれたにも関わらず、笑顔でこんな事言ってくれるリーリエたんマジ天使。錯乱しすぎて本当に天使に見えるくらい天使。

「美味しかった！ また食べたい！」

ハルジオンもご満悦のようだ。といっても、こいつパンしか齧ってなかったけど。

「ふふ、いつでもとは言いませんが……ケンさんに頼まれたら断れませぬね」

「えーほんと？ ケンーまた食べたいよー」

悲報、邪神様食い物に釣られる。

「馬鹿野郎、ここまで揃えるのにどれだけ手間暇かかっていると
思ってるんだ」

「確かに、毎朝焼きたてのパンをエーテ……取り寄せるのは難しい
ですね。でも、ケンさんが喜んでくれるならへっちやらです！
これでシエードジャングルでも頑張ってくださいますよね？」

なるほど、今回は冒険前の鼓舞が目的だったのか。効果覿面すぎて
一日中頑張れそうだな。まあなにか致命的な言い間違いをした気もす
るが、おそらくは気のせいだろう。よくあることだ。リーリエも疲れ
てるんだらう。

そんな些細な事よりも、リーリエがここまで尽くしてくれることに
全身全霊の感謝を示さねばならない。

「リーリエ、少ないけど受け取ってくれ。今回はありがとう」

「え、いいですよ別に！わたしはケンさんに喜んで欲しくて作った
んですから……それにこれくらいじゃ足りませんしね」

リーリエはボソツと呟いて、差し出した手をそつと下ろした。

あーあれれーおつかしいなー、俺の手には十数万円くらい握られてる
んだけどなー。

さーて、シエードジャングルにはいったい何が待ってるんだらう
か。果たして十数万円以上の働きができるのだろうか。もう疑問し
かなかった。

太陽。

常夏の島であるアローラだが、シェードジャングルは熱帯地域にあるジャングル特有の蒸し暑さなどなく、寧ろ生い茂る木々のおかげか涼しさを感じる。せせらぎの丘が近いのも要因の一つかもしれない。

今回の役目はリーリエの護衛だ。いつもと変わらないかと言えばそうでもなく、600族の威圧感で有象無象を圧倒するシーザーは留守番。代わりに小さくてジャングル内での小回りが効く、フェアリー・ゴーストタイプのシルキーを出している。指示はリーリエが出し、俺はお目付役のようなものだ。

リーリエ曰く、冒険したい。できればバトルもやってみたい。ださうだ。思っていたより随分と思いついた願い事で少し躊躇したが、ストーリーを改変するのは決定事項なので気にしない事にした。しかし……リーリエってこんなにアグレッシブだったっけ……？

「あ、カリキリが飛び出してきましたー！」

目の前には、キューと威嚇してくる虫ポケモンもどき、カリキリがあらわれた。これが一応、リーリエの初バトルとなるのだが……果たして大丈夫なのだろうか。

「シルキーさん、お願いしますね！」

「キュキュー！」

リーリエの前にシルキーがふわりと飛び出した。意地っ張りな性格の彼女は見た目にそぐわず好戦的なようで、即座に剣の舞を踊り始めた。最早この時点で勝負が決まったようなものだ。

「シャドークローです！」

シルキーは残像を残すような、目にも止まらぬ速さでカリキリの背後を獲り、双腕で斬りつけた。勢いよく吹っ飛ばされるカリキリに少し同情する。

「あつ、ちよつとやりすぎじゃ……」

「そんなこと言い出すだろうと思つてな。はい、元気の欠片。これでカリキリを治しておいで」

この世界、特にアローラは弱肉強食だ。弱ったカリキリなど即座に捕食されてしまうだろう。リーリエのように優しい心を持っているつもりはないが、徒らに傷付けたポケモンがそのまま死んでしまうのは忍びない。俺たちトレーナーのメンタル的にも最低限のケアが必要だ。

「ありがとうございます！ 早速使つてきますね」

カリキリが倒れている方へ一目散に走るリーリエ。それを見て、シルキーは少し申し訳なきような雰囲気を出していた。

「なあに気にするな。シルキー、お前は正しい事をしたんだ。リーリエを守ってくれてありがとな」

「キューー」

しよぼんとした様子から一転して、ぴよんぴよんと嬉しそうに跳ねる跳ねる……少しは落ち着いたらどうだろうか。布の下を見てしまったら最期、魂を吸い取られるとかなんとか凶鑑に書いてあったし、不慮の事故とか本当にやめてほしい。

あ、リーリエさんの布の下なら死んでも良いから見てみたいです。

「カリキリ、ちゃんと元気に帰っていききましたよ」

リーリエは白派か黒派か、それとも水玉かなど考えていると、本人が帰ってきた。思考を即座に切り替える。

「よかった。それで初バトルどうだった？」

「……あんまり思ってたものと違う気がします」

「ポケモン同士のレベルが違いすぎるから……」

シルキーは進化しないミミッキュという種族であり、カリキリは進化を残したレベルの低い、且つ未熟なポケモンだ。レベル差だけでなく、種族差も露骨に出ていたと言っても過言ではないだろう。

「んー、じゃあいつそのことポケモン捕まえてみるか」

リーリエが驚きのあまり、かわいい小さな悲鳴をあげた。

「え、でもモンスターボールが……」

「大丈夫、この時のために50個くらいバックの中に入れてきたから」

「準備が良すぎませんか？……もしかして、執事が親戚にいたりします？」

「誰がセバスチャンだ」

「ふふふ。せっかくケンさんが用意して下さったんです、お言葉に甘えてもいいですか？」

ちよつと困ったようなはにかみで、首を傾げ上目遣い。うわめっちゃあざとい。秒で脳裏に焼き付けた。

「足りなくなったらダツシユで買いに行くわ」

「流石にそこまで失敗しませんよ……わたしでも怒りますよ？」

原作のおこりーリエも可愛かったし、是非とも拝んでみたい。ちよつかいかけてワザと怒らせてみるのも選択肢の一つとして拳がったが、そもそも迷惑をかけるのはNGなので見送った。

「ごめんごめん、じゃありーリエに相応しいポケモンを探しに行こうか」

「あ！ 先頭はわたしですよ！ わたしの冒険ですから！」

「分かったから置いてかないで」

俺はともかくとしてシルキーも追いつけてないので、全力疾走してポケモンと遭遇してもフォロー出来ない。少しため息を吐いて走り出した……シルキー、頼むから自分で歩いてくれ。重い。サトシくんのスーパーマサラ人っぷりが感じられる貴重な経験かもしれないとポジティブに考えたが……肩が筋肉痛になるのは避けられなさそうだ。

いくら火山が近くて虫ポケモンでも、こいつが野生にいるのはおかしいだろいい加減にしろ。アローラの生態系どうなってんだ。

「やった、初ポケモンさんゲットです！ でも、虫ポケモンなのにあつたかいですね？」

「ピィ」

色が綺麗だから。なんて適当な理由で、見つけたかと思つたら即座にクイックスタイルでモンスターボールを投げ、一発ゲット。リーリエってプロ野球選手だったっけ？

それはともかくとして、問題なのはゲットしたポケモン。メラルバだ。おかしい、こんな目立つレアポケモンがこんなところで見つかるなんて。ここジャングルだぞ？ 故郷の砂漠は何処にもないぞ？

「ふふ、太陽のように暖かいです。イツシユチャンピオンが同じようなポケモンを持っていた気がしますし、その進化前でしょうか……？」

流石は博識なリーリエ。大正解だ。ウルガモスはイツシユチャンピオン、アデクの切り札で、イツシユの伝説ポケモンより高いレベルの固定シンボルポケモンである。その進化前がメラルバだ。

ちなみに固定シンボルというのは、ほとんどの伝説のポケモンとバトルするように、フィールド上で話しかけるとバトルできるポケモンのことである。というか最近の伝説や準伝は固定シンボルばかりで、徘徊系の方が珍しい。厳選楽しそれでもいいけど。

ウルガモスは高水準のとくこう、とくぼう、素早さを蝶の舞や拘り系アイテムで底上げし、長らく猛威を振るってきた。コイツ用に岩技やステルスロックを導入したのは俺だけじゃないはず。

だが運用はバトルだけに留まらず、炎の身体という特性を持ち、空を飛ぶを覚えるため長い間孵化作業のお供に使われ続けていたポケモンでもある。

正直、俺が欲しい。59レベルでようやく進化する大器晩成型のポケモンなので、初心者には不向きすぎるし、コスモッグと同じくレアなポケモンなので襲われる原因が増えただけかもしれない。

ただ……あんなに嬉しそうにメラルバを撫でているリーリエに、そんなこと言いたくない。まあ二匹目を早いうちに手に入れればなんて事はないからいいか！

「うーん……モフモフしてるから、もふもふちゃん！」

「……それってもしかして、ニツクネーム？」

「はい！ ほしぐもちゃんにも付けてましたし、この子にも付けたいなって」

ダメとは言わないが、ネーミングセンスがユニークすぎる。でもかわいいからアリ。やっぱりリーリエは完璧すぎるので、ある程度欠点があってもそれは魅力にしかない。

「いいんじゃないか。愛着湧くぞ」

「ふふ、ありがとうございます……家ではポケモンの名付け親なんてさせてくれませんでしたから、少し嬉しいです」

それは家族がグツジョブと言わざるを得ない。

「それはまあいいとして、試しにバトルやってみるか？」

「そうですね、どうやらこの子は炎タイプのようにですし、練習にもってこいかもしれません」

タイプの見極め速すぎだろ……と呆気に取られてると都合よく一匹のポケモンが目の前に現れた。

「あ、今度はケララツパです」

「やる気があるのはいいけど、やめておいた方が……」

ケララツパは飛行タイプのポケモンで、岩技を使ってくる個体もある。虫・炎タイプのメラルバじや分が悪いだろう。

「もふもふちゃん、攻撃してください！」

人の話を聞いてください。

だいぶアバウトな指示だが、メラルバは承ったと言わんばかりに頷き、炎を纏って突撃した。ケララツパは突然の素早い攻撃に対処出来ず吹き飛ばされ、そのまま追撃の炎弾もくらってしまい、ノックアウト。

あれ、こいつ強くね？

炎を纏う攻撃は火炎車かニトロチャージ、炎弾は火の粉だろう。それはわかる。ただ、今の一連の洗練された流れを見る限りだと相当バトル慣れしているようだ。つまりは、レベルも相当なものになる。

おかしいな……シエードジャングルに生息するポケモンのレベルって、良くて30くらいじゃなかったか……？

そもそも、メラルバが出てきた時点で今までの常識は投げ捨てたほうがいいのだろう。俺は考察を諦めた。

「すごいです！… 今のはニトロチャージですね！」

「プピィ」

えっへんと、胸というかモフモフを張っているメラルバ。なんかかわいい。

「はい、ご褒美のポケマメですよ」

バッグの中から何かを出すリーリエの様子を怪訝な目で見ていたメラルバだが、ポケマメケースの中から虹マメが出てきた瞬間、歓喜の声を上げた。

「そんなに欲しかったんですか？ ゆっくり食べてくださいね」

リーリエから手渡されたそれを一心不乱に食す姿は、三日ぶりに水にありつけたエジプト人を彷彿とさせた。見たことないけど。

「キユキユ」

シャドークローを使って袖にぶら下がっているのは、おそらく意思表示だろう。脅しとも言う。シルキーたちは毎日食べているが、やはり目の前で食べられるとお腹が空くのだろうか？

「まあ、護衛頑張ったもんな。はい、虹マメ」

もしリーリエがポケマメを一つも持っていなかった場合に備えて、ポケットに忍ばせておいた虹マメをシルキーへ渡した。メラルバ程じゃないが、食いつぶりは最高だ。

「ケンさんと一緒に取りに行った甲斐がありましたね。本当でしたら、一年に一度ありつけるかどうかの品ですから」

「え、そんなに貴重なの？」

ゲーム内では、レアではあったものの一度の収穫に数個は取れていたし、何よりカフェのおじさんは何でもないようにポンと十個ほど手渡してきた。

「ポケマメ自体、最近……と言っても十年ほどですが、ある研究で発見されたんです。何故こんなにも生態系豊かなアローラで、そこまで絶滅種を見ないのか。その研究の最中、あらゆるポケモンの栄養源として、偶然ポケマメの木が見つかったそうです。市場に流通し始めたのはそれから二年後くらいで、供給量も一定を保っていたそうですよ」

「ポケモンに絶滅されたら困るしなあ」

何か特定のポケモンを餌にしなくても、ポケマメを食べればお腹いっぱいになる。ほぼ無限に近い数落ちて来るから奪い合いにはな

らないって訳だ。

その中でも虹マメは途轍も無く貴重な代物だろう。機会があれば、おじさんへ返しに行かなければならない。倍にして返そう。

「ですので、島の管理人さんとお知り合いだったなんて驚きです。今度会わせてくれませんか？」

「い、いやーやめておいた方がいいよ？ 一日三食ポケマメで過ごすキチガイだからね？」

「研究者は誰も彼も変人ばかりなので、覚悟は出来てます！ 何ヶ月ククイ博士の助手をしてきたと思っっているんですか！」

反対の理由は、その偏屈な研究者が生き別れた父親の可能性があるからだよ！ とは言えず、さてどうしたものか……

「まあ考えとくよ。それより次のポケモンが来たみたいだぞ」

目の前には二匹のカリキリと、一匹のカイロス。リーリエがメラルバをゲットした段階で、後ろに隠しておいた匂い袋を放り投げておいたが都合の良いタイミングで効果を発揮したようだ。処理が追いつかなくなったらニシキで威嚇しよう。

カリキリはともかく、カイロスは強敵だ。何より図体がデカく威圧感がある……メラルバの視点であればだが。

さて、注意は反らせたし、ここをどう切り抜けるのか見物させてもらおう。リーリエは既にメラルバの攻撃技をある程度把握したが、補助技が無い状態でどう立ち回るか……

地獄のポケリフレ三本勝負。

蓋を開けてみれば秒殺だった。

片方のカリキリをニトロチャージで加速しつつ処理し、そのままの速度でカイロスを翻弄、シザークロスを外したカイロスは火の粉が数発当たると戦闘不能となった。それを見たもう片方のカリキリは逃亡しようとして背を向けたところに、火の粉が突き刺さりノックアウト。

非常に鮮やかな手腕で驚かされる。

驚かされたのは、メラルバの熟達した動きは勿論だが、それ以上にリーリエの的確な指示だ。必要最低限で十二分に力を発揮させる、実に無駄のなく効率的な指揮だった。観察力の高く、機転が利き、知識に富んでいるリーリエらしいといえるだろう。うかうかしているとは追いつかれそうな才覚を垣間見た。というか抜かれているのでは？

ニトロチャージは、攻撃と同時に加速する技だ。知っている技の中では、攻撃すると同時に確定で素早さが上がる技はこれだけで、あとは全パラメーターが上昇する原子の力や、銀色の風などが挙げられる。能力上昇は低確率なため、バトルで使われるのは稀だが……不思議のダンジョンでのトラウマが蘇りそうになったので、思考の隅に追いやった。レディアンとモルフオン、お前らは絶対に許さない。

初見であれば、ニトロチャージや火炎車の見分けなど付かないし、ましてや、メラルバは両方とも覚えるのだから尚更見分けるには至難の技だろう。それを見抜き、戦術に組み込めるリーリエの博学っぷりは脱帽物だ。

見事カイロスに指一本、いやツノ一本触らせる事なく勝利したリーリエは、倒したポケモンに傷薬を使った後、ポケリフレに勤しんでい

た。実に気持ちの良さそうなメラルバを羨望の眼差しで見ていると、見ている事にリーリエが気付いたのか苦笑いを浮かべた。

「もしかして、何か変でしたか？」

「いや、そういった意味で見てたわけじゃないから」

口が裂けても、ポケリフレしてくださいとは言えなかった。

こちらを不思議そうな目で少し見つめると、メラルバに催促されたのかポケリフレを再開した。危ない危ない、邪な心が見透かされるどころだった。

「キュウ!!」

「今度はなんだ……シルキー、もしかしてポケリフレか？」

「キューー!」

非常に困った。ここまでぴよんぴよんと期待されているところ悪いのだが、ポケモンは勿論のこと動物のブラッシングすらやったことは無い。そんなド素人の初ポケリフレにも関わらず、下手に触って中身が見えたら即死なんてちよつとハードル高すぎるのではないか。百歩譲って他のポケモン……シーザーやニシキであれば何の問題も無かった。

……鮫肌で出血し、事故で丸呑みになりジ・エンドになる可能性はあるが。それでも、死のリスクは回避……出来てるのか？ 自分のポケモンが強すぎるのも考えものである。他の三匹は言わずもがな、察してくれ。

仕方がない、シルキーが今日頑張ってくれたのも事実だ。細心の注意を払っていけば問題ないだろうし、最悪見ちやつても許してくれる筈だ。なんせ親だもの。

気持ちちをちよつとポジティブに寄せて、バッグからブラシを取り出す。タオルや櫛、ドライヤーは不適當だろう。

いざ近くで見ても、果たしてポケリフレする程汚れているかどうか分からない。それでも少しの汚れや埃を見つけては、丁寧に、慎重にブラッシングしていく。気分は高層ビル掃除のようなものだ、下を見たら終わる。無理矢理上げた気持ちは既に急降下していた。

仕上げにドライヤーで布の皺伸ばしをしながら、取り敢えずは窮地を脱した……と考えていたが、甘かった。コイツが見逃す筈が無いのは分かっていたが、心の何処かで祈っていた自分がいた。

「随分と楽しそうだね？ アタシもいい？ いいよね？ やつたー！」

何も言っていないし、楽しくないし、全く良くない。背後からするウツキウキな声に疲労感を感じながらも、どうやって避けるか考える。

咄嗟に、お前バトルやつてないだろうと指摘しようとするも、振り返れば憐れな獲物が数匹転がっていた。ボールから飛び出て、俺が振り向くまでの数秒間に何があったか察する事も出来ないが、私バトル頑張りましたって顔に書いているようなドヤ顔をキメているハルジオンに、その言葉は効果が無いようだ……

「でもお前無傷じゃん、汚れてないじゃん」

「あー、風がー、葉っぱがー」

違う、それはサイコキネシスだ。周囲の木々だけが都合良く一箇所に向けて折れ曲がる風なんて、吹いてたまるか。数秒後、何食わぬ顔で元通りとなった木材のしなやかさと、自然の逞しさを再確認させられた。

葉っぱまみれのドヤ顔に、とうとう返す言葉も無くなった。全くもって不本意だが、仕方ない。

「ほら、こっち来い」

急発進したハルジオンを受け止め、取り出した櫛でびよこんと跳ねた桃色の髪を梳いていく。木の葉の他に、一緒に舞い上がった砂埃も付いていたのでより念入りに櫛を入れていく。

一通り終わると、ハルジオンの頭をポンポンと撫でながら囁いた。

「大事なパートナーが汚れてしまうのは、あんまり嬉しくないな」

「……………バカ」

ちよろい。好意が分かってしまえばこっちのものだ、喜びそうな事をすれば大人しくなるに決まっている。その証拠に、ハルジオンは照れ隠しをするように、ボールへと戻っていった。

はっはっわ、軽い軽い朝飯前よ。などと有頂天になっているのも束の間、何処と無く、不意に嫌な予感がした。

ポンと勝手に開くウルトラボール。

——それも二つ。時間差で。

最初に飛び出たポケモンも俺の二倍くらい大きいのが、次に飛び出たポケモンは更に大きく、着地で先程撒き散らした木の葉と砂埃が宙を舞う。セレスは兎も角、エルモが出てくるのは意外だった。

「フン」

「…」

無言の圧力。ハルジオンとは違い言葉を話せず、かといってシルキーやシーザー、ニシキとは違い表情や表現も出来ない彼等だからこそのものであった。感じないはずの視線が、ヒシヒシと突き刺さる。ズルいぞと。

ハルジオンが悪しき前例を作ってしまった今、バトル後といった限定的な条件は撤廃されたも同然。そこで意地を張っても、不幸なポケモンが若干数増え、地図をある程度書き換える必要が出てくる。

山を壊すと謳われるバンギラスの数倍はある巨体で、ちよつとでも暴れたらシェードジャングルに新しい獣道が増えても不思議ではないだろう。そして無駄に汚れた身体をポケリフレするのは俺だ。手間は洗車どころの騒ぎではないし、汚れは少ないに限る。お互い余計な手間を掛けない方がメリットは多い。

気は進まないものの、セレスは問題ない。只々時間がかかるだけだ。でも、エルモは？ 頭触ると感電死待った無しなんですけど？ どー見ても触っちゃいけない光り方してるし、だれかスーパーマサラ人呼んできてください。

「わかった、ケーブルだけ、ケーブルだけな？」

やるしかないと腹を括った。タオルに持ち替え、つるりとした表面を拭う。素手に触れるゴム特有の弾力性が、幾許かの安心感を与えてくれている。犬の尻尾のように激しく揺れる三本のケーブルは、どこか嬉しそうだ……この大きさと当たれば打撲は免れないだろうが。

柔軟性に富んだ身体構造を無駄に駆使して、身長1.5mの俺に隅々まで身体を拭かせようとする様は、少し滑稽で、つつい触られるのを嫌がっているアースのような、尻尾のようなコードに手を伸ばしてしまった。そのまま何食わぬ顔で拭い続けていると、エルモは耐えられなくなったのかボールにコードを伸ばした。

「モクク!!!」

緊急脱出という表現が似合うくらい、素早い逃走だった。くすぐつたいなら身を振ればいいものを、と考えたが、もしかしてハルジオンと同じく照れ隠しの可能性もあるかもしれないと、ふと頭をよぎった。考えすぎ……か？

「……」

「なあ。流石に全身は時間かかるし、綺麗にしたい部分だけでもいいか？」

「フウン」

シルキーもハルジオンもエルモも、揃いも揃って共通している事がある。目的が毛繕いではないという点だ。理由が何であれ、ポケリフレという行為自体に価値を見出しているのは明白である。

故に、考えた。今セレスが求めているのは何か。それを的確には出

せないが、本人に聞けば間違い無いだろう。セレスは返事をした後、いつものようにブラスタ―部分を器用に使い、くびれまで俺を運んだ。

「俺も乗せてもらってるし、念入りに拭かなきゃな」

セレスにもタオルを使うつもりだ。金属の身体を磨くのだし、エルモ以上に効果的だろう。顔周辺を拭けないのは残念だが、手が届かない以上仕方がない。セレスを横に寝転ばすという手も無くは無いが、それは自然に大きなダメージを与えるだろう。サイコキネシスを耐え忍んでも、三階建て相当の大きさをした鉄の塊を耐えることは不可能だ。何より土が付いて汚れてしまい、本末転倒だ。

しかし……こうやって拭いてみると、セレスの身体には傷という傷がなく、よく手入れされた鏡のようだ。木陰の下にいるせいか、より一層冷たい雰囲気を増しており、見えていても、触っていても涼しげに感じさせてくれる。生半可な攻撃ではビクともしないのは分かっているが、磨いていると無意識のうちに宝物を扱うかのような気持ちになってきた。鋼タイプ専用のワックスとかあるのだろうか、機会があれば全身磨いてしまおう。

「ケンきーン！ そろそろ終わりそうですかー？」

下から、リーリエの呼ぶ声がする。寛大なリーリエが催促してきたということは、相当な時間これに没頭していたということか。メラルバが付いているという安心感で、少し気が緩んでいたのかもしれない。

「リーリエが呼んでるし、今回はここまでだな」

「クーン」

「捨てられた子犬みたいに鳴くんじやない」

少し心惜しいが、暇な時間も少ない。セレスを全身ピカピカにするのはまた今度だ。残念そうな空気を出しながらも、セレスはキッチンと地面に下ろしてくれた。

「結構な時間ポケリフレしてましたね、やっぱり強さの秘訣はポケモンとのコミュニケーションですか？」

「んー、それはバトルに関係なくするべきじゃないかな。俺らは弱い、いつポケモンに殺されるかなんて分からないぞ」

「え、殺され……？」

「そうならないように、ポケモンの言い分をよく聞けるようにならないとな。幸い、彼等は友好的だ」

今までポケリフレする利点は、経験値を多めに貰う程度の認識だったが……自分で言ってみて、ポケモンの要求を正確に叶える事はかなり重要だな。

今回は分かりやすく、ポケリフレしてほしいというのが見え見えだった。ただ、ハルジオンのように予想の斜め上をいく可能性もあるし、何より倫理と遠慮が一切ない。今朝の観光客に対する攻撃も、いつかこちらに牙を剥く可能性は決して低くは無いだろう。彼女は激情家だ、あの手首が首だったらと考えると背筋が凍る。

逆に、エルモとセレスは心配ないかもしれない。彼等は、トレーナーである俺を「弱い者」として正しく認識している。振り回すコードも極力当たらないように、ブラスターで潰さないように力を正しく

調整できているし問題ないだろう。その点、ハルジオンは弱い事を知っててやっってるし一番気をつけた方がいいかもしれない。

やはり、籠絡するか？ 最近リーリエに当たり弱いし。一番近くにいる異性がリーリエで、カップルだったら殺すと宣言した辺りこの手は使いたくなかったが……勢いは弱りつつあるし、改善が見られない訳でもない……時間は無い訳じゃないし、尚早か。

「ケンさん？ 話聞いてました？」

「……ああ、今度メラルバと絆を深めるために、ミヅキやハウともバトルしてみたいって話だったな」

セレスをボールに戻しながら、内心冷や汗をかいた。考え事が重すぎて、リーリエの会話でなければ聞き逃している所だった。

「……おかしいですね、考え事をしているように見えたんですが」

「俺はいつでもリーリエの事を考えてるよ」

「もう、からかわないで下さい！ ……ミヅキさんやハウさんとバトルするために練習したいのですが、付き合ってくださいますか？」

「うん、付き合おう。時間の限りね」

えへへとはにかむ天使は眩しすぎて、やはり俺には勿体無い。果たしてあの狂気から、彼女を守り切れるのだろうか。

動き出した。

リーリエとの特訓が終わり、ジョーイさんにポケモンを預けた後は適当なカフェでディナーを楽しみ、そのまま二人部屋にチェックインした。

リーリエは二人きりの空間に慣れ始めているようで、おやすみなさいと言葉を交わした五分後には小さな寝息が聞こえてきて驚いた。自分が言うのもなんだが警戒心を持って欲しい。

まあ仕方ないか。一日歩き回ったり、ポケモンバトルをしたりと体力を消耗してかなり疲れていたのだろう。俺も寝

「むかえにきたよー」

寝たかった。おかしい。どうして三行前に書かれたことを無視してやってくるのだろうか？ ジョーイさんはどうした？ 管理がガバガバすぎるのでは？

「預かってもらってるはずなのに！ って顔してるね……アタシに逆らえる人間が、このアーカラ島にいるわけないじゃない」

「それもそうでしたね」

こんなんでも神様みたいなものだからね、しょうがないね。

軽くアローラの神話体系を恨みながら、よいしょつとベッドから降りる。どうせサイキネで無理矢理起こされるのだ、自ら出頭したほうが痛い目を見ずに済むだろう。

「あれ、ケンもデートを楽しみにしてたの？ 嬉しいー！」

変な勘違いをされているが、放っておいても害はないと判断した。というより抱き着いてくる邪神を払いのけたほうが後が怖い。されるがままになつておくのが無難だ。

「はいはい。それで、今日はどこに行くんだ？」

「んーとね、ヴェラ火山！ あそこの火口は良い景色だし、邪魔者もないからね！」

前回のフィッシング詐欺をまだ引きずっているのか。あんなの釣りデートなんてものに釣られるほうが悪い。

いや、売り言葉に買い言葉でホイホイ釣られるタイプのハルジオンにしてみれば、そもそも人がいないところに行くのがベターだと何気に自己分析できているのか。なかなか侮れないな。

「おお、いいねヴェラ火山。でもどうやって行くんだ？」

「セレスティーラに乗っけてもらうの。大丈夫、もう話は通してるから」

「まさか外に待機させてないだろうな……」

あんなに巨大な未発見ポケモンがいたら、今頃大ニュースになっているぞ。即刻、国際警察に身柄確保されそうだ。

「ちゃんとボールの中にテレパシーを送ったよ。ケンも目立つようなことをしたくないみたいだし？ 夫の意を汲み取る妻って最高でしょっ？」

もうボールから出てきている時点で汲み取れていないので、良妻賢母は諦めて欲しいんですけど。という心の声を押し殺し、ハルジオンをくつつけたまま外に出ることにした。

全くもって憂鬱だ。

「もしもし、おにいさま？　夜分遅くに失礼します。早速ですが、コテージ前の広場に来てもらえませんか？　……ええ、少し話したいところがあるので早急にお願いしますね。それでは」

夜勤中のジョーイさんから預けたボールを受け取り、そそくさと外へ出た。まるで幽霊でも見たかのような表情をするのはやめてほしい。背負っている業じゃしんは深い……というか重いけれど、まだまだ人間性を棄てた覚えはないんです。そもそも解放したのは貴方達じゃないですか、そんな目で見る前にちゃんとポケモン管理してください。

そんな細やかな願いさえ叶う事はなく、また徹夜コースのようだ。こんなに不健康な生活を続けていてもロクな事にはならないと、大学での連続オールで身に染みているので出来るだけ避けたいところではある。平和な日本じゃいざ知らず、この世界は集中力が欠けると、いざという時に死ぬ目に合うのが目に見えているからな。

「セレス、（不本意だけど）お出かけの時間だぞー」

「クーン！」

待つてましたと言わんばかりに、散歩待ちの犬のように飛び出すセレス。話は通っているのか通じているのかその両方かは知らないが、この前磨いたコックピットへ、ものの数秒で収納された。ハルジオンも込みで。

「今日は夜景だよ！ まったく、セレスとだけ一緒に見るだなんて浮気もいいところよね。そういうことで、あたしとも一緒に見ようね」

何がそういう事なんだろうか。

お前浮けるし一人で見に行けよ、なんて言おうかと思っただが口を噤

んだ。ハルジオンが俺と見ることにしか価値を見出していないのは、想像に難くないことだった。

「なるほど……もしかして、ヴェラ火山自体には降りないのか？」

「今はミツキとハウが彷徨っているからね。折角の二人きり……三人きり？だし、邪魔されたくないの」

「……名前、覚えてるのか。というかなんでそんなことを知ってるんだ？」

ミツキ組がヴェラ火山に到着してるなんて、リーリエからも聞かない。どうやって知ったんだろうか。

「あいつら有象無象とは少し違うし、ケンが大事にしてるから名前くらいはね……それに、セントエルモとセレスティーラの事を黙っててくれるし。知ってるのはね、下見を既に終わらせているからだよ！
ちやーんとリサーチ済みなんだから！」

褒めて褒めてー、といった願望丸出しな顔をしているが、そのリサーチは一切役に立たないままだぞ……というか、推察するに預けて数秒で抜け出してるなコイツ。ポケセンのポケモン管理どーなってるんだ訴えるぞ。裁判所あるかは知らないけど。

まあいいかと、複雑な気持ちのままテキトーに頭を撫でて誤魔化した。ミツキとハウの名前を覚えているのは想定外であり、唯一あるかないかの褒めるべきポイントだろう。その調子で周囲の人間に迷惑をふりまくの止めてくんねえかな無理だな。

えへへへ、なんて擬音を口から漏らしながら、ふにやりと抵抗する事なく撫でられているハルジオンは、

油断したのか、突如発射したセレスから滑り落ちていった。

「フウン」

「もしかして、怒ってる？」

なんだろう。人様の上でイチャイチャしてんじやねーぞうらやまけしからんって声が聞こえたような聞こえなかったような。

「ふうん！」

それにしても、セレスは気持ちよさそうに飛ぶ。見ているこつちが爽快感を覚える。もう既に取り残されたハルジオンが豆粒のようだ。

「お前にも、色んな景色をみせてあげないとな」

「フウン」

独り言のように呟いたそれは、空を切る音とジェットンの爆音で掻き消されたかのように思われたが、確かに届いたようだ。

「ねえねえねえ、楽しかった？　ねえ、アタシがいない空は楽しかった？　目を見てよねえ、ケン。ねえねえ、こつちを見て、アタシノメモミテ、ミロ。ねえ」

怖い。ただひたすらに怖い。ハルジオンを置いて遊覧飛行をしていたのは確かだが、それは俺の意思ではないという事もまた確かなのだ。だのに、ここまで恨み節をぶつけられるのは如何なものか。

「そもそも、セレスを当てにしていたのであれば、テスト飛行をしていない時点で振り落とされた落ち度はハルジオンにあるわけだろ。どれだけの上昇負荷がかかるかさえ認識しておらず、ましてやその失態で発生した時間的損失を別のことに充てるという俺の正当な権利を否定しているわけだ」

目を逸らしながら答える。正直、今のハルジオンの目を見ながら論理的思考なんてできる気がしない。ほんの僅か一瞥したが、あれはマジで怒っている。何かドス黒いナニカを感じた。

「そんなつもりじゃ……」

「でもいいじゃないか。さつきも言っていただろ？　そういうわけで、一緒にまた見ればいい」

「そういうわけって何？」

そんなの俺が聞きたい。言い出したのはハルジオンだからな。

「とにかく、ハルジオンは追いついたんだしオールオツケーって事で。ちゃんと絶景ポイントも抑えてきたぞ？ 何なら街の夜景も素晴らしいものだった。ヴェラ火山観たら市街地にも行ってみような」

「全然オツケーじゃないよ！ アタシがやりたかった事全部やりちゃってるじゃん！ 街の夜景も、とっておきだったのに………まあいいや」

まあいいやって何？ 凄く怖いんですけど。

「気持ちの切り替えって大事だよな。今この瞬間を楽しむことにするよ」

恐怖の邪神様から一転、ニコニコと笑うポジティブ少女と化したハルジオンに戦慄する。最早切り替えなんてレベルじゃない、価値観ぶっ壊れてやしないだろうか。今時海外旅行行った大学生でもそこまで価値観変わらないぞ。

ハルジオンはフワフワと寄って定位置（俺の首）に着くと、ぐしぐしと頬擦りした。

「じゃあ、気を取り直して夜景見に行こっか。セレスは後で10万ボルトね」

「はー」「ふうん」

あ、コイツ全然反省も価値観変わっても気持ちの切り替えもしてないわ。

針の筵に座るような時間を過ごしながら、二週目になる遊覧飛行を終えた。わあ、綺麗だねえケンは何回目だけど。凄い迫力だねえケンは二回目だけど。等と後ろから囁かれるようなテレパシーで真綿で首を締めるように痛めつけられた精神の疲労は、いつもの三倍くらいはあった。

「無抵抗の相手に10万ボルトするのはよくない」

その一声で、着陸したばかりの砂浜にサイコフィールドが張り巡らされる。

「じゃあ、バトルね。ケンは勿論、アタシに指示してくれるんでしょ

「？」

「ふううん？」

どちらからも圧力を感じる。元よりそんなつもりは毛頭なかった。虚をつかれた気分になった。そもそも、10万ボルトをセレスに浴びせるのは不当だと思ったからこそその言葉であり、バトルで正々堂々叩き潰せという意味ではない。そこを理解しているのだろうか。この戦闘狂共は。

「いや、俺は傍観に徹しよう。いつそどちらかが戦闘不能になるまでやってみたらどうだ？」

「ホントに？ 砂浜がめちゃくちゃになりそうだけど……」

「いや今更すぎない？ もう既に一面黒焦げだよ、後でセレスにブローアーしてもらうけど歪んだ椰子の木は戻らないんだよ？」

ミシミシと音がする。あ、これハルジオンがサイキネで椰子の木を元どおりに行っている音だなと、感覚的に理解した。もう見ずともわかる。

「大丈夫、戻るね。アタシとしてはケンとの思い出の場所として痕を残しておくつてもやぶさかじゃないけ……」

「ふん（油断厳禁）」

不意をついた一撃は、見事にハルジオンに刺さった。

第二回怪獣大戦の幕開けである。そもそも特性のサイコメイカーを発動させた時点で、惚気話に現を抜かすことが命取りなのだ。同レ

ベルの猛者がいないからって油断しすぎたのだろう。おそらくはヘビーボンバー。体重を一気にかけて押し潰す大技だ。

ヘビーボンバーは自身と相手の体重に依存する技だ。セレスの体重は計測出来ないほど重く、体重が有限でのゲーム内ですら200kg以下の敵に最大威力を発揮できる。アローラというガラパゴス環境での仮想敵に、威力を減らせるポケモンはいない。

通常ならハルジオンは確一とられて沈んでるだろうが、サイコメイカーも霧散しておらず、特有の確かな威圧感も消えない。

「やってくれるじゃない」

そこには、紛うことなき邪神がいた。

馬鹿は二度騙される。

激しい殴り合いが続く。

ようやく異変に気が付いたのは、三回目のヘビーボンバーがハルジオンに炸裂した時だった。とうの昔にダメージの許容量がオーバーフローしているにも関わらず殴り合える理由、それは、

「アタシの方がケンのこと愛しているんだから!!!」

「ふうううん!! (私だって負けない!!)」

仲良し度が一定以上だと、瀕死になるような攻撃を受けても耐えることがある。勿論インターネット対戦のようなバトル環境だと起こり得ないが、これを最初に見た時はアニメのような行動に感動したものだ。実際に見ると戦慄モノだが。

なんだこいつら。普通に即死する攻撃を三回連続とか、どんな理屈で耐えてるんだ? 返しの10万ボルトを涼しい顔して……いや表情分かんねえや……耐えているセレスも、傷だらけの体と血走った目で衰えることのない技のキレと闘志を持つハルジオンも。

ポケモンをこんな風にしてしまうポケマメって、なんて怖い食べ物なんだろうか……と半ば現実逃避しながら、止めるタイミングと、止めるためのソリューションを考える。生半可な理由なら、「じゃっ、続きしよつか??」と殴り合いを再開するに違いない。

一呼吸置き、名案を力の限り振り絞った。

「やめろ! もうたくさんだ!」

俺は声高らかに叫んだ。振りかぶられる鉄柱が時を止めたかのように物理運動を止め、酸素をオゾンに変え続けていた迸る電撃は一瞬で鳴りを潜める。

「お前らを煽ったのは俺だ、それに関しては本当にすまないと思ってる！ 仲間内でここまでやりあう事を想定していなかった俺の落ち度だ。ハルジオンからの如何なる罰も受け入れよう！ だから、ここで矛を収めてくれないか？」

「え、どういうこと？ もしかして、セレスティーラが、負けそうだからって庇おうっていう、魂胆なの？」

「それは違う！」

コンマ一秒で否定する。想定内の問いかけだ、ここで言葉を詰まらせたら人生が詰む。

「へえ、じゃあ、どういう事？」

「ただ純粹に、お前らに傷付いてほしくないだけだ。アローラの環境だとかトレーナーとしての体裁だとか、そういったもの抜きでお前らが大事なんだ。その事に今一度気付かされたと同時に、自分が途轍も無く愚かである事を悟った。セレスの分まで俺が罰を受けるのであれば本望だ、これは愚かな俺に対する罰でもあるんだからな」

「ケンは、愚かじゃないよ？」

「愚かなトレーナーだからこそ、故意にポケモンを煽り傷付けたんだ。それがこのザマだ、もしチャンピオン級の外敵がやってきていたら……負ける事は微塵も想定してないが、そもそも万全の状態で戦わせなければならないなんて事態は、トレーナーとして失格だ。シロナさん

は、セレスとハルジオンが、ここまで消耗してしまっている状態で迎え撃てるほど弱い相手ではなかった」

実際、肩で息をする程疲弊しているハルジオンを見るに、相性有利なガブリアスですら対応する力は残っていないように見える。本来なら二発目くらいで留めておくべき行動だったと自省していることもあったため、こちらの気持ちは真摯に伝わったようだ。

「むう」

「フウん」

どこか考え込むセレス。いや、考え込むというより……反省しているのか？

「ふううん」

「そうだね。そもそもセレスは、外に出して、もらえないもんね」

おっと、これは喧嘩両成敗的な流れかな。ちょっと成長が見られて少し嬉しいぞ。

「じゃあ……アタシからの罰は、セレスもちやんと、外に、出してあげて」

おやおやおやおやあ、想像の斜め上だぞお？

「それはちょっと困るんですけど……」

「セレステイーラ、続きをやりましょ」

「ふうん」

「はいはいわかりましたお姫様。ただ、お前が外に出る機会は確実に減るからな?」

「え? 普通に出るけど?」

うそだあ、君たち100レベルの対応するのにどれだけの労力を割いていると思っっているんだ。そろそろ寿命の前借りも効かないレベルまで到達するのも時間の問題ではないように感じるのだが?」

「まあ、いいや。どうせ俺が蒔いた種だし……もしかして、こうなることを見越して、こういうった対立を作り出した。なんて事はない……よな?」

サツと俺から見て右斜め上に視線を寄越すハルジオン……もしかして俺、嵌められた???

所詮は五歳児程度の頭脳だと侮っていたツケが回ってきたのを悟った朝だった。普段は頭パツパラパーで傍若無人な振る舞いをする邪神でも、本質は長い間人間という生き物を見てきた守り神であったという事実を嫌という程味わったのだった。

そもそも何故セレス以外のポケモンが、特にエルモがボールから出てこないのか。何故普段よりハルジオンの圧が強かったのか。何故セレスに対する罰が10万ボルトだったのか。

色々考えるだけでも、ターニングポイントはいくらでもあった。ただコイツらが何時もいつでも本気すぎで、見破れなかったのだろう。だってさあ、仲間の自由を勝ち取るために本気で殴り合いなんてします？ あれ容赦のカケラもなかったよ？ 目の前で見ていてドン引きでした。

「ほらね。セレスもエルモも、ちゃんと外に出てきていいんだって！」

「モクモク」

「フウン」

「はいはい朝ごはんですよー」

コテージ前の広場には、特に何もない筈なのに人だかりが出来ている。一部には写真を撮ろうとしている人間もいたが、周りに全力で窘められていた。なんだろうなあ、撮影NGでも入っている芸能人でも来るのかなあ。そもそもこの世界の芸能人見た事ないやあ。

どうしてこの人集りは、俺らを囲んでいるんだろうなあ。

「ふふ、見せつけられてるわね」

「フウん！」もクク」

てんきがいいなー、あろーらつてすごい。いなかにもこんなにひとがあつまるんだなあ。

よりにもよって、どうしてボイスレコーダーなんて持ってたんだろ
うな。おかげで揉み消そうに揉み消せず、しきりに証拠を誇示してく
るようになった。これからは発言もより一層気をつけねばならない。
どうかサイコパワーで何か言わされでもしたら終わりじゃね？
どうか気付かないでほしい。

あー、それにしてもてんきがいいなあ。

「あ、ケンさんこんなところにいたんですね！ ポケモンさん達と仲
良しで羨ましいです」

「意識が躁鬱を繰り返して認識がバグっているせいかは知らない
が、雑踏の中から天使が現れた。これが信仰心の為せる技かと我なが
ら感心する。リーリエが尊すぎて全てがどうにでもよくなった」

「え、え？」

ヤバい。もう現実も地の文も判別つかなくなりつつある。ここら
辺で現実に意識を戻したほうがいいかもしれない。

「やあ、おはようリーリエ。昨日はよく眠れたかな？」

「え、え？」

ヤバいぞ由々しき事態だリーリエがバグった。なんか顔もすごく赤いし、呼吸も同じくらい荒い。昨日ジャングルのどこかで病気でも貰ってきたか？

「ケン。流石に今のはちよつと……」

「え、あ。おはようございます、ケンさん」

今のはちよつと、なんだろうか。それよりもリーリエの容態が心配だ。

「リーリエ、調子はどう？ どこか具合悪くない？ 顔が赤いし、ちよつと休んだほうがいいんじゃないか？」

「いや、えつと。お気になさらず……」

「そういう訳にはいかない。お兄さんやククイ博士に頼まれた事もあるが、やはりリーリエには健康でいてもらいたいからな」

「あの、少し寝不足で……」

「よし今日は休もう。どうせ今日か明日くらいでミツキとハウが来るし、お兄さんのコテージで休もう。それがいいそれがいい」

何より、俺も眠たい。だいたい比率にしてリーリエ九割九分五厘、俺五厘くらいだけど。

「は、はい。移動するなら早めに……その、周りの目が」

「フウン」

セレスがブースターを使っつての、突然の擬似砂嵐を巻き起こした。粋な計らいというやつなのだろうか、はたまた自分はこんな役に立ちますよという打算的なアピールなのだろうか。どちらにせよ助かった。

リーリエを背中に背負い込む。どうせお兄さん鍵開けつぱなしだろ、凸るか。ご飯中のポケモン全員をボールに仕舞い込むと、一目散に駆け抜けた。目指す先はコテージだ。

「こんにちはー、誰かいま……」

聞き覚えのある声で目を覚ます。どうやら深く眠っていたようだ、瞼が重い。目脂がザラつく不快な感覚を無意識のうちに拭いながら、上半身を起こし、来客を、見た。

「え、えっと。おじやましましたー……!!!」

「また来るねー」

ミヅキとハウ。そう、それは分かった。ただ理解出来ない、どうして逃げる必要があるのだろうか？

ちよつと待て、どこへ行くかと声をかけようとして、上半身が裸である事に気付き、同時に、下半身も裸であることに気付いた。

やべえ、追いかけれねえ。

それよりも嫌な予感しかしない。何故なら横に生暖かい物体がある事を感覚器官が察知しているからだ。

「むにや……おはようございます、ケンさん。どうしましたか？」

「どうしたも、こうしたも、ない。どうして裸なんだ……」

「え、覚えていないんですか！　ちよつとショックです……」

いや確かに覚えていない。敬虔なリーリエ教徒の脳味噌構造は特殊であり、リーリエとの記憶を保存するために脳のストレージなど容易く削り取るのだ(自称)。そのため覚えられない筈がないのだが、何故か思い出せない。こうなつた経緯を。

確かに運んだ。リーリエを寝かせた。そしたら、一緒に添い寝してくださいと言われ理性と人間性を犠牲にして添い寝した。

あれ、俺いつ服脱いだんだ？

「リーリエと一緒に横になった後、どうなつたんだ？」

「それを女の子のわたしから言うのはちよつと……」

完全に悪手だった。何を馬鹿正直にストレートに聞いているんだ俺は馬鹿か？ダメだ寝起きのせいかな全然頭が回らない。まだ微睡んでいる気もする。

「ほら、ケンさんも色々やって疲れてますし。もう一回おやすみなさいしまししょう？」

「お、おう」

されるがままに布団に戻ると、背中にリーリエが抱き着かれた。どうやら向こうも恥ずかしいようで、身体というか、埋められた顔が熱い。

ここまでされてようやく、ああ、俺成し遂げたのか……記憶ないけど。と、謎の達成感を感じるのだった。

思惑と陰謀渦巻く。

「ちよつと、聞いてないんだけど」

「ボイスレコーダーを渡す時に、私は伝えましたよね。また同じように添い寝をして、ケンさんを癒したいって」

「それがどうしてケンと番になることに繋がるわけ!？」

土地神の怒りは止まる所を知らない。リーリエはテレパシーから感じる殺意に似た怒りを、飄々とした表情で受け止めていた。もう私は、昔とは違う。確かな覚悟と自信を持って、心から邪神と向き合った。

「そもそも、私とケンさんは（まだ）番ではありません」

「そんなの関係ない!! ケンから読み取った感情は親愛がたくさん入っていてとても、とてもとても幸せそうだった……羨ましい。羨ましい、羨ましい、羨ましい羨ましい羨ましい羨ましい羨ましい羨ましい羨ましい羨ましい羨ましい!! なんて忌々しい小娘、今すぐ首をへし折ってやろうか!!!」

「モクク（まあ待て）」

あわや大噴火、というか既に大爆発といった様子のハルジオンの眼前に、落ち着けよと言わんばかりに、セントエルモは発光しながらコードを畝らせた。

彼としてはどうだっていいのだ、主人の隣に誰が居ようが居まいが増えようが減ろうが生きようが死のうが、ただ主人が幸せでいてくれ

たら。ついでに自分を必要としてくれたらそれで大変満足できるポケモンだった。

逆に言えば、安寧を脅かす存在は例え身内でも許さないという、無機物染みた冷たさを帯びている使命感にも似た愛情を持っているとも言えた。痛い辛い報いたい、そのような自身の感情抜きでオートマチックに技を繰り出せる、安定感とは裏腹の表裏一体の危うさを内包したポケモンであるというのが、ケンのポケモンの共通認識だった。

結果として、その事實はハルジオンの動きを大きく阻害した。少なくとも今の盤面では味方ではないと彼女は本能で理解したのだった。今、リーリエを殺めてしまえば否が応でもケンに影響が出てしまう上、セントエルモはリーリエを好きではないものの嫌ってもしない。故に必ずこちらへ牙を剥く確信があった。

ボックス内にいる頃から知っていることだ、アイツはケン以外の誰にでも躊躇なく最高火力を叩き込めると、解っているからこそだ。彼女は矛を収めた。

潮の匂いがする涼しげな夜風と共に、マグマのような熱を帯びた邪神の怒気はすっと流れた。流星は腐っても土地神、感情コントロールはお手の物のようだ后感嘆する。それが日頃からもう少し出来ていれば、想い人の気苦労も多少は癒えるのになとリーリエは思った。

「話を、続けてもいいですか?」

「はい」

思った事が伝わってしまったかと、相変わらずのムスツとした返事に若干の苦笑いを浮かべるリーリエ。刺さるような視線に気付き上を見上げると、巨大な鉄塔と目が合った。どうやら、次の言の葉を待

ち望んでいるのは土地神だけではないようだ。

「まず、ケンさんがカントー出身であるというのは周知の事実ですよ
ね」

「と、当然よ」

動揺を隠せないハルジオン。この邪神、ケンに執心があれどバック
グラウンドに興味など一切無い神であった。

「カントーには、『告白』といった文化が存在します。恋人が恋人であ
ることを互いに認知し合う、一種の確認作業です」

「ふうん？」「ああー、なるほど。話が見えてきた」「モク」

三者三様。理解できぬ者、できた者、興味がない者。

「とどのつまり、私はまだ告白されていないという事です」

「でもそれって、単なるアンタの思い込みでしょ。アローラには告白
なんてダサイ文化無いじゃないの、ケンと余所者を一緒にしないで頂
戴」

「でも、ケンさんが余所者っていうのは純然たる事実ですよね
……………あれだけ迫っても、セックスはおろかキスもハグもしないし
……………はあ」

「あつ……………」

愚痴にも似た独白が嘘ではない事はハルジオンが一番良く理解し
ている。互いの心に同情心、というかシンパシーというか、仲間意識

が芽生える。少しだけ優しい感情が空間を占めた。

「でも、何時もケンに構ってもらえてるよね？ いっぱい優しい言葉も掛けてもらってるし、尽くしてあげたいって気持ちも伝わってくるし、何でもお願い聞いてもらえてるよね??？」

「それ多分愛とか恋とか抜きの、ケンさんの親切心ですよ……」

げんなりした様子で呟くりーリエ。最初は下心抜きの親切心が心に響いたのだが、好意を抱いている今となっては、その優しさは厄介以外の何物でもない。ハルジオンのように、他の者が親切を享受されているのを（邪神としては）黙って見ている自信と余裕が、今のリーリエには無かった。

「これからどうなるかは未知数です、私にも、そしてハルジオンさん達にも分からない。ですので、これからも協力していきましょうというのが私からの提案です」

「むむむ……ねえねえ、セレスはどう思う？」

困った時のセレス頼り。バトルでも日常でも、不利な場面で頼れるのはセレスティーラだった。何度あのボロ布クソミミにやられそうになったところを助けてもらったか、覚えていないほど恩知らずでもない。

「ふううん、フウン（いいんじゃない？ それに恩もある）」

そんな彼女にそんな事言われたら、ちよつと反論しづらい。

「んー、そっかあ。でも、自由にさせ続けたら良いようにされて取られないかなあ」

「心配には及びませんよ、数日はケンさんから離れることにしますから」

「……それは、どうして?」

ピリピリと、大気の振動がリーリエの柔肌に伝わる。言外に、舐めてると殺すぞ、といった邪神の意気込みが鋭い視線と共に襲うが、リーリエも負けてやるつもりは毛頭なかった。

「準備がありますから」

さも何でもないように言っただけだが、内心は穏やかではなかった。逆撫でしつとも殺されないような言葉選びを、曲芸師のようなバランス感覚で行っていくのは並大抵のメンタルでは無し得ない。

「そう、準備ね。でもいいの? せっかくケンはアンタに……ああ思い返すと腹が立ってきた」

「そう、ケンさんと上手くいく為には必要な事なんです。ですから、ハルジオンさんに時間を与えるわけではなく、私が時間を頂くという事を忘れないでくださいね?」

「今に見ている、必ず後悔させてやるからな」

「楽しみにしてますよ。では、そろそろ戻りましょうか」

リーリエの開いたライブキャスターは、ちょうど丑三つ時を示していた。そろそろモーターへ戻らなければ、明日の行動に支障が出る。一日一日を無駄に出来る余裕はないのだ。それに今夜が過ぎれば、しばらくは想い人と一緒に添い寝が出来なくなると思うとより一層早

く休みたくなる。隣で目一杯成分補給しようと、リーリエは異形を引き連れモーテルへと足を進めた。

晴れの日には雷を受けたような衝撃だった。

「お兄さんと一緒に、エーテルパラダイスに乗り込む……だと?」

カフェで朝食をとっていると、唐突にリーリエが爆弾を放り込んできた。どうしてそのような結論になったのか小一時間ほど問い質したいところだったが、その前にリーリエが口を開いたので止めにした。

「スカル団からお兄さま伝で、お母さまが呼んでいると……三ヶ月も留守にしていましたし、身辺報告でもしてきますね」

「そんなに気軽なものかなあ」

なんてつつたって、相手はあのルザミーネさんだ。数日後には、娘は元気ですと氷漬けにされたリーリエの写真が添付されたメールが届くまでである。しかも、今はそこまで力をつけていないグラジオ兄さんもセツトというのが、余計に心配を煽った。

「これは、私たちがいずれ付けなきやいけないケジメです。この機会を逃せば、必ず衝突は避けられないとケンさんも分かっているのでは?」

「まあ、そう、なんだけどさあ……控えめに言って大反対だよ俺。どうなるか分かったもんじゃない」

終盤、ルザミーネがスカル団を使い実力行使でリーリエの引き戻しを図るのだが、本当に引き戻したいのはコスモッグであり、リーリエは最早用済みといった様子であり、タダで返せばどうなるか想像に難くない。分かったもんじゃないのは、どのような末路を辿るかどうかといった話で、今現在、親子の絆など無いのは分かり切っている。

「それでも、私は行きます。ケンさんが止めたとしてもです」

「そんなに決意が固いなら、俺も一緒に行こうか。話がスムーズに済むぞ」

「これは私たち家族の問題です、家族だけで話し合いたいです」

「んー、でもなあ。ルザミーネさんのポケモン、多分お兄さんより強いよ?」

「それでも、です」

アドバイスを無視してまで頑として譲らないリーリエ。どうして聡明なのに分からないんだと、頭を悩ませる事0.5秒で妙案が浮かんだ。

「じゃあ、ハルジオンを貸すよ。ついでに仲良くなってくるといい」

「ハルジオンさんはちよっと」

即答だった。おかしい、仲が良くなってきているリーリエとハルジ

オンを一緒にして、天使と引き換えに休暇を得る作戦だったのだが、どうしてこう上手くないかないのか。

「んー、そしたらエルモかな。セレスは目立つし、小回りが効かないし、デカいし」

「それはどれも一緒の理由なのでは……」

「ごもつともである。巨大な身体は分かりやすい長所だが、同時に欠点でもある。あの図体じゃ、エーテルパラダイスを破壊しかねない。地下にでも放ってみれば、確実にワンフロアは吹き抜けとなること間違い無しだ。」

「でも、良いんですか？ ケンさんの大事なポケモンさんですよね？」

「同じかそれ以上に、リーリエが大事だからね」

リーリエが顔を真っ赤にする。脳内にある辞書『リーリエに言っただけの言葉』から抜粋した一撃が、見事リーリエの心を射止めたようだ。これでまたリーリエの好感度を稼いだらう、ポケモン貸したし相乗効果でラブラブになれるに違いない。

「ケンさん……本当にありがとうございます!!」

「いいよ。ちゃんと仲直りしておいで」

逆立ちしたって、俺がリーリエとルザミーネさんの仲を取り繕う事など出来ないし、何ならルザミーネさんの正論でボコボコにされるのが関の山だ……ちよつとだけ、いいなと思ったのはナイショだ。

それに、まだルザミーネさんとウツロイドが遭遇していない今の夕

イミングなら間に合うかもしれない。家族パワーがどれだけ通用するかわからないが、部外者がでしゃばるよりマシだろう。

ウルトラボールのスイッチを押すと、触手のようなコード束にギョツと抱き締められた。周りからどう見られているか分からなかったが、おそらくカフェのおじさんが持っていたであろうカップが床に着地した音とジョーイさんの悲鳴で、少なくとも抱擁しているように見えないのだけは確かだった。

「もく」

「すまん、しばらくリーリエを俺の代わりに守ってやってくれ」

絞られた身体から絞り出した言葉がエルモに届いたのかは分からなかったが、解放された後チカチカと蛍火を上げたのを見て、分かってくれたのだと理解した。ボールに戻すと、リーリエに差し出した。

「きつと上手くいくよ。頑張ってるね」

「……はいー」

潤んだリーリエの瞳には決意が見て取れた。エルモもいるし大丈夫だと自分に言い聞かせて、そのままリーリエを見送った。ごめんねククイさん、約束を数日で破ってしまったよ。

さて、これからどうするか。昨日逃げられたミツキとハウでも探し出すかと考えながら、リーリエの残していった食事も全て平らげて支払いを進めていると、

「キミが、ケンくんの間違い無いね」

ダンディな男性に肩を掴まれた。

ああ、この茶色いコート見覚えある……遂に来ちやつたかあ、ついでに見覚えあるスーツの女性もいるし、間違い無いよね。

エルモ、帰ってきてー！

タワータイクーン。

国際警察について作中で多くは語られないが、プラチナではギンガ団を、BWではプラズマ団を、XYではフレア団を取り締まっていた事から、おそらく多地方を跨ぐエージェントの集まりだと推測できる。

ハンサムという名前はコードネームというより、No. 836というエージェントナンバーから託けた渾名に近いものだ。国際警察は少なくともあと835人はいるのだろうが、おそらく水面下で悪の組織や危険の芽を摘んでいるのだろう。ハンサム以外には見たことも聞いたこともないが。

サンムーンに入って、ようやくクチナシとリラという国際警察が現れたが、リラもクチナシも事情が特殊すぎて内情がサツパリ分からない。まあ、こんな田舎にも出張るほど暇だということだけは確かだ。

「キミのことは調べさせてもらった」

開口一番ストーカー発言とは恐れ入った。正直今すぐ逃げ出した
い。

「ウルトラホールは知っているね？ 一週間前、アローラのメレメレ島付近に、観測史上最大規模の穴が開いた」

「……それが、私と何の関係があるんでしょうか」

「関係があるなんて一言も言っていないさ、ただ事実を述べたまで。その余波で連鎖的に開いた穴から、ウルトラビーストが押し寄せてきていてね。駆除するための協力を要請しに来たって訳だよ」

静かに黙っていれば良かった。言外にお前のせいだと言われてしまえば逆らえない。

「お断りします」

まあ逆らうんですけど。快諾したら扱き使われるだろうし、そうするとどれだけ時間がかかるか分かったもんじゃない。協力するならば条件を渋りに渋った後だ。

「そういう訳にもいかないんだ。キミから放出されているウルトラホール由来のエネルギーが、ウルトラビーストたちを惹きつけるのに一役買っていてね。ここアーカラ島に、遅かれ早かれウルトラビーストが攻め込んでくるだろう……恐らくそれはキミにとって、とても不都合な事なんじゃないかな？」

「いえ、アローラに愛着なんてないので。それに惹きつけるのは、後ろにいるスーツの女性も同じでしょう？」

血も涙もない切り返したが、こうでも言わなきゃ諦めてくれないだろう。協力するのは容易いが、日数の調整に支障をきたすかもしれない。ウツロイドをあのタイミングで手に入れなければ、確実にルザミーネさんは破滅への道を歩み始めるだろう。運命を変えるなら、あそこで変えるしかない。

悪いね。やるべき使命がなければ協力してやっても良かったんだが、生憎タイミングが悪すぎた。出直してくれ。

「キミはどうしてそれを……いや、Fairer同士だと何か感じるのか？ リラクくんは何か感じるかね？」

「……………いえ、わたしには何も感じません」

そりやそうだ、俺も何も感じない。同じF a i lでも、やってきた場所は全く違うし、なにか惹かれ合うこともない。

「貴方達だけが、物事を把握しているとは思わないで下さい」

とは言えども、流石に自分が出てきたウルトラホールの影響がここまで出てるなんて思わなんだ。把握しているのは、ハンサムとリラがどうしてここに来ているのかと、それぞれが抱える問題のみ。

「そうか……では『分かった上で』断っている、という事だね？」

「ええ、あなたにとって厳しいでしょうけど、そういった認識で構いません。今は本当に時期が悪い」

「どうしてもダメかな……チャンピオンを退ける実力と、ウルトラビーストを従える度量の持ち主だと伺ってたんだが」

末恐ろしいな、どこからシロナさんとバトルした情報を仕入れてきたんだろうか。相手もとっておきの情報を切ってきただろうし、そろそろ条件を提示してみるか。

「挑発しても無駄ですよ。ただ、どのようなウルトラビーストがどこに現れているかによっては、貴方達に協力しても構わないとは思っています」

暗い顔をしたハンサムが、希望を持った表情をする一方でリラの顔は難色を示す。

「そんな自分勝手な事情で協力されても困ります。わたし達は命を賭けて任務に当たっているんです。いざとなれば逃げ出すような人間

に、わたし達や市民の命を預けるなんてできません」

「リラくん！ 彼にも事情があるんだろう、それを聞いてみてから決めてもいいんじゃないか？」

むう、と押し黙るリラ。ハンサムのあまりの様子のおかしさに閉口したが納得いかないといった様子。どうしてそんなに必死なのか理解に苦しむといった表情を浮かべているが、必死になる要因が自身にあるとは微塵も理解していない様子。

「なるほど……私には、待ち人がいますので日帰りでここに帰ってこなくてはいけません」

「そうか！ では早速コニコシティ周辺に現れたウルトラビーストの対応を「その前に、本当に貴方が相応しい人物か試させていただきます」リラくん！」

「いいでしょう。こちらとしてもある程度、何ができるかを把握しておく必要がありますから」

カウンターに代金を置くと、リラについて来るようジェスチャーをし、バトルスペースに案内する。

「結構な自信ですね。わたし、こう見えて強いんですよ？」

「知ってますよ、腐ってもタワータイクーンですからね」

「タワー、タイクーン？」

あ、やばい。変な記憶を呼び覚まさなければいいが。さっさとポケモン出して、衝撃を上書きしよう。

「セレス、 出番だよ」

繰り出すのは10mの巨塔、しかもウルトラビーストだ。付いてきたハンサムが青い顔をしているが、何かトラウマでも思い出すのだろうか？

「ケンくん、その、リラくんに襲い掛かったりしないのかね？」

「ああ、そういう心配ですか。私とポケモンの絆を疑うなんて心外ですわね」

リラは普通のFairyとは違い、多量にウルトラホールからのエネルギーを受けているためか、ウルトラビーストの帰巢本能をくすぐり狂暴化させる心配があるとのこと。ただ、セレスに限って元の世界に帰りたいなんてなることはないだろう……エルモは少し心配だけど。

「ウルトラビーストを……あの話は本当だったんですね」

「ポケモンは何体使ってもいいですよ、戦闘が終わる前にセレスのタイプを当てられたら終了ということだ」

「……なるほど、わたしを試す気ではいるんですね」

細められた目から、ぞくりとするような威圧と敵意を感じる。一周回って癖になりそう。

リラの繰り出したポケモンはフリーデイン。初代ポケモンらしく技のデパートと化しており、この一匹だけでタイプが見破られる可能性が高い。尚且つエスパークタイプ特有の読心術で、もう既に勝敗が決してる気もしなくもない。速攻で潰すか。

「セレス、ヘビーボンバー」

全体重を込めた一撃を、勢いを込めて振るう。フリーデインは防御が薄く、耐久力のないポケモンだ。一撃お見舞いすればひとたまりもないだろうが、当てられる保証はない。素早さ種族値は120と俺のパーティの誰よりも早い上、エスパータイプの代名詞テレポートを駆使して回避でもされたら余計手間がかかる。

「フリーデイン、気合玉！」

瞬時にセレスの後ろを取ったフリーデインが、気合玉を放つべくエネルギーを貯める。タイムラグは1秒程だが、むしろ気合玉という技の威力と命中率を鑑みるにポケモン界屈指の速さだろう。

ただ、相手が悪かった。

放った気合玉を打ち消すと共に振るわれるセレスの剛腕が、フリーデインを吹き飛ばす。追撃に何か指示をしようかとも思ったが、もう起き上がってくることはなかった。

「そんな、一撃で……カビゴン、炎のパンチ！」

「宿木の種」

カビゴンの出会い頭に放った炎技を、平気な顔して受け止め、返しに宿木の種をカビゴンへ植え付けた。宿木で締め付けられ、体力を奪われながらも片方の腕で炎のパンチを繰り出すも、セレスは守るで弾き返す。お互いに次やるべき事を見越しての行動に、トレーナーの俺が一番付いていけない。やって欲しいことがそのままセレスに伝わっているかのようだ。

守るを使われて間合いを取られたカビゴンを、宿木が蝕み体力の25%が削られ、そのダメージ分セレスに還元される。炎のパンチで受けたダメージは、もう殆ど残ってはいなかった。

「ヘビーボンバーの後、守る」

「炎のパンチで押し切って！」

おそらく草タイプと鋼タイプの複合だと思っっているのだろう、炎のパンチで削りを入れるカビゴンにヘビーボンバーを叩き込む。カビゴンのような重いポケモンに効果は無いが、厚い脂肪を考えると火炎放射よりマシだろう。火傷しなければいいんだけれど。

ヘビーボンバーで吹き飛ばされ、尚も食らいつこうとするカビゴンを守るで更に弾き飛ばす。守るの効果が切れるタイミングで再度殴り掛かろうとして、カビゴンは膝をついた。

「うそ……マニニューラ、辻斬りよ！」

「火炎放射」

カビゴンと入れ替わりで出てきたマニニューラに、炎の壁が襲い掛かる。こう見ると物理アタッカーに特殊技は牽制にもなつて強いかもしれない。

マニニューラというポケモンもフリーデインと同じく、高速低耐久アタッカーだ。カウンターも覚えるので警戒して火炎放射を指示するが案外簡単に当たるな。おそらく技を指示されているというのもあるのだろうか。

「鋼タイプなのに、草タイプと炎タイプの技を使えるなんて……ポーマンダ、メガシンカよ！」

「宿木の種」

おそらく最後の切り札であろう、メガボーマンダを繰り出される。特性威嚇がセレスの攻撃を下げるが、あまり関係はない。

問題は、マンダが炎技を持っているかどうかだ。この対面はゲームの頃から嫌ほど見ていたが、勝敗を分けるのは炎技の有無だろう。悠長に積むなら漏れなくセレスのヘビーボンバーが突き刺さるが……

「火炎放射！」

「守る」

やはり持っていたか、炎技。コイツの特攻はライコウより高く、普通に痛いし何なら特殊型の方が使われていた時期もあった。ボーマンダは第四世代から一緒に戦ってきたポケモンでもあり、倒してきた強敵でもある。

今回はレベル差があるので、役割破壊の火炎放射くらいではなんともないが……普通の対戦だったらセレス切ってたな。

「もう一回、火炎放射！」

「ヘビーボンバー」

火炎放射を受けつつも、ヘビーボンバーを打ちかますセレス。ただ高耐久のメガボーマンダに、威嚇の効果が入ったヘビーボンバーでは大したダメージは与えられない。与えられないが、そもそもセレスは

耐久力に重きを置いた育て方をしているので問題ない。容赦なく宿木がボーマンダからエネルギーを吸収する。

「捨て身タツクル！」

「そろそろ答えが分かったかな？」

何も指示を出さなかったので、セレスは守るを繰り返したが悪手だった。捨て身タツクルに守るを消費させられるのは反動もあるし勿体無い。

「鋼、草タイプですか？」

「残念ハズレです。ヘビーボンバー」

メガボーマンダの火炎放射を、セレスが守るで弾き飛ばす。宿木で苦しんでいる隙に、ヘビーボンバーを叩き込む。

「鋼タイプ！」

「惜しいですね。ヒント、セレスは複合タイプですよ」

もう一度、火炎放射を守るで弾いたと同時に、宿木のダメージでボーマンダがメガシンカを解いた。バトル終了だ。

「最後にもう一回、答えるチャンスをおあげますよ」

「……鋼と、飛行タイプですね」

「まじかよ」

負けた。気付かれる要素は何一つ無かったはずなのに。

「最初、このポケモンの特性が浮遊だと思っていました。空を飛んでいたと聞いていたので」

だから地面技を打ってこなかったのか。てつきり草タイプとの複合だと思い込んでいたからだと思ってたが……やられた。

「でもそれ事前情報ですよ、ズルくないですか？」

「ふん、勝ちですよ。大人しく協力してもらいますからね」

「あっはい」

てつきり関わらせてもらえないかとも思ったが、そうではないらしい。優しい印象しかないリラの、激レアなツンツンした様子を興味深く観察しながらセレスをボールに戻した。お疲れ様。

デートorデッド

アーカラ島に襲来した未曾有の危機は、一人の少年によって半日で片付けられた。

正確に言えば、彼の所持していた島の守り神が全てを蹂躪し尽くしたのだが、国際警察ですらも情報を掴めていなかったポケモンの素性までも『知っている』かのように適切に対処したトレーナーの手腕も間違いなく優秀であり、少年の頼みでなければ守り神は梃子でも動かないので、その表現に大した違いはないだろう。

二人のfallerによつて、アーカラ島の外れに引き寄せられたウルトラビーストたちは全て『処理』された。あの若さで別世界のポケモンとはいえ、眉一つ歪めずに息の根を止めるよう指示を出す姿はハンサムの記憶に新しい。その指示を嬉々として受け入れ、実行する守り神は噂に聞く邪神そのものであると妙な納得さえあったが、いくら成人していてポケモンが強くともトレーナーの方は年端も行かない少年。

国際警察としては、神よりも少年のほうが末恐ろしく感じた。今でこそ鳴りを潜めているものの、何かの拍子でウルトラビーストへ向けた力が人間に向くかもしれない。或いは、鍛え上げた神を制御できなくなる可能性もある。リラのように国際警察で管理するにしても、国際警察の存在そのものが消し飛ぶ危険もある程の逸材だ。彼を秘密裏に葬ったとしても、彼のポケモンが黙っていないだろうし、そもそも殺せるかどうかさえ怪しい。セレスと呼んでいたウルトラビーストのような強大なポケモンをあと何体所持しているかすらも分からないのだ、底が全く見えない。

ハンサム自身、バトルはあまり好まないため詳しくは無いものの、リラがチャンピオンに匹敵し得る実力を持っているのは知っていた。

記憶を無くしたと言えど10年の月日も経てば、類稀なるバトルセンスと神通と謳われる程の頭脳で組織内でも頭角を現し、特殊な部署とはいえ部長となる程の女性だ。少年を試すと言った彼女の目を見た時は、完膚無きまでに叩きのめしてしまうのではないかとさえ思った。

実際は、彼の持つポケモンを一匹さえ倒すことができず、あまつさえ交換させ、控えのポケモンを引き摺り出すことも出来なかった。

もし彼が、あの力を悪の為に振り始めたらと考えたら気が気では無かった。こちらには止められる力も無く、引き留める魅力も無く、隙を突くための弱みさえ掴めていない。今はリーリエという少女と懇意にしているようだが、出会って一週間程の相手にどれだけ拘束力があるだろうか。

「今日は本当に助かった……それと、辛い思いをさせたね」

「私は手を下していませんから、平気ですよ。カプ……ハルジオンも気にしてない様子ですので、貴方も気にしないでください」

彼の言葉には、少しだけやるせなさが感じられた。何も思うことが無いわけでもないらしい。確かにウルトラビーストの亡骸を海の底へ沈め終わった後、褒めて褒めてとじゃれつく勢いで襲いかかっていたのを見ている身としては、何とも言えない。

「おそらく君と、リラくんを追って来たのだろう。確認できたウルトラビーストは全てアーカラ島に集結していたようだ」

「では、私の仕事はこれで終わりということですね」

「また問題が発生すれば、助力を受けたいと思っているのだが……勿

論、ケンくんの都合が良い時で構わないよ。では、今回の報酬を……」

「必要ありません」

懐から差し出した200万円もの大金を一蹴した。よもや金銭ですら靡かないとは、何を考えているか全く理解できない。

「その代わりに、一つお願いを聞いてもらってもいいですか？」

「……聞くだけ聞いてみようじゃないか」

そんな少年が口にした願いは、私の、いや我々の想定するものではなかった。

口約束ではあるが、なんとか一流組織への内定が取れたので今回のデモンストレーション、及び実技試験は大成功と言えるだろう。

内定といっても、クチナシさんのようにカプ神を盾にアローラの駐在員としてスローライフをするようなもので、高給は見込めない

が安定は段違いだろう。激務で身体を壊すこともない。

リラさんもハンサムさんも、大歓迎だと諸手を挙げて大賛成だったので安心してもいいが……あんなにツンケンされてたリラさんが、どうして賛成票を入れたのか今でも分からない。何が目的かもさっぱり理解できないが、安定した就職先を手にしたのは大きい。

ついでに言えば身の安全も保証される。ポケモンバトルの出来がどうだろうと、fallerの特性上、手離さざるを得ないだろうし、島の守り神に気に入られている以上、秘密裏に葬り去られる心配も無くなった。また、別の組織に命を狙われそうになれば向こうから知らせてくれるだろう。監視対象にはなるだろうが身の安全は今以上に堅い。

あとは目の前じやにある脅威けんをどうにかすれば安泰なのだが、そうは問屋が卸さない。

楽しいデートが、また始まろうとしている。

「ねえねえ、どつちが似合うかな？」

「うーん、迷うなあ」

目の前で、サニーゴの髪飾りと炎の石のネックレスを付け替え続けるハルジオン。そうだ、既にデートは始まっていたのだ。

カンタイシティでバーネット博士と状況を再整理するとのことで、ハンサムさん達と別れた矢先にコニコシティへ連行された。曰く、慰安旅行をすべきだと。

それには納得したのだが、どうして俺は休めないのだろうか……

フェローチェとマツシブーンの群れを全滅させるのは流石に心へのダメージも大きいというのに、今度は邪神のご機嫌取りか。しようみしんどい。

「どうせだし、どっちも買ってあげようか？」

「それじゃ意味ないの!! 愛しい人を選んでもらった物を、愛しい人に買って欲しいの!!」

プンプンと、可愛らしく怒るハルジオン。あれ、ここでサイキネが飛んでくるのがお決まりのパターンでは？ 少々拍子抜けしたが大人しいだけマシだろう。

「んー……じゃあ、サニーゴの髪飾りかな。色もハルジオンに似てて、宝石の散りばめ方もセンスがあるし」

「お、嬉しい事言ってくれるねえ」

そして、隣りには店の主人であるライチさんもいる。ライチさんにはウルトラビースト狩りをする際、万が一危害が及ばないようにコニコシテイ付近でこの世界のカプ・テテフと一緒に警護してくれていたのだった。その後の流れで、デートをするならばと自分が経営するアクセサリーショップへ連れて行かれて今に至る。

「いや、本当に嬉しそうですね」

「当たり前よ！ カプ・テテフがデートでウチの店に来てくれて、アタシの作ったアクセサリーを身につけてくれるなんて……歴代の島キング、島クイーンの中でも数える程しかいないだろうね」

うつとりした表情で、ハルジオンに珊瑚色の髪飾りをつけるライチ

さん。濃度の違うピンクのコントラストが、様々な青系の鉱石をより際立てるものとなっており、それでいて派手さが抑えめなので目立ち過ぎることもなくハルジオンを引き立てる。

「うーん。アタシとしてはお団子真珠の髪飾りがカブ・テテフに似合うかと思ってたんだけど、サニーゴの髪飾りも中々ね。流石アタシ」

「確かに真珠のバレッタもいいかもしれませんが」

口に出したのがマズかったのかもしれない。即座に飾りを付け替えると、どうかな？ と聞いてくる。ハルジオンも乗り気な様子で、くると回ってドヤ顔をキメた。確かにパール特有の柔らかい白が一層ハルジオンのピンクを際立たせており、素材を際立たせるのが上手だと感心する。

「どつちも欲しいな……」

ねえねえ、と袖を引っ張る邪神。ここで甘やかすのはどうなんだろうかと頭を過ったが、そもそも躡られるような相手でもなく技量もないので機嫌を損ねるよりはマシかと財布を取り出した。

「お代なんてとんでもない！ 宣伝効果だけでもバカにならないからね。その代わり、またアクセサリーを作ったらケンくんに渡してもいいかい？」

「んー、いいよー！」

「ハルジオンが言うならいいですよ。ただ、これは私からのプレゼントなので代金はキッチリ払わせていただきますね」

合計六桁オーバーの買い物だ。まだまだ懐に余裕はあるのだが、そ

れでも金銭感覚が狂いそうになる。まあ、付き合って三ヶ月の彼女にブランド物のバッグを買うより、費用対効果が高いのは間違いない。

「オツケー、流石は守り神を誑かせただけの事はある。ちようど頂いたよ」

「ありがとね！ 宝物にする！」

むぎゆつと、ハルジオンが抱きついてきた。心なしか、いつもより締め付けがキツイ。鉢巻でも巻いてるのかな？

こんな高いプレゼントも、喜んでもらえなきや意味がない。ここまですんでもらえるのであれば、打算ありきの行動だとしてもいい気分になるものだ。もう少し付き合ってやるとするか。

「せっかくだしお披露目しないとな。何か美味しいものでも食べに行くか」

「それなら、美味しいパンケーキのお店を知ってるよ。付いて来な」

「パンケーキ食べたーい！」

あ、これは今日は一日ライチさんも同行する流れだ。

その直感は正しく、パンケーキ屋から灯台巡り、お香選びの後に食堂屋でディナーを頂戴し、ライチさんのお店で別れるまでずっと一緒だった。ただ、ゲームでは知れない色んな細かい部分も詳しく見れたし、シールドジャングルで会えなかったマオとも顔合わせ出来たから、全体的に満足だった。

今日は気持ちよく眠れそうだな……

あれ、朝だ。

これは昼に二人きりになれなかった分、夜に追加デートが入るパターンでは？　　と思ひ、身構えていたのだが……拍子抜けを通り越して逆に怖い。なにがあつた？

布団の中にはハルジオン。あいもかわらず腕を抱き枕にしてグツスリと寝ている。取り敢えず引き剥がし、身支度を整える。引き剥がす手際が段々良くなりつつある事実に向き合い、自身の成長の証だとポジティブに捉えた。

エントランスへ出ると、見知った顔が二人。ただ、昨日とは違い空気が張り詰めている。

「ケンくん、少し話したいことがあるんだ」

結果として、嫌な予感は的中していた。

埋まりつつある外堀。

話がある、とは言われたものの全く身に覚えがないし、寧ろ昨日は平和に終わったはずだった……

……と考えてみたが、十数匹の未確認ポケモンの死体が海岸下に沈んでいるのを思い出し、心拍が上がった。やばい、何の言い訳も持ち合わせていない。

ライチさんは避難こそ受け持ってくれていたが、肝心のウルトラビーストについて何も話してはいない。薄々勘付いてはいるだろうが、ジョーイさんの前では隠し通すのも難しそうだ。

「話って、いったい何でしょうか？」

「カプ・テテフの件よ」

わからん。邪神ゆえ心当たりはごまんとあるが、こうやってトレイナー直々に呼び出される事は無かった。ただ、今まで我慢していたが、堪忍袋の尾が切れた可能性も否定は出来ないが。

「うちのハルジオンがまた何かやっただんですか？　ご迷惑をおかけし本当に申し訳ありません。つかぬ事を伺いますが、その、何をやったのか聞かせてもらえませんか？」

「今回の件は、アローラの存続に関わるかもしれないの」

益々わからん。アイツの邪智暴虐は留まることを知らないものではあるが、それでアローラが滅びそうになる事はなく、守り神である自身の本質を見失うような奴ではない。唯我独尊の極みとはいえ、短い付き合いでもそれくらいは分かる。

「あたしたちの祀っていた、カプ・テテフが消滅したわ。まだ日が昇らないうちにね」

「えつと、え？ それは本当ですか?!」

目眩がする。思考が上手く働かない。

「夜に大規模な戦闘音が、アーカラ島の外れから響いてたの。守り神同士の戦いは熾烈で、数時間に渡ってたわ。実際に見た人も多いし、もう隠しきれないかもしれない」

「島クイーンとはいえ、ケンさん……貴方が泊まっているかどうか、何処かに出かけているかどうかを伝えるのは憚りましたが、事情を聞いてはそうも言ってもらえなくなりました。」

貴方は、私たちの守り神を滅ぼしてしまっただんですね」

それは、ハルジオンが勝手にやったことだ。

そう言えたらどれだけ楽か。良くも悪くも、ポケモンのやった事はトレーナーに返ってくる。今の俺たちは、この世界の、このアーカラ島にとって外来種ウルトラビーストそのものだった。

「別に責めてる訳じゃないよ。あたしにとってカミサマは仕える対象で、そのカミサマ同士が争い合って、一方が生き残ったってだけ。でもアーカラ島はそうはいかない」

「神の消滅を知れば、今までバランスが取れていた他の島の守り神たちが何を行うのか。その混沌から身を守る術が無いわけではありませんが、穏便には済まないでしょう。領土を広げるために攻め入られるかもしれませんし、同胞を滅された怒りで天罰を下すかもしれません」

ん」

ジョーイさんの意見も最もだ。何があっても不思議ではない。守り神の関係は、結束とも、均衡ともとれる。

「だから、誰かがアーカラ島を守らなきゃアローラ全体に悪影響が出る可能性があるの。その責任を負えるのは、ケン。あんたとハルジオンしかないの」

「争うのであれ、天罰を下すのであれ、貴方達であれば無問題です。貴方のカップ・テテフであれば、どの島の守り神より強いんですから」

「だから、ケンには次期島キングの座を明け渡すわ。貴方が二十歳になる迄はあたしがするけど、アローラから離れるのは控えて頂戴ね」

「つまり、私に、一生この世界のアローラで暮らせて言うんですか」

耳が痛くなる静寂。重い空気、気まずい感覚が空間を支配する。

「無理には言わないわ」

「ちよつと!! ライチさん状況が分かってるんですか!？」

「彼は、周りの環境に振り回された末に此処へ辿り着いた。その責任の一端を担っているには違いないけれど、それはあたし達にも言える事じゃない？」

守り神がいなくても、あたしがいる。ククイやバーネットがいる。島のみんながいる。むしろ、こういった頼りきりな部分を変わっていかなくやいけないのかもね」

少し苦笑いを浮かべる彼女は、どこか照れ臭そうだった。まるで今

まで謝れなかったことを、恥ずかしそうに口にするような。

「だから、一時的にでもいいから少し考えててくれないかい？ ケンがいれば百人力だからさ」

「……ライチさん」

少しだけ、時間をください。捨て台詞のようにそう言って、踵を返し自分の部屋に戻った。

「ライチさん……」

「心配しないで、決して悪い方には進まないから……つい最近、顔馴染みに聞いたの。彼は居場所を求めているって」

「え、それって……」

「言っておくけど、この話は他言無用よ？ あたしとケンの信頼関係に関わるから。あと住む場所の手配とかもアタシがするから」

「必死、ですね」

部屋に入ると、既にハルジオンは起きていた。いつも以上に上機嫌のようで心なしか和かなのが癪に障る。

「ハルジオン、どういうことだ？」

「さっきケンが話してたこと？ そのままよ、アタシがアイツを消してきたの。アイツってば自分がホンモノだって煩くって」

「だからって殺すことはないだろ。下手をすればお前が代わりに守り神になって、俺も罰を受けることになるかもしれないんだぞ」

「アタシだって我慢したんだよ？ 精々半殺しにして放っておこうとは思ったんだけどさ、」

『お前からあの人間を奪う』なんて言われたら、もう生かしてはおけないよね」

「アタシからケンを奪うなんて方法さえ知りたく無かったし考えたくもなくて、そしたら急に沸沸と身体から力が溢れてきて、きつとこれは愛の力だなんて思っちゃった。それからサイコキネシスで何度も何度も何度も何度も何度も何度も念入りに念入りに捻り潰して壁に

叩きつけてからムーンフォースで死ぬまでじっくり焼いてあげたの。ウザくて硬い相手にケンがお薬飲ませてくれたおかげでいっぱい技も撃てたし、技の威力も最大限に発揮できるよう調整してくれてたしやっぱり愛の力だよな？おかげで塵一つ残す事なく綺麗さっぱり排除出来たしケンとの愛を今一度再認識しちゃったよ。そんな大事な大事で大事すぎる掛け替えのないケンとの仲を引き裂こうなんて言っちゃいけないし思ってもいけない事だし、そういう奴はどんなものであろうと許されないよね。ケンは頑張ってきたアタシを褒めてくれる？」

ハルジオンの狂気に心が折れ、よしよし一時間の刑（執行猶予5秒）に処された一時間後、ジョーイさんへチェックアウトのために顔を合わせると、さっきの排他的な視線とは打って変わって同情のような目を向けられた。デジャブを感じる。

頑張ってください。そう言ってポケモンたちを手渡された。少しだけ締め付けられた心が軽くなった気がした。代わりに首が締め付けられた。

ライチさんの家へ訪ねに行くべく、人通りの多い道を人目を気にす

ることなく歩いていく。早朝の事もあり、こちらへ向けられる視線も昨日までとは少し違っているように感じる。目立つのは相変わらずなので気にしないようにする。

わざわざ人通りの多い道を通るのは避けたいところだが、ライチさんが大通りにお店を構えているのだから仕方がない。どうしようもないので早足で向かった。

「お、早かったね。気持ちは固まったかな？」

「はい。やはり元の世界へ戻りたいという気持ちはありますが、この世界で骨を埋めるのも悪くはないかと思ひまして」

「……同年代と比べて、少し、いやかなり固いなあ。昨日というよりずっと前から気になってたけどさ、あたしってそんなに信用ならないかい？」

「いえ、これは私の性分ですので……」

「親しくもない大人に、そうやって壁を作るのがかい？ あたしはもっと、ケンと仲良くしたいよ。そうやって綺麗な上辺だけの言葉より、あたしはあんたの本心が知りたい」

真つ直ぐ見つめられたせいか、それとも凶星を突かれたせいか、恥ずかしさで目を逸らしてしまった。すると初めて表情らしいものが見れたと愉快そうにライチさんは笑う。

「わ、俺は、ここでポケモンたちとゆっくり過ごしていきたいと思つてます。だからライチさん、力を貸してくれませんか？」

「んー、及第点かな！ 敬語は使わなくていいよ、ハルジオンにも認め

られてるし、あたしもあんたを認めてるからね」

「いえ、それでもライチさんは目上の方ですし……」

「いいのいいの！ どうせ一緒に住むんだから、そういうの面倒でしょ？」

「そうですか。え、一緒に、住む？」

和気藹々とした空気の中、爆弾発言が繰り返された。

「え、ククイから聞いてたけど戸籍が無いんでしょう？ 田舎とはいえ、収入も職も無いし、そんなんじや家も借りれないよ。ウチは部屋も余ってるし、何だったら一緒に部屋の部屋で寝てもいいよ？」

「ねえ、ちょっと調子乗り過ぎじやな「すみませんでした」

見逃しそうな程、恐ろしく早い謝罪だった。とはいえ少し考える。今はリーリエといい感じだし、そんな中、付き合ってもいない女性の家でヒモ生活を始めるとなれば幻滅一直線で破局間違いなしだろう。駆け引きの一環で住んでみてもいいのだが、俺とリーリエの仲がどのようなものかで変わってくるし、一旦様子を見て決めた方が良さだろう。

「ライチさんの申し出はすごく嬉しいんですけど、やっぱり今すぐには難しいし、この世界のアローラを見て回りたい気持ちもあります」

「そっかそっか。何も今すぐじゃなくていいから、困ったらあたしのところにおいで。力になれる事ならなんだってするよ」

「ありがとうございます、とても心強いです」

いってことよと肩を叩かれる。エールを送ってもらえてる気分になるが、ハルジオンが微妙な表情を浮かべてる。あまり触って欲しくないようだ。

「じゃ、この後祭壇に行こうか」

「はい。どのようになっているか自分の目で確かめない」と

祭壇はハルジオン曰く、全く変わらないとのことだった。幾ばくかの祈禱と粉飾を終え、帰路に着くと、行きで見た光景を再度思い出す。荒地のようになっていて、急ピッチで作られた橋のようなものが掛かった変わり果てた島の光景だ。

せつかく綺麗に痕が残らぬよう、昨日は掃除をしたというのに。こうなることなら気にせず放っておけばよかった。

「お待ちしておりましたよ、ケンさん」

「いつぶりかですね、リラさん」

簡易橋の向こうに、リラさんが立っていた。リラさんはハンサムさ

んと一緒に帰らず、少しアローラを見て回ると言っていたが……まだ事後処理が終わっていないのだろうか。

「ええ、お久しぶりです。それとライチさん、今少しお時間いただけますか？」

「うん、わかった。そしたら、ケンは先に帰って、ハルジオンにパンケーキでも食べさせてあげな」

「じゃあ、今日はここまでで。ありがとうございました」

島クイーンと国際警察。昨日の今日で密会……怪しい、怪しいが後を付けてバレると怖いし、大人しく帰った方が無難だろう。おそらく悪くはされないだろうし、最悪はポケモンたちと窮地を切り抜けければいい。そう、主人公みたいにな。

「パンケーキなら、昨日行ったお店にもあったよね」

「じゃあそこにするか」

特にやることもないし、ミヅキたちが来るまでコニコシティで待っていればいだろう。少し軽くなった身体で、パンケーキ屋へと向かった。

「リーリエ、貴方……よくもまあ抜け抜けと」

「おかあさま、少しお話しがあつて来ましたの。まずはこのボールを見てください」

雑談日和。

コニコシテイに滞在して一週間が経過した。最初はポケモンセンターを根城にしていたが、邪魔だと言われ三日目からはライチさんに身柄を引き渡され、居候をする事となったのだった。

やっていた事といえば、ハルジオンとデートしたり、無人となった島の外れでセレスを磨いたり、あまりレベル差の無いシーザーやシルキー、ニシキと共にライチさんと模擬戦したりとまあ充実していた。

唯一の不安要素は、リーリエから何の音沙汰もない点だが、リーリエにはエルモが付いているため武力衝突なら負け無しだろう。何か別の理由があるのか、或いは……と考えたところで、いくら心配しても仕方がないことに気付いた。

エーテルパラダイスにセレスで行くにしても着地が難しく、ポケモンライドで飛んで行くにもブックマークしていないため飛べない。座して待つ。リーリエを信じて待つのが今できる最善策だ。

「また上の空って感じだね。どうしたの？リーリエの事でも考えてるの？」

「ケンって、時々おれらの話聞き流してるよねー。そんなに気になるなら付いていけばよかったのにー」

目の前で好き勝手言いながらマラサダを食べているのは、ようやとコニコシテイへ辿り着いたミヅキとハウだ。現状を確認するがてら、マラサダシヨップでお茶をしている最中だった。

「うるさい。リーリエにはリーリエなりの覚悟があるんだよ」

「でも、リーリエってポケモンバトルは苦手だったよね？」

「問題ない。俺の信頼できるポケモンを渡しているからな」

少しの動揺も見せないことにムツと来たのか、ハウが「でもさー」と異議を唱える。

「ポケモンバトルって、トレーナーとポケモンの絆が重要だと思うんだけどなー」

「それも問題ない、案外リーリエはポケモンに好かれてる様でな。更に言えば、本人曰く苦手との事だが、リーリエはポケモントレーナーとしても優秀だ。もしかすれば、ミツキやハウでも勝てないかもしれない」

「えーそんなに!!」「へー、そうなんだー」

ちよつと自信無くすなー、と思っても無いことを言うミツキと、ニコニコ笑うハウ。その証拠に、二人の目には闘争心がありありと見て取れた。このバトルジャンキー共が。

「まあ、いつかバトルするのも良いかもな。

それで二人は最近どうだ？仲良くやってるか？」

俺としては、ここが一番気になるところだ。そろそろ旅の折り返し地点だろうが、ここまで一緒に進んできておいて何の進展も無いわけがない。もう付き合っている頃だろうが、どこまで進んでいるのか凄く気になる。

「もちろん！ ハウとのコンビネーションは最高よ！」

「どんな敵とも、一緒に戦ってきたからねー」

「へえ。流石、負け無しで進んできてるだけのことはあるな。いつから付き合ってるんだ？」

「うん！ ハウと組めば勝てない敵は……付き合う？」

「付き合うって、おれと、ミヅキが？」

ミヅキとハウが顔を見合わせ、互いに少し気まずそうな表情を浮かべた後、たちまち顔が赤くなっていく様子は見ていて面白い。

……あれ、もしかしてとんでもない爆弾を放ってしまったのか？

「あれ。てっきり仲良しすぎて、もう付き合ってるのかと思ってた」

「あ、あははー。そう。そんな風に見えるかなあ？」

「別に、その、ミヅキとは付き合っていないし」

このどこか見えていてやきもきするやり取りは、中学生くらいの初々しいカップルを彷彿とさせる。付き合うのも時間の問題だろう。百合ーリエも寝取りーリエも、興味がないと言えば嘘になるが、せっかくだし俺より先にリーリエと交流のあるライバルを今のうちに滅らしておく事にしよう。

本音を言えば、他人の恋愛は最高の娯楽だしな。ぶっちゃけこの一週間普通に暇だった。

「そっか。じゃあどうせだしこの機会に付き合っちゃいなよ、どうせ友達の延長線上みたいなものだし」

「そんな気楽に!?! いやいや無理無理、だって昨日までそんな目でハウを見たことなかったし、ふつーにその、仲の良い友達だって……」

「おれも、初めて出来た同い年の友達って感じだなー」

「そうそうそうよね! ていうかそんな事言って、リーリエとはどうなの? 付き合ってるの!?!」

「無理に話を振ろうとするな。俺のことは良いんだよ」

「そもそも、他人の恋愛にとやかく言うのはどうなのさー」

「俺が楽しければ何でもいい」

「……真顔でここまで言われると、むしろ清々しさまで感じるわ」

「何とでも言うがいいさ」

「おにー、あくまー、へたれー、たらしー」

「お、なんだ? 喧嘩なら買うぞ?」

「ええ……沸点低すぎじゃない? それとも凶星?」

「うーん、多分へたれに怒ったと思うなー」

「勝手に考察するな」

「え、嘘。あれだけリーリエが頑張ってるのに? まだなの? まだ付き合っていないの?」

「いいか、ご存知の通り俺にはちよつと厄介な島の神様を取り憑いているんだ。アイツは独占欲が半端ないから、ちよつとしたことでリーリエに危害が及びかねん」

「確かに、カプ・テテフは見初められたら終わりつてじーちゃんも言つてたー」

「やっぱり島の守り神つて怖いの？」

「怖いなんてもんじゃない。今はボールの中で大人しいが、一度癩癩を起こすと手が付けられなくなる」

「あー、確かに神様つて感じじゃなくて、少し子供っぽいような気もするわよね。それなら案外飽きっぽいんじゃない？」

「でも、とーさんの幼馴染みは死ぬまで帰つて来なかつたつてー。おれもポケモンに好かれやすいみたいだから、気をつけなさいつて言われたー」

「怖っ!!」

「アイツ気に食わないからつて平気な顔して人の腕を粉々にしたり、もつと遊びたいからつて36時間歩かせたりするからな。子供っぽいというの也被われて当然だろう。あまり欲望に忠実になるのも大概にしてほしい」

「えー。で、でもそれも愛情表現の一つなんじゃないかなー!」

「そうね、健気つていうか。頑張つてるつていうか!」

「そうか? まあ嫌われているよりマシかとは思うが、時々これは愛な

のかと問い質したくなる事もまああるぞ。暴力的だし、怖いし」

「いやいや、ちょっと距離感が分かんないだけなんだって！」

「そうだよー。あまりー、悪く言うのは良くないと思うよー」

「まあ悪く言ってるワケじゃないが。頼れる一面もあるからなんとも言えないな」

「うんうん！やっぱり仲が良いみたいで何よりよ！応援してるわ！」

「そうだねー、仲が、良いのが、一番だもんねー」

「仲が良いとはいえ、周囲の人間関係にヒビを入れかねない行動をとるのはどうかとは思うんだが。傍若無人だし」

「それは神様だから仕方ないって！」

「まあ神様は神様でも、邪神様だからな」

「誰が、邪神ですって？」

「いや、話の文脈から察せ……よ？」

「あーあー」

「そしたら、あたしたちはここで席を外すわね」

「死なないようにねー」

「加減はするわ。でもどうなるかは分からないけど」

「あまり、その、やり過ぎないでくださいね？」

「ケンのマラサダは貰っていくよー。じゃあ頑張つてねー」

「ええ、また会いましょう……ケン、弁明は聞かないわ。そういえばアタシって、さつきも言われてたけど子供っぽいでしょ？好奇心旺盛だと思っし。だから少し気になった事は、どうしても試したくなっちゃうのよ……その鉄仮面が、どれだけ嫌がらせをすれば歪むのか」

酷い目にあつた。あれからずっと、ハルジオンの嫌がらせと称した抱っこを強要され続けていた。

ハルジオン曰く、両手と視界が塞がってしまうと嫌でしょ？との事だった。確かに抱きかかえると視界がピンクの髪で半分埋まるけれども、両手が塞がっても別にといった感じなのだが、問題は食事の時

間だった。

あーん、なんてチャチなものじゃない。飲み物も食べ物も全部口移しだった。

外だろうとライチさんの前であろうとお構い無しである。過激さがより一層際立ってきているようだ。お風呂も一緒に入ってくる……というか、離すと殺すつて勢いだったのでハルジオンに服を脱がせてもらい、身体を洗ってもらっていたのだった。囚人かな？

勿論、寝る時も一緒だ。抱き付かれる事は無くなったため、片腕の血の気が失せる事は無くなったのだが、今度はサイコパワーで両腕が固定されるため、寝返りも打てず、睡眠は浅くなる。それを見越して危険な薬物を処方（物理）してくるのだから、人権つて何だろうと少し考えさせられた。流石にトイレの時間は勘弁してもらったが、扉の前で五秒間隔でノックしてくるのはやめて欲しい。

これを丸二日間行った。

「ケン、その、大丈夫？」

「ケンは大丈夫だよ」

「……そっかー」

だいじよばない。ぜんぜん、だいじよばないよ。

「俺の心配より、自分の心配をしたらどうだ？今から大試練だろ？」

「うん、一人ずつって言ってたけど大丈夫だよー」

今日が、待ちに待った大試練の日のようだ。これを進めば、ようやくエーテルパラダイスへ足を進めることが出来る。

「まあ祭壇の片付けがてら、一緒に行ってやるよ。勿論、両手が塞がってるから全てハルジオンがやるけどな」

「案外まだ大丈夫そうだね。いや、訂正、やっぱり大丈夫じゃなさそう」

お返しと言わんばかりに、ミックスオレを注入される姿はやはり大丈夫じゃないんだろう。そろそろ平気になってきたし俺も相当かもしれない。

「準備も出来たし、そろそろ命の遺跡へ行こうよー」

思えば、ハウやミヅキと一緒に旅をした事はなかったな。これが最初の冒険になると考えたら、少しワクワクしてきた。野生のポケモンとどんなバトルをするのだろうか。

そんな事を考えながら、二人の後ろをついて行く。勿論、ハルジオンを抱っこしながら。これいつまで続くんだろうなあ。

色んな意味で大試練。

大試練は、あつという間に終わった。

実力としては申し分ない二人のことだったので、心配してはいなかったが、それにしたって早すぎる。原因は大試練の内容にあった。

まず、形式が一騎打ち¹。この時点で俺の知っている大試練ではない。それに加え、必ずしも勝負の決着をつける必要はないという点も大きいだろう。

ただ、ゲームと違い主人公の物語進行度合いによってレベル調整をする事が難しいため、このような方法を取っているのだろう。でなければ、シーザーの逆鱗を耐えるようなルガルガンを倒すなど、今のミヅキたちでは無理だ。

あくまで、挑戦者を見極めるためのバトルということだろう。

ただ、決着がつかないというのは不完全燃焼に陥りやすい。

特に全力を出せない、挑まれる側は。

「ほら、さっさと準備するー！」

生き生きとしたライチさんの言葉に、自然と溜息が出る。このために早々終わらせたのではないかと勘繰りたくなる気持ちを抑え、ボールを放った。

相手は、ミヅキたちと今までバトルしていたルガルガン。かいふくのくすりを使ったとはいえ、疲労が抜ける訳ではない。

ハッキリ言って舐めプである。これにシーザーやニシキ等といった、明かにルガルガンへ有利を取れるポケモンを投げても面白くな

い。

更に言えば、上記の二匹は模擬戦で勝利の感覚を掴みたいがために多用していたこともある。敢えて先程まで戦っていたルガルガン継続投するということは、何かを誘っている可能性も十分考えられた。

「……なるほど、ミミツキュネ」

「わあ、シルキーちゃんだ！」

「二人ともー、がんばれー」

この戦いは、所謂エキシビジョンというものだ。勝ち負けに拘り過ぎてワンサイドゲームって結末は大変よろしくない。

そこで、今回はシルキーをぶつけることにした。何を考えたのかは知らないが、相手の思惑を外す事もできるし、経験値も稼げるしで一石二鳥だ。

「シルキー。今日はよろしくな」

「きゅきゅきゅー！」

「ルガルガン。いつもと違う相手だけど、小さいからって油断するんじゃないよー！」

「ルウ」

両者は気合い十分、決戦の火蓋が切られようとしていた。

こちらはセオリーを通していくだけで勝てるだろう。ルガルガンに決定打はなく、カウンターもゴーストタイプには意味を成さない。どういった秘策があるかは知らないが、様子見で剣舞するか。

「シルキー、剣の舞」

「ルガルガン、ストーンエッジで邪魔してあげな！」

シルキーが地面を滑るように踊る。そこにルガルガンのストーンエッジが襲い掛かった。岩の破片は当たりこそしないものの、量や威力は無視できないもので、避けるために精一杯なせいか剣舞の効果を十全に発揮できないでいる。

シルキーが逃げた先に、囲うように穿った岩が配置される。誘われたか。

「来るぞ。じゃれつくで迎え撃て！」

「噛み砕くー！」

逃げから一転して、シルキーはルガルガンに果敢に攻め込む。じゃれつくが見事ルガルガンへヒットしたが、代わりに噛み砕くを受けてしまった。

ただ、シルキーには『ばけのかわ』というチート特性がある。これは、どんな攻撃技も一回だけダメージを無効化できるという頭のおかしい特性で、ミミツキュの代名詞とも言えるだろう。

独自のタイプ構成であるゴースト・フェアリータイプの技の通りやすさと、低威力技を底上げできる積み技が特性と種族値に噛み合っている部分もあるため、これだけでのし上がってきたとまでは言わないが、大半を占めている事に違いはない。

ポケモンというゲームは、相手より一回多く行動出来れば勝ちにながるケースというのが非常に多い。その一回は、最後の一押しであつたり、勝ちへ繋がる土台作りであつたりと様々だ。

その一ターンをお手軽に作り出してしまおうのが、この特性だ。一撃でHPを半分以上削られる事も珍しくないこのゲームで、一回相手の攻撃を空かすことができるのは非常に大きい。

これにより噛み砕くのダメージは受けなかっただろうが、ダメージは無効化出来ても、技の追加効果は無効化出来ない。毒や火傷等、様子を見れば分かる効果は噛み砕くには付いていないが、ぼうぎよを下げる効果があるため油断はできない。

目には見えないが、ぼうぎよが下がっているとするとストーンエッジ急所で持つていかれる可能性も高い。

「もう一回じゃれつけ！」

「離れてストーンエッジだ！牽制しろ！」

ばけのかわが剥がれてしまい、安全に積む事もできない上、一回攻撃を受けているルガルガンへ剣舞をするメリツトは薄い。一回積んで殴るより、肉薄している今、エッジを撃たせずドッグファイトして二回殴った方がプレッシャーを与えられるだろう。

それに、勝負には流れというものもある。今が攻め時だろう。

後方へ下がるルガルガンだが、素早さはシルキーの方が上だ。じゃれつくを当てる事に成功したが、攻撃の衝撃を逆に利用されて上手く距離を取られてしまった。放たれたストーンエッジは威嚇射撃のようで、シルキー本体に襲いかかりはしないが、攻撃への道筋を完全に塞がれたようだ。

一旦の仕切り直し。ただ、こちらはHPを完全に残していて、相手は一撃貰えば倒れるであろう状態。流星に影撃ちでは倒せないだろうが、連打するのも選択肢に入る。

こうなれば剣舞も選択肢に入れておけばと少しの後悔をした後、相

手が動いた。

動いたのは、ライチさんだ。あれは……Z技の決めポーズ。

「これが、全力のZ技!!」

「ワールズエンドフォール!!」

ぬかった。よくよく思い返してみたら、ライチさんはさっきのバトルでZ技は一回も使っていない。これは耐えきれないかも。

ルガルガンの咆哮と共に、頭上へ集合する岩石群。太陽を隠すほどの巨岩は、対象者へ大きな影を落とす。

「今のうちに距離を詰めるー!」

岩が降る直前まで、シルキーは距離を詰めた。おかげで、Z技を撃った後の無防備なルガルガンに一発叩き込める。

勿論、耐えられればの話だ。

空を覆う程の巨岩が、小さな身体一つ目掛けて振り下ろされた。シルキーの物理耐久は平均以下だが、対するルガルガンは平均以上の火力で最大パワーの技を繰り出している。レベル差やぼうぎよダウンの有無で変わってくるため何とも言えないが、大凡八割方耐えられないだろう。

だが、信じるしかない。

落とされた岩が砕け、割れた岩から満身創痍ではあるが、鋭い気迫を持ったシルキーが飛び出すと、シャドークローで一閃。

そのまま流れるようにルガルガンへ影撃ちを決めると、ルガルガンは戦闘不能になった。

「ライチさんのルガルガン、めっちゃ強かったなー」

「これはもう、完全に手加減してましたって言ってるものだよね」

ギリギリすぎる勝利だった。おそらく、シルキーが最後まで耐えてくれたのは絆のお陰だろう。ルガルガンが、シーザーとニシキのせいでレベルアップしていた可能性が高い。原作最後がだいたいLv60弱って感じだっただろうし、もう60は超えてるか。

シルキーも少しずつレベルアップしているが、流石にレベル差付いてるだろうし、よく勝てたな。やっぱり化けの皮が化け物すぎる。

「うーん、上手くいったと思っただけどねえ……流石はケンってところかな」

「いえいえ、どちらが勝ってもおかしくないバトルでした」

「あんまり謙遜するもんじゃないよ。ほら、カプ・テテフ……ハルジオンもそう思うわよね？」

先代のテテフが消滅してから、邪神たつての希望で、俺の知り合いは全員ハルジオンと呼ぶ事になった。権力者はこういった小さいところから支配していくのだろう、これからハルジオンのアローラ制覇

物語が始まるのかもしれない。

「んー、バトルは見てないけど、ケンのバトルに集中している顔が見れたから満足かなー!」

「……いつも通りの顔のような気がするけど」

「なんか、リーリエも違いが分かるって言ってたよねー」

好き勝手言いやがって。そこまで表情筋死んでないからな? 感覚はあるし、喜怒哀楽くらいは表現できているだろう。むしろ動かなかつたら普通気付くわ。

ハルジオンは勿論、絶賛ひつつき虫となっております。バトルを障碍を来たさないと分かってしまった今、剥がす理由が見つけれない。

ただ、不便がないのもまた事実だ。口移しと不意打ちのキスさえ我慢すれば、基本何でもやってくれるのだ。重さも自分で浮いているためか殆ど無く、ライチさんが居ない家の家事をやらせてはいるが、中々に力加減が上手になっている。全て最高の才能(王冠込)を持っているだけの事はあるな。

……いや、やっぱり口移しは無いわ。そろそろ辞めてもらうように言おう。

「俺としては、顔じゃなくてバトルを見て欲しかったなあ」

「バトルは見るものじゃなくて、やるものでしょ?」

「お前は見守る神じゃなかったのかよ……」

「ケンのバトルは別よ。ケンが他の子とバトルしてるのを見ると、嫉妬以外の感情が浮かばないから」

「結構、ストレートに言うようになったなあ」

ふふんと胸を張る邪神。それ褒めてない褒めてない。

「でも、そんなイチャイチャしてるとリーリエが怒るんじゃない？

そろそろカンタイシテイに着くって言ってたよ」

「そ、ま？」

「何その略し方……ケンがライブキャスター持ってないから、会ったら伝えてくれって」

リーリエが、ようやく帰ってくる？

もう一週間くらい離れ離れになっていたし、色々話したいこともある。正直飛んでゆきたい。

「あ、なんか今日は用事あるから、明日以降でお願いしますだって」

「マジかよ。そんな御無体な」

「ケンが我慢する必要は無いわ。さあ、はやくセレスを出して！今すぐ行きましよう！」

「いやそれは無い、リーリエに迷惑をかけるのは論外だ……まさかお前、リーリエに俺が嫌われるように?」

サツと目を逸らす邪神。なんかコイツ色々と成長してきているよ
うな……やり方が分かってきているというか。誰かが入れ知恵して
る可能性があるな。

チラと目を向けると、直ぐにライチさんと目があった。

サツと目を逸らす島クイーン。お前か?お前が色々吹き込んだん
か?

思えば、抱つこで口移しとか家事全般こなしてるとか違和感があつ
た。前のハルジオンがそんな搦手を使ってくるような……いや、これ
はライチさんが吹き込んだのではなく、ハルジオンが教えてもらいに
いったパターンの可能性もある。

ボイスレコーダーを持ち出す前後くらいから、ハルジオンにも焦り
が見え始めたんだろうな。まあしゃーない、相手は天使と言えど神に
匹敵する熾天使クラスだからな。しゃーない。

ライチさんは被害者。そう思った方が俺としても都合が良い、精
神衛生上……いやだって、認めたら完全にアーカラ島に永住させよう
としてきてるって事になる訳で、そう考えると今まで見ていた尊敬で
きるライチさんが崩れ去ってしまう。

「ライチさん。この話は夜、ゆつつつつくり話しましょう。ミヅキ
とハウは、明日朝一で出発するので、心残りのないようにコニコシ
ティで準備してくださいね。朝五時に迎えに行きます」

「はやっ!」

「異論は認めません。それでは解散」

ようやくリーリエと会える。ただその前に、やるべき事もある。

夜、心して聞いてみると、大分黒寄りのグレーだった。俺は泣いた。

奪われやすい唇。

リーリエに、ようやく会える。

あの魔窟から、どのようにして逃れたのかは知らないが、帰れる算段まで叩き出し、生還まで漕ぎ着けるとは一体どんな取引をしたのだろうか。

リーリエの母である、ルザミーネ。彼女の狂いっぷりは業火を見るより明らかだ。あの冷凍保存されたポケモン達を見るに、原作開始時点で既に手遅れ。現在進行形で絶賛発狂中だろう。

そんな彼女から、UBを呼び出すキーアイテムであるコスモッグを奪い、剩え逃げ出すようなことをしているリーリエが、無事で済む筈がない。どうしてそうなったのか全く絡繰が見えない。

勿論、無事で帰ってくる事を嬉しく思っていない訳では断じてないのだが……ただ、不思議が過ぎる。謎は深まるばかりだ。

「ねえ、やっぱり話聞いてないよね」

「結局どっちの道に行くんだよー」

「あ、この道は右だな」

ミヅキとハウの声にハッとさせられた。危ない危ない、考え事をしながら歩くと、やはり周りが見えなくなってしまう。現在時刻はおよそ8時。デイグダトンネルを通過してカンタイシティを目指しているところだ。

「さつきからボーツとしちゃって。転ぶよ？危ないよ？」

「大丈夫、後ろの守護神が守ってくださいるんでな」

「そういう事！」

再度、定位置に収まったハルジオンが耳元で喧しい。

昨日の夜、もう抱っこスタイルと口移しはやめて欲しいと直談判したところ、なんとアツサリオ許しが出た。昨夜、しこたまライチさんに小言をぶつけていたのを見て、己も同じ道を辿るのではと危機感を覚えたのだろう。

ただ、折衷案として何時ものように首に掴まるおんぶスタイルを所望してきた。もう何回も首を絞められてきて慣れかかっている事だし、それで機嫌を損ねないのであればいやと、渋りに渋ったフリをして了承した。

明朝、あの二人に普段のケンに戻った、等と言われたことは忘れない。もう彼等の中では、サトシの肩にピカチュウを乗せるように、邪神に取り憑かれた姿がスタンダードに映るのだろう。もうイメージアップは諦めている。

しかし、こういった軽口一つで一喜一憂するのはやめて欲しい。少し皮肉を挟めばヘッドロックしてくるし、今回みたいに喜んでいても、緩むのはコイツの口元だけで、無意識なのだろうが腕に力が入る。どちらにせよ首は締まるのだった。

「ここを行った先を2回曲がれば、おそらく外に出られるだろう……この地図が正しければ」

「ケンは大バトルしないんだからさ、ちゃんと道案内に集中してよねー」

「いや、俺一人だったらそもそもバトル吹っかけられないから」

二人の修行の一環で、俺はバトルに手出しをしない。そもそも、ハルジオンを見てもなお俺に襲い掛かってくる野生のポケモンはいないし、野良トレーナーはミヅキとハウに片されるのだが。要するに時間短縮と暇潰しを兼ねてのガイド役ってところだ。

この洞窟は整備されており、そこまで複雑化はしていないのだが、それでも行き止まりがあったり、段差で一方通行になっていたりと面倒極まりないので、ガイド役を買って出たのは正解だった。

曲がった先から外の太陽光が漏れている。ようやく外に出られそうだ。少し手間取ったが、これもエーテルパラダイスへ行くために必要な事だと割り切る。原作通りならば、此処から先も、コイツらから肌身離れず行動する必要があるのだから油断はできない。

「ようやく出口か、長かったな」

「わたし達、来る時は半日以上かかったんだけど」

「オレらが強くなったって事だなー」

「前向きだな」

強くなったのは事実だろう。昨日の大試練でも、フクスローとオシヤマリはタイプ相性を加味しても大活躍であったし、スムーズに行きすぎる事で少し調子に乗り始める時期も、俺という存在が天狗になることを許さない。こちらも原作通り着実に育ってきていて嬉しい。

コイツらには後で活躍してもらおうからな。俺一人でどれだけ無双しようが、影分身なんて出来ないし、イベントフラグも立たないしでリーリエ周りが好きだからけだからな。失礼、隙だらけだ。

まあ、育ってはいるが要求レベルまでは程遠い。最低でもLv40程度の主力が欲しいので、これからも頑張ってもらおう。

他愛もない雑談を続けていると、不意に首を引っ張られる。十中十九、後ろのあいっだ。

「どうした？いきなり引っ張ると危ないぞ」

「ケン、ギューして」

「いやいや、いきなりどうした？」

出口間際のこのタイミングで、どうしてそんな事を言い出すのか。分からない。虫の知らせか何かを感じて、嫌な予感でもしたのだろうか。

「大胆だねー」「青春だねー」

「五月蠅い」

離立てる外野の二人も、そこそこハルジオンと長い付き合いになるせいか、それとも命知らずなのかは知らないが肝が座ってきたようだな。いずれコイツらが痛い目を見ても、見てみぬふりをしよう。

別に減るものでもないし、別にいいかとフワフワと近寄ってきたハルジオンを抱き寄せる。

「はいはい、ギュー。これでいい？」

「ダメ」

全身に伝わるサイコパワー。幾度もくらってきた経験から推測するに、これは拘束するためのサイコキネシスだろう。もうサイキネソ

ムリエを名乗ってもいいかもしれない。

動かなくなった腕の中で、ハルジオンがモゾモゾと顔を近づける。ジツと見つめ合うこと十数秒。

改めて観察してみると、エキゾチックなフェイスペイントに黒い肌、そこに浮かぶように存在感を放つ眼は、光の加減で鮮やかに変化する宝石のようだ。

神々しさを感じる出立は、島の支配者と言っても過言ではない。観察を通り越して見惚れていた。

見惚れていたため、反応もその分遅れたのだと言い訳をさせて欲しい。

気付けば、唇は重ねられていた。

口移しとは違う、明らかな求愛行為。

口腔は貪られ、蹂躪され、激しく熱い吐息と、仄かに甘く柔らかな感触が、ボヤけていた頭を一瞬で真っ白にさせた。

思考が戻るが、拒否はできない。目を合わせられながらも、舌先を舐られる。先程まで宝石のように輝いていた瞳は、いつしか深淵のように昏くなっていった。

それに映るのは情けない顔をした自分自身と、恐ろしい程燃え上がるナニカだ。

どうして、いきなりこんなことをするのか。驚きと怖れが過ぎ去った後には大きな疑問が残った。

こんなレイプ紛いの暴挙に出ることは、今まで一度たりともなかった。それは、ハルジオンなりに俺を想つての事だろう。逆に言えば、このようにして何時でもハルジオンは襲えたにも関わらず、何故今なのか。

ていうかキス下手だな、めつちや歯が当たるんだけど。初心者か？

少しばかり冷静になると、周りの様子を伺う余裕も出てくる。興味津々なミヅキと、気不味そうに顔を逸らすハウと、

微笑んでいる、リーリエ。

なるほど。

「ン、ん、ー、ー、ツ!!」

声なんて出ない。当たり前だ、塞がれているもの。

「んもー、そんなに大きな声で愛を叫ばなくってもいいんだよ?」

コイツはどうしてキスをしながら喋れてるんだろうと思っただらテレパシーだったな!

久しぶりのリーリエを見る。笑顔が素敵だなあと一瞬だけ思ったが、それが勘違いに気付いた。いつも見てきたから分かる、あれは怒っている顔だ。目が笑っていない。

何故怒っているのか。それは久しぶりに会えた、裸で同衾しても良いと思っっている程信頼していた人間が、別の女と熱烈な接吻をかましているからだ。

是非、それが自惚れだと思いたい。勘違い野郎でありたい。何故なら、一度失った信頼は、取り戻すのは困難なのだから。

別に性的な意味での同衾でなかったとしても、その別の女が生物学上全く異なるものだとしても、この一幕はリーリエを怒らせるに足るものだったのだ。

そして漸く理解した。突拍子もないハルジオンの行動に、何の意味があったのかを。

「ハルジオンさん、そろそろ止めましょうか。ケンさんが嫌がってるじゃないですか」

全く感情の籠っていない声に、ひえ、とミヅキの小さな悲鳴が聞こえた。

「あー、ここまで長いキスは初めてだったし、ちよつと慣れてなかったのかも」

「わたしが居ない間に、随分と仲良くされていたみたいですね」

不自然なまでに崩れない笑みは、いつもニコニコしているハウのポーカーフェイスに、少しだけ歪みを生じさせる。

「ケンさん、お久しぶりですね。ミヅキさんもハウさんも、お元気そうでなによりです。」

それで、これは一体何をされていたんでしょうか?」

「愛し合う二人が、いつどこで何をしようが勝手にしょ?」

「愛し合うために、超能力で相手を縛りつけなければならぬなんて、随分と不憫なんですね」

「お前……!!」

「あら、また暴力に頼るんですか。いくら主人が有能でも、所詮は獣ですか」

その一言を皮切りに、ハルジオンは近くに散らばった礫つぶてを放った。サイキネで直接攻撃をしておらず、礫の軌道を見るに正中線は外しているだろう。どうやらまだ理性を保っているようだ。

ハルジオンもハルジオンだが、流石にリーリエも言い過ぎな面もあったし、ここらで少しばかり邪神様の怖い一面を見ていた方が

いいと思っただが。

「セント……エルモ……」

ボールから即座に飛び出し、全ての礫を弾き飛ばしたのは、俺が貸したエルモだった。

弾き飛ばした事自体は、当然出来ると思っているので全く驚かない。ハルジオンが驚いているのは、何故リーリエを、それも自主的に守ったのか。

「もくく(何をしている?)」

「はあ?アンタには関係ないでしょ!」

「モク、くく(関係ある、お前は主のものを傷つけようとした)」

「セントエルモ、まさかその女の肩を持つワケじゃないでしょうね!」

「もくく、モク(これが死ねば、主は悲しむ)」

何を言っているのかはサッパリだが、ハルジオンが舌打ちを残してボールへ引いていったのを見るに、どうやら説得してくれたようだ。

「何だかよく分からないけど、ありがとう。エルモ」

「もく(会いたかった)」

一週間振りの抱擁。どうやらエルモに、俺の感謝の気持ち伝わったみたいだ。

「リーリエ、その、俺にも悪いところはあるからさ。あんまりアイツを怒らせないでくれ」

「そうですね。では、悪い子にはお仕置きをしないとイケませんよね?」

「え、あ、そうだね」

「ふふ、楽しみです」

何が楽しみなんだろう。どう楽しまれるんだろうか。先程まで一切の感情を感じなかったのに、その笑顔と声には明らかな喜びを感じるのが逆に怖い。

「ミヅキさん、ハウさん。改めてお久しぶりですね」

「う、うん。久しぶり、リーリエ」

「見ない内に、結構遅くなったなー」

今のリーリエにそんな事言えるお前が一番遅しいよ、ハウ。

「いえいえ、わたしなんてまだまだですよ。もっと強くならなきゃ」

これ以上強くなるって、一体どこまで行くつもりなんだろうか。ハルジオンに怯えていたリーリエが懐かしく感じる。

「それより、大試練を見事成し遂げたとお聞きしました。おめでとーございますー！」

「いやー、それほどでも」

「ミヅキは結構ギリギリだったけどねー」

「それは言わない約束でしょー！」

先程までのリーリエとは一転して、何時もの明るくてお淑やかなリーリエが目の前にはいた。今まで見ていたものが嘘のようで、何か悪い夢でも見ていたようだ。

「そうだ、ケンさんにエルモのボールを返さないといけませんね」

そう言つてリーリエは、腰のボールホルダーからウルトラボールを取り外すと、俺のところまで歩いてくる。

なんだろう。何か引つかかるが、もう次の瞬間には引つかかつていた事さえも忘れてしまった。

「ついでに、上書きもさせていただきます」

真の分岐点。

いやいや、おかしいおかしいおかしい。

リーリエの好感度がバグった。

確かに前々から行動に違和感を感じてはいたし、これからもっと親しい間柄になるだろうとは思っていた。それにしたって、先程の一幕はプラスの好感度が全部吹っ飛んでマイナスに行ってもおかしくない、筈だ。

逆に好感度が下振れすぎて、数値がぶっ壊れたのかもしれない。おそらく—256を下回ったあたりで、好感度メーターが常識と共に明後日の方向に吹っ飛んだんだろう。

いや、吹っ飛んだのは俺の頭かもしれない。

「やっと起きましたね」

朧げな視界に映るのは、本を持った天使。

「…………おはよう、リーリエ」

たぶん、あれは夢だったんだ。

リーリエの熱い接吻に秘められた恍惚と尊みで脳がオーバーフローしてぶっ倒れた愚か者なんていなかったんだ。

リーリエから目を逸らし、知らない天井と睨めっこをする。ここ何処なんだろう。記憶が曖昧だ。

ぼうっとした視界にひよこつと、リーリエが顔を覗かせた。あ、こ

これはイケナイ事を考えている顔だ。と思っただのも束の間。

たつぷりと、味わい尽くされた。

「ん……ふう……流石に傷ついちゃいました。だってキスした相手が気絶しちゃうんですから」

でも、今度は大丈夫でしたねと、魔性の笑みを浮かべながら舌舐めずりをする天使。最早墮天使だ。ナニカに目覚めそう。

「……はい、すいません」

返す気力も、返す言葉もない。最近ハルジオン関連でバタバタしていたせいもあって、体力的に無理があつたのかもしれないが、それは言い訳にすらならない。

挨拶代わりにディープキスする方も十分失礼だとは思うが、キスをされたら卒倒するのも大分失礼だろう。そこは反省すべきだ。

「でも、可愛いケンさんを見ることができたので許します」

「そうですか」

「そうなんです。ですから、これからも、いっぱい見せてくださいよね？」

こわいこわい、いきなり積極性の塊みたいな女の子になってリターンしてきたんですけれど。信じて送り出したリーリエは一体何処へ行ってしまったんだ。こんな至近距離でくろいまなざしを向けるタipesの女の子じゃなかった……筈？本当にそうか？

まあ、どんなリーリエでも私は一向に構わんスタイルですけどね。

閑話休題。と言わんばかりの咳払いが一つ。

「それはそうと、明日の予定を話に来たんです。ミヅキさんとハウさんは、エーテルパラダイスへ招待することになりました」

さっきのは、それはそうとで流される流れだったのか。

だが、

「……ようやく来たか」

「その反応……やはり、明日に何かが起こるんですね」

ミヅキ達が、エーテルパラダイスへ初上陸するタイミングにウツロイドが現れる。このタイミングを逃せば、次に会う機会は既に手遅れの手詰まりな状態となっているだろう。

「ケンさんには、きっと何か考えがあるんですね？力になれるかもしれませんし、何をするか教えてくれませんか？」

「全部一人でやるつもりだったんだが、まあ協力者は多いに越したことはないしな。かと言って特別な事はしないけど」

「あんまり暴力的な内容だと、逆に邪魔しちゃうかもかもしれません」

「……善処する」

作戦内容としては、ウツロイドをボコってウルトラボールで捕獲するという、至ってシンプルな計画だ。

ただ一点、計画に邪魔な存在がある……エーテルパラダイス内には、貴重なポケモンを保護しているという都合上、盗難防止のためモンスターボールを阻害するための電波が張り巡らされているらしく、捕獲しようにもモンスターボールが働かないのだ。

「それを解決するのが、エルモというわけですね」

「そういうわけだ。動力源の電気を奪ってしまえば電波自体を止める事が出来るし、電波の出所も数も分からなくて良い。単純明快で致命的な妨害もされないし、大体、10秒も止めてくれたらハルジオンのサイキネで仕留めてボールを当てるまでに充分すぎるからな」

あまりに長い時間電気を止めてしまうと、エーテルパラダイスの生命維持装置的な何かも止まってしまうだろうし推奨出来ない。あんな海のと真ん中でビオトープを作っているのだから、そんな何かがあっても可笑しくは無いだろう。

「私がエルモを連れて、発電機近くで待機するとして……合図はどうするんですか？」

「心配ない。ウルトラビーストが現れる時には、大きな揺れが起きるからな。揺れから30秒くらいを目処にすれば良いだろう。停電なんて屋内だとすぐに分かるし大丈夫だ」

ウツロイドが現れる際に、実験の影響かは分からないが島全体が揺

れるのだ。これ以上と無い合図だろう。

「心配なのは……リーリエ、ちゃんと仲直り出来たのか？」

「秘密ですっ」

「あのなあ」

不安しかない。ウツロイドを手に入れた後は、ビツケに頼んで解毒剤を作って貰うつもりだ。そこまですり行き着く過程で、リーリエとルザミーネの間にイザコザが生まれれば達成は難しくなる。ビツケが火消しに向かうことが容易に考えられるからだ。

ビツケの事は、完全に信用してもいいだろう。彼女はエーテル財団実質ナンバー3のエリート研究者であると同時に、本物の善人だ。故にルザミーネにも、リーリエにも力を貸してくれている。そのどちらにもメリツトのある提案を飲まないはずがない。

「ビツケさんにウツロイドを引き渡せばクリアだ。それまで騒ぎは起こすなよ？」

「ふーん。会ったこともないのに、そんなにゾッコンなんですね」

「言い方に悪意を感じる」

ツーンとそっぽを向くリーリエ。ツンデレ可愛い。

「ふふ、分かっていますよ。特別なのはわたしだけだって」

「ハルジオンが聞いたらブチ切れそうだな」

「聞かせてあげてるんです」

ボールホルダーが異常に振動しているのはそのせいか。ピンの抜けた手榴弾より怖いんだけど、爆発物処理班はどこですか？

あ、僕ですか。そうですね。

「後で宥めるの大変だからな。また強引に迫られるかもしれない」

「その時はまた『上書き』してあげますよ？」

「人の口でオセロするな」

陣取りゲームとも言おう。ポーランドよろしく、巻き込まれる側はたまったものではない。

「しかし、随分とやり方が大胆になったな。何かあったのか？」

流石にここまでアプローチされれば嫌でも気が付く。気付かないのは鈍感系主人公を通り越して完全無感覚ドリーマーの不感症野郎だけだ。

リーリエはきつと、窮地を救ってくれる、導いてくれる、守ってくれる、そんなヒロイックな男を好きになってしまったんだろう。

実際は真逆だ。

博士に窮地を救われ、リーリエに行動指針を与えられ、ポケモン達に守られている。その癖、恩を忘れて一丁前にイキリムーブをカマス最低のクズだ。ポケモンのやりすぎで、受験勉強放つぱり出して勘当されるだけの事はある。

自惚れるな。自分の事は、自分が一番良く知っているのだ。リーリ

エには相応しくないなんて事も。

だが、クズでも男なら、それを隠し通して進まなければならぬ。失望されないうちに、醜くも足掻かなければならぬのだ。

「いいえ。ただ、負けられないと思っただけです」

おそらく、相手はハルジオンだろう。アイツもアイツで、なつき度や仲良し度に狂わされている可哀想なポケモンだ。

何が悲しくて、アイテムを使って上げられたポイントのせいで、ここまで自身を利用し尽くすクズを好きにならないといけないんだろうか。立場が逆だったら謀反を起こしてやるなきと。

「頑張り屋さんだなあ、リーリエは」

「はい。是非とも今夜は期待しててくださいいね？」

少し頬を赤らめ、恥じらいを見せる姿は天使そのものだった。先程までのグリゴリーリエな様子とは真逆の、新鮮で正当で清純な美少女の魅力が溢れんばかりである。

だが、おそらくそんな甘い夜は来ないだろう。どうしてここまでコケにされておきながら、ハルジオンが出てこないのか。それが答えだ。

「ケン、起きてる?」

「寝てる」

「そっか」

リーリエは来なかった。おそらく、ハルジオンが夜に降臨する事を初めから分かった上で挑発していたんだろう。マスターボールから勝手に出てくるためには、かなり労力が必要だと言っていたからな。

リーリエとしても、昼の段階で引き摺り出せば夜這いできるしいいやつて考えだっただのだろう。いやはや残念、ちよつと邪神様が想定より忍耐強かった。

「なんだ。今日は一緒に出歩こうとか、遊ぼうとか言わないのか?」

「明日は大事な用事があるんでしょ? アタシがゆっくり眠れるように、抱き枕になってあげるんだから!」

「それはまた随分と殊勝な心掛けだな」

直向きさという面では、ハルジオンも良い子だと言わざるを得ない。ここまで偏執な様子を見るに、いつも拘り眼鏡を持たせていたのが災いしているんじゃないかと最近思い始めたくらいだ。

傍若無人ではあるが、それによって俺が守られている面も大きい。ハルジオンがいなければ、ポケモン達、特にUBとは未だに馴染めな

かっただろうし、安定の約束された島キング生活も夢のまた夢である。

「それじゃあ、おじやましまーす」

モゾモゾと侵入してくる、体温の高めな小動物の頭を撫でると、何とも嬉しそうな顔をしてくれる。

いつもここまで可愛気があればいいんだけどなあ。外ではやはり、邪神然とした行動をとらないといけないんだろう。もしそうなら、色んなタイミングで口元がにやけすぎてて意味ないけど。

花の香りが鼻腔をくすぐったと思ったら、ハルジオンの顔が布団からすくつと飛び出た。昨日の今日に見た、魅せられるような守護神の顔が目の前に現れる。

前と違うのは、鳥の羽根のように軽い、触れ合うだけの淡いキス。

「おやすみ。明日はがんばろうね」

囁きと共に、意識は遠く彼方へ落ちていった。

待ちに待ったターニングポイントがやってきた。この為だけにミツキ達をストーキングしていたと言っても過言ではない。

ここから原作を離れて行くことになるんだろうが、それは致し方ない。せめて、自分がやれるだけの事はやってみせようじゃないか。

「お待ちしておりましたよ、皆様方……」

ハノハノリゾートホテル……さっきまで泊まっていたホテルのロビーで待っていたのは、原作と変わらないザオボー。いつ見ても小物臭が凄い。

加えて、リーリエもメンバーにいる事が、余計にザオボーの行動を小物臭くさせる。おそらく会長の娘という立ち位置の彼女を、嫌でも意識してしまうんだろう。初心者すぎる。

仮にこれでも支部長なのだから、カリスマ性の無さを補って余りある研究者としての実力があるということなんだろう。後からビツケを使つてこき使つてやるか。

「リーリエお嬢様、今更戻つて何をされるおつもりで？」

「少し用事があるのですが、子供のお守りで忙しそうな支部長さまに言う程の事ではありません。ただ、せっかくですし友人とご一緒させていただく事にしました」

澄ました顔であしらうリーリエに、悔しそうな顔をするザオボー。もう既に、格の違いが如実に現れ始めているのが面白すぎる。どちらが子供か分かったもんじやない。

「ふ、ふん。まあいいでしょう、わたしは約束を守る大人としての責務を果たしにきただけなのですから。それではミヅキさんと、そのお連れの方々と一緒に来てください」

ミヅキの後に続いて、一緒についていく。案内された船は、4人が乗るのに少し窮屈そうだ。

「これは、少し……いえ、かなり詰めなければいけませんね」

心なしか嬉しそうなリーリエ。泥臭い冒険が好みなのか？

「まあいいでしょう、せっかくだしゆつくり旅しよー」

「そうね、安全運転で行くべきですよね、ザオボーさん……怖くなったらしい、お母さまに色々言いつけちゃうかも」

「うぐう……ええ分かっていますよ、それぐらい」

ザオボーに続き、船に乗り込む。思った以上にスペースのある船内だったが、リーリエのポジションを確認したところ、俺の膝上を御所望らしい。詰めるってレベルじゃねえ。

前途多難だ。

何か言いようのない、一抹の不安を覚えながら無意識にリーリエの背を抱きしめた。

答え合わせ。

結論から言えば、ウツロイドはおろかウルトラホールすら現れなかった。

意味が分からない。どこで間違えたのか見当すら付かない。

ぐるぐると、頭の中が掻き回される感覚に犯される。言い知れぬ違和感が胃の中を掻き混ぜ、身体の中を這い回る嫌悪感と共に臓器を刺激しているようだ。頭と胴体、特に胃の具合が凄ぶる悪い。

フラグ管理自体は完璧だった。

どれだけ、どんなイレギュラーが介在しようが……それこそアルセウスを連れてこようが、ソルルナ含むウルトラビーストを揃えてしまおうが、世界は運命力に引き寄せられ、ストーリーはイベントフラグを頼りに回り続ける。ザオボーが迎えに来たのも、その証明だ。本来支部長クラスの間人が使いつ走りなど、現実世界では有り得ない。

それがゲームの物語。なのに、待ち焦がれた必然は訪れず、最大の目的は果たせず。

最早、八方塞がりと言えるだろう。このままでは二度とウツロイドを捕獲出来ず、運命は変わらぬまま、ルザミーネは暴走して目を覚まさなくなり、リーリエはカントーへと行ったきり。

勿論、ルザミーネの行動全てを妨害し続ける事で、阻止する事自体は可能だろう。だが、全て阻止した後は？　そもそもこんな事があつて、まだゲーム通りに動いてくれるのか？　もしや邪魔された？　それにしても誰が、なんのために？　それ以前にこの世界は本当に『ゲーム』通りに進んでいるのか？

……いや、もう考えるには全てが遅すぎる。

既にどうしようもない段階に来てしまったのだから。

「ケンさん、大丈夫ですか？」

リーリエが心配そうに、顔を覗き込んでくる。

初日からずつとこの調子だ。待てど暮らせどウツロイドは現れず、夜になってもそれは変わらない。本来ならば到着のタイミングでイベントが発生する筈であったし、滞在する必要など無かったのだが……未練がましく無理を言つて、エーテルパラダイスにて二泊三日している所だった。条件付きで。

「もしかして、ベッドの調子が良く無かつたんですか？」

「ふかふかだったし、それは違うわ。きつと乳臭い生娘と添寝してたせいよ」

「あらあら、土臭い抱き枕が何を言っているんですか？　ちゃんとお風呂に入りましょうね、嫌われますよ？」

「水浴びしてるし！　嫌われてない！」

条件とは、リーリエの部屋で寝泊りをするという一点のみ。それさえ守れば、リーリエと一緒にいれるし、異変が起きれば内線が鳴って知らせてくれるし、リーリエと一緒にいれるし、ミヅキたちのいる一般の宿舎よりも早く最上階へ向かえるし、リーリエと一緒にいれる。要は良いこと尽くめという訳だ。

いつ襲来しても問題ないように、寝てる間はハルジオンを見張らせている。眠っている間にウツロイドが来れば、ハルジオンが時間を稼ぎ、その場でエルモには電力を吸い取ってもらおう手筈となっており、もし昼間に来るなら、ハルジオンの役をシルキーとシーザーに担ってもらおう。

このようにして、昼夜いつやってきても良いように体制を整えた。最悪攻撃が当たらなくとも、レベルの低いウルトラビーストにウルトラボールを投げるのだから、ノーダメージでもゲット出来る気もする。

「リーリエったら、守り神とも仲良しなのね。素晴らしいわあ、成長したのね」

その条件を決めた張本人が、ここにいる。ルザミーネだ。いやなんでここにいるんだろうか。

前々から様子を見るに、家族ぐるみの仲直りは成功していたらしい。帰って来た時は、頑なにエーテルパラダイスへ乗り込んだ際の詳細を話そうとしなかったし、もしやと思ったが心配して損した。

しかも、このデレっぷりだ。少しリーリエが鬱陶しそうな顔をする程度には。頭と腹と胃が痛いのは、大半がこの人のせいだと言っても良い。どうして病が治らないうちに、ここまで穏やかなのだろうか。前のリーリエの口ぶりからして、ウツロイドの毒牙にかかっているのは間違いない筈なのだが。

何かがおかしい。おかしいが……逆に考えよう、光明が見えた。これは別に放置していても問題ないのでは？ このままの調子であれば、リーリエに危害を加えず、ウツロイドが現れないからウルトラビーストと融合もせず、それによって寝たきりになる事もない。

ただ、演技である事も否定は出来ない。この人一人何でもできるワ
ンウーマン社長タイプだからな、これくらいの事ならば、おそらく平
然とやってのけるだろう。

経過観察して様子見するとして、リーリエには変わらず俺がそばに
居ないとな。これは仕方がないからな。やる事なくて暇になるしな。

考えれば考える程、身体の不調が激しくなってくる。もう今日はす
ぐに寝た方が良さそうだ。さっさと意識を手放さないと、リーリエが
ベッドに入ってきて一層眠れなくなる。

尚、別の場所で寝ようにも、ソファで寝るとリーリエもソファに来
るので余計苦しくなるから諦めた。

「もう具合悪くて死にそうだし、寝る。おやすみ」

「ああもう、ケンさんったら、わたしを置いて夢の世界へ行かないで下
さいー」

「リーリエ、君のお母さまの前でベッドの中に潜り込もうとするのは
やめなさい。やめて」

「非常に仲睦まじいんですね、リーリエもケンくんも。では、お二人の
邪魔をしてはいけませんので失礼しますわ」

「公認にしようとするのは、今は、ちよつと勘弁して欲しいんですけ
ど。安眠を、安眠を下さい」

不安と心労と愛の重さで眠れないんです。お願いします。

「それじゃあ、いつもの粉で寝ちやおう！」

「それ使うと、爆睡して大事なタイミングで間に合わなくなるからダ

メです。というか何勝手に寝ようとしてんだ、哨戒任務はどうした？」

「そんなのセレスティーラに頼んだよ、久しぶりの外で嬉しそうだったなあ」

「いつの間にボールを……」

これ以上困らせないでくれ。セレスがなにかの拍子に設備を破壊でもしたら、ルザミーネに凍らされる。唯でさえ、寄りを戻した娘に手を出しているように見られているのに……

だが、殺意とか敵意とか、そういうった類が全く感じられないのも事実だが……そういったものを欺ける可能性も……ああ、どんどん悩みの種が増えていく。

悩みの種で、必ず不眠になる訳ではないという事が証明されてしまったな。俺の特性がなまけだったってオチかもしれないが。

もう俺は頑張ったし、少しお休みしてもいいよね。さよなら、俺の知っているアローラ。

時は少し遡る。

「それで、聞きたい事って何だい？ ライブキャスターじゃなくて、わざわざここまでやってきて。そういえば、今日はケンくんとオハナタウンまで行く予定じゃなかったかい？」

カンタイシティにあるホテルしおさいを出た後、用がある、とカプ・テテフとのデートを控えるケンに伝えて、リーリエが向かったのは空間研究所であった。

どうしても気になる事があって、ダメ元でチャイムを鳴らしたところ、ククイ博士もバーネット博士も、普通に二人とも帰ってきているとの事で拍子抜けした。

フィールドワークに出掛けた二人が既に戻っている事について、物申したい気持ちをグツと堪えて、リーリエは尋ねる。

「ククイ博士。どうしてわたしを、ケンさんに預けたんですか？」

思い切った質問ではあったが、当然、本来の庇護下であるククイ博士の下を離れるわけで、危険も高まるのだ。巻き込まれるであろうリーリエには、知る権利があると思っていた。

彼はイレギュラー過ぎる。

有り得ない強さ。有り得ない知識。有り得ない記憶。どれも昨日の今日で、ある程度理解はしたし、信用もしたものの、まともに整理

のつくものではなかった。それに、

「それに、ケンさんがハウエン地方から来ただなんて絶対に嘘だって、ククイ博士なら分かった筈です。荷物やトレーナーパスを見たら一目瞭然でしょう。どうして、そんな人物にわたしを預けようと思ったんですか？」

自分は昨日の話があつて、ようやく信用したのだ。嘘を吐かれたままのククイ博士が、彼を信用している訳がない。必要なら、口止めされている彼の身の上を話す覚悟さえしていた。

「……なあリーリエ、もうカップ・テテフには出会ったかい？」

「……ええ、まあ」

思い出したくもない。最強最悪、邪神と言つても過言ではない、非力な自分ではどうしようもない上位の存在。アレの殺気にあてられて失禁しかけたのは内緒だ。

「ぼくがケンくんを助けた時……ボールから彼女が現れたんだよ。助けてくれてね。」

「どうにも様子がおかしかったし、相手はカップ神だし、詳しく話を聞いてみることにしたんだ」

あの傍若無人が具現化したような存在が、お願いをするなんてと耳を疑う。怪訝そうな顔をするリーリエに、ククイは苦笑いで返した。

「ぼくだって博士の端くれだし、カップ・テテフがどんな存在かなんて理解してるさ。でもね、彼女は見ていられない程に必死だった。彼が死んでしまったかもだなんて慌ててね。」

空間を……方法は詳しく語らなかつたが、おそらくウルトラホール

を渡っている途中に、彼が落っこちたみたいなんだ」

理解できない。そもそも、ウルトラホールとはリーリエにとって開いているものであり、渡るための出入り口等では断じてない。そしてそんな方法を思い付くには、実際に見るか、経験してみるしかないのだ。未来から来たなんて半信半疑であった彼の話が、より現実味を帯び始めていた。

「ぼくもあんまり信じちやいなかったが、トレーナーパスを確認したらね……驚いたよ。もう島巡りを終えていて、アローラ凶鑑コンプリートの印もあった。凶鑑が無かったのが悔やまれるよ。それに一番信じ難かったのが……IDが、ミヅキくんのと一緒なんだ。勿論、見なかった事にした」

背中に冷や汗が走るのを感じながら、リーリエは彼が言っていたことを思い出した。

ミヅキはこの世界の俺みたいなものだから、と確かに言っていた。

「もう、リーリエには聞かされてみたいだね、彼が未来らしき所からやってきたって事。やっぱりぼくの見立て通りだ」

凶星を突かれ、キョトンとするリーリエに、悪気は無かったよと付け加えるククイ博士。

「いや、キミの持っているほしぐもがケンくんの興味を引くものだと思うってたからね。予定に無かったのに空間研究所に連れてきたのは、リーリエにもfairlyやほしぐもについて、ある程度の事は知っておいて欲しかったからなんだ」

「そうだったんですね。でも、おかげでケンさんの事がまた一つ分

かった気がします」

「そうかい、そのままケンくと仲良くしておいてほしいところなんだけど……ちよつと待ってて」

突然、ライブキャスターが鳴り出した。クワイは差出人の名前を見て、眉を顰める。

「なあライチ、報告は後でゆつくり時間をとつて……え？ほんとに？……分かった、少し考えてみる。うん、また後で」

ピ、と通話を切断すると共に、長い溜息が吐き出された。

「どうしたんですか？」

「カップ・テテフの件で前々からライチにお願いしていた件についてなんだけど……そういえば、ライチって知ってる？」

「アーカラ島の島クイーンですよ、耳にした事くらいはあります」

「本来なら、この島に来る際に顔合わせをするつもりだったんだけどね。ケンくんの対応で、少し予定を変えたからまだ会ってなかったよね。」

「それでね、前に頼んでおいて、ライチとケンくんを上手く接触させたんだけど……少し不味い事になってね。よく聞いてほしい」

「え？」

「ケンくん、本気のライチに勝ちちゃったみたいなんだ。ついでに、街一つ破壊出来るくらいの力を持ったポケモンも持っているみたいで、場合によっては敵対も辞さないとの事だ。最悪の場合、国際警察と協

力してでもケンくんを排除しないといけない」

「は、排除……？ 殺すんですか!？」

つい先日まで仲良く談笑していた相手を、殺す。ククイ博士の言葉に、リーリエは冗談の類が含まれていない事は重々承知していただけに、その言葉は重くのし掛かる。

「本当に最悪の話だ。ケンくんが守り神を殺し尽くし、アローラを滅ぼそうとした時、誰かが殺してでもそれを止めないといけない。

その止めなきやいけな立場の島クイーンが、勝てないと匙を投げたんだ。だとしたら、最悪が訪れる前に禍根を断ち切らないといけない」

「だからって……だからって、今も苦しんでいる何の罪も無いケンさんを、殺すんですか?」

脳裏に浮かぶのは、赤いギャラドスを愛おしそうに撫でる、真顔のケンの姿。彼はただ迷い込んでしまった、ただ足掻いているだけなんだと伝えないと。

「それを見極めるために、リーリエ、キミが傍にいてあげるんだ」

その時、リーリエはようやく自分の役割を認識した。ククイ博士はリーリエをケンに見てもらうためではなく、ケンをリーリエに見てもらおうようにと、この配役にしたのである。

「おそらく、本気のぼくでもどうにもならない相手だ。カプ・テテフもいる以上、島キング、クイーン総出で相手しても勝敗は分からない。

だけど、きつとケンくんは良い子さ。カプ神や凶暴なポケモンにも慕われ、険しく長い島巡りも修めている。ぼくと話す時は壁を感じた

けど、リーリエやミヅキ、ハウとはきつと仲良くなれると感じた。ぼくはその感覚を信じてる。だからリーリエ、キミを送り出したんだよ？」

ニカつと、人の良さそうな笑みを浮かべる姿を見ると、やっぱり敵わないあとリーリエは思った。

「はい！ わたしなりに、頑張ってみようと思います！」

頑張らなければならない、

ケンを救えるのは、わたしだけなのだから。

ウラウラ島へ上陸しただけ。

原作知識の通じない、試される大地アローラの冒険が幕を開けた。

開始地点はウラウラ島で、強くてニューゲームみたいなものだが細かい事はどうでも良いだろう。その場の気分とノリが大事だ。

結局、エーテルパラダイスでウツロイドの姿はお目にかかれなかった。もうどれだけ待とうが無駄だろうと、リーリエ、ミヅキ、ハウと共にウラウラ島へとやってきた訳だ。一応、ここは原作通り。

見送りにルザミーネがやってきて、お別れのハグをしたのは多分とどうか絶対原作とは違うだろう。リーリエの凍てつくような視線でタジタジになるルザミーネは、少しだけギャップ萌えした。後にその視線が俺にも向けられていたと気付くのに時間は掛からなかったが。

どこまでが一緒に、どこからが違うのか皆目検討も付かないが、おそらくミヅキがチャンピオンになる流れだけは変わらないだろう。ミヅキ強いし。

ミヅキの現段階での手持ちは、ジュナイパー、カビゴン、シャワーズ、バタフリーの四匹。よくこんな手持ちで戦えてたなあと感心するものだ。地面タイプと、鋼タイプ……序盤のアローラで手に入るポケモンなら、バンバドロやレアコイルなんかを入れたらもつと安定しそうなんだが。

ハウの手持ちは原作通りだ。アシレーヌ、ブースター、アローラライチュウの三匹。

ちなみに、ジュナイパーにはエーテルパラダイス中で進化した。俺の特訓という名の暇潰しに付き合ってくれた賜物だな。ハウのオシマリもアシレーヌに進化したので、ライバルの差は埋まる事は無かったが。

こうもタイミング良く同時期に進化すると、ご都合主義というか作
為的なものを感じる。まあ一緒に冒険していれば経験値も等分され
て入るだろうし、レベルというカッチリとした数値がこちらでまだ確
認できない以上は、メンタル面の問題もあるだろう。

ある程度の苦難を乗り越えなければいけないとか、ライバルが進化
すれば、呼応されるように進化したりとか……まだまだ分からない部
分が多いな。

その二人は、送迎船を降りて早々バトルをおっぱじめている。順当
に行けばミツキが勝つだろう。一匹多い手持ちは、それだけのアドバ
ンテージがあるのだ。それを抜きにしても、タイプ相性と戦術面でミ
ツキの方が優勢のようだが。

何というか、ミツキのポケモンは目に見えて動きが良いのだ。指示
へのレスポンスも素早くシームレスで、咄嗟の機転や勘も働く。勿
論、俺の手持ちには劣るが、それでも優秀な方だろう。

「うわー、また負けたー」

「へへーん、これで三連勝！ あたしってやつぱり天才？」

天才だ。なんてことは、調子に乗るだけなので言わない事にする。

「ハウが四体目を手に入れてからだな、本番は」

「多くのポケモンを育てるのも実力の内だって、ククイ博士も言っ
ただけだ」

負けじと反論するミツキ。それも間違いではないが、純粹にバトル
だけを見ればその理論は的外れだ。

「トレーナーの総合力的にはそうなんだろうけど、バトルだけに焦点を絞ればその限りではないって事。悔しかったらハウを三匹以下で倒してみやがれ」

「うるさいー！ ばーかばーか！」

「ケンさん……そこは素直に褒めてあげたらいいのに」

凄いとさえいえるのか。異なるタイプ、異なる生息域、異なる食性。それらを正しく理解して、管理し、必要に応じポケモンに与えることが出来るというのは、やはり凄いやうに感じるのだろう。

ただ、それは凶鑑や生息地で判断できる簡単なものだ。ポケモンも当然ながら個体差があつて、ポケモンによって、過ごしやすい環境や好みも当然異なる。それは種族によるものもさることながら、ポケモンの性格によっても変化すると考えている。

例えばシルキー。ファンシーな容姿にフェアリータイプとゴーストタイプを併せ持つ、この愛らしい生き物に付随するイメージは、暗がりや廃墟で慎ましく暮らす恥ずかしがり屋で寂しがり屋、というのが一般的だろう。

ミミツキユという種族が持つ、ピカチュウの擬態をしているという逸話もそのイメージを作るのに拍車を掛けている。好きなものはスィーツで、いつも友達募集中のボツチかわいい存在。それがイメージの中でのミミツキユだ。

だが、シルキーはイメージとは全く異なると言つてもいいだろう。

性格が意地っ張りなおかげで辛いもの好きであり、ハルジオンと同じく『暴れることが好き』で腕に自信もあるため、街中を白昼堂々我が物顔で歩き回り、喧嘩っ早く、才能に満ち溢れているためか選民意

識もプライドも高い。それがシルキーだ。

気を許した相手や実力を認めた相手には、フェアリーでラブリーな一面を見せるが、道端の子供等に絡まれようがそんな一面は一切見せない。息をするように子供相手にシャドークローで威嚇するし、ライチさんも撫でようとした手を払われていたし、これは相当なものだな。どうしてリーリエには懐いていたんだろう。天使だからか。Q
E D.

邪智暴虐の女王が近くにいるせいで随分と霞んで見えるが、真の問題児はこの子かもしれない。

他の一般ポケであるニシキとシーザーは、お互い性格が陽気で、気も合う仲らしく、食べ物好みも甘い物と凶悪な顔付きに似合わないものだ。シルキーとは違い強大な身体を持つ彼等は、自身の持つ力の影響を理解しているのだろう。

持ち前の性格もあってか、和を尊び力を無為に振るわない。なんとなくか、大人だ。最終進化形という事もあるのだろう。時々激しい撫で撫でを要求こそされるが、大人だ。出血すれば心配そうな顔をしてくるため、対鮫肌用グローブもライチさんのオススメお揃いを買った。

この二匹とは対照的に他のポケモンに喧嘩を売るシルキーを、身体を張って止めようとしたシーザーが、逆に戯れつかれて返り討ちに遭う光景をコニコシテイではよく目撃していた。街を離れる頃には、逆にシーザーが子供たちの人気者になっていくくらいだ。仕方がない、カッコいいし……ちなみに俺は、ガブリアスよりフライゴン派だが、泣かれると困るので言っていない。更に言えばテテフよりサーナイト派だが、殺されるので言っていない。

このように、ポケモンに付随するイメージのみで育成するには不十分であり、ポケモンを個別に見ていく事が肝心だろう。勿論、シルキーは昼より夜が好きだし、相応の才覚とプライドがあるシーザーやニシキも、同格相手に対する闘争本能は人一倍に大きい。どちらも彼

等の一面だが、そののみを見て育てると大きく歪みが生じる。

伊達に15年もポケモンをやっているわけではない。最近になって、この世界での育成というのは、性格に応じての味の好みやフレーバーテキスト等、昔からポケモンをやっているものとして最低限の知識が最大限に振るわれると言っても過言ではないと理解した。

ただ、テキストで表示されるゲームとは違い、個々の性格や、個性まで正しく把握するのはやはり難しい。今でも、ニシキの個性が臆げで思い出せず、『昼寝をよくする』か『ちよっぴり見栄っ張り』のどちらかで迷っている。色違いでもあるためか少し見栄っ張りな面もあるが、『昼寝をよくする』シーザーと一緒にいるせいで見分けが付かないのだ。誤差だが、その違いが何れ役に立つ可能性もある。

ちなみに『暴れることが好き』『昼寝をよくする』という文面は、通称個性と呼ばれる。個性とは、ステータス画面で確認できる、そのポケモンの最大個体値を表したものであり、その最も高い個体値を5で割った余りで決定される30種類のフレーバーテキストだ。

つまり、ゲーム内で覚えていても何の意味も持たない要素なのだが……この世界は違う。行動原理が見て取れるのは非常に有利であるし、ある程度の才能がありそうなポケモンも目星が付く。ゲーム通りなら。

個体値のHHPA攻撃B防御C御特攻D特防S素早さどこかにV(32進数の31番目)が付いているのであれば、テキストは余り1のもの6種類に絞られ、最大個体値の数……Vの数が多ければ、その範囲でランダムに決まる。C抜け5Vのニシキであれば、『イタズラが好き』以外の5つからランダムに選ばれる訳だ。

逆に言えば、その個性に当てはまりそうなポケモン或いは従えている人間を見つけてさえしまえば、味方に引き入れるもよし、警戒する

もよしで予め手が打てるようになる。まあ前述も言った通り、こんな小細工する必要も無いため誤差だが。

ただ、1余りの数字は31だけではない。昔は準伝の乱数調整が成功したかどうか、これを基準にやっていたから良く身に染みているが、5Vつばい個性の記述があつて成功したか!?!と思つたらクソ個体でしたってオチになりかねない。なんで初期seedが5つもあるクソゲーを出したんだ……まあ次回作から乱数調整自体消え去つたけど。

個性のみで判別すると、このように最大個体値が16とかいうゴミもヒットする事になるため、決定打としては薄いけど、やたら強いモブが今後障害になる可能性も否定できないため、頭に入れておいて損はない。

結局、何が言いたいかつて言うと、ミツキがそのあたりの伏せられた情報を正しく汲み取つているように見えるのだ。

見えるというだけで確証はないが。

例えば、ミツキのジュナイパー。あれは多分『物音に敏感』なタイプだろう。訓練中、気配察知に優れているなあと思つてはいたが、大きな物音に過剰に反応しているように見える。

そういった面を見て、ミツキはよく、ジュナイパーには周りの音を良く聴くようにと指示を出す。死角からの攻撃やフェイントは、全体を見れるトレーナーはともかく、戦っているポケモンは気付きにくい。

一人称視点^Fと三人称視点^Tの違いみたいなものだ。ポケモンが攻撃に気付いてくれると、その分指示も通りやすくなりラグも少なくなる。

これがミツキの強い秘訣だろう。ポケモンに与えるマラサダの味がポケモン毎に違うのを見るに、おそらく性格や好みも大凡把握して

いると見た。ハウも負けてはいないが、それでもミヅキにはやはり勝てない。

これが天才見えているか努力家見えていないかが判断付かないため、おいそれとホイホイ褒めるのは憚られる。というのが心情だ。

「はいはい、すごいすごい。やっぱり天才は違うなー」

ただし、リーリエに褒めろと言われてしまえば掌を返すのは造作もない。手首は水を得た水車の様に回るだろう、原動力はリーリエだ。

「いや棒読みすぎ。もつと気持ち込めて！ もつと！」

「流石はミヅキ、様々なポケモンを使いこなすなんて、なかなかできることじゃないよ。さすみづ」

「最後ので確信したわ、あんた絶対褒めてないでしょ！」

「……ポケモンをよく見ているとは思う、それは素直に評価しているよ」

「ツンデレかよー」

ポケモンの世界にツンデレという概念があったのか。ハウでも知っているとおれば、最早それは常識と変わりないだろう。

「分かればいいのよ分かれば。そのまま天狗になっているあんたの鼻をへし折ってやるんだから！ 行こうハウ！」

「えー待ってよー」

声高らかに宣言したかと思つたら、ハウの手を引いて何処かに行つてしまった。大方、バトル後ではあるしポケモンセンターだろう。

「俺らも目的地に行くとするか」

「そうですね。図書館で情報収集でしたっけ？」

マリエシテイには大きな図書館があり、そこで本来の主人公はハプウやアセロラと出会う。ハプウは未来の島クイーンであり、アセロラは未来の四天王である。どちらも強力なNPCだ。顔を繋いでおいて損はないし、何よりハプウは、あのがんばりーリエの産みの親でもある。是非、りーリエに言わせるためにも顔合わせをしておきたい。

「カプ神について、少し知識が足りてないからな。問題ないとライチさんは言っていたが、カプ・テテフが不在のアーカラ島がどのような状況に置かれているかも少し知りたい」

表向きの理由はこれだが、あながち間違いでもない。ウチの邪神が神を滅ぼしてしまったのは事実なので、その尻拭いは主人である俺がしないといけないって訳だ。傍観者ではいられないのなら、自分の状況を知るのにはなるべく早い方がいい。

ハルジオンがボールから出てこないのも不気味だ。おそらく自分の縄張りではなく、カプ・ブルルの領域であるからおいそれと出てこられないのだろう。他のカプ神と顔を合わせることを当面の目標にするか。百聞は一見に如かずとも言おうし。

「あ、あつちに図書館があるみたいです。早速行ってみましょう！」

自然な感じで、りーリエに手を引かれ、その勢いのままに腕を組まれる。ふと、隣にいる天使の顔を覗き込めば、恥ずかしそうに顔を赤らめ、はにかんでいる。幸せだ。身体が縮んだおかげで身長差無いか

ら顔が近い。もう告白とかやってないけどもう恋人みたいなんだ
ろこれ。最高すぎる。

こんな時間が、ずっと続けばいいのに。

古代のプリンセス。

マリエシテイの図書館は、それはもう大きなものだった。アローラ随一を名乗るだけのことはある。

表向きの目標は本探しだが、人脈作りのためにも人探しをしなければならぬ。ハプウはともかく、アセロラを懐柔するのはクチナシに対して非常に効果がある、と踏んでいる。

クチナシは、ウラウラ島の島キングだ。しかも元国際警察でハンサムの同僚という立ち位置もあり、ウルトラビーストに対して浅からぬ因縁がある。恐らく、アローラで怒らせてはいけない人の一人にランクインするだろう。最悪消される。

それに、アセロラはリーリエに負けず劣らず、可愛いのである。そう、可愛いのである。可愛いは正義。異論は認めない。

正直言つて、雨宿りイベントまではアセロラに気持ちが悪くはない。くらいには好きなキャラクターだ。ポケモントレーナーとしての質も高いため、いざと言う時は戦力になり得る。仲良くしておいて損はないだろう。というかお近付きになりたい。

「じゃあリーリエ。俺はカプ神について調べてくるから、後で……そうだな、2時間後に入り口で落ち合おう」

「分かりました。わたしはウラウラ島について色々調べておきますね」

リーリエは今後の冒険のために、島全体についてある程度の目星を付けておきたいと言っていた。あの口ぶりだと図書館内に収まらず、外での聞き込みも行うつもりだろう。少し心配だが、まあメラルバが

いるし大丈夫か。

リーリエのメラルバ、ミヅキのジュナイパーを追い込めるスペックがあるからな。リーリエの経験不足が否めないが、あと数手あれば確実に瀕死まで追い込んでいただろう。もう進化前の範疇を超えているし、進化の日も近いのかもしれない……進化するのLv59なんです、ここゲームの世界じゃないし例外もあるんだろうきつとそう
だ。

そんじよそこらのポケモンだと概ね歯が立たないし、ルザミーネから念願のライブキヤスターを貰ったので、緊急の際は連絡が取れるから安心か。連絡が取れない状況にあっても、互いの位置情報が分かるという優れものらしい。もうミヅキのストーキングをしなくて済む。

「じゃあケン。一緒に色々見て回ろっか」

「あい」

リーリエの心配をしなけりばならなくなつた元凶が、先程までリーリエの組んでいた腕にピタツと張り付いている。リーリエと図書館デートに洒落込もうとしていた矢先、カプ神を調べるならカプ神と一緒にの方がいいじゃない、という謎理論をかつさげて勝手にボールから出てきた。

いや、自分のやってきた数々の所業を暴かれようとしているって時に出てくるか普通……と考えたが、勝手に自分のスマホとパソコンのストレージや検索履歴を弄る輩が現れたら、どれだけ恥ずかしくとも、本当にヤバイものを見つけたら、邪魔したくもなるかと一人納得した。いや別に昔サイトに投稿したポエムとか昔好きだった子の隠し撮り写真とかそんなの無いけど。

結局のところ、どう足掻いても邪神からは逃げられないし、色々補

足とかしてくれると助かるから合理的だと割り切った。諦めているとも言う。

図書館内に足を踏み入れると、本特有の匂いが鼻をくすぐる。この世界では初めて嗅ぐ匂いだ。中は湿気防止の為に空調がよく働いており、日差しの降り注ぐ常夏の外と比べると天国のようだ。

記憶が正しければ、アセロラは上の階にいるだろう。アセロラと前にハプウと遭遇する筈だったのだが、ここまで会うことが無かったということは、何処かですれ違っている可能性が非常に高いという事だ。会っていないキャプテンも多いし、ハプウは島クイーンとして、ストーリーにガッツリ関わってくるのでいずれ何処かで会うだろう。今はそれよりもアセロラだ。

二階には、アローラと守り神の歴史について記載のある本が並んでいた。粗方の歴史を探るには十分の量だろう。

ふと見渡すと、フロアの隅に継ぎ接ぎだらけの服を着た女の子がいた。間違いない、アセロラだ。

「ちよつといいかな」

腕に纏わり付く自己主張の激しい邪神を無視して、アセロラに話しかけに行く。悪いなハルジオン、これには深い訳があるんだから腕を捻り切ろうとするのはやめてくれないかな。

「うん？ どうしたの……って、本当にどうしたの？」

「いやあ気にしないでくれ。それよりこの邪神とカプ神、あとは島に伝わる伝説や伝承について教えて欲しくってさ」

「邪神って言った！ アタシのこと邪神って言ったわね！ もう言わないって約束したのに!!」

喧しい。念波が不特定多数に届くせいか、周りからの注目度が半端じゃない。図書館ではお静かについて習わなかったのかな？

「あの……どういふ状況か分からないけど、そこにいるのカプ・テテフだよ？ どうしてウラウラ島にいるの？ おにいさんはだれ？ どうしてアセロラに聞いたの？」

アセロラからは疑惑の目……というか困惑したような顔をしているな、仕方がないか。ただ、思ったより根掘り葉掘り聞かれるな。

「あー、君はアセロラっていうのか。よろしくね。俺はケン、訳あってカプ・テテフ……ハルジオンを捕まえてしまって、一緒にいるんだけどね、やっぱりお互いの事をよく知っておくべきだなって事でコイツについて色々調べにきたんだ。君に声をかけたのは他意はない……けど、何故か君の事が気になっちゃってさ」

「そっか！ アセロラのこと知ってて声を掛けたのかなって思っちゃった。おにいさん、ケンっていうんだね。よろしくね！ カプ・テテフの事だよ？ ……お父さんの本にも、カプ神についてとか、アローラの言い伝えについてとか書いてあったかも」

「そうなの？ アセロラのお父さんって凄い人なんだね」

「うん！ アセロラも、こう見えて昔凄かった一族の娘なの！」

えっへんと、無い胸を張る姿は隣の邪神を彷彿とさせる。

「それじゃあ、カプ神の言い伝えについて、どんな事を聞きたいの？」

「まずは……当たり前障りのないところから始めようかな」

アセロラも思わず苦笑いを浮かべる。お互いに、腕に絡みついている神の視線を無視することは出来なかった。

分かってはいたが、やはりロクでもない神様だなこいつ。

カプ神が伝説のポケモンから力を授かり、島の守り神として数百年も前から君臨しているとの事だが、今に至るまで結構な数の、それも大規模なコミュニティをぶっ壊している形跡があり、それはアーカラ島内に留まらないところがより恐ろしい。

ポニ島はその影響か、それともレヒレの排他的主義があるのか分からないが人口が減ったまま元に戻らないようだ。合掌。

コケコは人と関わる事で成長を促したが、テテフは再生能力という強力な力を与えこそしたものの、結果として滅亡しているようで草も

生えない。

どの時代でも畏怖の対象だったのだろう、好奇心旺盛で、人と関わろうとするカプの中でも一際悪質な神様としての記述が多いものが目立つ。レヒレのように人を避けるか、ブルルのように無関心であれば人も安心して暮らせたものを。

ただ、アセロラと一緒に顔色を窺いながら話をしているが、どれについて話してもドヤ顔なのだ。地雷があるのか心配するだけ無駄だったが、こんな倫理観を持つ危ない力を持つ奴と、これからも付き合わされる事を心配しなければならなくなった。最早コイツが地雷そのものだろうと考えたが今更だったな。

尚、文献の一部から、元気の出る粉に依存性と副作用がある事が発覚したため使用を厳禁とした。何だよ身体が変化に耐えられないようになり死ぬって。どんな死に方だよ。

いきなりバラバラになって死んだりしないよなど、ハルジオンに問いかけても顔を逸らされるのでこの話はやめた。

話を変えるべく、今度はアセロラの家系について話をしていると、見知った顔が階段から登ってきた。

ミヅキとハウ、そして先程別れたリーリエだ。

「ケン！ まさか、リーリエを放っておいてナンパした女の子とデートってワケ？」

「うわー、これはちよつとなー」

「ふーん。ケンさん、随分と楽しそうですね？」

おかしい。まだ一時間程度しか経っていない筈だが……と考えて

みて、思い出した。それもそうだ、ハプウに会うのも、アセロラに会うのも『主人公』だった。俺ではない。

となれば、ミヅキと一緒に図書館に来て何らおかしい事はない。

おかしくなるのはこの後の展開だろう。心なしか、別れる前までなんにも澄んで綺麗だった、リーリエのエメラルドのような瞳が濁りきっているように見える。

こういう時に限って、ハルジオンは何も言わずに傍観を決め込んでいるのが腹が立つ。とにかく、この場を凌がねば。

「違う。誤解だ。弁明させてくれ頼む」

「え、アセロラもそこまで言われると傷付くなー」

「余計に話がややこしくなるから止めて!」

ヤバイ。見られてやましい事は無いが、拗らせると後の関係にヒビが入る。ここは何としても誤解を解かなければ。

「でも、ケンにはアセロラのこと、気になって声をかけたって……今思えば、ナンパだったのかな? えへへ、ナンパされたのって初めてだったけど、悪い気はしないね!」

「待って。違いますリーリエさん、よく聞いてください。彼女は古代の王族の末裔であり、アローラの歴史について深い知識を持つ方なんです」

「へーそうなんです。でも、ケンさんだったら一人で探せますよね?」

ジト目のリーリエ。蛇に睨まれた蛙の気持ちが痛い程分かった、これは動けない。

「どれだけ時間が掛かってもいいなら探せるけど、流石に短時間じゃ無理だ。詳しい人に話を聞くのが手っ取り早いし、本にはない事も聞けるかもしれない」

「ふーん。あくまでそのスタンスを変えないつもりなのです。今なら謝れば許してあげますけど」「すみませんでした」

「はやっ！」「認めちやうのかー」

頭を下げるだけで許されるならば安いものはない。もう何故謝罪しているのかすら分からないままに首を垂れているのだが、後悔は何一つとない。

「認めてない！これは、誤解を招く行動を起こした事に対する謝罪ですので悪しからず！」

「ここまで酷い開き直りっぷりは逆に尊敬するわ」

「レアだよねー」

この外野共そろそろ黙っててくれないかな。

「いいでしょう。許してあげますけど、条件があります。わたしも同席してもよろしいでしょうか？」

「全然いいよ。アセロラもいいか？ いいよな！」

「うーん。別に良いケド……なんか複雑」

「……チツ」

よしよし。そもそもこの流れこそが原作通りのものだ。ここでアセロラとリーリエに、是非とも仲良くして貰わなければなるまい。悔しそうなハルジオンを見て、リーリエもある程度状況を理解し始めたみたいだし順風満帆だと言えるだろう。

「はじめまして、わたしはリーリエです。ケンさんには何時も非常に良くしていただいています、今日はよろしくお願いしますね?」

「あたしはミツキ! こっちはハウ! 二人で島巡りしてるよー!」

「ねー、おれにも自己紹介させてよー」

「古代のプリンセス、アセロラちゃんだよ! みんなよろしくね!」

図書館に似つかわしくない、少し騒がしい雰囲気だったが、周りにはハルジオンとアセロラの時点で全てを諦め、二階から消えていたので問題はなかった。後で謝っておこう。

庭園の思い出。

和気藹々とした時間は、ミヅキとハウがホクラニ岳へ向かってしまつてから一向に訪れない。

どうしたものか。俺の脳内予測だと、このまま百合ーリエ展開に突入しキヤツキヤウフフな状態になり、俺は二人を見守る観葉植物となる。そんな演算結果が出ていたのに。

実際は何故かクイズバトルへと突入。これもまた何故かりーリエがアセロラに対抗心を燃やし、アセロラも負けじと対抗する中、ハルジオンが見ていてつまらないのか時々発作のように騒ぎだす。カオスだ。せめて俺を間に挟むのをやめろ。

「……じゃあ、ポニ島にある祭壇の名前は「日輪の祭壇！……ですが、そこで必要なアイテ「月と太陽の笛！」はい、ありがとう二人とも」
どうして早押しクイズみたいになっているんだ。クイズ形式にするにしたって、出題者はアセロラにすべきだろう。何故俺が、問題を出す役になつてるんだ。

「……中々、やりますね、アセロラさん」

「ふう、リーリエちゃんも……凄いね、よく、勉強してるよ」

そして何故、アセロラから教えてもらうより多く、リーリエが回答しているんだろうか。もう本来の趣旨から大きく脱線しているのだが。

リーリエが回答できるという事実について考えられるのは、俺がいないところで勉強していた以外に無い。コスモツグについては一任してくれているとばかり思っていたが……流星はリーリエだな。自

覚の塊だ。

ただ、今は発揮するタイミングではないだろう。素直にアセロラの話聞いてくれ。

「今回は、引き分けですね」

「ふふ、次は負けないんだから!」

リーリエと、アセロラに友情?が芽生えた!

先程までの冷え切った果たし合いのような雰囲気とは打って変わって、ガシツと、熱い握手で幕を下ろしたこの勝負。必要かどうかで言えば、恐らくは必要だったのだろう。結果的にだが、リーリエとアセロラの仲は想定よりも深まった……のか?

「……ようやく、月と太陽の獣の秘密に迫れたな。キリもいいし、そろそろ昼飯にしようか。アセロラもご馳走するよ」

「ケンさん、やっぱり手慣れてますよね?」

「ナンノコトカナ」

「うん! アセロラお腹すいたー!」

うんうん、アセロラちゃんは純粹だなあと頭を撫でてあげていると、ミシリと骨の軋む音と共に、右腕が微動だにしなくなった。この感覚は久方ぶりだが、やっぱり慣れないし痛い。

「アタシのことを忘れて、三人で楽しそうにして良いご身分じゃないの?」

「いやいやいやいや、楽しんでたのは主にこの二人で……」

「クイズ、楽しそうだったなー」

「……ハルジオン向けに用意してやるから、今度でいい？」

「やったー！　ありがとね、ケン」

あのディープキス事件以降、リーリエとの行動を再開してからは、ハルジオンの感謝の言葉を良く聞くようになった。また別の誰かの入れ知恵か、あるいは心を入れ替えたのかは知らないが、悪い傾向ではない。未だにナチュラルに脅しをかけてはくるが。

「ケンさん、私も挑戦してみてもいいでしょうか？」

「勿論、クイズはみんなで楽しまないとね」

「アセロラはー？」

「はいはい」

特にやる事もないし、殿堂入りした後は祭りでクイズ大会でも開いてみるか。少しでも色々な情報を集めておくに越した事はないからな。

「それより、どこに食べに行こうか。マリエシテイには有名な懐石料理の店があるみたいだが」

「女の子とのデートに、そこを選ぶのはちよつと……」

「あそこ美味しいけど、地味なんだよね」

「甘い物以外はイヤ」

女性陣のダメ出しが酷い。マリエシテイの似非日本食レストランは、あのクチナシが通う程の場所だというのに……そもそも、ゲームの記憶しかない俺は、この街のレストランなんてそれ以外知りもしない訳だが。

「仕方ないなあ、じゃあアセロラとリーリエで決めていいよ。アセロラは現地人だし、リーリエはリサーチしてきたんでしょ？」

「わかりました、任せてください！」

「いや、ここはアセロラちゃんオススメのカフェがいいよ！」

「いえいえ、せっかく私がケンさんの為に観光地を調べてきたのですから」

「いやいやいや、アセロラのほうがマリエ歴長いから任せてって」

ヤバい。新たな火種を放り込んだ気がする。と思った時にはもう遅かった。庭園の景色を見ながら茶をしばくか、今風の店でパンケーキを食べるかのバトルが勃発している光景から目を逸らすと、邪神と目が合った。

「ねえ、アタシには聞かないの？」

「アーカラ島ならともかく、お前完全なアウエーじゃねえか。今回くらい大人しくしてろ」

「ぐぬぬ……」

随分と悔しそうだ。まあリーリエが勝とうが、アセロラが勝とうが、ハルジオンの希望は概ね叶う。というより叶うように場所を選んでくれているのだろう、二人ともいい子だ。

「パンケーキなんて何処でも食べれます！　せっかくケンさんとのデートなのに、ありきたりな場所に行くななんて考えられません！」

「何処でも食べれないよ！　マリエシテイにしかこのお店無いし、そんなジョウトのパクリみたいな場所に行くならこっち！」

……いい子、だよな？

数十分の議論の末、リーリエが決めた茶屋へ行く事になった。それでもパンケーキを諦めきれないアセロラには、後日一緒にパンケーキを食べに行く約束をさせられたので、もう初めからこうしておけばよかったのと思いました。まる。

マリエ庭園は、日本人にとって感慨深い場所でもある……かのように思えたが、そもそも京都や奈良にでも住んでいない限り、そんな懐かしさを覚えるような所ではなかった。最早ただの観光地と同レベ

ルである。

それでも、やはり根は日本人なんだろう。少しだけ風情を感じる。確かに近所に寺や和風の建物が無いわけではなかったし、城も一時期通うくらいには好きだったし、何より草木の手入れがされていて庭園の名に相応しい。素晴らしいなここは！

その素晴らしい庭園の中央に鎮座するのが、今回のメインである茶屋だ。茶屋で昼食を摂るつもりとは聞いていたものの、あまりそういった店には縁が無かったため、イメージが団子と大福とおはぎしかなかったが、蕎麦や天麩羅などのオーソドックスな日本食も置いているようだ。

メニューを眺めていると、何やらボールホルダーが忙しない。どうやら、動いているのはセレスのようだ。そういえば、こいつは庭園産のポケモンだったか。俺と同じように、なにかを感じているのだろう。

リーリエに、ざる蕎麦と大福を注文するよう、言伝と財布を託して人気のない場所へと移動する。ハルジオンは当然のようについて来るのは止めない。言っても聞かないし、野良トレーナーとのバトル避けに使えるからと割り切った。もう今更だしな。

少し端の方に行くと、丁度良い広場を見つけた。ここらで良いだろう。

「ほら、おいでセレス」

「ふうん」

着地点に何もいない事を確認して、セレスを繰り出した。エーテルパラダイスで出すと、島が崩壊の危機に晒されるため、あまり最近は

出してあげられてなかったからな。ここらでゆつくりリラックスして欲しいものだ。

「ここが懐かしく感じるだろう？ セレスの前の主人と出会った場所だからな」

「……」

「あれ、どうした？」

「ねえ、セレスティーラはもうケンだけのものなのに、どうしてそんな事言うの？ 嫌いになっちゃったの？」

「は？ どうしてそんな事になる？」

何か不味い事でも言ってしまったのだろうか。

「前の主人の話なんてされたら、セレスティーラだって怒るよ。はやく謝って！」

「ええ……ああ、悪い。配慮が足りなかったな」

どうしてそうなるんだろう、別にただの思い出ではないのか。とうか怒っているのか？ 顔面が遠過ぎて表情が全く見えない。

「セレスティーラは、前の主人に捨てられてケンのところに来たのに、どうしてそんなデリカシーの無いこと言えるの？ 次言ったらアタシが許さないから」

結構本気で怒っているみたいだし、あまり出さない方が良い話題だったのかもしれない。藪蛇だったか……ただ、気になる事を言っ

いるんだよな。捨てられたって、ただ交換に出された訳じゃないのだからか。聞いてみたい気持ちもあるが、ここで何か言えばハルジオンに殺されそうだしなあ。

「分かったよ、悪かった。そんなに深い意味はなかったんだ、気にしないでくれ」

「……………ルウン」

セレスが、ブラスターで俺を抱えた。許してもらえたのだろうか。もし、許されなかったらどうなるのだろうか。

いつもセレスに乗る際、毎度のように差し伸ばされるブラスター。だが、もしもの事を考えると緊張が走る。攻撃力、質量共に子供一人軽く押し潰す程度の事なら朝飯前だろう。力加減次第で一瞬でミンチになる事だって考えられるし、空中で離されても落下の衝撃で死ぬ可能性だってある。

セレスは、いつもの様に十二単に乗せるのではなく、自身の頭に乗るよう、器用に俺を置いた。地上からおよそ9m、大体3階建の建物から見る景色と一緒だが、足場と柵が無いせいで恐怖度が段違いだ。

「ふううーん」

「ハルジオン、セレスは何て言ってるんだ？」

「撫で撫でして、だって」

ふわふわと、同じ高さまで浮いて来るハルジオン。諸刃の剣ではあるが、やっぱり便利だな。ポケモンの言葉を翻訳してくれるし、落ちた時はサイコキネシスで助けてくれる。少し恐怖が和らいだ。

セレスは、頭を撫でて欲しい……との事だったが、どこを撫でればいいんだろうか。手すり代わりに掴んでいる部分が角だとすれば、俺が尻を置いているところが頭だろう。

触ってみると、スベスベとした冷たい金属の感触が伝わってくる。これは撫でていると感じ取れるのだろうか。こんな巨体にこんな硬さを持っているのだから、蚊に刺された程度にすら感じないだろう。

「フーン」

あ、これは喜んでみるみたいだ。ということとは、撫でていると分かるのかな。こちらとしても少し嬉しい。最近はポケリフレ出来ていなかったし、落ち着いたタイミングで磨いてあげよう。

「一緒に散歩したいって」

「散歩か……まあ少しくらいならいいか。茶屋まで歩こう」

リーリエはともかく、アセロラはどんな反応を見せるだろうか。もし、いきなり巨大なポケモンの頭に乗って、さつき知り合った人がやって来たら……そもそも、高さが高さだから乗っているのが俺だと認識出来ない可能性もあるな。まあリーリエが指摘してくれるだろう。

セレスが進むべく宙に浮き始めた。ブラスターを浮かす要領で、短時間浮遊するくらいなら簡単にできるらしい。最初見たときは流星は飛行タイプだと感心した。これなら地震も当たらない。

しかし、改めて見回してみると、この高さからの眺めがとても良い。庭園を一望できるのは言うまでもないが、塔の造詣や塀の装飾など

の、地上からでは気付かないような細かい拘りも発見出来る。こんなに高い所からは普通見ないからこそ、新しいものが見えてくるというものだ。

セレスは、敢えて茶屋までの最長距離で進んでいるのだろう。庭園を一周する気満々だ。ハルジオンまで嬉しそうにしているし止める気も無いが。

しかし、どうしてUBと守護神という相入れないような二匹の仲がいいのだろうか。これが分からない。そういえば、積極的にセレスを外に出そうとするのもハルジオンだったし、皆が近寄らないハルジオンに積極的にじゃれあいを仕掛けるのもセレスだった……ハルジオンに喧嘩を売れるのはエルモとセレスくらいで、エルモは無関心が過ぎるっていうのもあるかもしれないが。

喧嘩する程仲が良いとも言えるだろうが、この二匹はそれ以上に信頼し合っている様にも感じる。いずれ理由を聞いても良いのだろうが、変な地雷を踏んでブチ切られるのも避けたいので向こうから言ってくるまで待つか。

セレスを撫で回しながら考え事をしていると、目下に赤い屋根の茶屋が見えてきた。どうやら、そろそろ一周してしまおうようだな。

茶屋の前までやって来ると、セレスがブラスターを器用に使い、地面に下ろしてくれた。楽しかったよとお礼を言ってボールへ戻し、リリー工達と合流する。

「待たせたな」

「……あれ、ケンのポケモンなの？」

「全く、目立ちたがりもいい加減にして下さい」

「いや、セレスが散歩したいって言うから……まあアイツ歩けないんだけど。それで庭園一周してきた」

少しお怒りのリーリエ。宇治抹茶味パフエを食べながらの説教は威力半減だと伝えてあげたい。ほっぺにクリームついてるから更に半減だな、可愛すぎて。

「もう、あんまり目立つと碌な事になりませんからね。ほんとに！蕎麦と大福置いてますから、早く食べましょう」

「何でそんなに怒っているんだ……アセロラ？　ずっとお口あんぐりしてるけど大丈夫か？」

「あー、さっきまで巨大なナニカが近寄って来るって騒いでましたから。面白そうだったので何も言いませんでしたけど」

悪戯が成功したかのようにクスクスと笑うリーリエ。小悪魔可愛い。流石にこのままだと可哀想なので、後で色々と話すとするか。

苦悩と葛藤。

お口あんぐりのアセロラちゃんには、事情を説明して早急に口を閉じてもらった。説明と言っても、特にウルトラビーストについて説明したり、何処からやって来たのかを教えたりはせず、ただ単にセレスがどんなポケモンかについての説明だ。

悪いポケモンじゃないよお、仲間想いの良いポケモンだよお、と懇切丁寧に伝えたことで、どうにか逃げられずに済んだ。そもそもリーリエが脅かさなければこんな事にはならなかったのに。お戯れが過ぎる。

ともあれ、アセロラとは無事に良好な関係は紡げた。リーリエとアセロラはライブキャスターの連絡先を交換できたし、明日以降はウラウラ島の案内をしてくれると約束してくれたしで戦果は上々だ。ついでにクチナシに挨拶出来ればパーフェクトってところか。

ちなみに、俺のライブキャスターで連絡先を交換しようとする、エラーが発生しましたとか、存在しないアカウントですとか表示されてしまい、終ぞ登録することが出来なかった。ルザミーネに文句の一つでも思ってたが、この端末にはリーリエの連絡先しか無いので文句を伝える事すら出来ず仕舞いである。リコールは大分先になるだろう。

まあリーリエと連絡が取れるだけでも十分に役割は果たしているし、機会があれば言ってみる程度で問題ないか。ただストーリー通りだとウルトラホールの向こう側に行く準備が整うまでは会えないし、そうならリコールどころじゃないんだが。

こうして説明の終わったアセロラとは、食事の後に庭園を散歩してそのまま解散した。早速明日パンケーキをご馳走になるとの事なの

で、明日はマリエシテイ内の散策になりそうだ。

散歩していて視線を良く感じたのだが、リーリエとアセロラ……確かに両手に花のシチュエーションだが、既に背中にラフレシア（ポケモンではない）みたいなもの背負っているようなものだし、普通に手一杯なんだよなあ。しかも、リーリエとハルジオンのプレッシャーで全然楽しくない。

ちなみにハルジオン（ポケモンではない）は貧乏草と呼ばれていて、引っこ抜くと貧乏になるとお祖母様が言っていた。処理さえ許さないとか普通に厄介だ。なんで語感だけで名前付けちゃったんだろう俺。

そんなこんなで、今はリーリエと二人でポケモンセンターのチェックインを済ませ、部屋で茶屋からテイクアウトしてきたカツ丼を食べながら、ゆつくりリーリエしているところだ。

リーリエとベッドに座りながら、同じご飯を食べる……ここまでの至福な時間があったか、いやない。同じ時間、同じ空間、同じ食べ物、同じ感情を共有しているのだ。何よりニコニコしながら食べているリーリエをここまで間近に見ることができるのが素晴らしい。

間近というより、最早ゼロ距離なんだが。もう肩がくっついてるんだが。というか太腿に手を置かれてるんだが。

最近というか、エーテルパライズ突入前からリーリエの距離が近い。最早恋人というかもうこれ付き合ってるんじゃないかってレベルだけれども、物事を焦りすぎるのは良くない。

「はい、あーん」

差し出されたそれを口に含めば、一層喜びに満ちた表情をするリーリエ。以前の様に恥ずかしがって顔を真っ赤にしないんだな、と成長してしまった娘を想う父親みたいなセンチメンタルな気分になってしまった。

リーリエとこんな幸せな時間を過ごせるのは、ここがウラウラ島だからだろう。アーカラ島では独裁政権を敷いていた邪神も、ウラウラ島では他のカプ神がいるため迂闊なことは出来ない筈だ。ありがとう、ウラウラ島。ありがとう、カプ・ブルル。出来れば永住したい。

だからといって、リーリエとの仲を急速に縮めるのもよろしくない。リーリエはおそらく、きつと俺の事を良く思ってくれているんだろうけれど、ここは心を鬼にして遠ざけねば、最悪リーリエを失いかねない。

ハルジオンもまた、並々ならぬ感情をこちらへ向けているのは承知の上だ。その上、ルザミーネの件は何一つ片を付けられていないのだから、ここで恋愛に現を抜かすと絶対に足元を掬われる確信がある。

最低でもハルジオンと折り合いを付けなければ、リーリエとハッピーエンドを迎える事は出来ないだろう。それまではどんなアップローチを掛けられようが、リーリエと一線を超えることは出来ない。鋼の精神で跳ね返さねばならないのだ。

とどのつまり、生き地獄である。天使とイチャイチャする地獄とはこれいかに。先人の幸せすぎて死にそうって台詞は、これの事を言っていたのかな。

「食事の手が止まっていますよ……ケンさん、また何か考え事していますね」

「俺はいつもリーリエの事しか考えていないよ」

嘘は言っていない。

「本当ですか？ とつても嬉しいですよ。わたしも、いつもいつでもどんな時でもケンさんの事を考えていますよ」

「はは、それは嬉しいなあ」

にへらとしたリーリエの幸せそうな表情を見ると、嬉しい悲鳴というか断末魔が心の底から湧き上がってくる気分になる。ここまです慕われても手を出せないなんて……ただ、ハルジオンの扱いも大事だからな。最悪皆殺しだし。

「うふふ。両思い、ですね！」

そんな心境を知ってか知らずか、というか絶対知らないリーリエは肅々と、詰将棋の如く心身共に距離を詰めてくる。

もういつそ全てを投げ出して駆け落ちでもしてやろうかとも考えた事はあるが、何度シミュレーションしても上手く行くヴィジョンが見えないから辞めた。

アローラでカプとUB相手に鬼ごっこをするのは分が悪すぎる。おそらく島キングクイン総出で俺を止めに来るだろうし、なんと今なら国際警察のオマケ付きだ、いい加減早く帰国してくれないかなあいつら。

「そうだな、両思いだな。嬉しいよりリーリエ」

「もう少し気持ちを込めて言ってください」

「あっはい」

怒リーリエもまた可愛い。久しぶりに見ればその可愛さも一入ひとしおである。

だが、少しからかいすぎたかもしれない。リーリエに俺のカツ丼をぶん取られてしまった。

「そういえば聞きましたよ。ハルジオンさんに『ごういう事』して貰っていたって」

リーリエがカツ丼を口に運び始める。

ヤバいと思った時にはもう遅かった。頬を掴まれたらもうあとは早業だ、もうされるがままで。

「……………ふふ、ふふふ。これでまた一つ、ハルジオンさんに追い付きましたね」

ハルジオンとはまた違った味わいの流動食だった。まあどちらも味なんて一切感じなかったが。

今まで目を背けていたが、そろそろ向き合わなければならぬかもしれない。もしかすると、もしかすればリーリエの方がハルジオンより危ない存在かもしれないと。

「では、次は何をしましょうか？」

いつもの輝かしいばかりのものとは真反対の、ドス黒く濁った翡翠の瞳に見つめられながらそう思った。

おそらく深夜に差し掛かろうかといったタイミングで、奴は現れた。気配を感じた時点で、もうアローラでコイツを止められるものはいないんだろうと全てを諦めたのだった。

「この小娘……調子に乗るのもいい加減にしたら？」

「ハルジオンさんも、そろそろケンさんに迷惑をかけるのはやめませんか？」

「迷惑なのはアンタでしょ！ そんなに密着すると、乳臭くってケンが眠れないじゃない！」

「ハルジオンさんが呆け老人のように夜な夜な徘徊するから、ケンさんも不安で眠れないんです！ ジョーイさんに後で謝るのはケンさんなんですからね、迷惑かけてないで早く戻って下さい！」

「アタシは迷惑なんてかけてない……そうよね、ケン」

「ここはハッキリ言った方がいいですよ、ケンさん」

訂正。コイツらを止められるものはもういない。

いつものようにハルジオンがジョーイさんを脅して、勝手にボールから飛び出して遊びにきたのはいいんだが……ベッドの中で、リーリエに絡め取られている俺を見て早々にブチ切れたのだった。

リーリエは俺を抱き枕にして、それはもう気持ちよさそうに爆睡していたんだが、ハルジオンが来た瞬間に即覚醒。そしてこの応酬である。常在戦場にでも身を置いているのだろうか。

まあハルジオンの行為も迷惑と言えば迷惑なのだが、妥協範囲ではある。怪我人が出ないからな。

「まあまあ。ハルジオンも何か大事な用事があるかもしれないし」

「ハルジオンさんの事ですから、ケンさんに会う以外に大事な用事は無いって言い切りますよ」

「よく分かってるじゃないの」

どうしてそこは息ピッタリなんだろうな。そして、どうしてハルジオンは少し嬉しそうなんだろう。理解者を得たつもりなのだろうか。そいつはお前を貶めようとしているんだぞ？

「ケンと遊びに行くのは大事な事なんだけど、ちよつとカップ・ブルルに呼ばれちゃって。せつかくだし一緒に行きましょー！」

なるほど、もう感知して接触を凶ってきたのか。流石は腐っても島の守り神といったところか、どこぞの邪神とは大違いである。

「カプ・ブルルか。温厚でものぐさだが、怒ると手がつけられなくなるってアセロラが言ってたな」

「それって……ケンさんを連れて行っても大丈夫なんでしょうか」

「大丈夫、余裕よ」

少しの迷いすら見せずに、ハルジオンは言い切った。

「だって、アタシはケンと一緒に戦い続けてきたんだもの。猿山の上で踏ん返り返っている奴に負けるわけないでしょ……アザレアくらい強かったら、ちよつと自信ないけど」

アザレア。俺が育てたカプ・ブルルのニックネームだ。確かにLv100だし、グラスフィールド下での意地っ張りA極振りから繰り出されるタイプ一致ウッドハンマーは、ハルジオンのサイキネより火力指数は上だ。

ただ、草タイプは技の通りが悪くフェアリータイプの相性補完も微妙で、ブルル自体の種族値が遅めなものもあってハルジオン程の活躍は出来ない。

まあ遅いからといって、トリックルームやスカーフを使えば何とでもなるのがポケモンバトルの恐ろしいところだが。コイツで3タテした時の爽快感は何者にも変え難い。

「アザレアもハルジオンも、俺が鍛えたからこそその強さだ。それに圧倒的優位に立ってるセレスもいるし、あまり心配は要らないだろう」

フェアリー、草共に半減以下に抑えるセレスは、カップ・ブルルの天敵と言っても過言ではないだろう。セレスの宿木の種こそ通らないが、適当にヘビーボンバーか火炎放射を撃っているだけで倒せる。レベル差があれば尚の事だ。

「そこまで安心なら、わたしも付いて行っていいみたいですわね」

「え」

「ダメ！ 絶対に連れてってあげないんだから！」

「器が小さいですね、それではケンさんを受け止めることは出来ませんよ。」

「器が小さい？ 馬鹿ね。生憎だけど、ケンだけのスペースしか用意していないの！ 他はどうでもいいんだから！」

「そういうところで、ケンさんの評価を落としていると気付けないなんて哀れですね」

「ぐぬぬぬぬ」

売り言葉に買い言葉。何度か言葉のキャッチボールならぬドッジボールを繰り返したところで、ハルジオンが折れた。

「そこまでして、どうしてリーリエは付いて来たいんだ？」

「ケンさんと少しでも離れたくはないので」

なんだろう。逃がしませんよとでも言いたげなこの目に、少しだけ恐ろしいと感じてしまった。この流れはよろしくない、話と空気を交

えよう。

「ハルジオン。俺だけじゃなく、リーリエまで連れて行けるのか？」

「ちよつと待つててね……………よし。カプ・ブルルをこっちに呼べたわ。これで移動しなくて良くなったね」

衝撃の発言だ。どこの世界に、謁見を命じた王を呼び出す奴がいるのだろうか。横暴にも程がある。

「それでいいのか……………」

「さ、流石はハルジオンさんですね。逆に呼び付けるだなんて」

随分と強気だが、本当に大丈夫なのだろうか。怒っていたら困るし、取り敢えずはセレス達を回収してくるか。ついでにジョーイさんにも謝罪しなきゃだしな。

がんばりーリエのすがた。

ものぐさと言われては、思っているよりも大分早くカプ・ブルルは現れた。夜中とはいえ、流星に街中へ呼ぶのは不味いだろうと地域住民の考慮をした結果、集合場所になったのはマリエシテイの外れだ。

ハルジオンの、来たよ。という声に反応し、気配を感じて上を見上げた。

「カプウブルウ!!」

目の前にいきなり現れたカプ・ブルル。上空から勢い良く着地したせいか、砂煙が周囲を覆う。まさに降臨、といった感じだ。

カプ・ブルル。初めて見るハルジオン以外のカプ神で、嘗てポータウンと巨大スーパ―を壊滅させたとされるウラウラ島の守り神だ。ハルジオンが近くににいるせいで感覚が鈍っているのかもしれないが、それでも守り神としての底知れない生命力が肌越しに伝わってくる。

少しでも気を緩めれば、こちらがやられるかもしれない。後ろにはりーリエも控えているのだし、油断せずに行こうとセレスのボールに手をかけた。

とりあえず何を言おうか。まずは来てもらった事への礼が必要だなと、

「遅いわ、いつまで待たせる気?」

「……ブルフ」

そんな事を考えていた束の間に、深々とハルジオンに頭を垂れる守り神の姿が。

「こっちのブルルは随分と鈍臭いわね、アザレアとは大違い。そんなんじゃカプとしてやってけないかも……情けないアンタごと、アタシがこの島を滅ぼしてくれようかしら」

「ぶるっ!?!」

「ふん、冗談よ……でも、ケンがやれと言えば話は違うけどねー」

どーする？ 処す？ と物騒な事を言いながら、愛らしい笑顔で頬擦りをしてくるハルジオン。目の前のブルルが絶望したような顔しているんだけど。潤んだ目でこっちをみているんだけど。想定していた守り神と少し掛け離れているんだけど。

「……やめろ、ハルジオン。カプ・ブルルが困ってるだろ」

「いいのいいの、困らせといて。もしアタシに逆らったら、アーカラ島のお仲間と同じ末路を辿らせてあげるわ。だから決して、ケンに粉をかけない事ね」

「ブフ……ブフ……」

先にお前がああ危ない粉をかけるのをやめろ、と言いたくなくなったが今は関係ないので黙っておく。

「うんうん、分かればいいの。後、この島で色々やるかもしれないけど多少は大目に見て、干渉は控えてよね。アタシからはそれだけだから」

え、終わり？　そもそもその言い方だと、まるでハルジオンが呼び出したみたいな言い方になる。

「いやちよつと待て。カプ・ブルルに呼ばれたんじゃないのか？」

「え、そうだけど……コイツはアタシがウラウラ島を襲いに来たんじゃないかと勘違いして、話せば分かるってテレパシーを飛ばしてきたの。それで、一回顔を合わせよっかって事になって、どうせだし持て成しますよって呼ばれてたわけ」

あれ、俺が思っていた呼び出しと何か違う。呼び出しと言うより、お呼ばれされたって表現の方が正しそうだ。

「でも、ケンがどうしてもって言うからさー。持て成しはいいからこっち来いよって呼び出したの」

「型破りがすぎる」

向こうの用意を全部ぶっ飛ばしていく事を許されるのは、流石ハルジオンとしか言えない。俺がもしブルルだったらブチ切れて怒りのウッドハンマーを決めかねん。

だが、そこまで大事になっていないようで安心した。アーカラ島でハルジオンがやった事は、完全にカプに対する挑戦と取られても仕方がない。ブルルのように話し合いで解決してくれる分には平和的で良いんだが、奇襲や騙し討ちなどをされようものならたまったものではない。守り神同士、是非とも仲良くして欲しいものだ。

「それでは、もうお話は終わりですか？」

俺と同じく、ただ傍観しているだけだったリーリエがようやく口を

開いた。リーリエもカップ・ブルルに拍子抜けしたようで、少し呆れ顔だ。

「みたいだな。それじゃあ、わざわざ来てくれてありがとうカップ・ブルル。出来れば、これからも良好な関係を築きたいと思っているよ」

「だってさ。良かったね、アタシと夫が寛大で」

「ぶもう!!」

「アンタさつきからテレパシー使わないの、人間だからって舐めてるの？ケンが何言ってるか分からないじゃない」

「すみませんでした」

全然寛大でもないし、お前の旦那でもない。というか図体の割に可愛い声だな、男だと思っていた。守り神に性別なんかないけど、イメージ的にだ。

「いやほんと、気にしてないから大丈夫。もしアーカラ島の島キングになったらよろしくな」

「はい！ よろしくお願いしますう！」

「ふふん、分かればいいのよ」

大仰に頷く守り神と、ドヤ顔で胸を張る邪神を見て、この先大丈夫なのだろうかと不安になった。

(利用価値があればと思いましたが、アテが外れましたね)

昨日カプ・ブルルがマリエシティに来た事は、街の様子を見るに、まだ誰も気付いていないようだ。唯でさえハルジオンのせいで目立っているのに、これ以上何かあれば田舎特有の排他的事勿れ主義が炸裂してウラウラ島に居辛くなる。

まあ、居辛くなるだけで用事が終わるまで普通に居座るんだけどな。ここでアーカラ島の守り神様を盾に、自由に動けるのは普通に助かる。ただその後が大変そうになるので、あまり角の立つような動きは控えるが……セレスの件は反省していない。あれはフラストレーションを溜めて暴発されると困るからやった事だ、自分の命に関わるからな。

それに比べて、エルモは少しもボールを揺らさない。嫌なまでに静かで、風のような沈黙を貫いている。全てを受け入れるかのような姿勢は、絶大な信頼を得ているのか、はたまた微塵も信頼されていないのか……後者は有り得ないとして、やはり向こうから言い出さずとも出してあげるべきか。

ああいう肝臓みたいなタイプは、様子がおかしい事に気付いた段階で既に手遅れだからな。

「ケンさん、この服はどうでしょう？　最後の一着と言われて、少し迷っているんですが……」

危ない危ない、考え事で目の前の事象を見逃すところだった。これ一番取り返しがつかなくなるからな。

リーリエが昨日気になった服をもう一度見たい、という事で、アセロラと一緒にブティックへと向かったのだが……まさかのあの服だった。

リーリエの少し気合の入った服とポニーテールを見て、そういえばあのイメージチェンジ用の服は、ここで買うんだったかと思いついた。主人公たちには内緒で、先行お披露目という訳だ、役得である。

今日は珍しくハルジオンが出て来ないので、ゆっくり落ち着いて楽しめそうだ。隣でリーリエの披露宴を見ていたアセロラも、興奮を隠しきれないといった様子である。

「良いじゃん良いじゃん！　リーリエかわいいよお！」

「アセロラさん、ありがとうございます。ちょっとわたしのイメージとは違うから、少し不安だったのですが……ケンさんはどう思います

か？」

「ああ、いつものお淑やかなりーリエとは少し違うとはいえ、そういうハツラツとした姿もまた新鮮で良いな。髪もこの服に合わせて結ったんだろ？それも含めて良く似合っていると思うよ」

「えへへ、ありがとうございます」

顔を赤らめて笑うりーリエ。可愛い。まありーリエは既に完成されたkawaiiであるので、別に何を着ようが似合わない訳がないんだが。

もう可愛ければ何でもありという風潮さえある。可愛い女の子がダサイ格好していても、それはギャップを生んでダサ可愛いという新たなジャンルを生み出すのだ。

「じゃあ今の服と前の服、どっちが好みですか？」

「前だな」

あ、やべ。即答しちゃった。

「いや別に似合っていないという訳ではなく、普段のりーリエの方が個人的に好みというだけで気にする必要は全くないし俺はりーリエが例えどんな服を着ようが全然良いと思うし寧ろ色々な服を着たりーリエを見てみたいというのもあるし「ケン、ちよつと焦りすぎ」……はい」

アセロラが苦笑いを浮かべている。りーリエはというと、特に怒っている訳でも無さそうだ。どうやらかなりテンパリ過ぎていたみたいで、今もまだ冷や汗が止まらない。

だが仕方がない。こればかりは仕方がない。趣味趣向とは個人によって異なる訳で、偶々リーリエの服装が後より前の方が好きだっただけの話なのだ。ただ考え無しに口に出したのはどうしようもなく阿呆だったと思うけど。

「ケンさん、いいんですよ。むしろケンさんの好みや本音を聞けて嬉しくすら思います」

こんな失態を、笑って許してくれるリーリエ。天使だ。この笑顔を一守り続けたい。

「わたしは、ケンさんが似合っていると行ってくれたこの服を気に入ったので、購入はしますし、せっかくですので今日もこの服装のまま遊びたいと思っています。

ですが、わたしのワンピース姿のほうがいいだということは、

ずっと、ずーっと忘れませんから」

服は俺が買った。アセロラも当然だろって顔をしていて、リーリエからも異論はなかった。ここまで言われたら、買わないほうがどうかしている。

「ふふ、ありがとうございます。大事に着ますね」

そう言われたらもう黙る他なかった。

あの後、なし崩し的にアセロラの服も買わされた。先程の件もあつたし、リーリエも楽しそうだったので良しとする。というか、アセロラってあの手作り感満載の服以外にも着るんだなと少しだけ驚いた。勿論、これ以上の失言はご法度なので言わなかったが。

アセロラが買ったのは、シンプルでゆつたりとした白のTシャツに濃いデニムのショートパンツだ。シンプルであるが故に、アセロラの可愛さをまた一段と引き出していると言えるだろう。活発なリーリエの姿を見て、おそらくスポーティーな服装を選んだとか何とか。

二人とも心機一転といった様子で、そのままパンケーキを食べにカフェへ出向き、街を散策して解散となった。

結果的に二人とも満足した様子で、無事に終われて本当に良かった。特にアセロラの機嫌を損ねたら、クチナシにも影響が出るし、リーリエとの不仲にも繋がりがかねない。極力排除すべきだろう。

ただ、少し関わり過ぎたのかもしれない。

リーリエがホクラニ岳を登ってみたい、と言った際には、どうせだ

し一緒に行こう！　と言われてそのまま明日登ることになった。それでキャプテンが務まっているのだろうか、時期にミツキやハウがメガやす跡地までやってくるぞ。

まあそこら辺はクチナシがどうにかしてくれるだろうと、不安を頭から放り出した。バスではなく普通に登ると言っていたので、おそろく動きやすいよう、今日買った服で行くつもりだろう。ついでにポケモンたちも一緒に歩かせて、少しストレス発散でもさせようか。

「今日も楽しそうだったね、ケン」

「ほらハルジオン、あのお店のパンケーキ」

嫉妬の炎で焼かれる前に、先手を撃つ。お店に無理を言ってテイクアウトしてきた品を、満更でもないような顔で頼張るハルジオンを見て一安心する。

夕飯と入浴がひと段落して、明日の為に荷物を見ていたところだったし、リーリエも席を外しているのでそろそろ来る頃かと思っていた。ちなみに迷惑がかかるので、もうジョーイさんにボールは預けていない。

「明日の夜、ホクラニ岳で天体観測でもやろうか。そろそろハルジオンとも何か遊びに行かないとだしな」

「あれ、アタシから誘おうと思ってたのに」

「別にお前と過ごすのも嫌いじゃないしな」

ただ気を遣いすぎてストレスが溜まるというだけだ。どうしてゲームの世界でこんな中間管理職みたいな事をしているんだろうか

と、少し恨み言を言いたくもなる。

「嬉しいなあもう！　じゃあ今日はゆっくり休んで、明日楽しみにしてるよー！」

「なんて、言うだけでも思った？」

拙い。いつものストツパーであるリーリエは、洗濯物を見に行っているためここにはいない。

「カプ・ブルルに聞いたんだけど、ここら辺に丁度良い海岸があるんだって。明日は行けないみたいだし今日行こうよ」

「いや、明日は登山だし」

「大丈夫、ちよつと外で一緒に寝るだけだから。何だったら、このベッドも一緒に運んでもいいけど」

「それは流石にちよつと」

ポケモンセンターの備品を持っていくとか正気か？と思ったが、正気の沙汰じゃないのはいつもの事だったのを思い出した。

「じゃあ大人しく付いてきてよね」

「はあ……分かった。ただリーリエに一言言ってからな。いきなり居なくなると心配するだろ」

「もう言ってるから大丈夫！」

どうやら、俺が思っていたストップパーとは少し違ってたみたいだ。

全てを諦念し、一応、書き置きだけはしていこうとメモを残して、久しぶりにハルジオンと空を飛んだのだった。

カプ・ブルルとの約束。

心躍るといふか、それを超えて心臓が狂喜乱舞といふか、逆に心停止一歩手前といふか、千差万別の表現方法がある短期飛行であったが、こんな下らない事を考えられるくらいであるから、無事にビーチへと辿り着いたと言ってもいいだろう。

控え目に言つて死ぬかと思つた。

以前も同じように砂浜へ連れて行かれた事があつたが、これに関しては全くもつて慣れることはない。セレスには改善する意思と改善するだけの能力が存在したが、ハルジオンの場合はそれが欠如しているのだから当然だ。これ以上どうしようもなく、また、どうにかしようとも思つていないのだから。

あと二言くらいは恨み言を纏めてから、一気に目安箱へダンクシュートを決めたい気分であつたが、目の前にそれを許しそうにない存在感を放つポケモンが一匹。

カプ・ブルルだ。

島の守り神が一体何故こんな辺鄙な砂浜に、という疑問を差し置いて、まず驚いたのは、無人の砂浜だというのにも関わらずビーチエリアにパラソルと、『人間用』の道具が揃えられている点だ。側のラウンドテーブルには山のようにきのみが盛り付けてあり、木製の食器や果物ナイフまで置いている徹底っぷりだ。

極め付けには、余りにも『俺に対して』低姿勢が過ぎる。

ハルジオンに対してなら分かる。というより、昨日あれだけ平伏していたのだから最早当然と言つても過言では無いだろう。

その低姿勢が、人間の俺にも向いているのが可笑しな所だ。なんせ頭を垂れている相手は、気紛れで商業施設と街一つ滅ぼすような存在なのだから。

人がヒーヒー言いながら着地して胸の動悸を抑えていた時点で既に顔を伏せ、「お待ちしておりました」等と言う始末。テレパシーを使っているので、俺に向けられたものでもあると思って間違い無いだろう。

心当たりはある。横でほっぺすりすりを止めないハルジオンが、何か良からぬ事をブルルに吹き込んだのも原因の一つだろう。そろそろ静電気で麻痺しそうなくらいの勢いなのだが、飽きないのだろうか。

守り神相手に接待されるのは心臓に悪いし、対応が面倒だが、ここで対応を間違えると今後の展開がもつと面倒になる。

ブルルが完全に折れてしまったら、アローラのパワーバランスがハルジオンに傾き過ぎてしまうのだ。

どう見ても完全に邪神へ従属している様子のカプ・ブルルだが、本来であれば戦闘面に関して他のカプ神より有利に立ち回れる。

カプ神の最大の強みは、特性で自属性のフィールドの張り替えが出来る点なのだが、素早さが速い順に特性が発動するため、不利に働く筈の鈍足が逆に強みへと変わるのだ。カプ・ブルルは種族値上一番遅いため、殆どの場合フィールドを張り替えせる……性格や育て方で素早さ関係が逆転する等の例外もあるが。

レベル差と個体値努力値に差があるハルジオンには流石に勝てな

いが、タイプ相性を加味すると他二匹のカプはブルルに基本的に不利である。電気タイプの技が半減になりフィールドも張り返されるコケコも、そもそも水タイプという相性上勝ち目が薄いレヒレも、ブルルにとっては絶好のカモだ。ゲーム通りであればだが。

島対抗戦が始まろうものなら秒で勝負が決まると思ってた良い。ただでさえ辛い相手に加えて、最強の邪神が相手に回れば、勝ち目はもうゼロだと言っても過言ではないだろう。

そんな暴れ馬の手綱を俺が握っているのだ。最高に面倒臭い。こうやって俺に御させようという魂胆が目に見えているが、そうは問屋が卸さない。ブルルが折れたら、アローラは全てハルジオンが治める事になってしまう。

絶妙なところで、あの物臭な神には自尊心を保ってもらわなければ。無邪気な神の機嫌を損ねない程度に。

「ほ、本日はお忙しいところ、お越しいただきありがとうございます」

とか考えてたけどもうダメかもしれない。ブルルちゃんプルプル震えてるよお。

「ふーん、『今回は』テレパシーを使ってるのね。拙過ぎて聞くに堪えないけど、いい心掛けだわ」

「ひっ、と、とんでもない、事です。きゅ、今日は、偉大なるハルジオン様と、その婿殿に、ささやかながらのおもてなしをさせて頂けたらと思い、お呼びした次第です」

「へえ、ささやかながらなんだ」

「失礼しました！ 盛大なおもてなしをします！」

「……ハルジオン。せっかく歓迎してくれてるのに、ちよつと高圧的過ぎないか？」

さながら小姑のような重箱の隅の突き具合である。呼び掛けに応じ、あまつさえそれを利用して立場であるにもかかわらず、この振る舞いだ。流石は邪智暴虐の王と言われるだけのことはある。

言っているのは俺だけかもしれないが。

「ケン、甘やかしちやダメよ。ソイツは基本的に人間を見下しているんだから」

「それはお前もじゃないのか？」

うぐう、とバツの悪そうな顔でそっぽを向くハルジオン。思い当たる節は星の数より多そうだ。

「カプ・ブルル、貴方は立派なウラウラ島の守り神なんです。それなのに、どうして私に謙るんですか？ もっと自信を持ってください」

透かさずフォローを入れるのを忘れない。

「む、婿殿……」

「後、ハルジオンとは結婚してないので婿殿はやめてください。申し遅れましたが、私の名前はケンです。ケンとお呼びください」

「ちよつと、どうしてケンが下手に出てるのよ。ていうか婿じゃないってどういう事？」

「そのままの意味なんだが？」

寧ろ、もう結婚した気になっていたのか。ポケモンと結婚なんて、そもそも出来るかどうか怪しい話ではあるが、ハルジオンもブルルも別に問題を感じていないような口振りだ。おそらく可能ではあるのだろう。

問題を感じていないのは逆に問題だが。

「周りが夫婦だって認めてるなら、それはもう結婚したのと同義なの！ 現に目の前のノロマだって、夫婦だって認めてるじゃない！ 事実婚よ事実婚！」

「横暴が過ぎませんかね……そもそも俺は認めていないし、合意の無い結婚なんて神様が認めるか？」

「何言ってるの？ アタシたち神様なんだけど」

「そ、そうですね。この島だと、人間はボクらに永遠の愛を誓いますね」

そうだった。こいつら神様だった。ていうかボクっ娘だった……いや早まるな、中性的なだけで男かもしれない。

「つまり、ケンとアタシは既に公認の夫婦ってわけ！ 恋人とか番とか、そんなチャチな間柄じゃないって事よ！」

「一番肝心な新郎の宣誓が無いんですけど……まさか、お前ら俺を嵌めるために呼び出したのか」

「いえ、ケン殿には目一杯寛いで頂こうかと。何かとお疲れでしょうから」

予想外の言葉に涙腺が緩みそうになる。少しカプ・ブルルの株が上がつた。

「ふーん、アタシには何も無いんだ？」

「い、いやいや、ハルジオン様には頼まれた通り、二人きりになれる場所を提供したではありませんか!!」

「場所ね。じゃあ、この山の様なきのみはケンへのプレゼントって事ね。この前粉をかけるなって言ったばかりなのに、そんな宣言するなんて良い度胸じゃないの」

ひゅつと、息を呑むような悲鳴が聞こえた気がした。

「アンタも、あの阿婆擦れのように海の藻屑にされたいのかしら？」

威圧感に気圧されるが、今ここで引くとブルルが完全に折れてしまう。強気で行かなければ。

「落ち着け。あいつは別に俺を取って食おうって訳でも無いだろう」

「……手遅れになってからじゃ遅いの。確かにコイツらは今は何もしてこないし雑魚だけど、甘く見てるワケじゃない。万が一、ケンを庇えないタイミングが生まれるかもしれない」

「万が一なんて起きないように、波風立てずに生きてるだろうが……」

邪神様の隣だと波瀾万丈で、そんな心配りなんてまるで意味が無い

が。

「ケンには分かってない!! アタシたちが助けられないと、海に沈められただけで死んじやうんだよ!? 逆らう可能性があるなら潰さなきゃダメ!!」

海に沈められると死ぬなんて、どの陸上生物でも同じだろう……と思ったが、シルキーやシーザーが溺れる情景が浮かばない。やっぱりポケモンと人間を比較するなんて厳しいものがある。

「確かにそうだけど、ここで力尽くで屈服させたとしても、俺が本当にピンチになった時に助けてくれるか? 後先考えず、寝返って復讐してくる奴に脅しなんて効かないぞ」

「……………助けないの?」

「い、いやボクは助けますよ!! 命に代えても!!」

「ありがとう、カップ・ブルル。コイツのように助けてくれる存在もある。まだ遭遇していないレヒレやコケコ、島の重要な人間。そういった連中と助け合えるようコネクションを作っておけば、いざって時に寝首なんて搔かれずに済むだろ」

納得がいつていない、とハルジオンは顔というキャンパスで表現する。どれだけ反論したいのだろうか、返しの言葉を産み出すための苦しみを悶えながら味わっているようだ。

「どうしても仲良くしたくないみたいだな」

「当たり前でしょ! 弱いし信用できないし気に食わないし」

「何やったらこんなに嫌われるんだ……お心当たりはありますか？」

「全く、無いです……」

可哀想だ。何もしていないのに、蛇蝎の如き嫌われ様。しかも相手は最強の神だ。GOサインさえ出してしまえば、あの哀れな神の命は今日限りとなるだろう。

「分かった分かった。じゃあ、こうしよう。今夜以降は緊急性が無い限り、俺とカプ・ブルルは一切顔を合わせないようにしよう。お互いの頼み事はハルジオンを介して行うようにすればいい」

「それいいね！ 採用！」

結局のところ、ハルジオンが他のカプ神を嫌う理由は、俺の好意の裏返しだろう。取り合いになった場合が面倒だから、先に潰しておこうとか、そんな脳筋プランだろうという読みだが、多少は当たっているようだな。

ただ、これだけじゃ不十分なので、満足気な邪神に釘を刺す。

「ただ、後で情報の握り潰しが発覚したら、相応の仕打ちが待っているからな？」

「……例えば？」

「一週間くらい口利いてやんない」

「えー!! なんで!! 酷い!!」

ちゃんと重大さを分かってくれているのだろうか。ブルルも不安

なのか、こちらを狂人を見るような目で訝しげに見つめてくる。こちらにも信用されていないようだ。

あまり使いたくない手だったんだが。リーリエを庇護下に入れるためにも仕方ないか。

「どうしてもハルジオンが頼れそうにない時は、昨日一緒に居たリーリエという女の子を伝えてください。彼女を含め、私達を害さずウラウラ島を治めている間は、私はあなたの味方です」

「は、はい。わかりました……でも、本当に大丈夫でしょうか……」

「ああ、ハルジオン相手に無視が一番効果的ですから。多分大丈夫です」

あの構ってちゃんには一番堪えるだろう。何度でもボールに戻してやるからな。

「はあー。仕方ないけど、少しくらいはアンタが存在する事を許すわ。死ぬ気でケンの役に立ちなさい」

「は、はひっー!」

なんやかんやで、ブルルの生存ルートは確立されたけれども……あの様子じゃ自尊心なんて欠片も残ってないだろうなあ。失敗かなあ。

「そうだな。ちゃんとウラウラ島を治めてくれないと、ハルジオンを喉けちゃうかもな」

「そ、それは勘弁願いたいです。がんばります」

そうだな、最初からこのパターンで行けば良かったんだ。

ハルジオンという手綱で他のカプ神を従わせる。

これで争い事なんて起きないだろう。ある程度の自治権は向こうに委ねられるから、こっちの手間は一切かからない。むしろカプ神を顎で使えるならメリットも大きそうだ。

ただ、話の分かるブルルだったから良かったものの、他二匹がそうだとは限らない。別の手段も考えておかなければ。

「よし。そろそろ面倒な腹の探り合いは辞めて、このビーチを楽しもう……夜だけど」

昼のビーチも格別だが、夜なら夜の楽しみ方がある。潮の音を聞きながら、きのみを食べてゆっくり寝る。明日は登山だし、なるべく英気を養わねば。

「ブルルには、外敵が近寄らないように警護をお願いしようかな。最初のお願い事だけど、やってくれるか？」

「勿論です！ 頑張ります！」

「よしよし。ハルジオンは……たまには一緒に寝るか」

「やったー！」

ハルジオンには意見を曲げてもらった分、今日くらいは甘やかしてあげようじゃないか。

ジエツトコースター記念日。

波のさざめきと、少しの肌寒さで目が覚めた。流石の常夏のアローラといえど、野外の、それもビーチで一夜を過ごすとなれば多少は冷えるようだ。

湯たんぽ代わりにハルジオンの他に、周囲にはカプ・ブルルが近くにいるのみ。どうやら言付け通りに周囲を見回っていたようだ。昨夜と変わらずテーブルの上に無駄に積まれたきのみが、忠犬の仕事っぷりを物語っている。

まあカプ神が二柱いる砂浜に近づくポケモンなんて、ハッキリ言っておアローラを生き抜くためのセンスが無きすぎるので絶対来ないとは思ってはいたが。

極稀に、危機察知センサーがぶつ壊れたポケモンや戦闘狂の無謀なポケモンがいるだろうが、そういうイレギュラーも視野に入れサボらずに見回りを続けている点を見ると、ものぐさの神という評価を改めなければならぬのかもしれない。

「あー！ ケン殿、起きられましたか」

「おはようカプ・ブルル、ご苦労様だったな」

「い、いえ。とんでもないことです」

それとも、単に命が惜しいから渋々やっていると聞いた感じなのだろうか。腕の中で幸せそうに眠るハルジオンを見ると、少し目を泳がせたブルルを見て漠然と考える。まあやる事やってくれたら、ものぐさだろうがナマケモノだろうが関係ないか。

「おかげでハルジオンが爆睡するくらいには、平和にゆっくりと休めたよ。本当にありがとう。まあこれでも食べてくれ」

ポケットからポケマメのケースを引き出し、虹マメを取り出してブルルに放った。

違法な粉を使うなんちゃって豊穰神ではなく、本職の豊穰神に献上するものとしては弱いかもしれないが、喜んでもらえそうな代物が虹マメくらいしか思い当たらなかった。

まあハルジオンでも嬉しそうに食べるし大丈夫か。

「え、ええっ!! これは……良いんでしょうか、こんなものを頂いてしまっても」

「だいじょ「良くない!」「ひっ!!」……起きてたのか」

先程までムニヤムニヤ言いながら俺を抱き枕にしていたとは思えないくらい、研ぎ澄まされたような気配を纏っているハルジオン。

「アンタ、それを人間から受け取る事が何を意味しているのか解って貰うなら……本当に殺すわよ?」

さつきからデレデレしやがって。昨日の事といいアタシもそろそろ我慢の限界なんだけど」

さつきとは、コイツ何時から狸寝入りをかましていたのだろうか。油断も隙もない。

「も、勿論返しますよお!! ボクにはとても頂けるような代物ではありませんから!!」

投げ渡したポケ豆を、凄い勢いで投げ返された。どうやら他のポケモンが虹マメを貰うことは許されないみたいだ……何の風習かは知らないが、嫉妬深さもここまで来れば勲章モノだな。その筋の人に見せたらリボンくらい貰えそうだ。

「ケン、それはアタシたちのモノなんだから、無闇矢鱈に有象無象へ渡さない事。特に他のカプなんて絶対ダメ!!」

アタシたち、と言う辺り手持ちポケモンの仲間意識が垣間見れる。どうしてUBとは仲良く出来て同族とは殺し合いも辞さない構えなのか、これがわからない。

「じゃあ代わりに、何をカプ・ブルルに送ればいいと思う？」

流星にここまでしてくれたんだから、お礼くらいはした方がいいんじゃないか?」

「バカね、アイツはアタシの下に付けるだけで十分なんだから、何も要らないわよ」

「ええ!! そうなんです!! ボク何も要りませんから!!」

ぷるるちゃんは生き延びるのに必死だ。この前まで威厳溢れる姿……だったかは分からないが、知らぬ間に調伏させられている。俺には助けられそうもないし、出来る事と云ったら、ここで何も与えない事だろう。

「分かった、でも何かあれば遠慮なく言ってくれ……ハルジオンには配慮してな。また何かあったらよろしく頼むよ」

「は、はい。ボク程度の力であれば喜んで!」

ウラウラ島の頂点がそんなに弱気で大丈夫なのだろうか。それとも謙虚と言うべきか。

まあそのどちらでもカプ・ブルルが有用という事実には変わりない。カプ神がバツクにいと知れば、この島の住民は恐怖で逆らえないだろう。直近で町一つと商業施設をぶっ壊しているのだ、もしかするとウチの邪神より恐れられているかもしれない。

そんな存在の協力を仰げるようになったのは良い収穫だった。この島での多少の無茶は誤魔化せる。

「そろそろ日も昇ってきたし、お暇しようかな。どうやって帰る？」

あんまり考えないようにしていたが、聞かないわけにもいかないのが現実の辛いところだ。

「え、帰りも飛ぶに決まってるじゃない」

あれは飛ぶとは言わない。

「いやいや。せっかくカプ・ブルルさんがいらっしやるんですから、森のポケモンに乗せてもらって帰るとか」

「そんな雑輩にケンを任せられるワケないでしょ」

さも当然のように言うが、俺にとっては空を飛ばないポケモンとの砲弾ツアーは、安全装置のないジェットコースターと大差ないので分かってるのだろうか。いやない。

「いやいやいや。ハルジオンと一緒にまったりと空の旅もいいなあって思ってたんだけどダメかなあ？」

「嬉しい……でもダメ。空は万が一があるし、今日はサクツと帰って
いっばいデートしようね!!」

ハルジオンのサイコパワーを全身に感じ、もう手遅れなのだと知っ
た。

だがそれでも心は諦めない。こういう時のためのカプ・ブルルさん
なのだ。気を利かせてエアームドみたいなポケモンを連れてきてく
れるだろうと、辛うじて動く首を振って期待の目線を向けてみる。

「それでは、その、お気をつけて」

少しの同情を包蔵したカプ・ブルルの一言で、俺は全てを察した
……サヨナラ大地……サヨナラ自意識……サヨナラ裏切り者……

今日はもう動けない。何なら明日も動けない。そんなレベルで身
体を酷使した一日だった。

あの後、满身創痕で戻ってきた俺に待ち受けていたのは山登りで
あった。昨日買った下ろし立ての服を着ているリーリエとアセロラ
が、既にポケモンセンターの前で待ち受けており、そのまま引き摺ら

れるようにホクラ二岳へと誘われた。ご親切にも、既に荷物も預けたポケモンたちも回収済みとの事で、感涙が止まらなかつたのは言うまでも無い。

臍物と三半規管が狂ったままでの山登りは困難を極めたが、それでも時間経過で体調は良くなった。このままピクニックを楽しめるようになるだろうと高を括っていたところに更なる試練が訪れたのは、リーリエとアセロラが作ってきたお弁当に舌鼓を打っていた時だった。

「バトルの練習がしたいです」

今思えば、これは布石だった。リーリエからの細やかな願いを俺が叶えない筈がないという前提の置き石。勿論これを、快く了承した。

昼食後、リーリエのメラルバとアセロラのシロデスナ、最近あまりバトルさせていないシーザーの三匹で軽くバトルの練習をしたり、野生のポケモンと戦ってみたりと穏やかな時間を過ごした。ところが、リーリエが突如、明後日の方向にモンスターボールを投げたところから雲行きが怪しくなる。

「勝負をしませんか？」

ポケモンバトルの練習中に突然そう言われると、普通じゃバトルの事だと思っただろう。言うまでもなく、これも快諾した。

「でも、ただ勝負をするなんて面白くありませんし……勝った人の言う事をなんでも聞くというのはどうでしょう？」

大した自信だ。リーリエのメラルバがそこそこ優秀で、シルキーだとちよつと梃子摺るなあってレベルだとしてもだ。ましてやアセロ

ラと二人掛でかかってきたとしても、この世界でレベル上げたシーザーに敵う道理など無い。

いいだろうと、同意してしまった。

「では、頂上まで競争です！」

耳を疑った。全くポケモンバトル関係無いじゃん。

いきなり始まった徒競走に俺だけが固まった。文字通り固まって足が動かないのは、おそらくアセロラのシロデスナが邪魔をしているのだろう。何時の間にか足元を砂で固められているのを見れば一目瞭然だ。砂地獄でも使われているのだろうか。

謀られたと気付くのに、そう時間は掛からなかった。

事の発端のリーリエは、さつき捕まえたであろう「りゆうせいちやん」に乗って遙か彼方へと飛んでいった。変な所に牽制球を投げたなあととは思っていたが、きちんと刺してる辺りメジャーデビューも遠くはないのかも知れない。

仮にも捕捉率が伝説のポケモン並みのアレを捕まえるなんて恐れ入る。しかも進化後だ。メラルバの件といい何処からそんなポケモンを引っ張ってきているのだろうか。

「ケン？ そんなにブーツとしていいの？」

「いやだって動けないじゃん」

シーザーに手伝ってもらおうと振り向いたら、困ったような顔でシーザーもこちらを向いていた。足元を見たら案の定だ。砂地獄は

ポケモンの交代を許さない、つまりボールに戻せない。

「それで、リーリエには何を？」

「ええ！　べ、別に何も貰ってないよ？」

「誰も貰ったかなんて聞いてないんだけどな」

バツの悪そうな顔で音の鳴らない口笛を吹いているのを見ると、問い詰める気も失せる。そもそも怒る気も無いが。

「交代できないなら追加すればいい。ニシキ、滝登りだ」

シーザーの地震は巻き込まれそうなので、万が一の砂地獄も効かないニシキに出張って貰おう。ボールから飛び出したニシキは、勢いそのままで水流を纏いシロデスナに目掛けて一直線に飛んでいった。

滝登りは何の問題もなく油断していたシロデスナに直撃し、そのまま一撃で仕留めたようだ。ニシキもメガシンカをしていないとはいえ、幾ばくかレベルアップをしているようで、成長を感じる。

「え、それはズルいよ！　斯くなる上は……ジュペッタ、黒い眼差し！」

「着地を狙って滝登り！」

繰り出されたジュペッタと目が合いそうになったが、即座にニシキが視線を遮り滝登りをお見舞いする。殺傷能力が無いとはいえ、端からトレーナー狙いとは恐れ入る。

「ニシキ竜舞。シーザー、拘束が解けたら俺を背負って山を登ってく

れ。手袋を付けるから」

ニシキで竜舞を積みアセロラの次の一手を牽制しつつ、バッグからポケリフレ用の対鮫肌用手袋を取り出した。これがこんな事で役に立つ時が来ようとは、買っていて良かった。ありがとうライチさん、肌荒れせずに済むよ。

ゲームだと4―5ターンは縛られる砂地獄だが、この世界ではキツチリとしたターン制など無い。ニシキの滝登り二回に竜舞一回、となればそろそろ解ける筈だ。

目の前のアセロラとニシキは膠着状態が続いているようで、お互いに睨み合っている。あんなにニシキの顔は怖いのに、よく睨み合えるなあ。

なんて考えていたら、足を締め付けるような感覚が消えた。と思った瞬間に、シーザーに背中へ乗せられた。

「ニシキ、アセロラをよろしっ！」

いってえ舌噛んだ。セレスにも負けず劣らずのロケットスタートだ、ちゃんと伝わっているといいんだけど。

それにしてもシーザーのクライミングは尋常じゃなく速い。舗装されている道路には目を向けず、頂上への直線距離を最短ルートで駆け抜ける様はマツハポケモンに相応しい。ただトレーナーを乗せて走っていると考えると、相応しいかどうかはその限りではないが。

まず揺れる。跳ねる。とにかく揺れる。その上速度も洒落にならないレベルなので風圧もすごい。しかもセレスやハルジオンに頼り切りだったせいも、何時になく張り切っている様子。

シーザーがゴールに辿り着くのが先か、腕が限界を迎えるのが先か。最早リーリエとの戦いではなく、己自身との戦いとなっていた。負ければ大怪我は避けられない。気分は安全装置の無いジェットコースターに乗っている様だ……あれ、デジャヴ？

腕の感覚が消えかけそうになっていたところで、ようやく頂上へと辿り着いた。長い様で短い時間だったが、良い感じに胃の中の昼食がシエイクされたみたいでシンドい。

だが、流石にこれは勝っただろう。中々の速度で、且つショートカットも駆使して来たわけだ。ぐへへ、なーにをお願いしようか……な……

「ケンさん、早かったですね。もう少しかかるかと思いましたが」

目の前には、メタングに乗って休んでいるリーリエの姿が。先程まで綺麗にセットされていたポニーテールが見るも無惨にボサボサになっている辺り、なりふり構わず駆け抜けたのだろう。敵ながら天晴れだ。

「リーリエ、お前の勝ちだ。とりあえず聞くだけ聞いてみるけど、お前の願いを言うといい」

「言っておきますけど、聞く『だけ』じゃダメですからね」

「あ、はい」

釘を刺された挙句、添い寝を所望された。勿論疲れて即寝落ちしたので、何も記憶に無い。非常に残念だ。